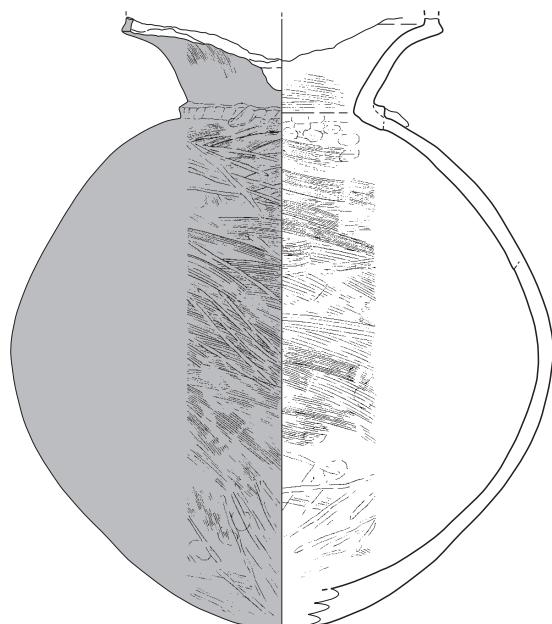


大道遺跡群7

第26次 第27次 第29次 第30次
第33次 第35次 第38次 第39次
第40次 第41次 第42次

大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10



2014

大分市教育委員会

大道遺跡群7

第26次 第27次 第29次 第30次
第33次 第35次 第38次 第39次
第40次 第41次 第42次

大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10

2014

大分市教育委員会

序 文

本書は、大分駅周辺総合整備事業に伴って実施してきました大道遺跡群発掘調査の正式報告書であります。

大分駅周辺地区では、大分駅を中心とする南北市街地の一体化を図り、駅北・商業業務中核都心と駅南・情報文化新都心との役割分担の中で、大きな経済効果と良好な市街地環境をあわせ持つ、県都「大分市」としてふさわしいまちづくりをめざしています。

大道遺跡群が立地する駅南地区は、戦前に区画整理が行われ宅地化されるまでは湿田が広がる地域であり、それ以前の開発史は知られていませんでした。平成8年に初めて遺跡が確認され、その後、古墳時代前期の集落跡や奈良・平安時代の掘立柱建物跡群が相次いで発見されました。中でも、奈良・平安時代の遺跡は地理的環境から国府との関連性が注目されており、駅南地区は本市の歴史を顧みる上でも、重要な地区であったと言うことができます。

大道遺跡群発掘調査報告書のシリーズ7となる本書は、平成20~24年度に実施した調査成果と併せて、これまでの11年間にわたる調査の成果を時代毎に通史としてまとめ、総括いたしました。新しい姿を見せてている駅南地区が過去から現代へと移り変わっていく様子について、遺跡を通し具体的に表しております。

本書に収録されたこれらの資料が学術研究者のみならず、広く市民の皆様に利用され、文化財に対するご理解を深めていただくための一助となり、郷土史研究に幅広く活用いただければ幸いります。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまでご指導いただきました諸先生方並びに長年にわたりご協力下さいました関係各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成26年3月14日

大分市教育委員会

教育長 足立 一馬

例　　言

- 1 本書は大分市教育委員会が大分駅周辺総合整備事業に伴って平成20～24年度に実施した大道遺跡群第26・27・29・30・33・35・38・39・40・41・42次調査の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、大分市都市計画部駅周辺総合整備課からの依頼を受け、大分市教育委員会が実施している。
- 3 調査担当は、表1 調査一覧表のとおりである。
- 4 発掘調査における遺跡の掘削及び調査記録作成業務については、大分市教育委員会文化財課の委託を受け、(有)九州文化財リサーチ（第38・39次 業務責任者：沖野誠）、(株)九州文化財総合研究所（第33・35・40～42次 業務責任者：三ツ股正明）が行った。
- 5 遺構の実測は、各調査担当者が行ったほか、(有)九州文化財リサーチ（第38・39次）、(株)九州文化財総合研究所（第35・40～42次）が大分市教育委員会文化財課の委託を受けて行った。
- 6 遺構の写真撮影は各調査担当者が行ったほか、(有)九州文化財リサーチ（第38・39次）、(株)九州文化財総合研究所（第40～42次）、が行った。
- 7 遺物の接合・注記作業は、倉増美智代・佐藤麻理子・敷島加代子・小野千恵美・松木晴美（大分市教育委員会文化財課嘱託）が行った。
- 8 報告書に掲載した出土遺物の実測・製図は、第26・27次の一一部を(株)埋蔵文化財サポートシステム及び雅企画有限会社（業務責任者：堤美智代）が、第30・33・38・39・42次は雅企画有限会社（業務責任者：同）が大分市教育委員会文化財課の委託を受け行った。第35次の遺物実測は佐藤が行い、第38次の遺物実測は長が、第39次的一部の遺物実測及び拓本は倉増・敷島が、第40次の遺物実測は倉増が行った。遺物の製図は(株)埋蔵文化財サポートシステム（第26・27次）、雅企画有限会社（第26・27・30・33・38～42次）が大分市教育委員会文化財課の委託を受け行い、一部を倉増・敷島が行った。個別遺構図及び第26・27・29・33・35・42次の全体遺構図の製図・修正は倉増、敷島が行った。総括図版の作成・製図作業は主として倉増・佐藤麻理子・松木晴美・小野綾夏（以上大分市教育委員会文化財課嘱託）が行った。
- 9 遺物写真撮影は、大分市教育委員会文化財課の委託を受け、雅企画有限会社（業務責任者 同上）がデジタル写真撮影を行った。
- 10 本書の執筆は、以下のとおりである。
第I章 佐藤 第II章 松浦
第III章 佐藤【第1節、第2節①②、第3節】・長【第2節③、第4節】・塩地【第2節④遺構】松浦【第2節④遺物】
第IV章 佐藤【はじめに、第1節（1）（3）、第2節（1）（2）（4）】・長【第1節（2）、第2節（3）、第3節（1）（3）、第4節】
倉増【第3節（2）】
- 11 本書の編集は、大分市教育委員会と雅企画有限会社（業務責任者 堤美智代）の双方の企画の下、雅企画有限会社が行った。
- 12 本報告書巻末の写真図版に掲載できなかった遺構・遺物写真については付属のDVDに収容している。また、遺構出土遺物一覧表・遺物観察表、第IV章の補足資料である図版・表も収容している。詳細は96頁にある『大道遺跡群7』DVD収録内容を参照頂きたい。
- 13 出土遺物・記録資料は、大分市埋蔵文化財保存活用センター（大分市大字田原337番地の5）に収蔵・保管している。

凡　　例

- 1 本書で用いた遺構略号と遺構掲載順番は、以下のとおりである。
①SB：掘立柱建物跡、②SA：柵状遺構、③SH：竪穴建物跡、④SE：井戸跡、⑤SK：土坑・貯蔵穴、
⑥SD：溝跡、⑦SF：道路状遺構、⑧SX：性格不明遺構、⑨SP：ピット・小穴、⑩NR：自然流路跡を表している。

- 2 本書に記載される遺構番号は、以下の要領で表記される。
- 「33 SD 001」…33（調査次数） SD（遺構略号） 001（遺構番号）
- 3 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N.）である。座標は、世界測地系の平面直角座標2系（北緯33° 0'、東経131° 0'）のX・Y座標を基点として表記している。
- 4 本書に掲載した遺構配置図（遺構の新旧関係を記録した図面）の表記は、新旧関係を実線で示し、下位の遺構については点線で記している。また、表記上、遺構の新旧関係が不明瞭な場合は、矢印で補足している。
- 5 遺構の規模と深度の単位は原則としてメートル（m）で、遺物の法量はセンチメートル（cm）で表記している。
- 6 遺物の法量の内、器高と口径、底径と高台径は以下のとおり計測している。

器高：底部を水平に置いた状態で、最も高い部分の高さ

口径：上記の状態で、口縁端部外縁の最大径

底径：口縁部を水平に置いた状態で、底部と認識した部分の最大径

高台径：高台端部外縁の最大径

- 7 本書に掲載した遺物の実測図の表記は、以下のとおりである。

(1) 遺物断面が黒塗りのもの…陶器・須恵器 (2) 遺物断面が灰色のもの…瓦器・瓦類

(3) 遺物平面の稜線と調整の変換点…実線 (4) 調整が同じでその単位が分かるもの…長破線

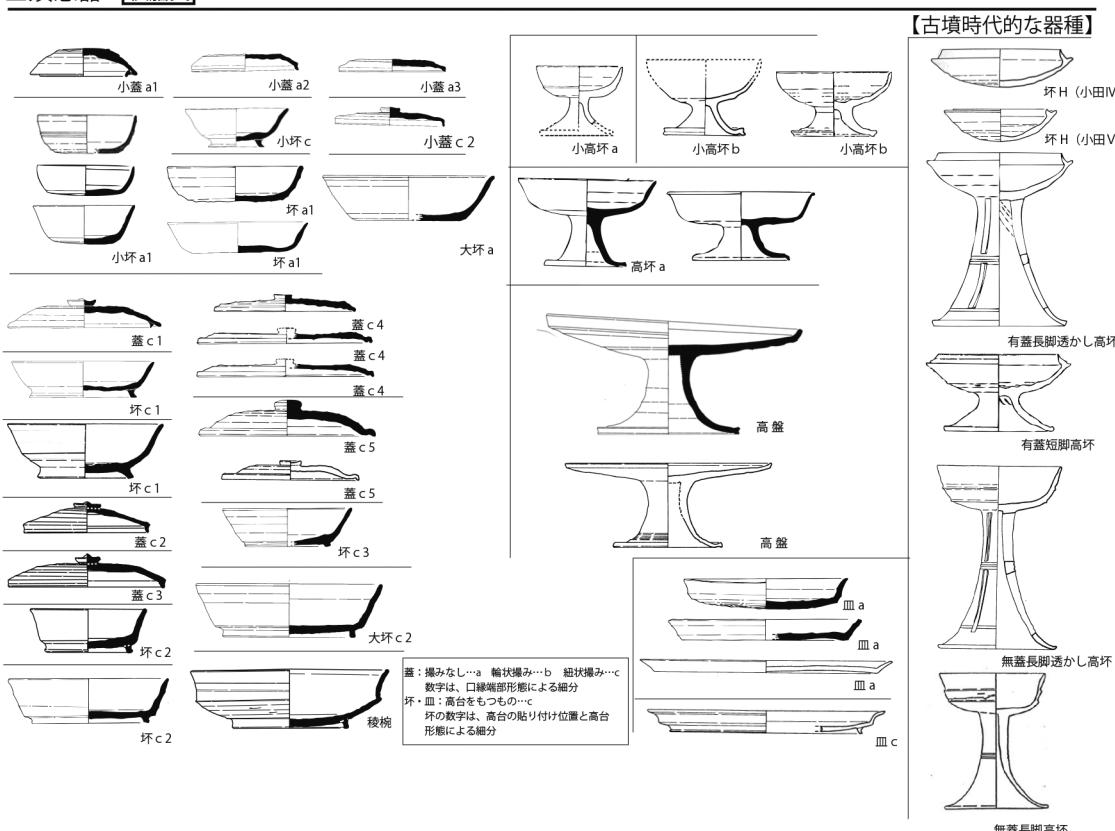
(5) 粟と付着物、黒班等その範囲を示す必要があるもの…一点破線

- 8 本稿における編年観及び年代観について、以下に掲載する分類資料図（1～3）に示す標識資料との比較による。なお、これらの資料が掲載された文献は分類資料図3にある一覧のとおりである。

また、古墳時代前期の古式土師器については弥生時代終末期の土器や古墳時代中期の土器との峻別が難しかったため、「土師器」の名称で統一し、分類については長直信2013「古墳時代前期の土器分類について」『古国府遺跡群1』大分市教育委員会に準拠し、中世後期の土師器については長直信2012「大友氏館跡出土土器の編年的検討」『大分市市内遺跡確認調査概報2010・2011年度』大分市教育委員会での分類名称を使用した。

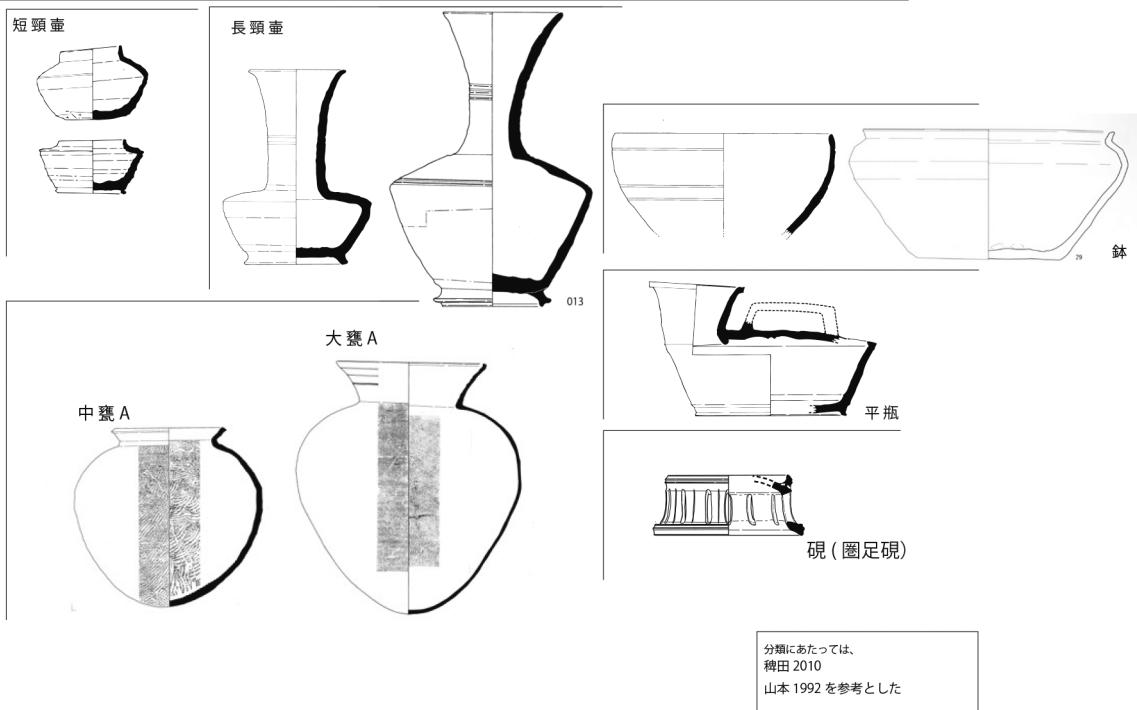
[分類資料図 1]

■須恵器 供膳具



[分類資料図 2]

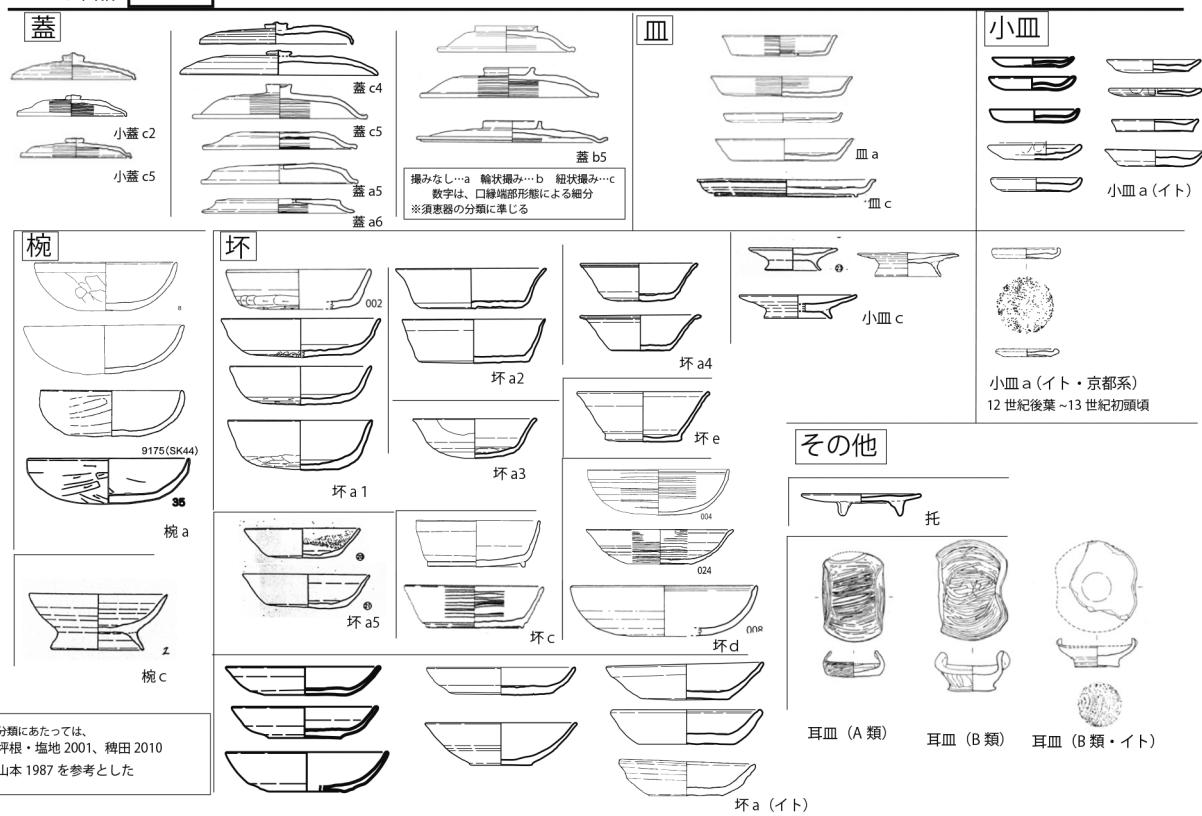
■須恵器 貯蔵具



■土師器 供膳具

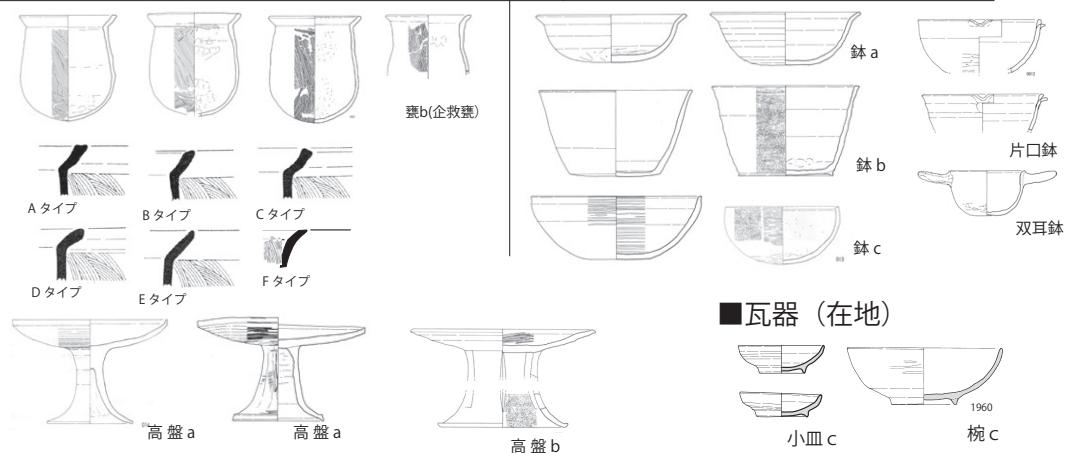
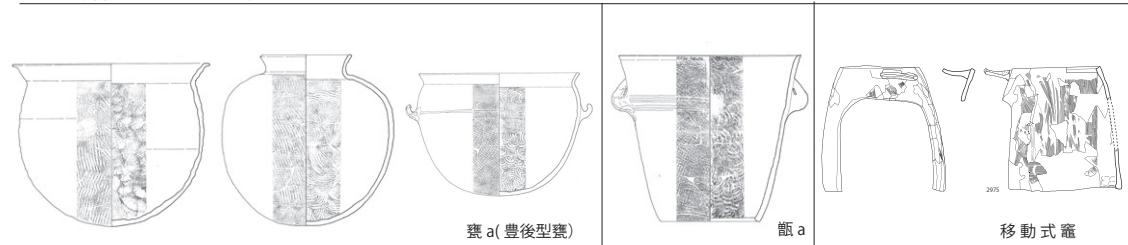
ミガキ a2 がある場合は各分類のあとに (ミガキ) を加える

ex : 皿 a (ミガキ)

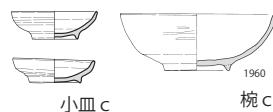


[分類資料図 3]

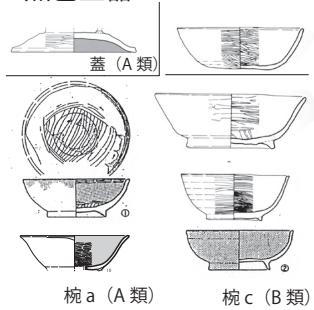
■土師器 煮炊具・貯蔵具



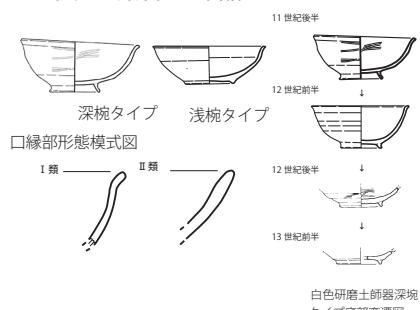
■瓦器（在地）



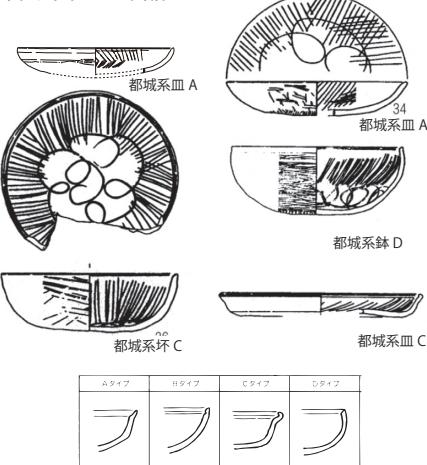
■黒色土器



■白色研磨土師器



■都城系土師器



<分類にあたっての参考文献>

[瓦質土器][土師質土器]

山本哲也 2009 「豊前・豊後における瓦質土器の初期様相」『中近世土器の基礎研究』22 日本中世土器研究会
河野史郎 2002 「出土土師器壺・皿類及び瓦質土器雜器の分類と編年」『大友府内 4』大分市教育委員会

[瓦器]

尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995 「瓦器梗」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

[白色研磨土師器]

稗田智美 2012 「第2節 羽田遺跡出土の白色研磨土師器塊について」『羽田遺跡3』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第114集
[土師器]

坪根伸也 1995 「付章 羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題」『羽田遺跡II』大分市教育委員会

坪根伸也・塩地潤一 2001 「豊後国の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会

稗田智美 2010 「(4) 古代の土師器について」『下郡遺跡群VIII』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書 第100集

山本信夫・山村信榮 1997 「中世食器の地域性 九州・南西諸島」[共同研究] 中世食文化の基礎的研究

国立歴史民俗博物館研究報告 第71集

山本信夫 1987 「付偏・土器の分類」『太宰府条坊跡』II

林潤也・中西武尚・今田しおふ 2001 「豊後における都城系土師器について」『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会
[須恵器]

山本信夫 1992 「3. 遺物各説」『宮ノ本遺跡II - 窯跡篇一』太宰府市の文化財 第10集

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査組織	2
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第Ⅲ章 調査の成果	10
第1節 調査の概要	10
第2節 C区の調査	12
第3節 E区の調査	28
第4節 F区の調査	44
第Ⅳ章 総括	76
はじめに	76
第1節 出土遺物の様相	76
第2節 遺構の時期変遷	80
第3節 古代の大遺跡群の性格について（第79～84図）	87
第4節まとめ	94
註	95
『大道遺跡群7』DVD収録内容	96
写真図版	

挿図目次

第1図 調査区配置図 (1/5000)	6	第42図 第30次サブレンチ南壁土層断面実測図 (1/60)	48
第2図 調査点位置図 (1/40000)	8	第43図 30SX015・005遺構実測図 (1/60)	49
第3図 大道遺跡群調査地点エリア区分図 (1/5000)	10	第44図 第30次井戸跡遺物実測図 (1/4)	50
第4図 大道遺跡群C区調査地点遺構配置図 (1/400・1/1500)	11	第45図 第30次土坑遺物実測図 (1/4)	52
第5図 大道遺跡群第29次調査遺構配置図 (1/400)	12	第46図 第30次溝跡遺物実測図 (1/2・1/4)	52
第6図 墨書きのある汽車土瓶	13	第47図 第30次性格不明遺構遺物実測図1 (1/4)	53
第7図 汽車土瓶猪口	13	第48図 第30次性格不明遺構遺物実測図2 (1/4)	54
第8図 大道遺跡群第35・40・41次調査遺構配置図 (1/300)	14	第49図 第30次性格不明遺構遺物実測図3 (1/1・1/4)	55
第9図 大道遺跡群第35・40・41次調査全体遺構図 (1/300)・第41次調査 区土層断面実測図 (1/80)	15	第50図 第30次性格不明遺構・その他の出土遺物実測図4 (1/2・1/4)	56
第10図 第41次土坑遺構実測図 (1/40)	16	第51図 大道遺跡群第39次全体遺構図 (1/300)	57
第11図 第41次土坑遺構実測図 (1/40)	17	第52図 調査区北壁土層断面実測図 (1/60)	58
第12図 第35次調査出土遺物実測図 (1/4)	17	第53図 第39次トレーナー遺構実測図 (1/60)	58
第13図 第40次調査出土遺物実測図 (1/4・1/2)	17	第54図 第39次土坑遺構実測図 (1/40)	59
第14図 大道遺跡群第38次遺構配置図・全体遺構図 (1/400)	19	第55図 第39次溝跡土層断面実測図 (1/40)	60
第15図 第38次土坑遺構実測図 (1/60)	20	第56図 39SX005遺構実測図 (1/40)	60
第16図 第38次溝跡土層断面実測図 (1/40)	20	第57図 39SX020遺構実測図 (1/60)	61
第17図 第38次出土遺物実測図 (1/4)	20	第58図 39SX070遺構実測図 (1/60)	61
第18図 大道遺跡群第42次調査遺構配置図・全体遺構図 (1/400)	22	第59図 39SX085・39SX100遺構実測図 (1/60)	62
第19図 第42次井戸跡遺構実測図 (1/20)	24	第60図 39SX090遺構実測図 (1/60)	63
第20図 第42次土坑遺構実測図 (1/10・1/20・1/40)	25	第61図 第39次土坑・溝跡出土遺物実測図 (1/2・1/4)	66
第21図 第42次井戸跡遺物実測図 (1/4)	26	第62図 第39次性格不明遺構出土遺物実測図1 (1/2・1/4)	66
第22図 第42次土坑・性格不明遺構遺物実測図 (1/4・1/2)	27	第63図 第39次性格不明遺構出土遺物実測図2 (1/2・1/4)	67
第23図 大道遺跡群第26・27・33次調査遺構配置図 (1/400)	29	第64図 第39次性格不明遺構出土遺物実測図3 (1/4)	68
第24図 大道遺跡群第26次調査全体遺構図 (1/300)	30	第65図 第39次性格不明遺構・その他の出土遺物実測図4 (1/2・1/4)	70
第25図 大道遺跡群第27次調査全体遺構図 (1/300) 調査区東壁・北壁土層図 (1/200・1/80)	31	第66図 第39次出土繩文土器遺物実測図 (1/4)	71
第26図 大道遺跡群第33次調査全体遺構図 (1/200) 東壁土層断面実測図 (1/80)	32	第67図 繩文時代～弥生時代中期の遺物	77
第27図 第26次土坑遺構実測図 (1/40・1/60)	33	第68図 弥生時代後期の出土遺物	78
第28図 第27次土坑遺構実測図 (1/60・1/30)	34	第69図 古墳時代前期土器資料 (1/15)	79
第29図 第26次溝跡土層断面実測図 (1/20)	34	第70図 古墳時代 特殊遺物 (1/4・1/8)	80
第30図 第26次自然流路跡土層断面実測図 (1/60)	36	第71図 中世・近世初頭の出土遺物	80
第31図 第27次自然流路跡土層断面実測図 (1/40)	37	第72図 大道遺跡群周辺の古地形復元図 (1/10000)	81
第32図 第27・33次自然流路跡土層断面実測図 (1/50)	38	第73図 繩文時代～弥生時代中期の遺構分布図 (1/5000)	82
第33図 第26次出土遺物実測図 (1/1・1/4)	39	第74図 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構分布 [A～C区] (1/1800)	84
第34図 第27次出土遺物実測図 (1/1・1/4)	40	第75図 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構分布 [D～F区] (1/1800)	84
第35図 第33次出土遺物実測図1 (1/2・1/4)	41	第76図 38SD001・41SD015と21SD035の関係 (1/80)	85
第36図 第33次出土遺物実測図2 (1/2・1/4)	42	第77図 中世段階遺構分布図 (1/5000)	86
第37図 第33次出土遺物実測図3 (1/2・1/4)	43	第78図 地山ブロック土坑集成図 (1/100・1/150)	87
第38図 大道遺跡群第6・30・39次調査遺構配置図 (1/350)	45	第79図 大道遺跡群周辺の遺跡調査地点及び字図 (1/8000)	88
第39図 大道遺跡群第30次全体遺構図 (1/200) 調査区東壁土層断面図 (1/80)	46	第80図 時期認定資料	89
第40図 第30次井戸跡遺構実測図 (1/40) 土層模式図	47	第81図 大道遺跡群及び周辺遺跡での特殊遺物 (1/3・1/4・1/8)	90
第41図 第30次土坑遺構実測図 (1/20)	47	第82図 8～9世紀の遺構分布 [A～C区] (1/1800)	91
		第83図 8～9世紀の遺構分布 [D～F区] (1/1800)	91
		第84図 第28次調査地点運河状遺構周辺のイメージ図	92

表目次

表1 大道遺跡群調査一覧表	5	表6 大道遺跡群第30次調査 遺構出土遺物一覧表	74
表2 大道遺跡群第26次調査 遺構出土遺物一覧表	72	表7 大道遺跡群第39次調査 遺構出土遺物一覧表	74
表3 大道遺跡群第27次調査 遺構出土遺物一覧表	72	表8 大道遺跡群第39次調査 遺構出土遺物一覧表	75
表4 大道遺跡群第33次調査 遺構出土遺物一覧表	73	表9 古墳時代の主要遺構出土遺物の位置づけ	79
表5 大道遺跡群第30次調査 遺構出土遺物一覧表	73	表10 大道遺跡群及び東田室遺跡群の諸様相	94

写真目次

写真図版1

大道遺跡群範囲（推定）（上が北）
整備途中の事業地一帯（下が北）

写真図版2

第30次調査区全景（上が北）
第33次調査区全景（上が北）

写真図版3

第38次調査区全景（上が北）
第39次調査区全景（上が北）

写真図版4（第30次）

第30次調査区検出状況（北より）
第30次調査区南端検出状況（東より）
30SX015底面検出状況（北より）
30SX015南北ベルト北半土層（西より）

第30次調査区東壁
30SX005遺物出土状況（東より）
30SX015床面検出状況（東より）
30SX015底面ピット完掘状況（東より）

写真図版5（第30次）

30SE020半裁（西より）
30SE020遺物出土状況近景（西より）
30SE020曲物出土状況（西より）
30SK041半裁（西より）

30SE020遺物出土状況（西より）
30SE020黒色土器出土状況（西より）
30SK025半裁（東より）
30SK041遺物出土状況（西より）

写真図版6（第33次・第38次）

33NR001検出状況（南東より）
33NR001東西トレンチ土層全景（南より）
第38次調査区検出状況（西より）
38SD001検出状況（東より）

33NR001北壁土層（南より）
33NR001杭跡検出状況（南より）
第38次調査区完掘状況（西より）
38SD001調査区東壁土層堆積状況（西より）

写真図版7（第38次・第39次）

38SK015土層堆積状況（北より）
第39次調査区検出状況（南東より）
第39次調査区南壁東端土層堆積状況（北西より）
39SD047土層堆積状況（西より）

38SK015完掘状況（北西より）
第39次調査区南東部分検出状況（北より）
第39次1トレンチ南壁土層堆積状況（北より）
39SX005検出状況（北東より）

写真図版8（第39次）

39SX005土層堆積状況（北より）
39SX020土層堆積状況（北より）
39SX085再検出状況（北より）
39SX085東側土層堆積状況（西より）

39SX005遺物出土状況
39SX020土層堆積状況（西より）
39SX085・090作業中（西より）
39SX090土層堆積状況（西より）

写真図版9（第39次・第42次）

39SX085・100土層堆積状況（東より）
39SX085・090完掘状況（南西より）
第42次調査区全景（東より）
42SK001遺物出土状況（西より）

39SX085・090完掘状況（東より）
39SX100出土状況（西より）
第42次調査区全景（南より）
42SK005土層観察時（南より）

写真図版10（第42次）

42SK005遺物出土状況（西より）
42SE007遺物出土状況（西より）
42SE007遺物出土状況2（東より）
42SK009土層観察時（北東より）

42SK006遺物出土状況（南より）
42SE007遺物出土状況1詳細（西より）
42SE007遺物出土状況3詳細
42SK012土層観察時（北東より）

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

大分市は、都市づくりの基本方針として以下を掲げている。

県都にふさわしい広域都心の形成

都市の産業や生活を支える交通体系の確立

都市生活を豊かにする安全快適な住環境と地区拠点を中心としたコンパクトな都市づくり

都市の個性と風格を醸成し集客力を高める都市の魅力創出

人と自然とが共生できる豊かな自然環境の保全・活用と身近な緑、水辺の再生

産学官民が協働して参画する都市づくりの推進

これらの方針を具現化する事業の一つが、大分駅周辺総合整備事業である。本市は、平成8年度より、大分駅の高架化・都市街路整備・大分駅南土地区画整理を一体とする大分駅周辺総合整備事業を推進している。このうち、大分駅南土地区画整理事業は、長年の懸案であったJR大分駅及び駅近傍JR線の高架化実施にあわせて、南北市街地の一体化を図るとともに、商業・業務用地と都市型住宅地の両面を整備することで地方中核市としての大分市の中心部としてふさわしい都市拠点の形成をめざしたものである。その上で、駅北地区は商業業務都心、駅南地区は情報文化都心としてそれぞれ位置づけられ、100年に1度のまちづくりが推進されている。

平成25年7月20日、大分市中心部の集客を担う目玉として「ホルトホール大分」がオープンした。開館記念イベントとして、三枝成彰による演奏会、南こうせつコンサート、その他福祉・健康に関連する講話や大分ゆかりのアーティストによる演劇等が催され、多くの市民が来場していた。市民のニーズも高く、開館から1ヶ月で延べ24万3千人が利用している。利用状況を見ると、例えば、市民図書館を利用し、子供ルーム・人権啓発普及ルームであるヒューレ大分やカフェに足を運ぶというような、1度で複数の施設を巡る相乗効果が生まれており、本施設のメリットが窺える。ホルトホール大分は、文化・福祉・教育・産業・交流・健康・情報の7つの機能を備えた多機能型複合施設であり、市民が集い・学び・憩い・賑わい・交流する情報文化の新都心の拠点としての役割が今後も期待される。

大道遺跡群は、大分駅周辺総合整備事業着手に先立ち、計画地区内の埋蔵文化財の所在状況に関して平成8年10月、都市計画課駅南対策室より大分市教育委員会文化財室（当時）に照会されたことで認知されることとなった。駅南地区は戦前に宅地化されたことで従来の地形が失われ、それ以前は水田やレンコン畑といった湿田が広がっており、遺跡の所在に関する情報は全く知られていなかった。大分市教育委員会では、事業に先立ち平成8年9月25日から10月11日に駅周辺総合整備課事務所予定地の試掘調査を実施したところ、遺構が存在することを確認した（東大道遺跡としていたが、平成12年度から大道遺跡群に改称）。この結果を受け、大分市教育委員会では、平成9年度から移転により空地となった地点について、順次試掘調査を行い、遺跡の有無及び本調査が必要なエリアの絞り込みに努めることにした。平成11年度までの断続的な試掘調査の結果、事業予定地内には2地区に埋蔵文化財包蔵地が所在することが判明し、大分駅の東側エリアは南金池遺跡、大分駅南側エリアは大道遺跡群として周知されることとなった。このうち大道遺跡群は、大分駅南地区土地区画整理事業地内の中心域に位置し、東西約0.6km、南北約0.7kmの範囲に広がり、大きくは弥生時代～古墳時代、奈良・平安時代、明治～昭和時代に該当する遺跡である。

本書は、平成20年度～同24年度にかけて、主にシンボルロード地内に該当する地点の発掘調査情報と併せて、調査事業が終了するまでの11年間の調査成果を通史的に著した大道遺跡群総括編としたものである。本遺跡群で発見された主要遺構・遺物を時代毎にまとめ、遺跡の性格及び駅南地域における土地利用の在り方を概観し、本地区の開発史について学習できるように努めている。

第2節 調査組織

【調査主体】大分市教育委員会 教育長 足立一馬

平成20年度 第26・27・29・30次発掘調査 報告書刊行：『大道遺跡群2』

【事務局】大分市教育委員会教育総務部文化財課 【調査協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課

教育総務次長兼課長 玉永 光洋

都市計画部参事兼課長 木崎 康雄

参 事 岩田 祐二

管理係

課長補佐兼係長 福田 誠一

管理係

伊達 俊秀

主 査 幸 俊昭

主 査

桜井 敏男

主 任 加藤 キヌ

主 任

加藤真由美

主 事

大川内匡史

文化財係

課長補佐兼係長 塔鼻 光司

換地工務係

課長補佐兼係長 富永 好一

主任技師 高畠 豊（整理報告担当）

主 査 後藤 正一

主任技師 中西 武尚（発掘調査担当）

主 事 五十川雄也（発掘調査担当）

主 事 古川 匠（発掘調査担当）

嘱 託 井口あけみ（整理報告担当）

佐藤 孝則（整理報告担当）

廣瀬 育子（整理報告担当）

平成21年度 第33・35次発掘調査 報告書刊行：『大道遺跡群3』

【事務局】大分市教育委員会教育総務部文化財課 【調査協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課

教育総務次長兼課長 玉永 光洋

都市計画部参事兼課長 中畑 修

参 事 岩田 祐二

課長補佐 塔鼻 光司

管理係

課長補佐兼係長 福田 誠一

管理係

伊達 俊秀

主 査 幸 俊昭（～6月末）

主 査

高屋 修司

主 査 神崎小由美（7月1日～）

主 査

加藤真由美

主 任 加藤 キヌ（～6月末）

主 事

大川内匡史

文化財係

係 長 坪根 伸也

換地工務係

課長補佐兼係長 富永 好一

主任技師 高畠 豊（整理・報告）

主 査

後藤 正一

主 任 永松 正大（発掘調査担当）

主 任 佐藤 道文（発掘調査担当）

嘱 託 井口あけみ（整理報告担当）

木村 藍子（整理報告担当）

倉増美智代（整理報告担当）

佐藤 孝則（整理報告担当）

山下 朋紀（発掘調査・整理報告担当）

平成22年度 第38・39次発掘調査 報告書刊行：『大道遺跡群4』

【事務局】大分市教育委員会教育部文化財課

教育部次長兼課長 玉永 光洋

課長補佐 福田 誠一

課長補佐 塔鼻 光司

管理係

係 長 筒井 和信

主 査 神崎小由美

主 事 朝川 貴俊

文化財係

係 長 坪根 伸也

専門員 高畠 豊

専門員 河野 史郎（整理報告担当）

主 事 長 直信（発掘調査担当）

嘱 託 井口あけみ（整理報告担当）

木村 藍子（整理報告担当）

倉増美智代（整理報告担当）

佐藤 良子（整理報告担当）

佐藤 孝則（整理報告担当）

稗田 智美（整理報告担当）

【調査協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課

都市計画部参事兼課長 中畑 修

参 事 伊達 俊秀

管理係

係 長 衛藤 興憲

主 査 高屋 修司

主 事 大川内匡史

換地工務係

課長補佐兼係長 富永 好一

専門員 副田 泰二

主 任 鶴上 浩

平成23年度 第40・41次発掘調査 報告書刊行：『大道遺跡群5』

【事務局】大分市教育委員会教育部文化財課

教育部参事兼課長 玉永 光洋

参 事 福田 誠一

参 事 塔鼻 光司

管理普及担当班

主 幹（グループリーダー）坪根 伸也

主 査 神崎小由美

【調査協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課

課 長 長野 保幸

課長補佐 池辺 誠

管理係

係 長 衛藤 興憲

主 査 高屋 修司

主 事 大川内匡史

埋蔵文化財担当班

換地工務係

専門員（グループリーダー）池邊千太郎

専門員 塩地 潤一（発掘調査担当）

主 任 佐藤 道文（整理報告担当）

主 事 朝川 貴俊

嘱 託 稗田 智美（整理報告担当）

平成24年度 第42次発掘調査 報告書刊行：『大道遺跡群6』

【事務局】大分市教育委員会教育部文化財課

課長	福田 誠一
主幹	坪根 伸也
主幹	池邊千太郎

埋蔵文化財担当班

専門員（グループリーダー）	高畠 豊
専門員	塙地 潤一（発掘調査担当）
主査	佐藤 道文（整理報告担当）
主事	朝川 貴俊
主事	松浦 憲治（発掘調査担当）
嘱託	倉増美智代（整理報告担当）
	敷島加代子（整理報告担当）

【調査協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課

課長	長野 保幸
課長補佐	井筒 幸男

管理担当班

主幹（グループリーダー）	衛藤 興憲
主査	高屋 修司
専門員	武安 高志
主事	大川内匡史
換地工務担当班	
主幹（グループリーダー）	副田 泰二
主任	鶴上 浩

平成25年度 報告書刊行：『大道遺跡群7』

【事務局】大分市教育委員会教育部文化財課

課長	塔鼻 光司
参事	神田 洋
参事補	坪根 伸也

大分市歴史資料館

埋蔵文化財担当班（埋蔵文化財保存活用センター）	
参事補（グループリーダー）	池邊千太郎
専門員	塙地 潤一（整理報告担当）
主査	佐藤 道文（整理報告担当）
主任	長 直信（整理報告担当）
主事	松浦 憲治（整理報告担当）
嘱託	倉増美智代（整理報告担当）
	敷島加代子（整理報告担当）

【調査協力】大分市都市計画部 駅周辺総合整備課

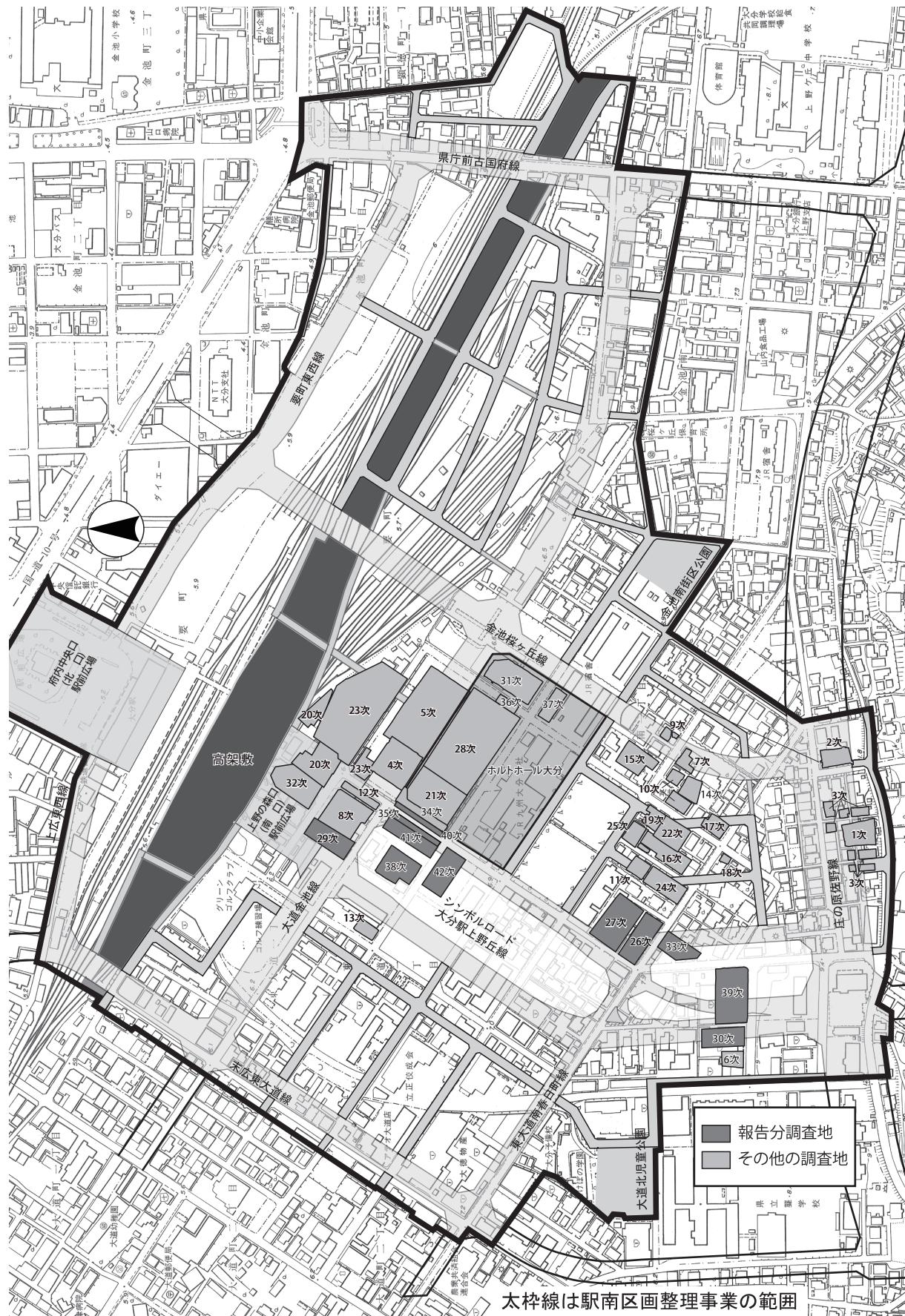
都市計画部次長兼課長	長野 保幸
課長補佐	井筒 幸男

管理担当班

主幹（グループリーダー）	衛藤 興憲
主査	高屋 修司
専門員	武安 高志
主事	大川内匡史
換地工務担当班	
主幹（グループリーダー）	副田 泰二
主任	鶴上 浩

表1 大道遺跡群調査一覧表

調査次数	所在地	調査担当者	本調査期間	調査面積	調査年度	掲載報告書
1	大分市金池南1丁目	後藤典幸・梅田昭宏	2002.01.28～2002.03.26	630.5m ²	平成13年度	第79集『大道遺跡群1』
2	大分市金池南1丁目	後藤典幸・梅田昭宏・勝間田あや	2002.04.17～2002.06.27	462.0m ²	平成14年度	第79集『大道遺跡群1』
3	大分市金池南1丁目	後藤典幸・梅田昭宏・勝間田あや	2002.08.31～2002.12.12	694.0m ²	平成14年度	第79集『大道遺跡群1』
4	大分市金池南	高畠豊・梅田昭宏	2003.01.06～2003.03.26	1,205.0m ²	平成14年度	第91集『大道遺跡群2』
5	大分市金池南	高畠豊・羽田野達郎	2003.05.01～2003.12.28	3,169.0m ²	平成15年度	第91集『大道遺跡群2』
6	大分市東大道2丁目	高畠豊・梅田昭宏	2004.01.23～2004.02.18	267.0m ²	平成15年度	第91集『大道遺跡群2』
7	大分市金池南1丁目	高畠豊・羽田野達郎	2004.08.10～2004.09.28	118.0m ²	平成16年度	第79集『大道遺跡群1』
8	大分市東大道1丁目	高畠豊・羽田野達郎	2004.11.01～2005.02.28	1,170.0m ²	平成16年度	第91集『大道遺跡群2』
9	大分市金池南1丁目	高畠豊・羽田野裕之・森岡晃司	2005.06.07～2005.06.14	103.0m ²	平成17年度	第99集『大道遺跡群3』
10	大分市金池南1丁目	高畠豊・羽田野裕之・森岡晃司	2005.06.16～2005.08.30	560.0m ²	平成17年度	第99集『大道遺跡群3』
11	大分市金池南1丁目	高畠豊・羽田野裕之・森岡晃司	2005.08.12～2005.10.28	246.0m ²	平成17年度	第99集『大道遺跡群3』
12	大分市東大道1丁目	高畠豊・森岡晃司	2005.10.12～2004.12.27	241.0m ²	平成17年度	第91集『大道遺跡群2』
13	大分市東大道1丁目	高畠豊・森岡晃司	2006.01.24～2006.03.14	424.0m ²	平成17年度	第91集『大道遺跡群2』
14	大分市金池南1丁目	永松正大・古田陽	2006.04.25～2006.06.15	317.0m ²	平成18年度	第99集『大道遺跡群3』
15	大分市金池南1丁目	永松正大・古田陽	2006.06.19～2006.08.28	603.0m ²	平成18年度	第99集『大道遺跡群3』
16	大分市金池南1丁目	永松正大	2006.10.27～2006.12.15	683.0m ²	平成18年度	第99集『大道遺跡群3』
17	大分市金池南1丁目	永松正大	2006.08.21～2006.09.14	297.0m ²	平成18年度	第99集『大道遺跡群3』
18	大分市金池南1丁目	永松正大	2006.08.28～2006.09.14	57.0m ²	平成18年度	第99集『大道遺跡群3』
19	大分市金池南1丁目	永松正大	2006.09.15～2006.11.08	306.0m ²	平成18年度	第99集『大道遺跡群3』
20	大分市東大道1丁目	荻幸二・高畠豊	2007.12.09～2008.03.28	1,389.0m ²	平成19年度	第106集『大道遺跡群4』 弥生時代・古墳時代環濠関連遺構編 第113集『大道遺跡群5』 古代～近代編
21	大分市金池南1丁目	永松正大	2006.12.25～2007.03.28	1,628.0m ²	平成18年度	第125集『大道遺跡群6』
22	大分市金池南1丁目	高畠豊・羽田野達郎・上原翔平	2007.07.02～2007.07.23	573.0m ²	平成19年度	第99集『大道遺跡群3』
23	大分市金池南1丁目	高畠豊・羽田野達郎・上原翔平	2008.07.24～2008.12.01	4,152.0m ²	平成20年度	第106集『大道遺跡群4』 弥生時代・古墳時代環濠関連遺構編 第113集『大道遺跡群5』 古代～近代編
24	大分市金池南1丁目	高畠豊・羽田野達郎・上原翔平	2008.02.04～2008.03.11	658.0m ²	平成19年度	第99集『大道遺跡群3』
25	大分市金池南1丁目	中西武尚	2008.05.22～2008.08.04	125.0m ²	平成20年度	第99集『大道遺跡群3』
26	大分市東大道2丁目	中西武尚	2008.05.22～2008.08.04	551.5m ²	平成20年度	第130集『大道遺跡群7』
27	大分市東大道2丁目	中西武尚	2008.09.01～2009.03.13	1,158.9m ²	平成20年度	第130集『大道遺跡群7』
28	大分市金池南1丁目	中西武尚・佐藤孝則	2008.09.01～2009.03.13	5,000.0m ²	平成20年度	第125集『大道遺跡群6』
29	大分市金池南1丁目	五十川雄也	2008.09.01～2009.03.13	484.0m ²	平成20年度	第130集『大道遺跡群7』
30	大分市東大道2丁目	古川匠	2009.02.16～2009.03.18	645.0m ²	平成20年度	第130集『大道遺跡群7』
31	大分市金池南1丁目	佐藤道文・山下朋紀	2009.06.18～2009.08.31	1,119.1m ²	平成21年度	第125集『大道遺跡群6』
32	大分市東大道1丁目	佐藤道文・山下朋紀	2009.10.13～2009.12.03	954.0m ²	平成21年度	第106集『大道遺跡群4』 弥生時代・古墳時代環濠関連遺構編 第113集『大道遺跡群5』 古代～近代編
33	大分市東大道2丁目	佐藤道文・山下朋紀	2009.09.02～2009.09.30	490m ²	平成21年度	第130集『大道遺跡群7』
34	大分市金池南1丁目	永松正大・山下朋紀	2010.02.04～2010.03.16	430.6m ²	平成21年度	第125集『大道遺跡群6』
35	大分市東大道1丁目	永松正大	2010.02.04～2010.03.16	353.8m ²	平成21年度	第130集『大道遺跡群7』
36	大分市金池南1丁目	永松正大	2010.02.04～2010.03.16	160.3m ²	平成21年度	第125集『大道遺跡群6』
37	大分市金池南1丁目	永松正大	2010.02.21～2010.03.16	252.8m ²	平成21年度	第125集『大道遺跡群6』
38	大分市東大道1丁目	長直信	2010.07.02～2010.09.15	837.0m ²	平成22年度	第130集『大道遺跡群7』
39	大分市東大道2丁目	長直信	2010.07.02～2010.09.15	1,438.3m ²	平成22年度	第130集『大道遺跡群7』
40	大分市東大道1丁目	塙地潤一	2011.11.01～2011.11.25	208.4m ²	平成23年度	第130集『大道遺跡群7』
41	大分市東大道1丁目	塙地潤一	2011.12.02～2011.12.26	603.5m ²	平成23年度	第130集『大道遺跡群7』
42	大分市東大道1丁目	塙地潤一・松浦憲治	2012.08.22～2012.10.15	800.0m ²	平成24年度	第130集『大道遺跡群7』



第1図 調査区配置図 (1/5000)

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

大分市は九州の北東部に位置しており、北側を瀬戸内海西端の別府湾に面している。別府湾に面した一帯には大分平野が広がっており、平野の中央部には祖母山の東裾を祖流とする大野川が北流し、平野西部には由布岳の東裾を祖流とする大分川が東流のち北流する。この二つの河川はその流域に河岸段丘を発達させ、上野台地や鶴崎台地などの低位の河岸段丘を形成している。さらに河口部には三角州を展開しており、大分市街地は、この三角州上に形成されたものである。一帯には沖積平野が広がっており、自然堤防、後背湿地などの微地形が形成されている。平野の西側には国東半島の両子山から鶴見岳・由布岳・九重山・阿蘇山へ北東から南西方向に続く第四紀火山列があり、高崎山がこれに含まれる。高崎山周辺の丘陵地である金谷迫から流出する住吉川（毘沙門川）は開析谷の形成による開析平野を展開しているが、三角州は形成していない。

今回報告する大道遺跡群は、大分川の左岸、河口部に形成された三角州上に立地しており、南側には上野台地が展開している。第2図は、調査地周辺の地形分類図である。大分川流域の沖積面は、東西にのびる上野台地により二分されている。南側は河道の変遷が激しく、旧河道や微高地が入り組む様相であり、大道遺跡群が位置する北側は三角州地帶として自然堤防、後背湿地、旧河道などが広く展開していることが見てとれる。流路と流路に挟まれた微高地には東田室遺跡や若宮八幡宮遺跡などの集落遺跡が立地することが確認されており、大道遺跡群が位置しているのもこの微高地上である。

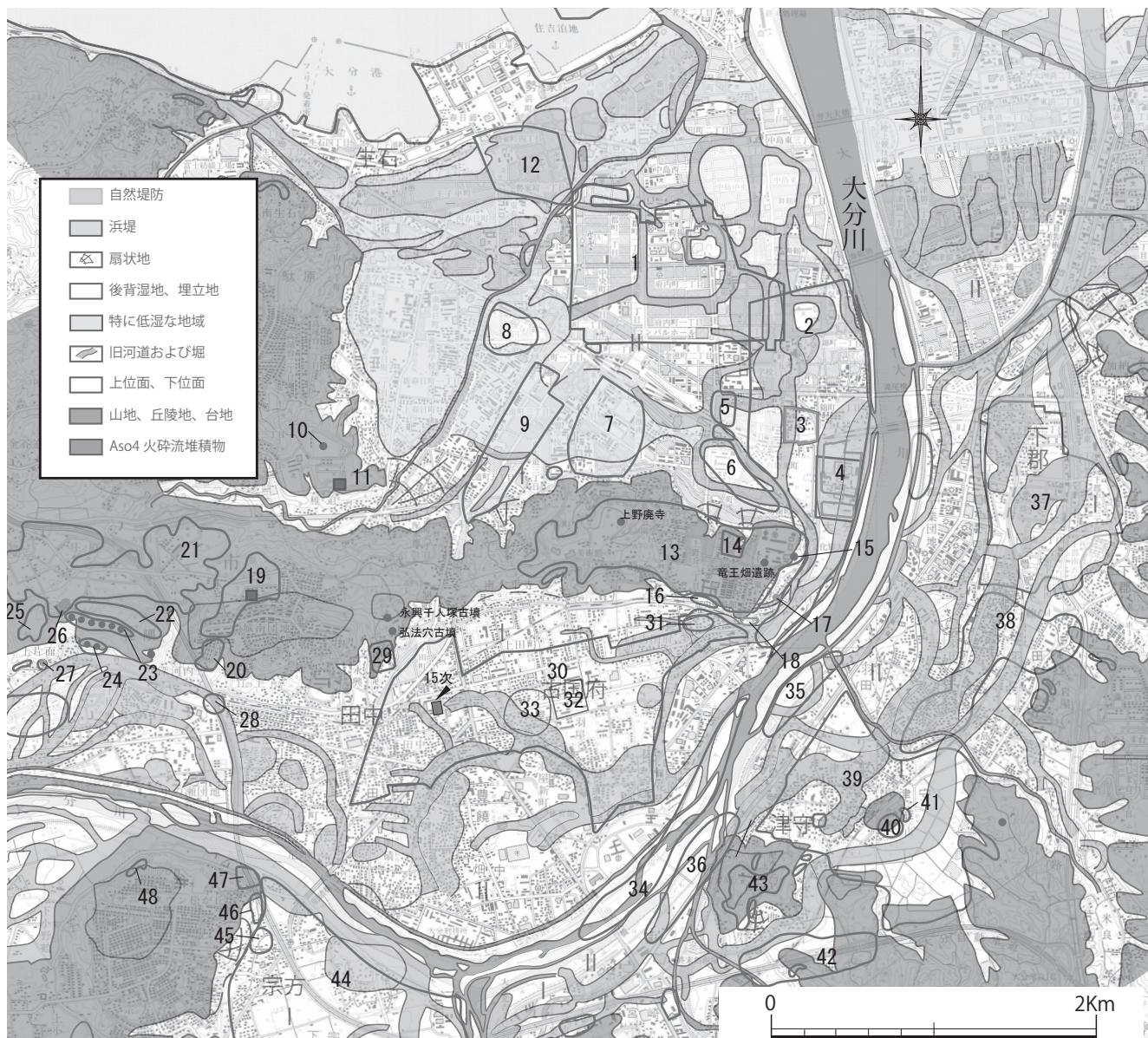
第2節 歴史的環境

大道遺跡群の周辺には、前述のように微高地が広がり、南には丘陵が、北には海が位置するという好環境にあったため、古くから人々の生産活動が活発な場であり、数多くの遺跡が存在している。

縄文時代の良好な遺構は確認されていない。しかし、大道遺跡群では、縄文時代前期の轟B式土器や中期の瀬戸内系土器である船元式土器、後期の磨消縄文土器、阿高系土器、晚期の刻目突帯文土器が多量に出土していることから、周辺では人々の営みがあったと想定される。また上野台地上に位置する上野遺跡群では腰岳産、姫島産黒曜石や金山産チャートを使用した石器が出土している。

弥生時代になると上野台地北側の低地上に立地する若宮八幡宮遺跡において溝状遺構から下黒野式段階に比定される土器が一定量出土しており、弥生時代早期段階には微高地としてすでに安定し、人々が活動していたと推測される。東田室遺跡では、弥生時代前期末の貯蔵穴が多数検出され、弥生時代中期に入ると、台地上に加え沖積面上においても集落が確認されて弥生時代中期後半には竪穴建物がつくられる。大道遺跡群第4次調査では、弥生時代後期の後漢鏡の破片が採集されており、この遺跡周辺に比較的規模の大きな集落の存在が予測される。また上野遺跡群では、弥生時代中期に比定される竪穴建物跡や貯蔵穴、それら集落を区画する環濠のほか、内部に掘立柱建物をもつ隅丸長方形周溝遺構などが確認された。特に、周溝遺構からは、祭祀用の土器類や鉄製ヤリガンナなどが出土しており、特殊な祭祀遺構として位置づけられている大分県内唯一の遺構である。

古墳時代では、大道遺跡群第20・23・32次調査で古墳時代前期前半～中頃の土器が大量に廃棄された幅約2～4mの環濠が検出されており、現代の大分駅を中心とする大規模な集落が形成されていたものと考えられる。環濠内から出土した多量の遺物には、大形の土錐や製塩土器といった海と関わりの深い資料が多く見られ、他にもサル形土製品や模造鏡などが出土している。また第24次調査で検出した井戸跡からはクスノキ製でほぼ完形の臼が出土した。クスノキの伐採年代は歴博年代研究グループにより西暦290年頃と判明している。東田室遺跡では、古墳時代前期中葉～中期前葉にかけての竪穴建物跡などが多数検出されている。大道遺跡群に後続する時



- 1 府内城・城下町跡
- 2 中世大友府内町跡
- 3 大友氏館跡
- 4 旧万寿寺地区
- 5 南金池遺跡
- 6 若宮八幡宮遺跡
- 7 **大道遺跡群**
- 8 東田室遺跡
- 9 大道条里跡
- 10 龜甲山古墳
- 11 古宮古墳
- 12 勢家遺跡

- 13 上野遺跡群
- 14 上野大友館跡(上原館跡)
- 15 大臣塚古墳
- 16 岩屋寺横穴墓群
- 17 元町石仏
- 18 岩屋寺石仏
- 19 城南遺跡
- 20 尼ヶ城遺跡
- 21 庄ノ原遺跡
- 22 田崎遺跡
- 23 田崎古墳群
- 24 万寿山古墳群

- 25 庄ノ原片面遺跡
- 26 蓬萊山古墳
- 27 丑殿古墳
- 28 莢隅杉下遺跡
- 29 永興遺跡
- 30 古國府遺跡群
- 31 岩屋寺遺跡
- 32 金剛宝戒寺跡
- 33 羽屋園遺跡
- 34 大分川河川敷1遺跡
- 35 大分川河川敷3遺跡
- 36 大分川河川敷2遺跡

- 37 下郡遺跡群
- 38 羽田遺跡
- 39 津守遺跡
- 40 篠山山頂遺跡
- 41 篠山横穴墓群
- 42 曲古墳
- 43 守岡遺跡
- 44 玉沢地区条里跡
- 45 乙院遺跡
- 46 北ノ後遺跡
- 47 馬姓遺跡
- 48 小野鶴横穴墓群

第2図 調査地点位置図 (1/40000)

期であり、拠点集落がこちらに移動したと考えられる。また、東田室遺跡第3次調査では絵画土器が出土している。竜をモチーフにしていると考えられ、古墳時代に生きた人々の精神世界や祭祀行為を推察する上で貴重な資料といえる。

古墳時代の墳墓である古墳や横穴墓は、上野台地に多く存在する。豊後で唯一の古墳時代前期の古墳で三角縁波文帯三神三獸鏡と小型仿製重圓文鏡が出土したことで著名な亀甲山古墳は、上野台地に西側に構築されており、古墳時代前期後半に位置付けられることから、時期的、距離的に近い東田室遺跡との関連が想定される。上野台地の東端部には大臣塚古墳が存在する。円筒埴輪が出土しており、その特徴から4世紀末～5世紀初頭の前方後円墳と考えられている。5世紀後半代とされるものに千人塚古墳がある。前方部が短い全長約47mの前方後円墳である。また、古墳時代後期古墳では大規模な横穴石室をもつ弘法穴古墳が6世紀後半に造られる。これらの古墳は、一系列の首長墓であると考えられ、その首長墓の最後のものが古宮古墳である。古宮古墳は、九州地方唯一の畿内系削貫式横口構造を有する古墳時代終末期古墳で、7世紀後半に築造されたものと推定され、壬申の乱で大海人皇子方として活躍した大分君惠尺・雅臣のいづれかの墓と想定されている。

古代の遺構としては、羽屋井戸遺跡の成果が注目される。長大な規模の掘立柱建物跡や門状遺構・柵列などが検出されている。これらの帰属年代は、7世紀後半から8世紀初頭に遡ることから評衡関連の遺構である可能性が想定されている。国衙推定地の古国府地区では、今までの調査結果から8世紀以降の国衙関連施設が存在する可能性は困難であるという評価がなされつつある。それに伴い、從来豊後国府の比定地であった古国府遺跡群に代わり上野台地上に豊後国府及び国衙関連施設の存在を推定する考えが有力になってきている。上野遺跡群竜王畑遺跡では、7世紀後半から10世紀代にかけてのまとまった大規模建物群が検出されており、特に9世紀代の遺構群には築地塀に伴うと見られる溝や一定方位に沿って規則的に配置されている掘立柱建物跡などが認められ、これらが国司館の一部であった可能性が考えられている。また、大道遺跡群第23次調査では、8世紀後半から9世紀前半に比定される掘立柱建物跡14棟などが検出されている。竜王畑遺跡から北西約1.4kmの地点にあり、大分川河口部の水上拠点でもあるから国衙の何らかの機能を持つ施設が分立したものと考えられる。また、隣接する調査地点では、当該期の井戸跡や掘立柱建物跡だけでなく円面硯や奈良三彩陶器壺も出土している。また、長さ約200m以上にも渡って直線的に延びる運河を想起させる溝跡から「厨」と刻書されている土師器小壺が出土している。隣接する南金池遺跡では、井戸跡や製塩土器が多く廃棄された土坑が検出されており、青銅製柄杓子の注口部破片など特殊な遺物も出土している。南金池遺跡の東側に近接し、一連の遺跡である可能性の高い上野町遺跡では自然流路跡と思われる遺構の内部から大形土錘79点、小形土錘339点が集中して出土している。これら土錘の存在は海岸線付近であることなどから漁労を営む集団が居住していた事を示唆している。埋土中には墨書き土器や円面硯、長沙窯系黄釉渴彩水注が出土している。国府比定地の北側に位置しており、大道遺跡群と同様に国府との関連性をもつ水上交通の拠点的集落である可能性が指摘されている。

中世には大分川沿いで中世大友府内町が形成され、近世にはさらに北側の海沿いのエリアに府内城及びその城下町が造られる。しかし、周辺にはそれ以外の顕著な遺跡が見られなくなる。周辺の耕地化が進み、水田としての利用がなされたものと思われる。

第Ⅲ章 調査の成果

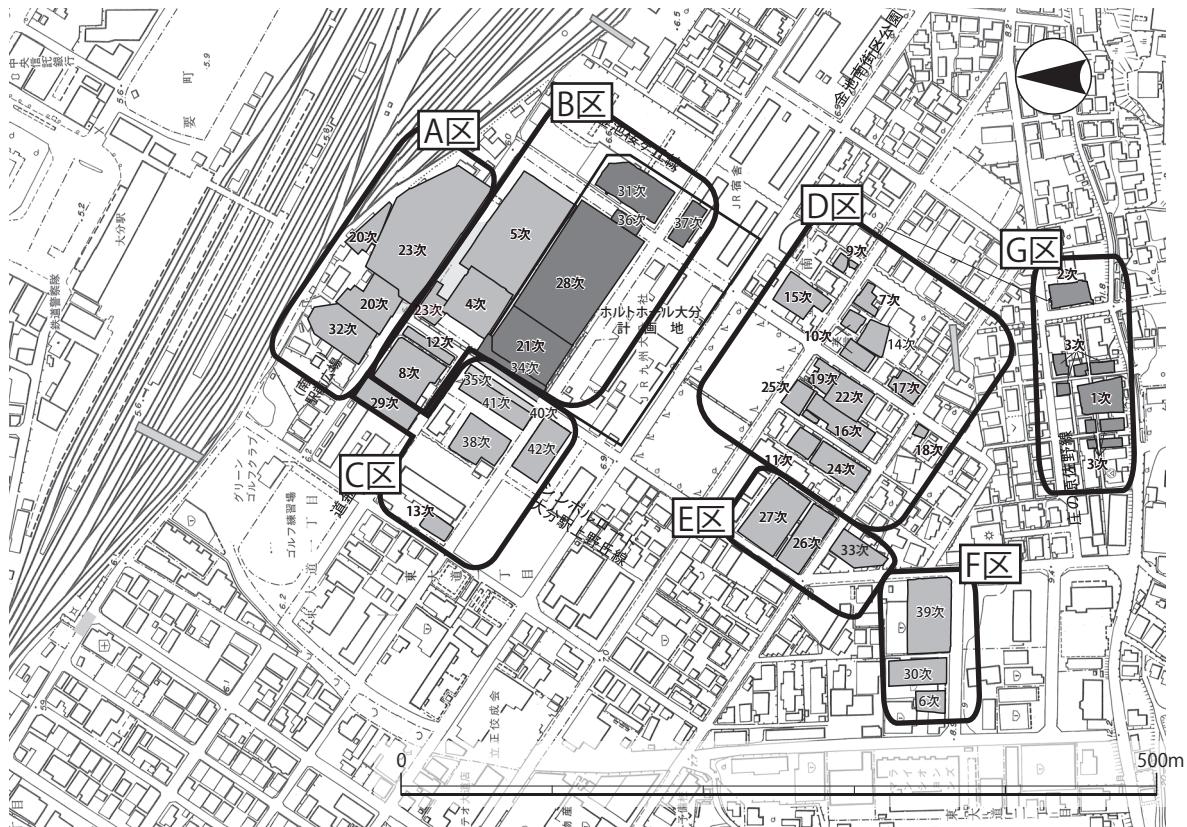
第1節 調査の概要

『大道遺跡群7』の報告にあたって、これまでの全ての調査地点を総括することから遺跡群内を遺構の性格・分布状況等から判断し、A～G区の区分けを以下のとおり行った（第3図参照）。

A区はJR大分駅上野の森口付近が該当し、古墳時代の環濠と推定されている溝跡、古代の掘立柱建物跡群が確認されている。B区はホルトホール大分を中心とする付近で、古代の運河の可能性が高い溝跡及び掘立柱建物跡群が主に広がるエリアである。C区はシンボルロード北側付近で、大道遺跡群の中では比較的遺構密度が低い地点である。

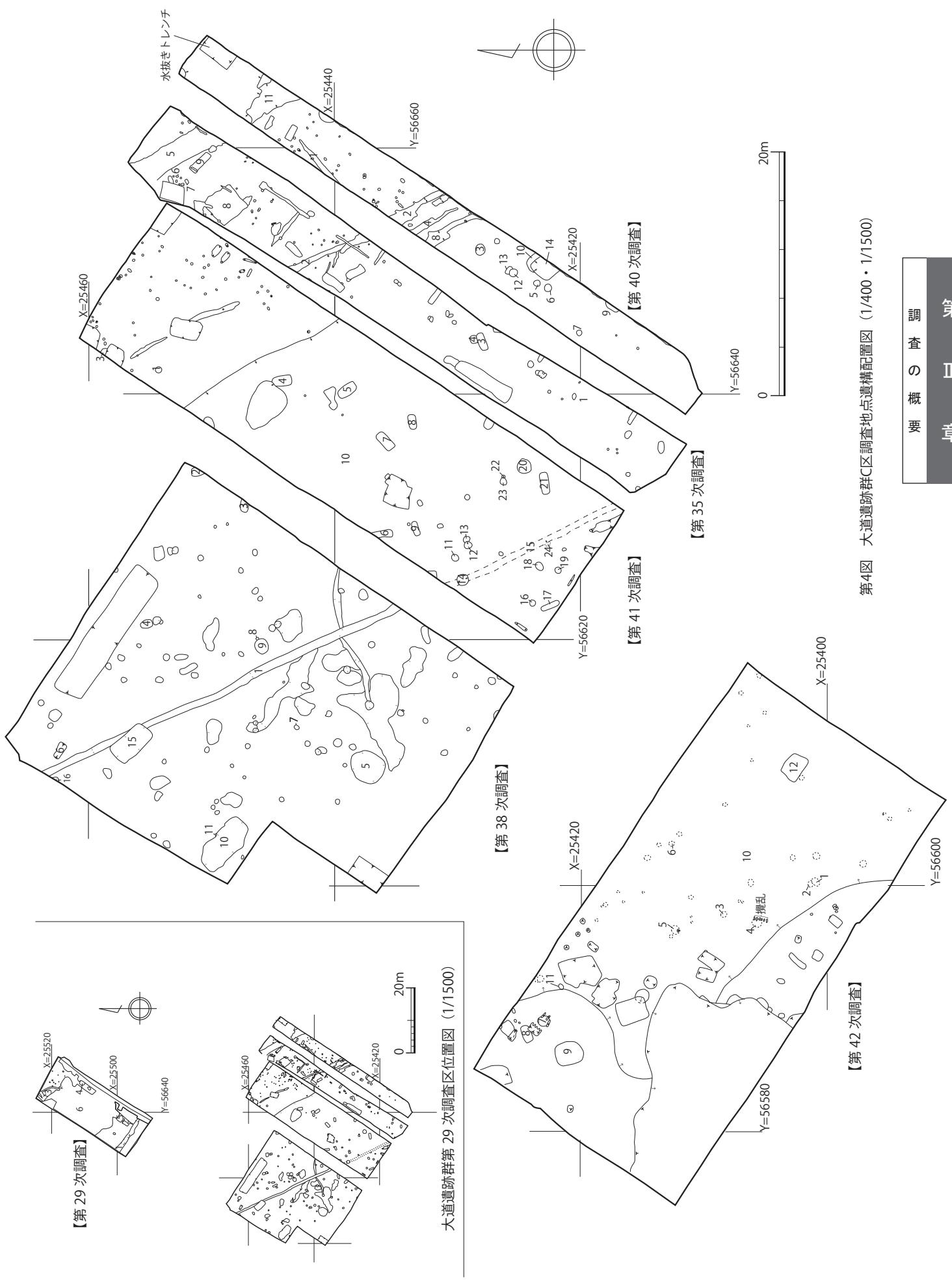
D区はホルトホール大分の南側街区であり、古墳時代前期の集落及び遺物群がその中心であり、古代の遺構が点在する。E区はシンボルロードの屈曲エリアで、この地点は古代の自然流路跡が確認される地点である。自然流路堆積層を基盤として土坑が構築される。F区はシンボルロードの終点付近で、自然流路跡並びに弥生時代前期の遺構群が展開する地点であり、大道遺跡群内では、時期が古い遺構が発見されている。G区はシンボルロードと県道庄の原佐野線合流地点で、この地点は中世後半期や近世段階の溝跡群が検出される区域である。

今回の『大道遺跡群7』では、C区・E区・F区での発掘調査の事実報告を行い、第Ⅳ章総括で、これまでの10数年の調査成果について時代毎にまとめ、遺跡の性格・主要遺構等にふれ、大道遺跡群を通史的に概観できるようにしている。



第3図 大道遺跡群調査地点エリア区分図 (1/5000)

第4図 大道遺跡群C区調査地点遺構配置図 (1/400・1/1500)



第2節 C区の調査

大道遺跡群第29・35・38・40～42次調査

C区は遺跡内の北西部に該当する。C区は第29・35・38・40・41・42次調査区が位置し、駅南地区の発掘調査の拠点として機能した駅南文化財資料室が所在したエリア及びその周辺地に該当する。これらの地点は現在のJR大分駅上野の森口から上野台地に向かって延びるシンボルロード「大分いこいの道」に位置する。本節で報告する調査区6地点は、旧文化財資料室が所在する敷地及び資料室前の市道部分にあたり、その範囲を工事計画等から6区に分割して調査を実施した。

これらの調査地点は大道遺跡群の中では遺構密度が低いが、その中において地山ブロック土を内包する土坑群や同一方向を指向する溝跡群といった遺構が分布する。出土遺物は、近世に該当する資料が多いことから、開発が進んだ時期が比較的新しい段階になることが想定される。

①大道遺跡群第29次調査

A 調査の概要

第29次調査区は第35・38・40～42次調査区が位置するエリアから北に約30m離れた地点に所在する。近代から現代に位置づけられる大形の掘り込み遺構、溝跡などが検出される。

B 基本土層

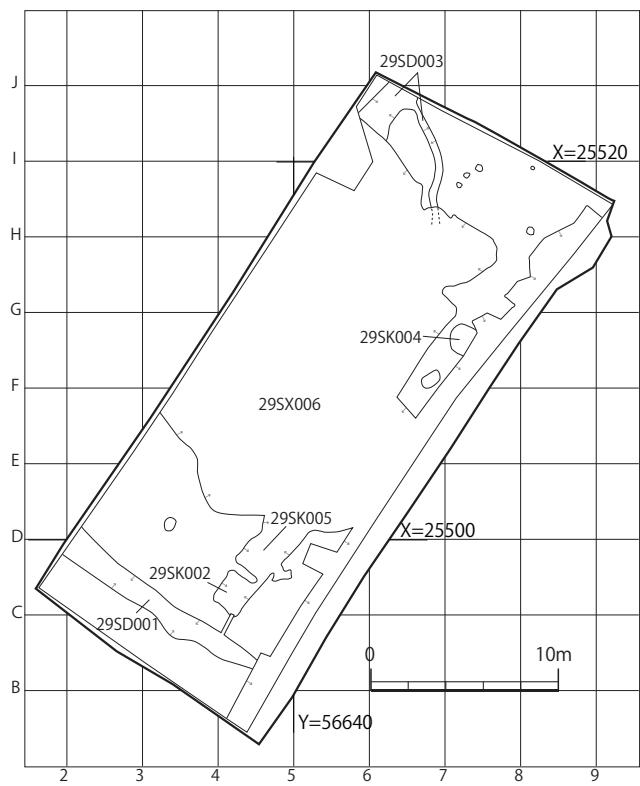
造成土等を含む表土を除去すると石炭ガラや炭化物を多く含む層が現れる。この層を掘り除くと茶褐色土が表出し、その下層には水田層が2層確認される。遺構検出面である淡灰白土は水田層群の下位で確認される。隣接地点である第8次調査区における黄灰色シルト質土がこれに該当し、北側に位置する第32次調査区においても、同層が遺構面として認識されている。

C 遺構

調査区の大部分は、不定形を呈す大規模な掘り込みプランが占める。この大形掘り込み遺構29SX006は、耕作土層に類似する暗灰褐色土を有している。埋土を一部掘り進めると汽車土瓶が出土することから、29SX006は近世以降の所産と考えられる。

調査区の中央東側には、ブロック土を主体とする円形（29SK004）及び隅丸長方形プランを有した土坑が確認される。29SK004の埋土からは肥前系陶器の破片が認められるため、近世以降に位置づけられる。

調査区の南側に所在する、方形状プランを呈す土坑（29SK002・005）からはインク瓶や汽車土瓶、ガラス製の薬品入れ等が出土していることから、明治末以降の時期と推定される。29SK002と29SD001は小溝で繋がっており、この小溝には木樋が埋められている。木樋は29SK002から29SD001へと傾斜していることから、29SK002で溜まった水を29SD001へと流していたことが想定される。よって、29SK002



第5図 大道遺跡群第29次調査遺構配置図 (1/400)

及び29SK005は水溜め等の機能を担っていたと考えられる。

29SD001は砂・粘土ブロックを多く含む層で構成されており、水流があったことを示している。29SD001は第8次調査の8SD013と繋がっており、出土遺物から明治時代初期に埋没したとされていることから、本遺構においても同時期であるといえる。



第6図 墨書痕のある汽車土瓶



第7図 汽車土瓶猪口

②大道遺跡群第35・40・41次調査

A 調査の概要

第35・40・41次調査は、以前は駅南地区の発掘調査の拠点として機能した駅南文化財資料室が所在したエリア及びその周辺地に該当する。3地点は、上記のとおり旧文化財資料室が所在する敷地及び資料室前の市道部分にあたり、その範囲を工事計画等から3区に分割して調査を実施した。

これらの調査地点は大道遺跡群の中においては遺構密度が低く、出土遺物も近世に該当する資料が多いことから、開発が進んだ時期が比較的新しい段階になることが想定される。

B 基本層序

表土を除去すると、耕作土層が2~3層認められ、最も下層に存在する暗褐灰粘質土を取り除くと淡灰黄褐色砂質土を基盤とする遺構検出面が表出す。第35・40次調査では検出標高は約4.6m、第41次調査では北側で約4.6m、4.4mとやや低くなっている。水田等の耕作による削平の可能性が想定されるが、そのためか第41次調査で確認されている遺構の深度は概して浅く、その傾向は第41次調査の西側に位置する第38次調査でも看取される。

C 遺構

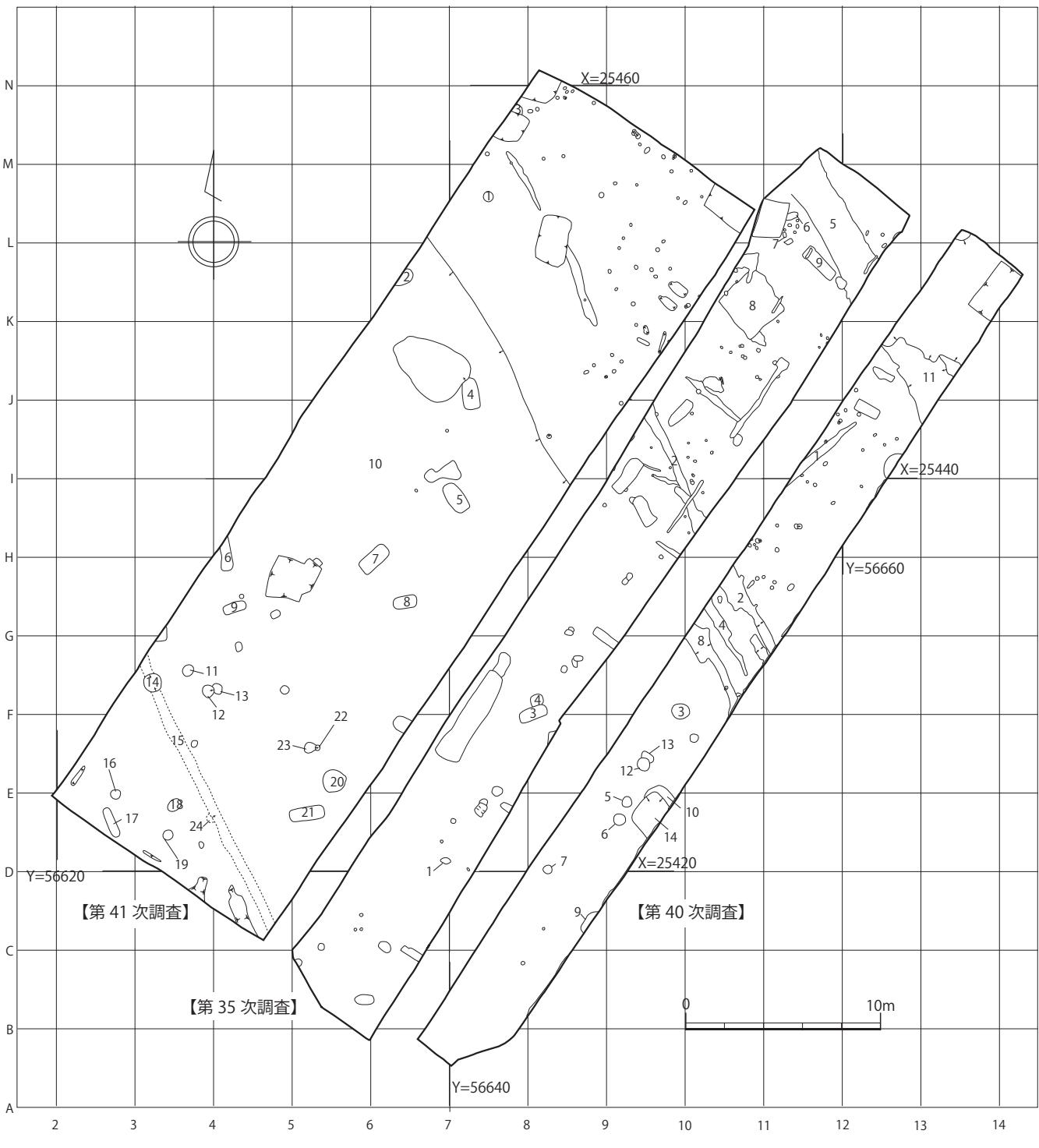
概要

調査で確認された遺構は、土坑・溝跡・ピット等である。遺構の配置状況を概観すると、長方形プランを呈した土坑は、第35・41次調査地点の中央から南側エリアと第35次調査地点の北側エリアの2区域に分布し、それぞれが南北・東西に直交するように配置している。溝跡は各調査地点に跨って検出される。時代が異なるものの全て同一方向を指向している点は注目される。以下、主要遺構について記述する。

土坑（SK）

35SK008（第9図）

第35次調査区北側のK9グリッドで検出され、1辺約2.5m四方の方形プランを呈す。埋土は暗灰褐色ブロック土のほぼ単一層で構成され、人為的に埋められたと推測できる。出土遺物には肥前系磁器が含まれることから、近世段階に位置づけられる。



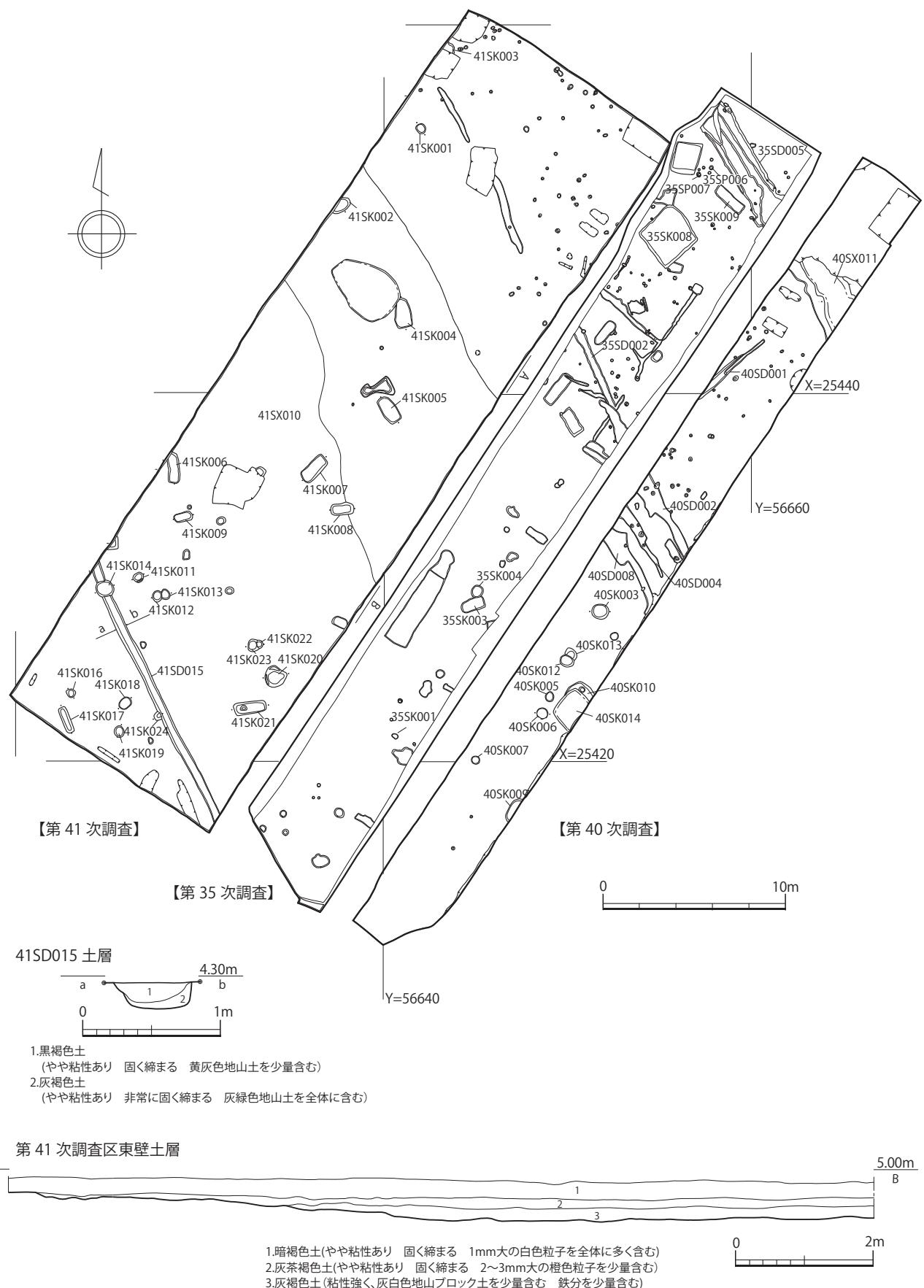
第8図 大道遺跡群第35・40・41次調査遺構配置図 (1/300)

35SK009 (第9図)

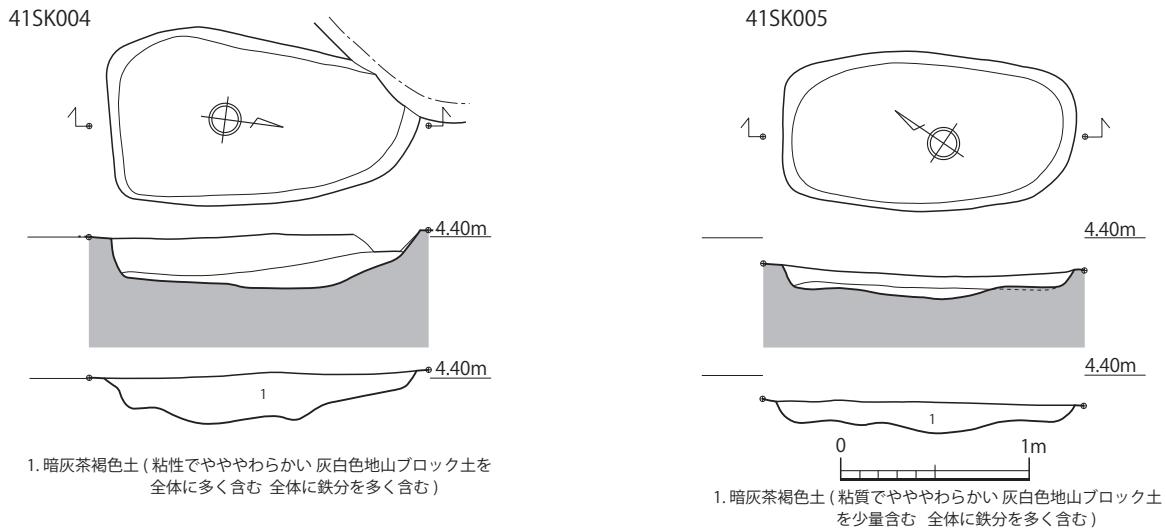
第35次調査区北側のK11グリッドで検出され、長軸約2.0m、短軸約0.7mを測り、平面隅丸長方形を呈す。埋土は灰黄褐ブロック土の単一層のみであり、人為的に埋められたと考えられる。出土遺物から近世段階に位置づけられる。

40SK014 (第9図)

第40次調査区南側のD9グリッドで検出され、一部調査区外へと延びるが、1辺2.0m程度の方形プランを呈すと推測される。埋土は灰褐色土の単一層である。



第9図 大道遺跡群第35・40・41次調査全体遺構図 (1/300)・第41次調査区土層断面実測図 (1/80)



第10図 第41次土坑遺構実測図 (1/40)

41SK004 (第10図)

第41次調査区中央やや北よりのJ7グリッドで検出され、長軸約1.6m、短軸約0.9m、深さ約0.3mを測り、平面形状は不定形な隅丸長方形を呈す。底面はやや歪であり、北側壁面は緩やかな傾斜で立ち上がる。埋土は地山ブロック土を多く含んでおり、人為的に埋められたと考えられる。出土遺物には土師器蓋もしくは皿の破片が含まれるが、明確な時期は不明である。

41SK005 (第10図)

第41次調査区中央のH7グリッドで検出した長軸約1.5m、短軸約0.8m、深さ約0.1mを測り、平面隅丸長方形を呈す。底面は中央部分が窪み、やや起伏が認められる。埋土中には地山ブロック土を含んでいる。時期は不明である。

41SK006 (第11図)

第41次調査区西側のH4グリッドで検出された。長軸約1.7m、短軸約0.6m、最大深度約0.2mを測り、平面隅丸長方形を呈す。底面は南側でやや窪むが概ねフラットである。埋土中には地山ブロック土を多く含んでいる。時期は不明である。

41SK007 (第11図)

第41次調査区中央のH6グリッドで検出された。長軸約1.6m、短軸約0.8m、深さ約0.15mを測り、平面隅丸長方形を呈す。底面はほぼフラットである。埋土にはブロック土が多く含まれる。

41SK008 (第11図)

第41次調査区中央東よりのG6グリッドで検出された。長軸約1.2m、短軸約0.7m、最大深度約0.35mを測り、平面隅丸長方形を呈す。他の長土坑と比べると深度があり、壁面の立ち上がりも急傾斜である。また底面は西から東へと傾いている。埋土中に地山ブロック土を多く含んでいる。

41SK009 (第9図)

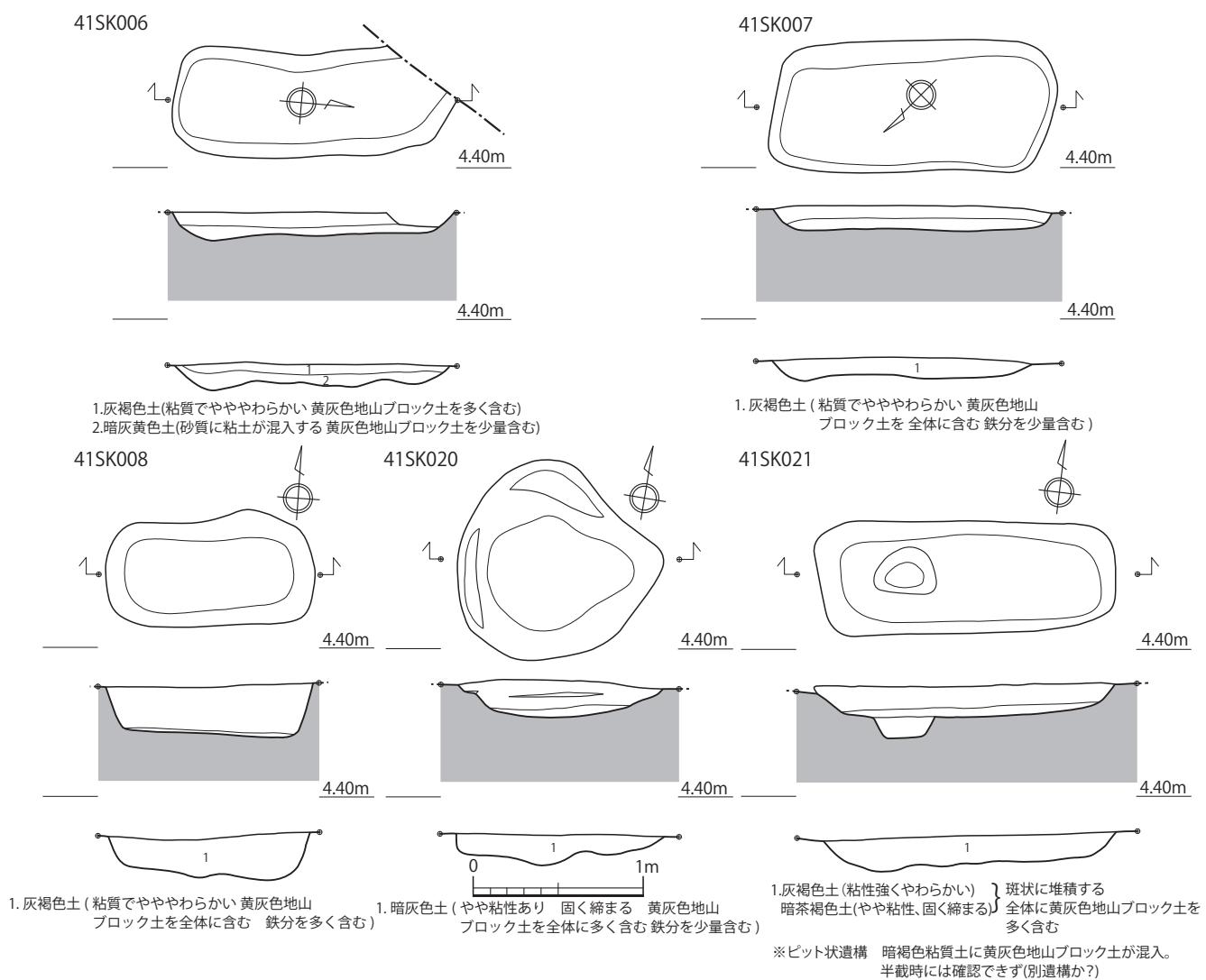
第41次調査区西側のG4グリッドで検出された。長軸約1.0m、短軸約0.5m、深さ約0.1mを測り、平面隅丸長方形を呈す。埋土には地山ブロック土を含んでいる。

41SK020 (第11図)

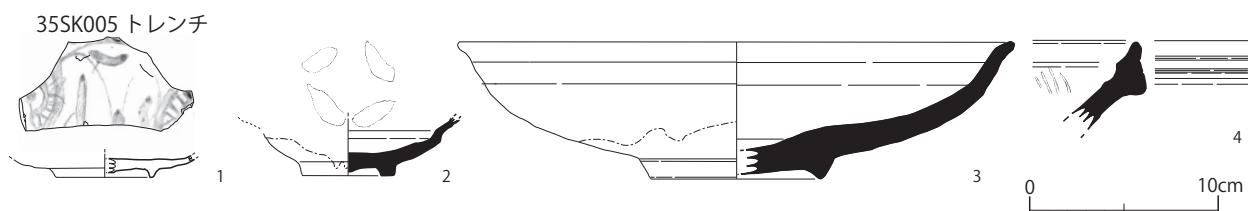
第41次調査区南東部のE5グリッドで検出された。径約1.2m、最大深度約0.2mを測り、平面不定形な円形を呈す。底面は緩やかなレンズ状をなし、北側及び西側にはテラスが存在する。埋土は固く締まっており、地山ブロック土を多く含んでいる。時期は不明である。

41SK021 (第11図)

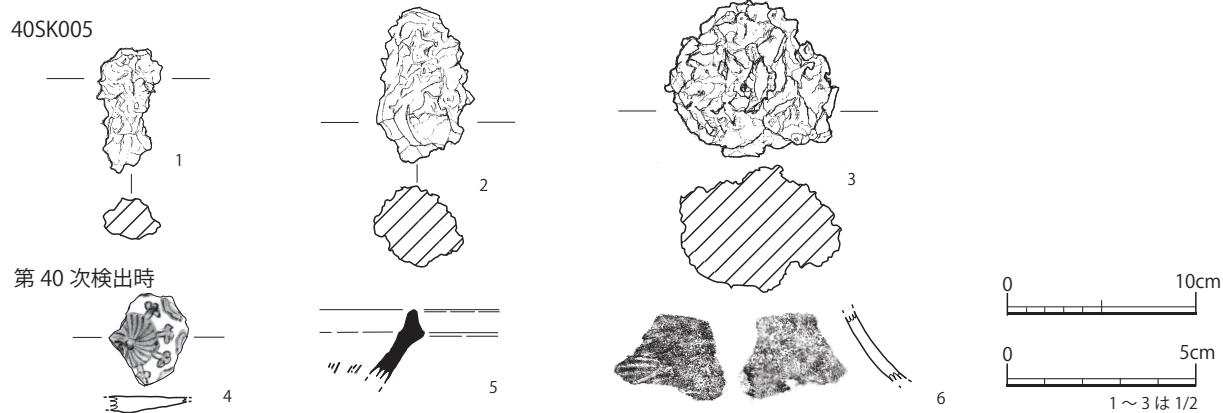
第41次調査区南部分のD5グリッドで検出された。長軸約1.7m、短軸約0.65m、深さ約0.2mを測り、平面隅丸



第11図 第41次土坑遺構実測図 (1/40)



第12図 第35次調査出土遺物実測図 (1/4)



第13図 第40次調査出土遺物実測図 (1/4・1/2)

長方形を呈す。底面はフラットな形状をなし、西側では径約0.2m、深さ約0.15mのピットが掘り込まれているが別遺構の可能性が考えられる。埋土は灰褐色土と暗茶褐色が斑状に堆積し、地山ブロック土が多く含まれる。出土遺物には弥生土器壺破片が認められるが、明確な時期は不明である。

溝跡（SD）

35SD005・40SD011（第9図）

各調査区の北側において確認され幅約2m、最大深度約0.5mを測り断面V字状を呈す。主軸方位はN-12°-Wを指向する。埋土は粘質土→砂層→暗灰色土の順に堆積しており、流水があったと推測される。出土遺物の大半は肥前系染付や関西系陶器といった近世陶磁器が占めるが、少数ながら初期伊万里、青花や龍泉窯系青磁といった資料も含んでいる。18世紀～19世紀にかけて機能していたと考えられる。

41SD015（第9図）

第41次調査区南側C4～F3グリッドにかけて南東から北西に延びる溝跡である。幅約0.6m、深さ約0.2mを測り、断面長方形を呈す。底面の標高は概ね4.1m前後と安定している。土層観察から1度掘り返しが行われていると考えられ、埋土に地山ブロックを含んでいる。流水痕跡は窺えない。出土遺物が無いため時期は不明である。38SD001に接続する。

性格不明遺構（SX）

41SX010（第9図）

第41次調査区の中央付近で確認された地形の傾斜部分に堆積した灰茶褐色土プランである。東西約14.6m、南北については調査区外へと延びているため全容は不明である。深度は、最も深い部分で検出面から約0.3m下がる。埋土については、第9図調査区東壁土層の第2・3層がこれに該当し、北側から南側に向かって緩やかに傾斜する地形に沿って堆積している。また、灰白色ブロック土を少量含んでいることから人為的に埋められた可能性が示唆される。（佐藤道文）

③大道遺跡第38次調査

A 調査の概要

第38次調査は、第41次調査の北西側に隣接する。調査の結果、安定した地山である「黄灰色土」上層に溝跡、土坑、ピットが確認された。遺構の切り合はほとんど認められず、遺構遺物ともに希薄な状況であったが、古代～中世に属する遺構群と考えられる。ピットの一部には大型のものも確認されるが、掘立柱建物跡と認定できるものはない。

B 基本層序

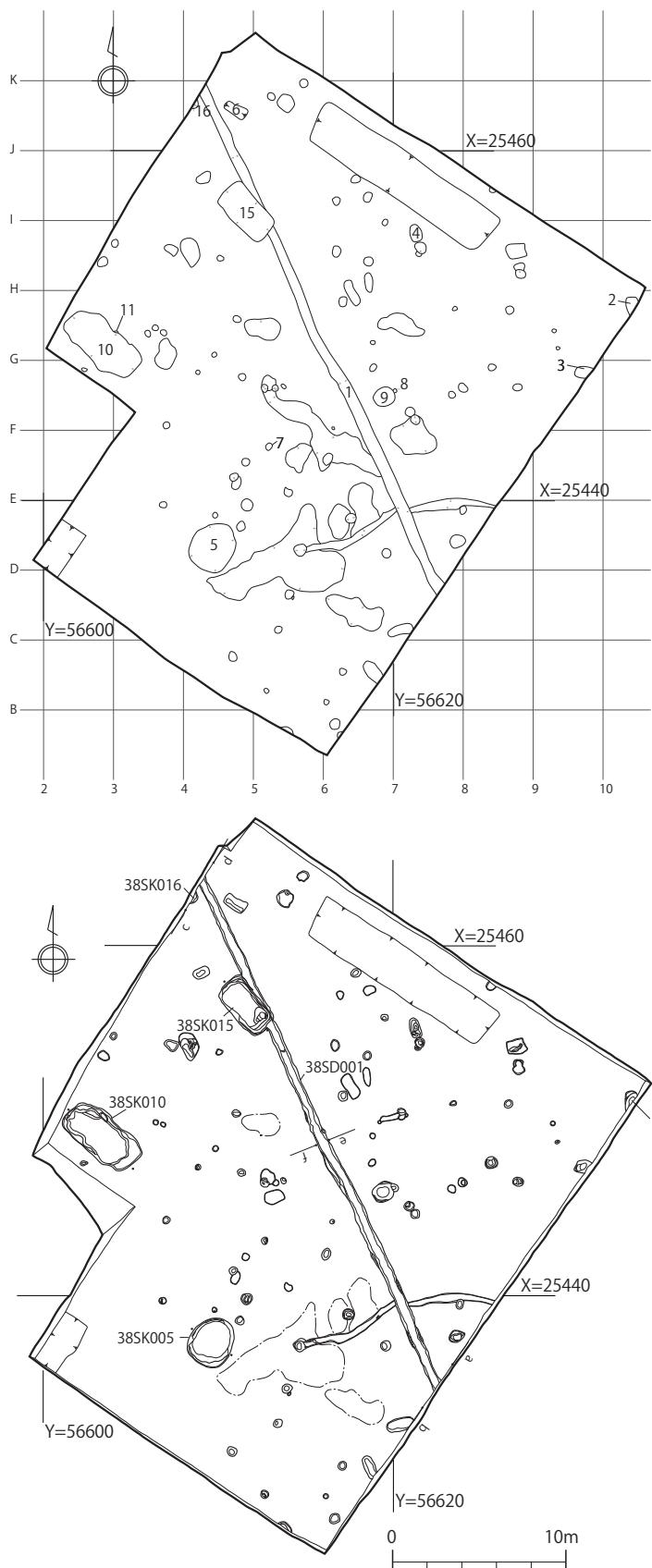
表土直下から標高4.4mの遺構面までは造成土が厚く堆積している。この造成土を除去すると厚さ0.1mほどの黒灰色粘質土の面を前後して遺構が確認されることから、2つの遺構面が存在すると考えられる。調査の工期等の関係から地山直上まで掘り下げた上で2面を同時に調査した。なお、こうした調査時における削平を考慮しても溝跡や土坑には浅いものが多く、後世に大きな削平が行われていると考えられる。

C 遺構

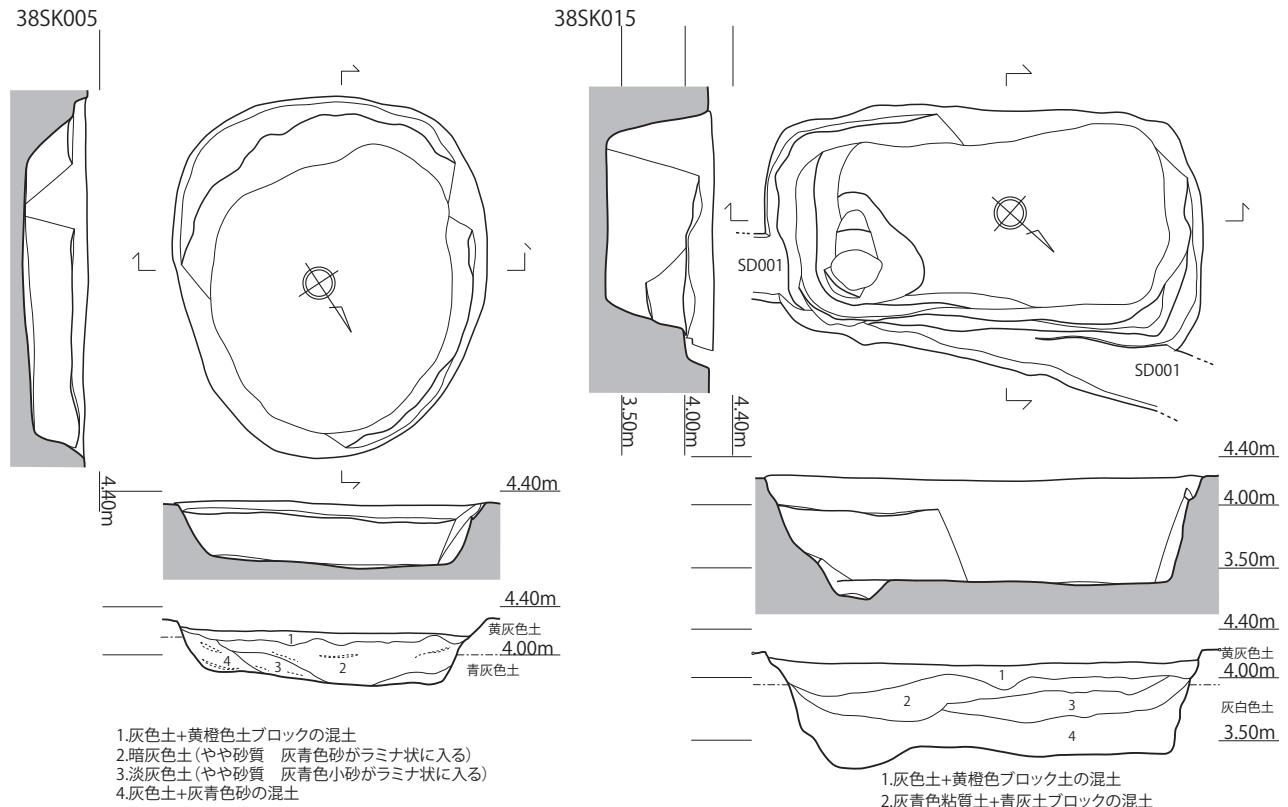
土坑

38SK005（第15図）

調査区中央のD4グリッドで検出された。長軸1.2m、短軸1.1mのほぼ円形で検出面からの最大深度は0.6mを測る。壁面には部分的にテラスがあり、断面形状は逆台形状を呈する。埋土は下位の第2～4層は砂質土がラミ



第14図 大道遺跡群第38次遺構配置図・全体遺構図 (1/400)



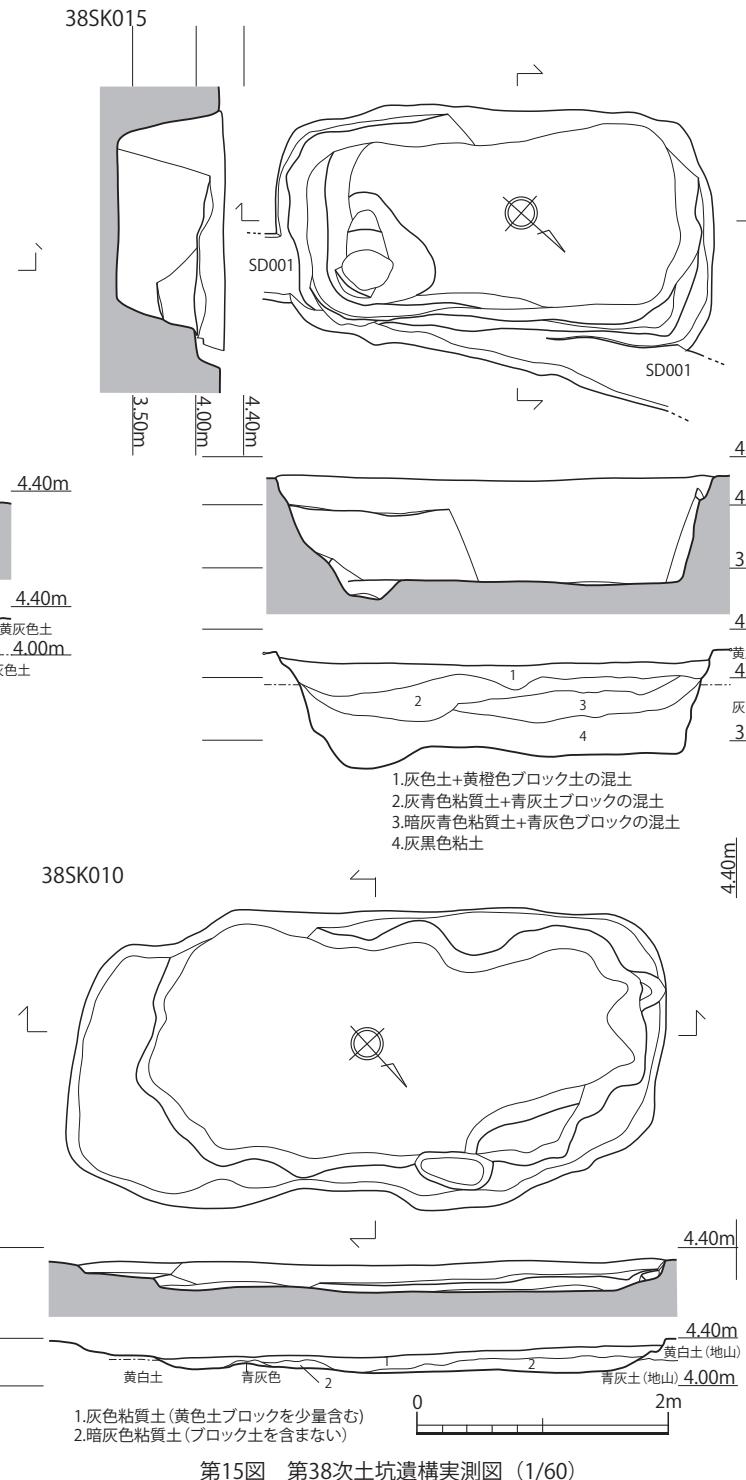
【SK016】

SD001】
黒灰色土
黒灰色土(灰色土ブロックを含む)
黒灰色土(黄色土ブロックを含む)
暗黒灰色土
暗黒灰色土(黄色土ブロックを含む)
黒灰色土

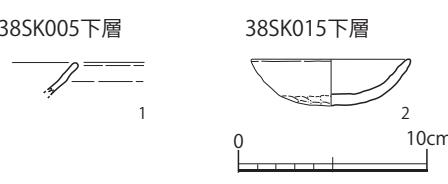
- 1.灰色土
- 2.橙黄色土
- 3.黑色土
- 4.淡灰白色粘質土
- 5.黑灰色粘質土
- 6.黑灰色粘質土+橙色土ブロック
- 7.灰色粘質土+白色土ブロック

- 1.灰色土(粘質 砂礫多く含む 黄色土ブロックを含む)
- 2.暗灰黒色土(やや粘質 黄色土ブロックを含む)
- 3.黒色土+黄色土ブロックの混土

第16図 第38次溝跡土層断面実測図 (1/40)



第15図 第38次土坑遺構実測図 (1/60)



第17図 第38次出土遺物実測図（1/4）

ナ状に入る水成堆積層である。第1層はブロック土を含んだ層であり、人為的に埋め戻した可能性が高い土層である。下位層の堆積は他の土坑とは異なっており、遺構の周囲から水が一定量流れ込むような環境であった可能性がある。

出土遺物は、極めて少ないが第2～4層掘削中に白色研磨土師器椀の口縁部片が出土した。11世紀後半から12世紀代以降の所産と考えられる。

38SK010（第15図）

調査区中央西端のG3グリッドで検出された。長軸1.2m、短軸1.1mの隅丸方形状のプランで検出面からの最大深度は0.6mを測る。壁面には部分的にテラスがあり、底部はやや凹凸をもつ。埋土は床面直上に堆積する第2層とその直上の第1層はグライ化した粘質土層であり一定期間水や泥が溜まっていたと考えられる。

出土遺物は極めて少なく図示しえるものは出土していない。

38SK015（第15図）

調査区中央北端のI5グリッドで検出された。38SD001を切る遺構である。長軸1.2m、短軸1.1mの方形プランを呈し、検出面からの最大深度は0.6mと他の遺構に比べ深い。壁面には部分的にテラスをもつ。断面形状は概して逆台形状を呈するが、西側の短軸部分は比較的垂直に立ち上がる。また、東側短軸の床面部分は不定形な窪みがある。埋土は第4層である灰黒色粘土が床面直上に堆積する。第1層～3層はブロック土を含んだ土が堆積しており、人為的に埋められたと考えられる。

出土遺物は極めて少ないが、第4層から出土した小皿C（京都系土師器・第17図2）からみて16世紀後半頃の遺構と考えられる。このような一定の深さを持った方形土坑は一見土坑墓のようにもみえるが、大道遺跡群内では多く確認されており、これらの機能や性格については第IV章の検討に譲りたい。

溝跡（SD）

38SD001（第16図）

調査区西北端のJ4グリッドから南東部のC7グリッドにかけて調査区を斜行する溝跡である。38SK015に切られる。幅0.3～0.35m、検出面からの最大深度は0.5m、ほぼ直線で主軸方向N-29°-Wである。底部の標高はJ4グリッドで4.1m、C7グリッドで4.2mを測る。

断面は緩い台形状で、底部は比較的平坦に掘削されている。埋土は、砂質土の形成はなく黒色系の土が堆積しているが、中央に堆積する第1層には多量の地山ブロック土を含んでいる。削平を考慮すれば中位層に相当すると考えられる。これが溝の掘り返しに起因するものかは遺構の遺存状況が悪く判断が難しいが、東側の第41次調査でも延長部と考えられる東西溝41SD015が確認されている。これを含めると総長30mの直線的な溝跡となる。遺物が全く出土しなかったため、時期比定は困難であるが38SK015に切られることから16世紀後半を下限とする区画的な性格をもった遺構と考えられる。詳細な時期等については第IV章にて検討を加えている。

D 出土遺物

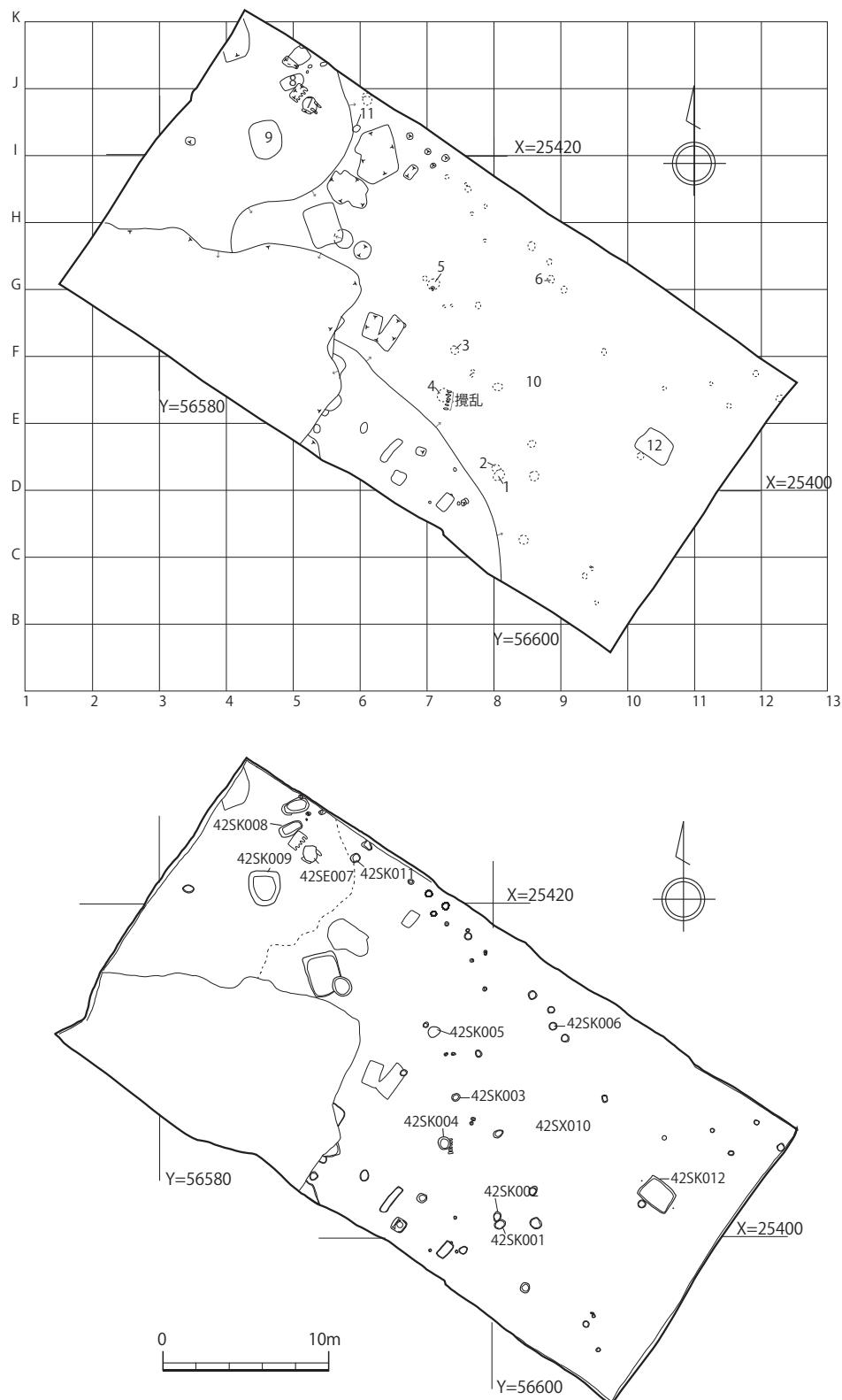
出土遺物の概要

今回の調査では、コンテナ1箱に満たないごく少量の遺物しか出土していない。内訳は土師器片・石製品・鉄滓である。出土遺物は細片と呼べるような極小さい遺物のみであるが古代～中世にほぼ限定されたものである。

なお、調査区東端部G10グリッド部分で検出した38SX002からは鉄滓が1点出土している。共伴遺物が皆無であるため時期の詳細は不明であるが金属器生産関連遺物として報告しておく。

38SK005下層出土遺物（第17図1）

1は白色研磨土師器椀の口縁部片である。内面に僅かにミガキの痕跡が確認できる。遺存部分が少ないとから詳細な時期は決しがたい。白色研磨土師器の存続幅としては11世紀後半～13世紀初頭（稗田2012a）と考えられていることからその範疇に収まるものであろう。（長直信）



第18図 大道遺跡群第42次調査遺構配置図・全体遺構図 (1/400)

④大道遺跡群第42次調査

A 調査の概要

駅周辺総合整備事業にかかる大道遺跡群の最後の発掘調査地である。JR大分駅上野の森口から南西方向に伸びるシンボルロードの敷設地にあたり、駅周辺総合整備課の事務所跡地に位置する。古代の掘立柱建物群に併行するように検出された大溝とその南側に分布する谷地形に近接する調査区である。調査面積は800m²で、遺跡は地表面から平均深さ1.0mで検出される。調査区のほぼ全域に古代に埋没した谷地形（42SX010）が分布し、その上層と下層からそれぞれ遺構が検出されている。上層では時期不明の人為的に埋め戻された土坑（42SK012）、下層からは古墳時代の土坑2基（42SK005・006）などが確認され、谷地形の隣接地においても時期不明の人為的に埋め戻された土坑（42SK008・009）や古墳時代の井戸跡1基（42SE007）などが認められる。これらの遺構からは、人為的な打ち割りや焼成後に穿孔された土器が出土していることから、谷地形周辺で祭祀が行われた可能性が指摘される。

B 基本層序

表層から約1.0mにかけてバラスと客土層があり、その下層に谷地形に堆積した遺物包含層（42SX010）である暗灰茶褐色粘質土層が認められる。遺構は暗灰茶褐色粘質土層の上層とその下層にあたる黄灰褐色シルト層で検出される。黄灰褐色シルト層の下層には砂層が分布しており、水脈となっている。遺構の埋土は大きく2分され、灰褐色ブロック土を基調とするものと黒色粘質土の単一層のものに区分される。

C 遺構

井戸跡（SE）

42SE007（第19図）

調査区北西部のI5グリッド、谷地形の隣接地で検出された。長軸0.95m、短軸0.82mの隅丸長方形で、検出面からの最大深度は1.33mを測る。湧水量が多く、遺構の堆積状況や断面形状の詳細な確認はできていない。埋土は黒色粘質土の単一層と想定される。遺物は底面にまとまって認められ、最下部に不等辺三角形の平石が置かれたような状態で出土し、その上位に焼成後に穿孔された甕や打ち割りのある甕が確認されている。

出土遺物の帰属年代から古墳時代前期後半の土師器Ⅲ期、布留式土器Ⅱ式併行期頃に位置づけられる。

土坑（SK）

42SK001（第20図）

調査区南東部のD8グリッド、古代に埋没した谷地形（42SX010）の下層で検出された。42SK002を切る。長軸1.38m、短軸0.97mの隅丸長方形で、検出面からの最大深度は0.78mを測る。底面は平坦で、主軸方向は座標南北軸よりやや東に向いている。埋土は黒色粘質土の単一層である。遺物は遺構の上位と底面付近で出土し、土師器甕や高坏、打ち割りのある坏などが認められる。

出土遺物の帰属年代から、古墳時代前期中頃（土師器Ⅱb期）に位置づけられる。

42SK005（第20図）

調査区中央部のG7グリッド、42SX010の下層で検出された。長軸0.95m、短軸0.82mの隅丸長方形で、検出面からの最大深度は1.33mを測る。断面U字状を呈す。埋土は淡茶色土、黒色粘質土を基調とするものの上下2層に区分される。遺物は第1層から土師器甕、第2層からは土師器坏の完形品（第22図22）が出土している。

これらの帰属年代から、古墳時代前期後半、布留式土器Ⅱ式併行期（土師器Ⅲ期）頃に位置づけられる。

42SK006（第20図）

調査区北部のG8グリッド、42SX010の下層で検出された。長軸0.42m、短軸0.4mの平面形状はほぼ正円形で、検出面からの最大深度は0.12mである。底面は平坦で、埋土は黒色粘質土の単一層である。遺物は焼成後に底部

に穿孔が施された小型丸底壺が1点、底部を上にして伏せたような状態で出土している。

この遺物の帰属年代から古墳時代前期後半、布留式土器II式併行期（土師器III期）頃に位置づけられる。

42SK009（第18・20図）

調査区北西部のI4グリッド、谷地形の隣接地で検出された。湧水量が多く、遺構の堆積状況や深度などの詳細な確認はできていない。長軸2.1m、短軸1.9mの隅丸長方形で、埋土は掘削した範囲では灰黄褐色粘質土を基調とし、黒色土ブロックを多量に含む単一層である。人為的に埋め戻されたものと判断される。出土遺物は皆無である。

42SK012（第18・20図）

調査区東部のD10グリッド、42SX010の上層で検出された。長軸0.42m、短軸0.4mのほぼ正円形で、検出面からの最大深度は0.33mを測る。底面は平坦で、主軸方向は座標東西軸よりさらに南東方向に向いている。埋土は灰褐色黒色粘質土を基調とし、灰褐色粘土ブロックを多量に含む単一層である。人為的に埋め戻されたものと判断される。出土遺物には、土器片が認められるものの、遺構の年代は断定できていない。（塩地潤一）

D 出土遺物

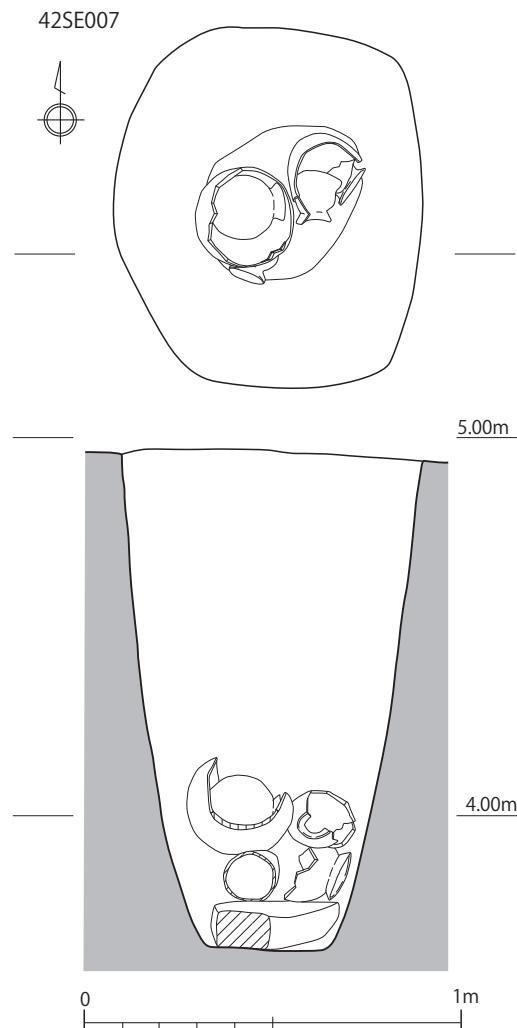
出土遺物の概要

今回の調査では、コンテナ5箱分の遺物が出土した。出土遺物は、弥生時代終末期～古墳時代前期、7世紀～8世紀の時期のものが出土しており、中でも古墳時代前期の遺物が中心に出土している。調査区内の遺構が少ないため遺物の全体数は少数ながらも、完形もしくは完形に近い遺物が比較的多い。弥生時代から古墳時代の遺物としては、弥生土器複合口縁壺や土師器甕、高坏などが主体的に出土し、小型丸底壺なども含まれる。7～8世紀の遺物としては、土師器坏、須恵器坏がほとんどである。

第21図・第22図には、遺構の時期を示すものを中心として遺物を掲載している。遺物の種類・名称・法量などについては、遺物観察表（付属DVD表9参照）にて報告している。また全遺構の出土遺物については、遺構出土遺物一覧表（付属DVD表15）に掲載している。ここでは、特に重要と思われる遺物（図中の○番号表記のもの）のみ述べる。

42SE007出土遺物（第21図1～6）

1～4は土師器甕である。1は甕Aでほぼ完形である。胴部内面にヘラケズリ、底部内面に工具圧痕が残る。胴部は完全な球形ではなく、やや縦長である。2は甕DまたはAと思われる甕で、口縁端部及び胴部中位に打ち欠きが残る。3はほぼ完形で、胴部中位やや下半が最大径となるやや下膨れ気味の器形をしている。4は胴部中位に直径約4cmの円形の穿孔が開けられている。甕の中からは土と一緒に炭化物が出土している。5は複合口縁壺で、半分ほど残存しており、口縁部に波状文、頸部に三角突帯と貼付文が残る。複合口縁の屈曲部より端部にかけて打ち欠いている。胴部中位よりやや下が最大径となり、やや下膨れ気味の器形をなしている。1～5は埋土から一部入れ子状態で、重なるように出土した。3・5が



第19図 第42次井戸跡遺構実測図（1/20）

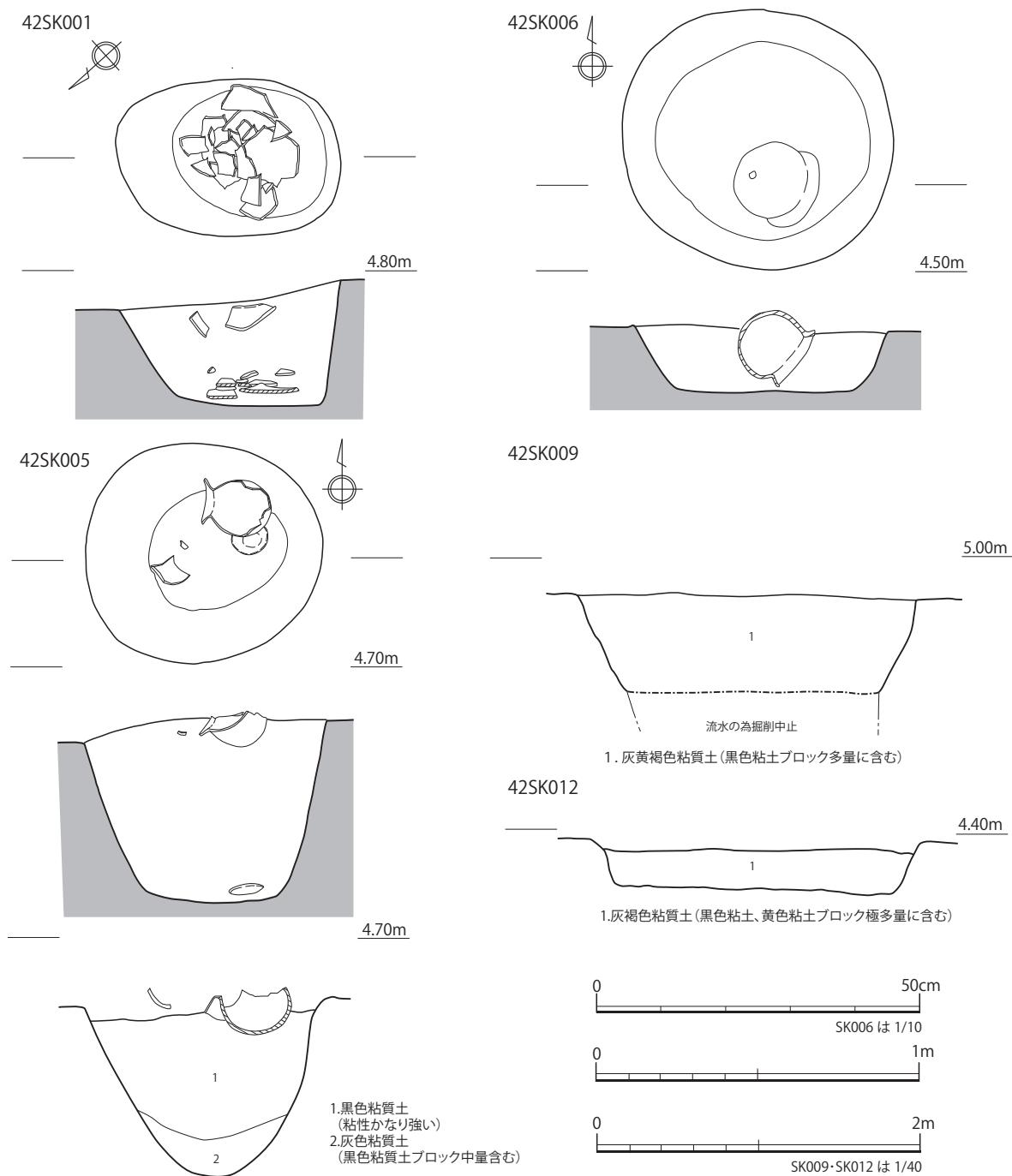
上位で、半分ほど残存した部分を下に向けた5の中に3が入れ子状態で入っていた。それ以外は下位で出土したが、1は埋土中で2つに分かれており、口縁部から胴部上半が胴部下半の中に入れ子状態で入っていた。1～5の一部で、口縁部や胴部などに人為的な打ち欠きが認められることから、重ね入れるために行なった可能性が考えられる。6は土師器小型丸底壺である。

42SK005出土遺物（第22図20～22）

20・21は埋土上位で出土した土師器甕である。20は布留式系で胴部内面にヘラケズリを施し、胴部が球形にかなり近い。22は埋土最下位で出土した土師器壺である。

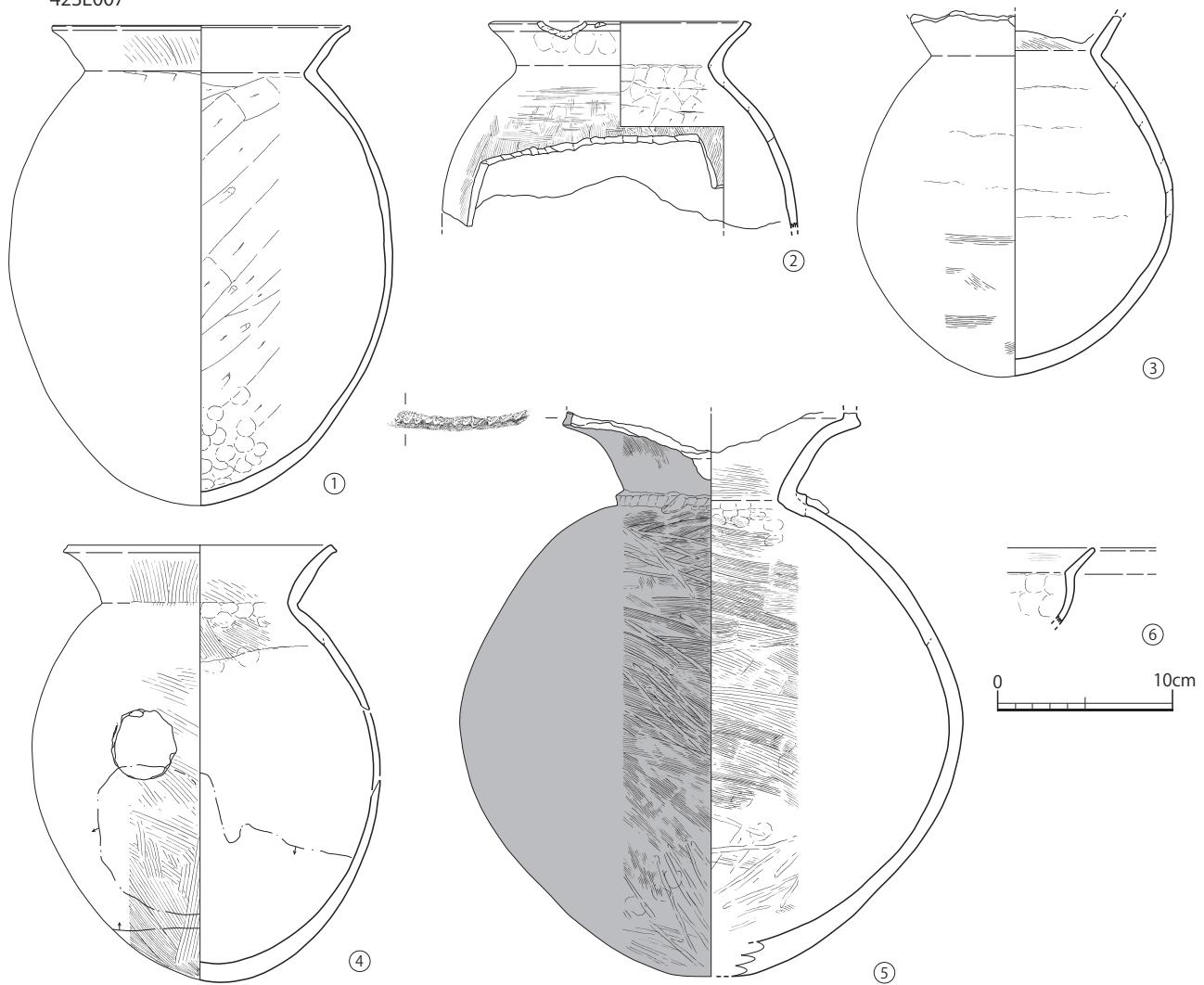
42SK006出土遺物（第22図23）

23は土師器小型丸底壺で、ほぼ完形である。胴部より口縁部の高さがかなり低い。底部に焼成後穿孔を外から施す。（松浦憲治）



第20図 第42次土坑遺構実測図 (1/10・1/20・1/40)

42SE007

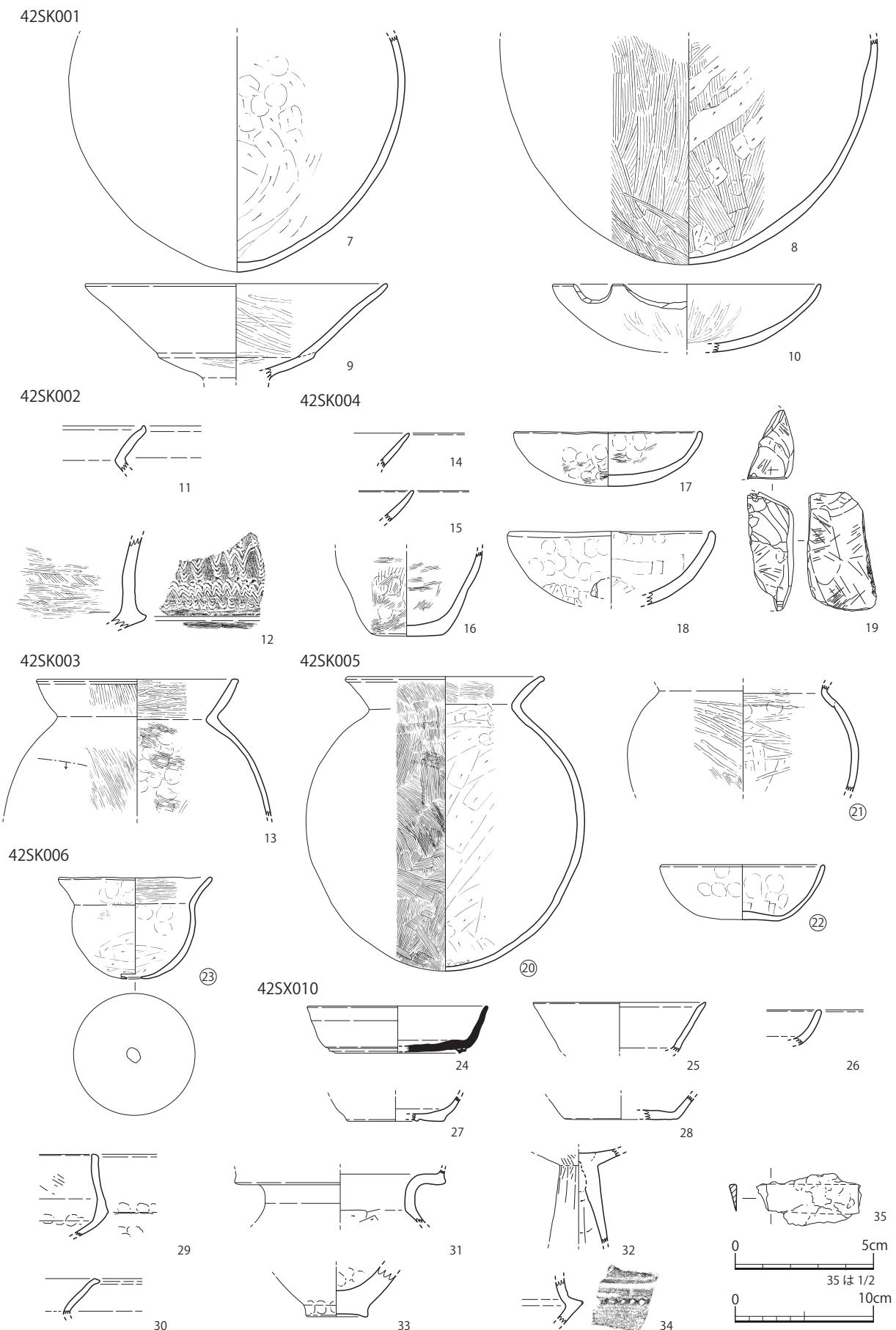


第21図 第42次井戸跡遺物実測図 (1/4)

E 小結

C区の第42次調査を除く5地点については、比較的時期の新しい遺構群が展開している。その中でも、地山ブロック土を多く内包する土坑群の分布が目立つ。これら土坑群の性格については水利施設との関連が想定されるが、詳細は第IV章で触ることとする。また、第41次調査で確認された谷地形は近接する第42次調査区まで広がっており凡そ古代に埋没したことが判明した。

第42次調査区で確認された古墳時代前期後半頃の土坑群については、用途は不明であるが、ほぼ全てにおいて湧水や土層の粘質化傾向が窺えることから水利に関する施設の可能性が考えられる。 (佐藤道文)



第22図 第42次土坑・性格不明遺構遺物実測図 (1/4・1/2)

第3節 E区の調査

大道遺跡群第26・27・33次調査

A 調査の概要

E区は第26・27・33次調査区が該当し、大道遺跡群の範囲の中では中央からやや南側エリアに位置する。本調査地点の西側に所在する第24次調査では、古墳時代初頭頃の井戸跡からクスノキ製の臼及び臼蓋が出土している。同じく第24次調査地点やその北側隣接地の第11次調査地点では古墳時代初頭から前期に比定される井戸跡が多数検出されており、当該時期において本地点周辺は湧水点が浅く、水利に最適な環境であったと推測することができる。調査中も湧水が認められるなど、現代においても、その名残が窺える。第26・27・33次調査では、主として古代に比定される自然流路跡及び土坑を確認した。

B 基本層序

第26・27次調査地は宅地であったため、それに伴う造成土が見られ、造成土を除去すると耕作土層が3層確認される。耕作土層は南から北に向かって傾斜していることから、上野台地より大分駅方面に向かって棚田のような段差が生じていた可能性がある。耕作土層を除去すると、自然流路跡に関わる堆積土層である淡灰褐色粘質土～明黄茶褐色砂質土（第25図10～16層）が表出する。これらの層は南から北へと、砂質土→粘質土という順に堆積をしている。これは水が流れていること及び水流の方向を示しており、また水流が滞った後は湿地様に環境が変化したことを示すものといえる。やや南に位置する第33次地点では、調査区西側を中心としたエリアで安定地盤である黄褐色土が確認されている。遺構は自然流路の上層で検出される。検出標高は約5.6m（第33次）、5.7～5.8m（第26・27次）である。

C 遺構

土坑（SK）

26SK002（第27図）

J9グリッドに位置し、26NR015を掘り込んで検出される。規模は長軸約1.1m、短軸約0.9m、深さ約0.32mを測り、平面橢円形を呈す。底面はやや擂鉢状の形状をしており、西側の立ち上がりは緩やかに傾斜する。埋土は、主として粘質土で構成されていることから水溜め等の機能を有していた可能性が高い。

26SK003（第27図）

L9グリッドで確認され、長軸約1.04m、短軸約0.79m、深さ0.22mを測り、平面不整形な橢円形を呈す。古代に比定される26SD007を掘り込んでいることから、同時期以降に形成されたと考えられる。

26SK004（第27図）

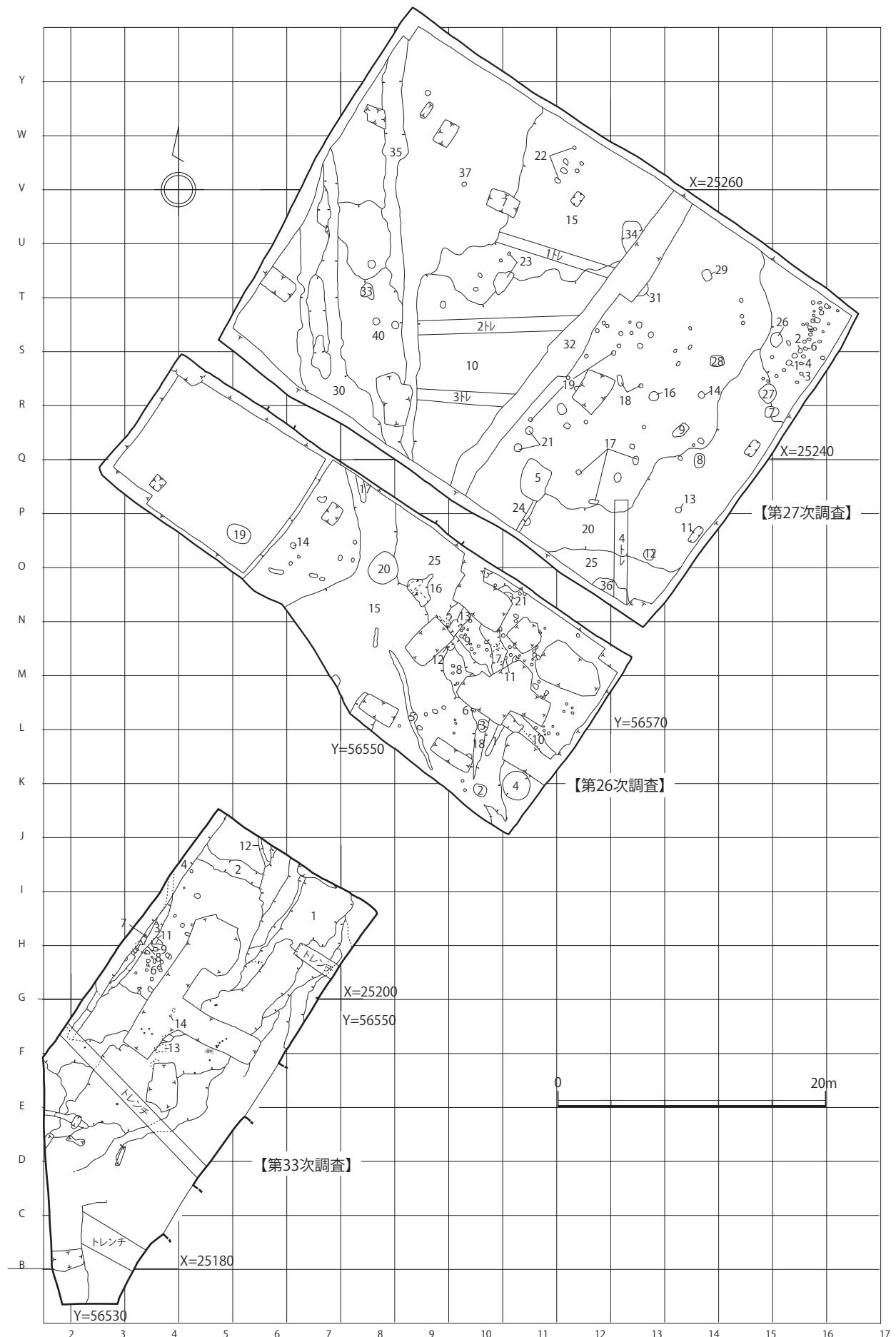
K10グリッドで検出され、長軸約2.3m、短軸約2.1m、深さ約0.38mを測る。平面円形を呈し、底面はフラットな形状である。

26SK019（第27図）

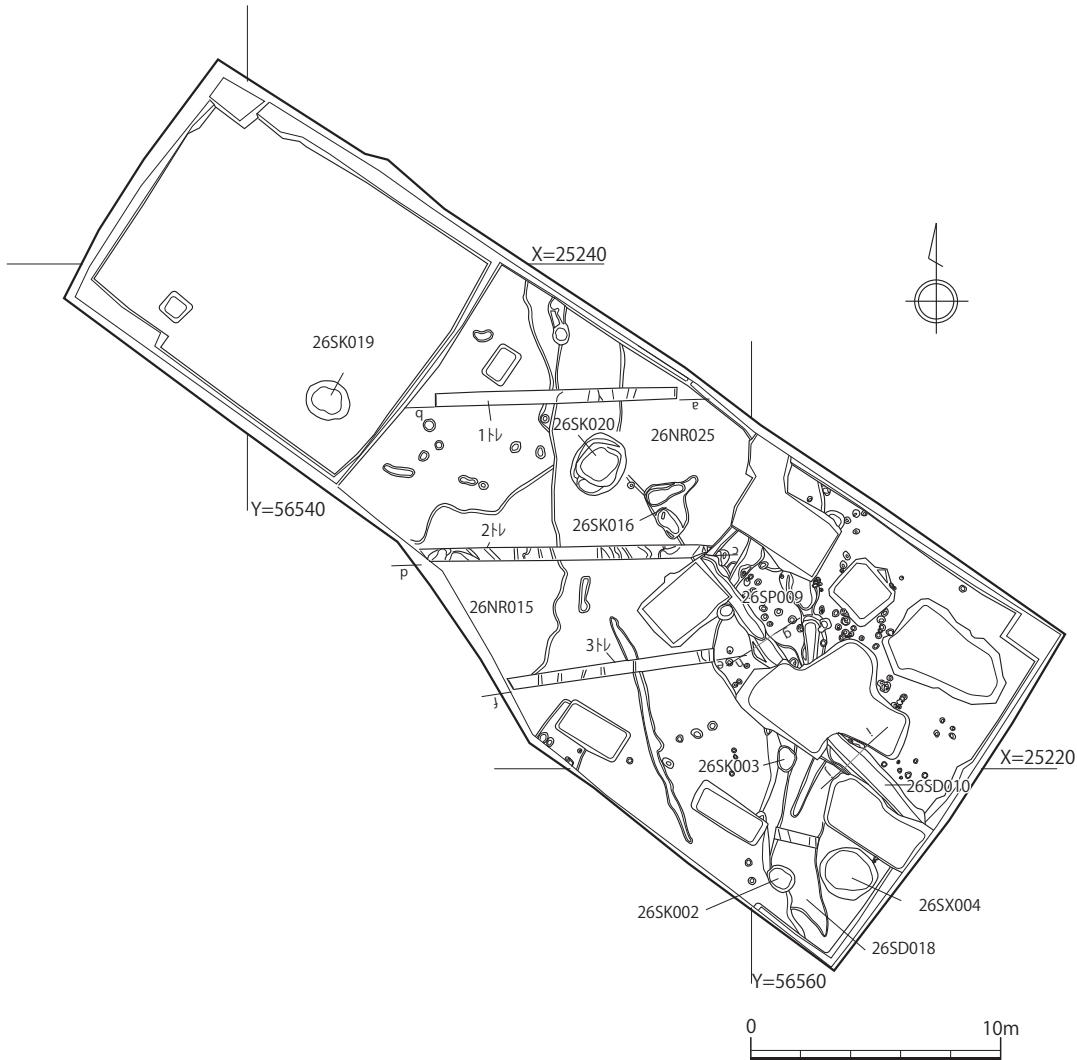
O5グリッドで検出され、長軸約1.68m、短軸約1.46m、深さ約0.5mを測り、平面円形を呈す。埋土は砂質を含んだ粘質土を主体とする。出土遺物には古墳時代の土師器破片が認められるが、詳細な時期は不明である。

26SK020（第27図）

O7グリッドに位置し、26NR015を掘り込み検出される。長軸約2.7m、短軸約2.3m、深さ約0.6mを測り、平面橢円形、断面段掘り状を呈す。埋土はきめ細かい粘質土で構成されており、水成作用によるものと思われる。第1層～第3層は掘り返し後の堆積であり、暗灰色粘質土（第3層）には礫の流れ込みが認められることから、同層が堆積する段階で機能が停止したと考えられる。出土遺物に唐津産皿や京都系土師器皿が見られるため、16世紀末～17世紀初め頃に比定される。



第23図 大道遺跡群第26・27・33次調査遺構配置図 (1/400)



第24図 大道遺跡群第26次調査全体遺構図 (1/300)

27SK005 (第28図)

P10グリッドで検出した大形の土坑である。長辺約2.75m、短辺約1.85m、深さ約0.5mを測り、平面不定形な隅丸長方形を呈す。埋土は灰褐色土と黒褐色土、茶褐色土が入り混じっており、短期間に埋められた状態を示している。

27SK009 (第28図)

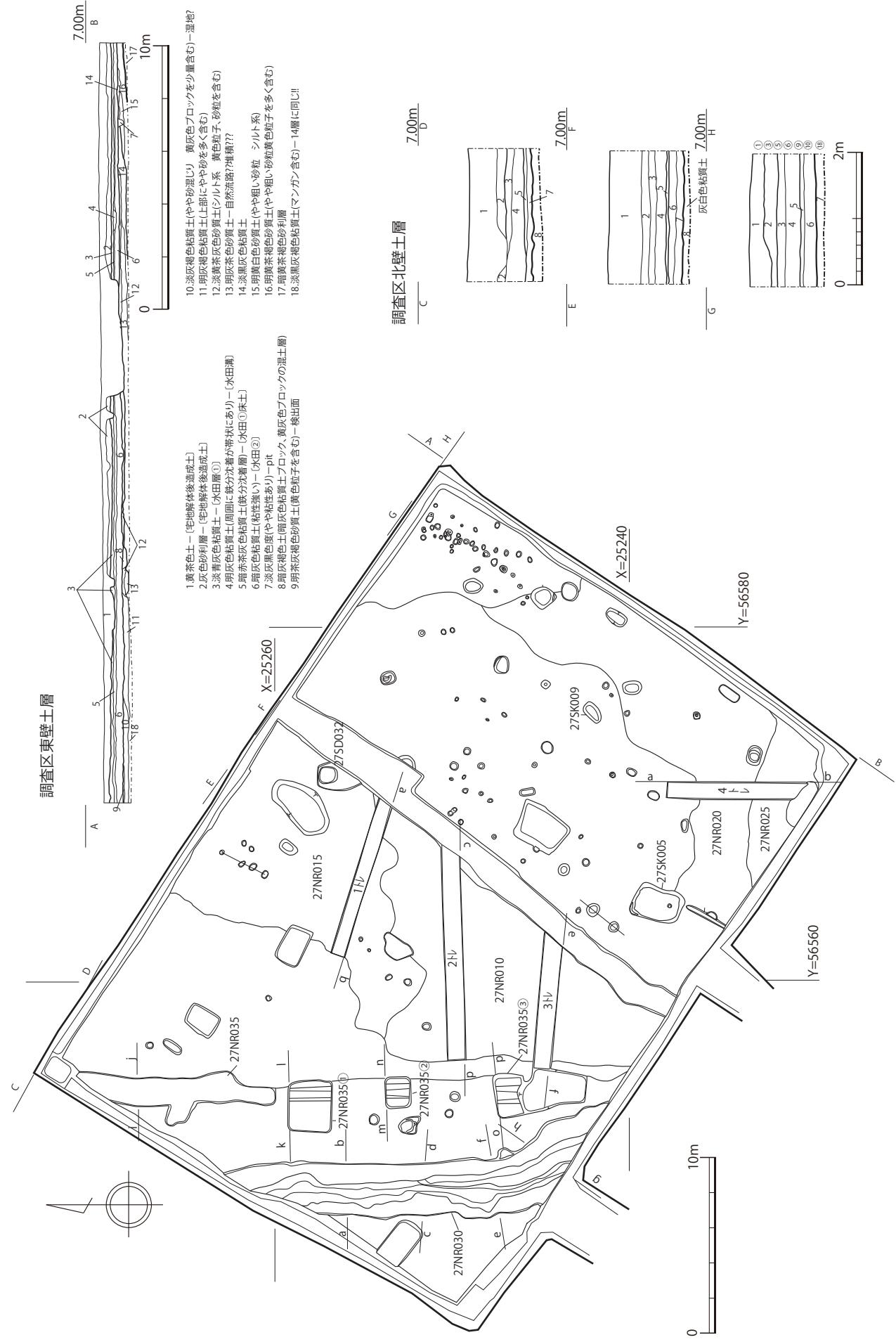
Q13グリッドで確認され、長辺約1.3m、短辺約0.75m、深さ約0.25mを測り、平面不定形な隅丸長方形を呈す。27SK005同様、埋土はブロック土を主体としており、短期間のうちに埋め戻されたと考えられる。

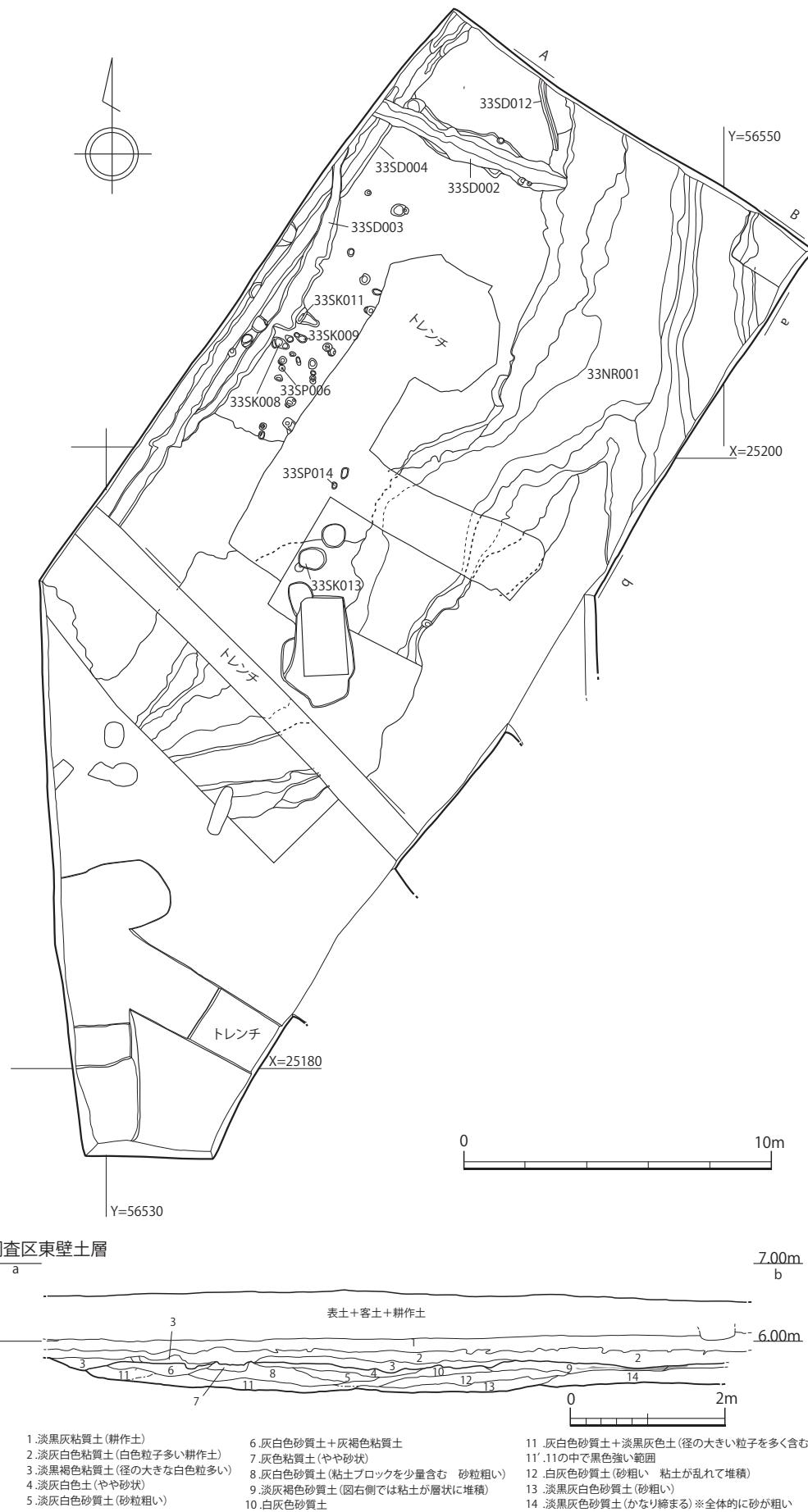
溝跡 (SD)**26SD010 (第29図)**

M9グリッド付近で確認される東西方向に延びる溝跡である。幅約0.5~0.6m、深さ約0.18~0.4mを測り、断面は深い部分で逆台形、浅い地点では緩やかな逆台形を呈す。埋土は粘質土が主体となるが、ラミナ状の堆積も認められることから流水があったものと想定される。出土遺物には龍泉窯系青磁の破片が認められることから、中世前半期には埋没していたと考えられる。

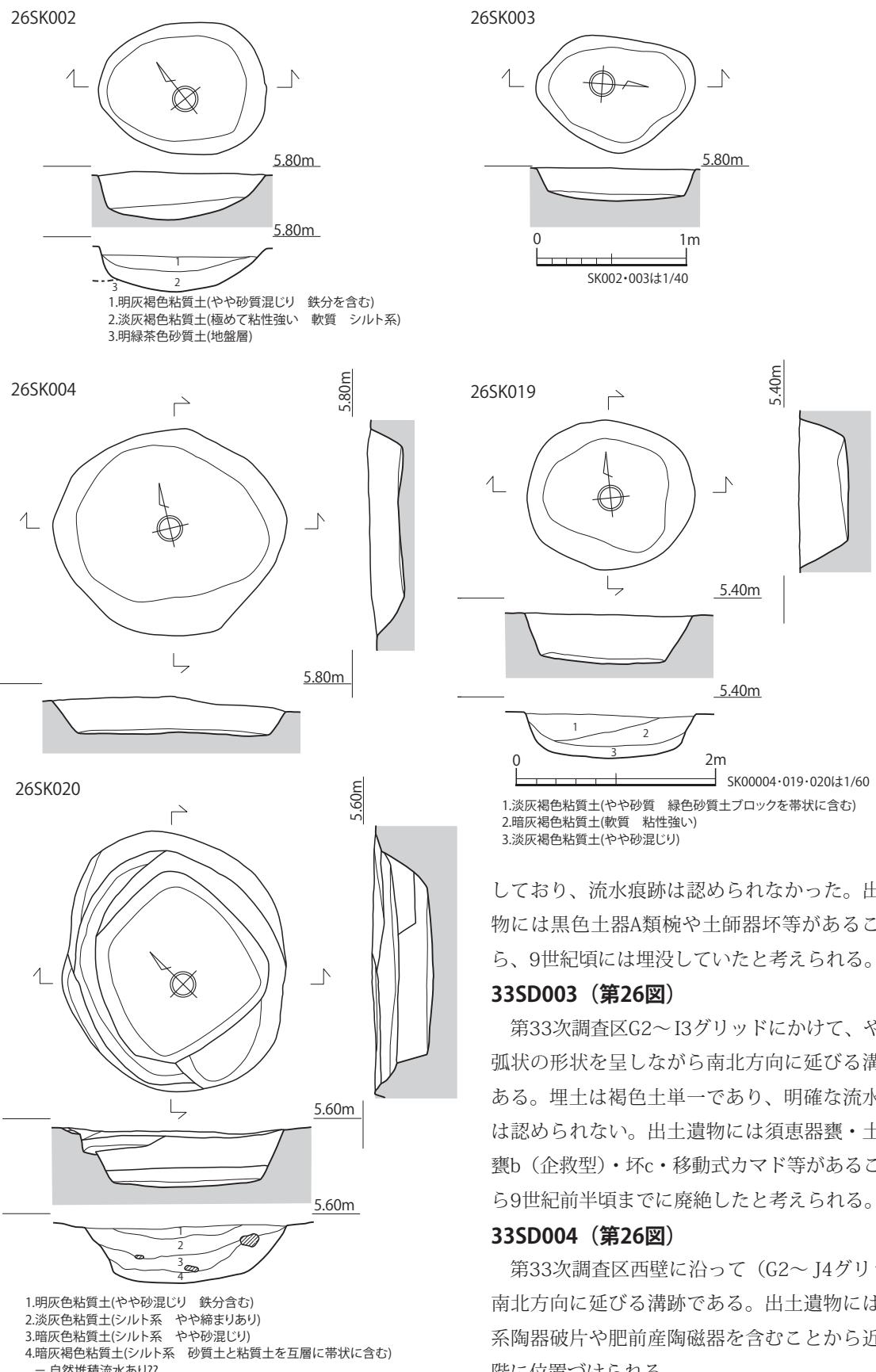
33SD002 (第26図)

第33次調査区のI4・5グリッドで検出された東西方向に延びる溝跡である。埋土は黑色土→黒褐色土の順で堆積





第26図 大道遺跡群第33次調査全体遺構図 (1/200) 東壁土層断面実測図 (1/80)



第27図 第26次土坑遺構実測図 (1/40・1/60)

しており、流水痕跡は認められなかった。出土遺物には黒色土器A類椀や土師器壺等があることから、9世紀頃には埋没していたと考えられる。

33SD003 (第26図)

第33次調査区G2～I3グリッドにかけて、やや円弧状の形状を呈しながら南北方向に延びる溝跡である。埋土は褐色土単一であり、明確な流水痕跡は認められない。出土遺物には須恵器甕・土師器甕b(企救型)・壺c・移動式カマド等があることから9世紀前半頃までに廃絶したと考えられる。

33SD004 (第26図)

第33次調査区西壁に沿って(G2～J4グリッド)南北方向に延びる溝跡である。出土遺物には関西系陶器破片や肥前産陶磁器を含むことから近世段階に位置づけられる。

自然流路跡 (NR)

26NR015・27NR030・33NR001 (第24~26・30~32図)

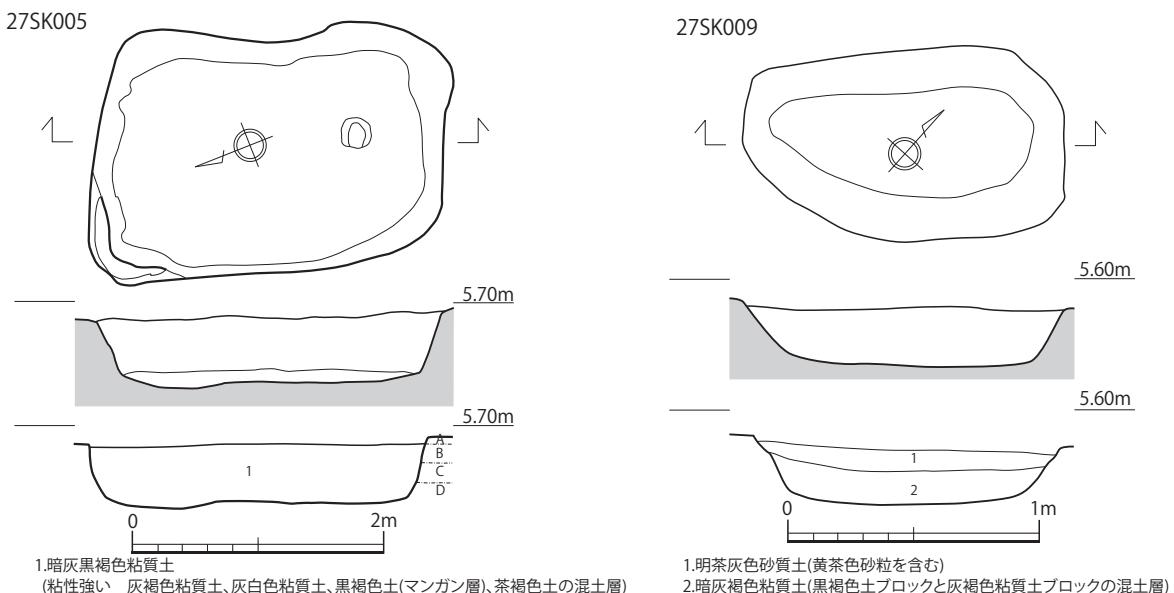
第33次調査区から第26次調査区へと繋がる自然流路跡である。33NR001では、粘質土・砂利層・砂層が交互に堆積しており、水流→湿地化→水流といった環境が繰り返されていたと想定される。33NR001は明確な立ち上がりは見られず、検出面から緩やかに底面へと窪む。流路の中心付近には木杭痕が点在していたことから、水流を調整するための施設が構築されていたと推測される。26NR015は広範囲を占める大形の不定形プランであり、本遺構の底面は起伏があり歪な形状を呈している。第3トレンチの断面を見ると、水流は大きく2つ存在しており、東側流路が埋まったため西側流路が形成されたと仮定できる。堆積状況については、底部分の窪み状になっている箇所は粘質土が主であることから水が溜まり濁んでいたと考えられ、上位層群は砂質・粘質土が交互に見られることから、水の流れと停滞を繰り返していたと推測することができる。また、O7グリッド付近からは北側へと直線的に延びる溝状を呈し、27NR030へと繋がっていく。

27NR030は、第27次調査のQ7~V7グリッドで検出される南北方向に延びる溝状を成す流路跡である。幅約2.8~5m、深さ0.2~0.3m、断面は底が広い逆台形を呈す。土層状況は細かな砂質土・シルト質土が互層状に堆積し、また、土層図にある暗茶褐色砂利層の分布から、水流は南から北方向へと蛇行していたことが復元される。

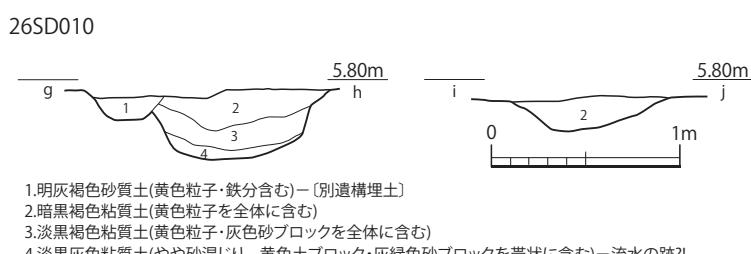
これらの遺構からは須恵器蓋・壺c、土師器壺a・壺c・甕、黒色土器A類椀といった遺物が出土しており、その特徴より9世紀前半頃に位置づけることができる。

26NR025・27NR010・015・020・025 (第24~26・30・32図)

主に第27次調査で広範囲に確認され、堆積土の違いによりそれぞれS番号を付しているが、同一の自然流路痕跡である。検出状況から、26NR015が形成される以前に広がっていた水流堆積層及び低湿状況を示すプランと



第28図 第27次土坑遺構実測図 (1/60・1/30)



第29図 第26次溝跡土層断面実測図 (1/20)

推測される。埋土は砂質土・黒褐色粘質土が中心となっており、ある程度の水量により砂質土が供給された後、湿地化し、再度流水により堆積し、最終的に土壤化したと考えられる。

出土遺物を見ると、26NR025・27NR015からは土師器壺・壺c・須恵器蓋・壺といった古代の様相を示す遺物群が、27NR010・020・025からは概ね古墳時代前期を中心とした資料が出土している。よって、古墳時代から古代にかけて次第に形成された堆積プランであると想定される。

D 出土遺物

出土遺物の概要

第26・27・33次調査ではコンテナ12箱分の遺物が出土した。出土遺物は縄文時代～奈良・平安時代までを主とした幅広い時期にわたって一定量認められる。遺物を概観すると、遺構を形成する時期とは無関係ながらも縄文土器や弥生土器の破片資料を多く含んでいることは注目される。縄文土器は船元式（第37図46）・小池原式（第37図47）・浦久保式（第37図48）といった縄文時代中期、後期～晩期にかけての破片資料が顕著である。その中で、縄文時代前期の資料である轟B式（第37図63）が見られることは、大道遺跡群から上野台地にかけての地域に当該時期の遺構が分布している可能性を示唆するものといえる。弥生土器については、下城式壺（第34図32）や東北部九州系甕（第34図12）、また平坦状の口縁を呈す壺（第37図45）といった弥生時代中期に位置づけられる破片資料が認められる。多重凹線文を刻む複合口縁壺（第33図15）や平底底部資料（第33図24）といった弥生時代後期に該当するものは比較的少量といえる。

以下、主要遺物について説明を行う。なお、その他詳細については、遺物観察表（付属DVD表1・2・4）にて報告している。

第26次調査出土遺物（第33図）

26SK016出土遺物

1は縄文土器浅鉢の底部である。断面三角形を呈する高台部状の底部が貼り付けられる。2は姫島産黒曜石製の石鏸である。ほぼ完存しており、抉り部はやや浅い。縁辺部の加工は片側が細かい連続剥離が施される。

26NR015出土遺物

15は口縁部側面に細かい多重沈線を施す弥生土器複合口縁部である。複合部から口縁部は短く屈曲し、全体的に器壁は厚い。17は弥生土器脚付鉢の柱状部の破片である。鉢との接合部は意図的に加工されている。

第27次調査出土遺物（第34図）

27SD032出土遺物

1はキセルの雁首を叩き潰して作られる雁首錢である。

27NR020出土遺物

11、12は弥生土器甕口縁部である。11は口縁端部が短くつまみ上げたように突出する。12は東北部九州系の甕口縁部で、頸部の屈曲はきつく口縁端部は断面三角形状を呈す。

27NR030出土遺物

34は縄文土器コウゴー松式土器深鉢である。波状口縁を呈し、口縁部外面には沈線及び刺突文で文様が描かれる。縄文時代後期初頭に位置づけられる。

暗茶土出土遺物

37は縄文土器深鉢の破片で、縄文時代後期に位置づけられると考えられる。

第33次出土遺物（第35～37図）

33NR001出土遺物

7は姫島産黒曜石製の石核である。微細な剥離痕が一部で認められるものの、大部分は自然面を残す。重量は

26NR015-025 1トリ南壁土層

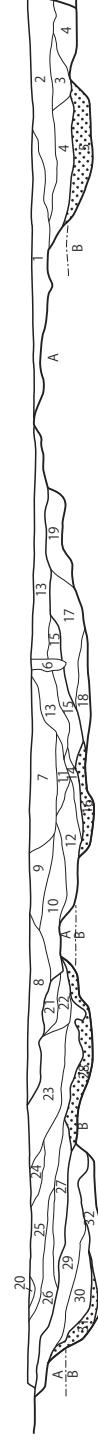
6.00m



1. 明灰茶色砂質土(シルト系) 灰色シルト質土を帶状に含む)
2. 暗灰色砂質土(鉄分、黄色粒子含む)
3. 暗反茶色砂質土(細かい砂粒)
4. 明灰色砂質土(シルト系) 極めて細かい砂粒、灰色粘質土を帶状に含む)
5. 淡灰茶色砂質土(鉄分や軟質、鉄分、灰色粘質土を含む) —わざかに帶水??
6. 淡灰茶色砂質土(シルト系) 軟質—滲水
7. 暗灰色粘質土(シルト系) 軟質—滲水
8. 暗灰色砂質土(角杭含む) —流水
9. 明茶灰色砂質土(鉄分含む)
10. 暗褐色砂質土(鉄分、灰色粘質土ブロックを含む)
11. 明茶灰色砂質土(硬化、鉄分、黄色粒子、黃色粒子含む)
12. 明茶灰色粘質土(灰黃色粘質土ブロックを含む) —一連の黒色層
13. 明茶灰色粘質土(やや粘性あり) 鉄分、マンガンを全体に含む)
14. 黒褐色粘質土(粘性あり) 自然流路か) —一連の黒色層

26NR015 2トリ南壁土層

d



1. 明灰茶色砂質土(やや縮まりあり) 鉄分、黄色粒子含む)
2. 暗灰色砂質土(鉄分、マンガン、黄色粒子含む)
3. 暗反茶色砂質土(細かい砂粒)
4. 明灰色砂質土(細かい砂粒)
5. 淡灰茶色砂質土(やや粘性あり) 黄白色ブロックを含む) 灰褐色シルト質土を帶状に含む)
6. 淡青灰色砂質土(縮まりあり) 帶水??
7. 暗青灰色砂質土(やや粗い砂粒)
8. 暗灰色砂質土(シルト系) 砂混じり)
9. 明茶灰色砂質土(やや粗い砂粒を帶状に含む)
10. 暗灰色砂質土(鉄分含む) 灰褐色粘質土ブロックを帶状に含む)
11. 暗茶灰褐色砂質土(やや粗い砂粒、鉄分を含む)
12. 暗灰色砂質土(鉄分含む) 黒灰色粘質土を帶状に含む)
13. 明茶灰色砂質土(シルト系) 錠まりあり) 鉄分、黄色粒子を含む)
14. 暗茶灰色砂質土(鉄分含む) 黄白色粒子、灰白色ブロックを含む)
15. 淡灰茶色砂質土(シルト系) 砂混じり)
16. 淡灰黑色砂質土(鉄分含む) 黄白色粒子を含む)
17. 暗灰色砂質土(鉄分含む) 黃褐色シルト系
18. 暗茶茶色砂質土(鉄分含む) 黄白色小ブロックを含む)
19. 淡灰茶色砂質土(鉄分含む) 黄白色小ブロックを含む)
20. 明茶灰色砂質土(鉄分が著しい) 黄白色シルト系
21. 明灰色砂質土(鉄分含む) 黄白色シルト質土、黄白色ブロックの混土層)

A. 淡茶色シルト質土 — 安定面

B. 淡黃色シルト質土 — 安定面

26NR015 3トリ南壁土層



1. 暗灰色砂質土(鉄分、黄色粒子を含む) 部分的に黒灰色粘質土を帶状に含む)
2. 明灰茶色砂質土(鉄分、黄色粒子を含む) やや粘性あり)
3. 明灰色砂質土(シルト系) やや細かい砂粒)
4. 暗茶色砂質土(鉄分や粗い砂粒)
5. 暗灰色砂質土(鉄分含む) 部分的に黄灰色シルト質土を帶状に含む)
6. 明茶茶色砂質土(鉄分含む) 黄色粒子を含む)
7. 暗茶灰褐色砂質土(やや粗い砂粒、黄色粒子を含む)
8. 明茶茶色砂質土(シルト系) 黄色粒子を多く含む)
9. 淡灰茶色砂質土(鉄分を多く含む)
10. 明茶茶色砂質土(鉄分を多く含む)
11. 淡灰綠色砂質土(やや粗い砂粒) シルト系)
12. 暗灰褐色砂質土(軟質) —滲水
13. 茶褐色砂質土(鉄分を多く含む)
14. 淡灰褐色砂質土(鉄分含む) 黄白色粒子、灰白色ブロックを含む)
15. 明茶褐色砂質土(鉄分含む) 黄白色粒子を含む)
16. 暗茶褐色砂質土(鉄分含む) 黄色粒子を含む)
17. 明灰茶色砂質土(鉄分含む) 細かい砂粒 黄色粒子を多く含む)
18. 淡灰茶色砂質土(鉄分含む) 黄色粒子を含む)
19. 暗茶灰褐色砂質土(鉄分含む) 黄色粒子を含む)
20. 明茶褐色砂質土(鉄分を多く含む)

C. 淡黃色シルト質土 — 安定面

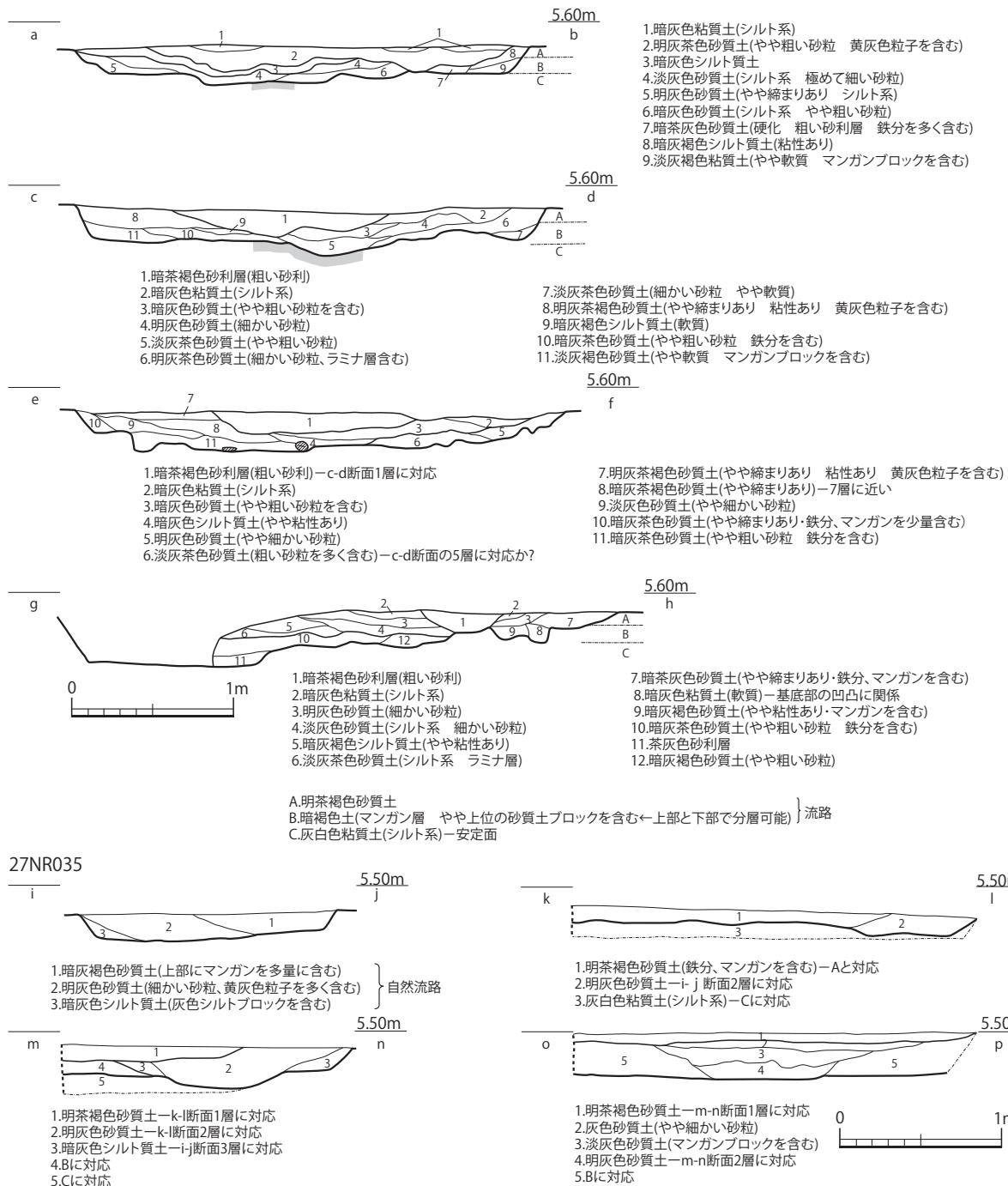
D. 淡黃色シルト質土 — 安定面

21. 淡灰黑色粘質土(軟質) 砂混じり)
22. 暗灰黑色粘質土(シルト系) 軟質)
23. 明茶褐色砂質土(シルト系) 砂混じり)
24. 淡灰褐色砂質土(鉄分含む) 黄色粒子を含む)
25. 暗茶褐色砂質土(鉄分含む) 黄色粒子を含む)
26. 明茶褐色砂質土(鉄分含む) 黄色粒子を含む)

※A-B-C-Dに同じ

第30図 第26次自然流路土層断面実測図 (1/60)

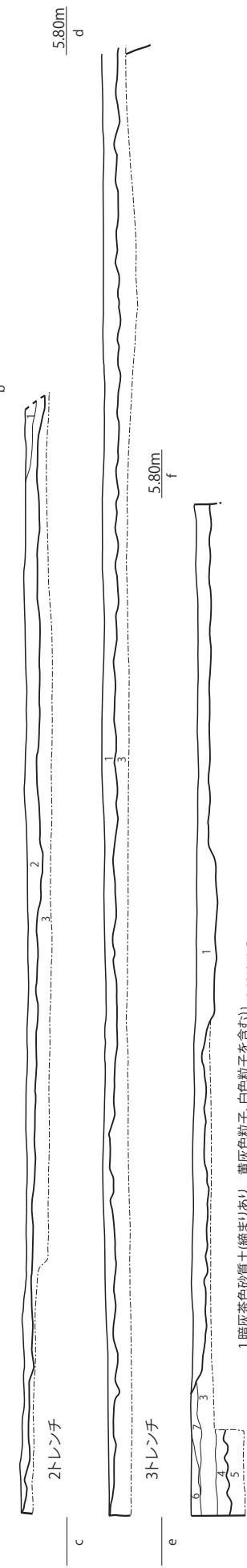
27NR030



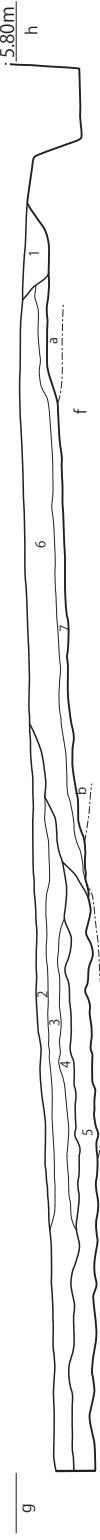
第31図 第27次自然流路跡土層断面実測図 (1/40)

179.2gを測る。9は須恵器甕Aに該当する破片で、器高は40cm以上を測ると推定される。外面には粗いタタキ痕跡が認められる。15は弥生土器長頸壺の頸部～口縁部である。縦方向のミガキ調整が施される。18は小型の弥生土器甕である。底部は厚い平底を呈し、口縁部は短く外反する。26は大型器台の破片で、大道遺跡群の調査では管見の限り事例が無いと思われる。柱状部には外面からの焼成前穿孔が施されている。35～37は同一個体と思われる山陰系の大型な二重口縁壺である。内面には斜方向の細かい刷毛目調整が施される。46～48は縄文土器深鉢の破片である。46は口縁端部に烈点文、その下位には多重沈線が刻まれる。内面には細かい条痕が認められる。船元式に該当する。47は小池原上層式の破片である。48は縄文時代晩期に位置づけられる浦久保式の深鉢口縁部である。波状口縁を有し、端部は断面長方形を呈す。63は轟B式の深鉢口縁部である。縄文時代前期前葉に該当し、大道遺跡群の中でも最も古い資料とされる。

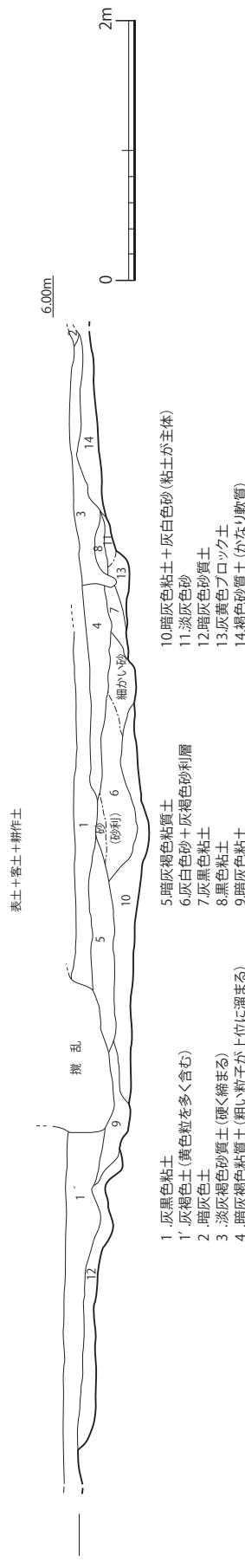
27NR010-015
1トレンチ



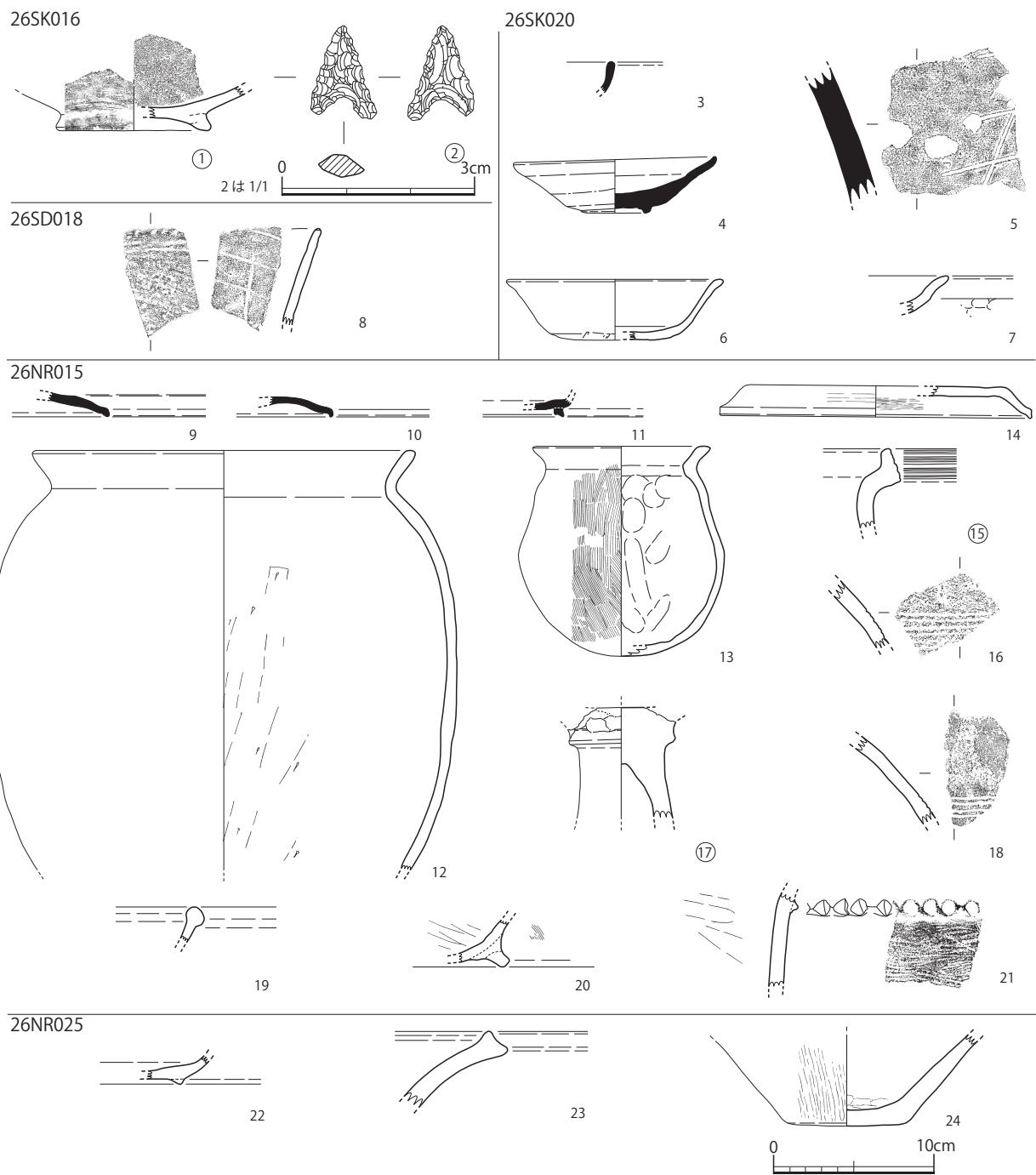
27NR020-025
4トレンチ



33次調査区北壁土層
A



第27・33次自然流路跡土層断面実測図 (1/50)



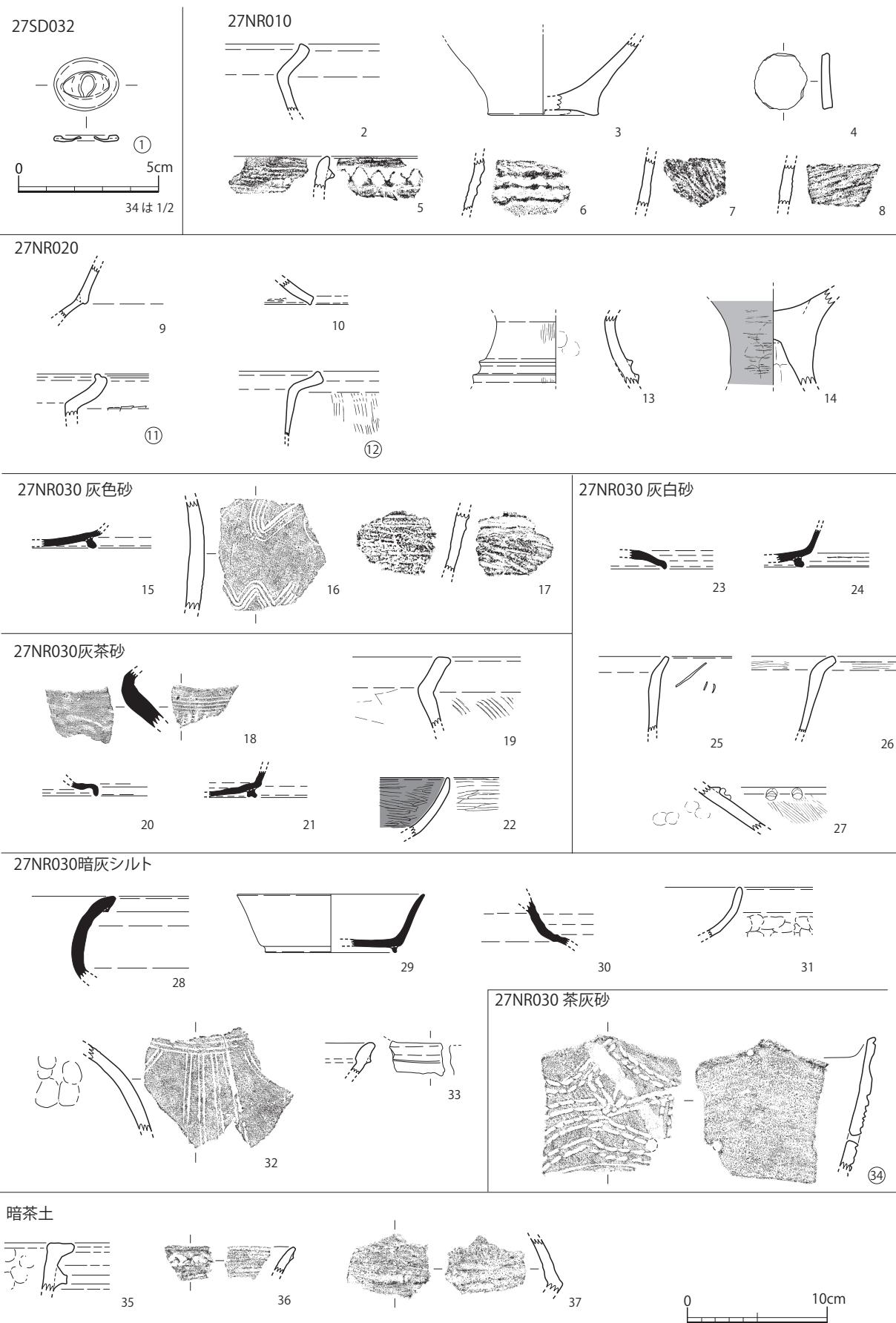
第33図 第26次出土遺物実測図 (1/1・1/4)

E 小結

今回の調査では、第33次調査区では直線的に、第26次調査区では不定形に広がった、そして第27次調査区では複数にわたる自然流路跡が確認された。出土遺物から概ね9世紀代までの範疇で捉えられ、それ以後は土壤化し、水溜め等に使用されたと推測される土坑が構築される。近世段階以降は完全に耕地化し、その後宅地化した変遷が辿ることができた。

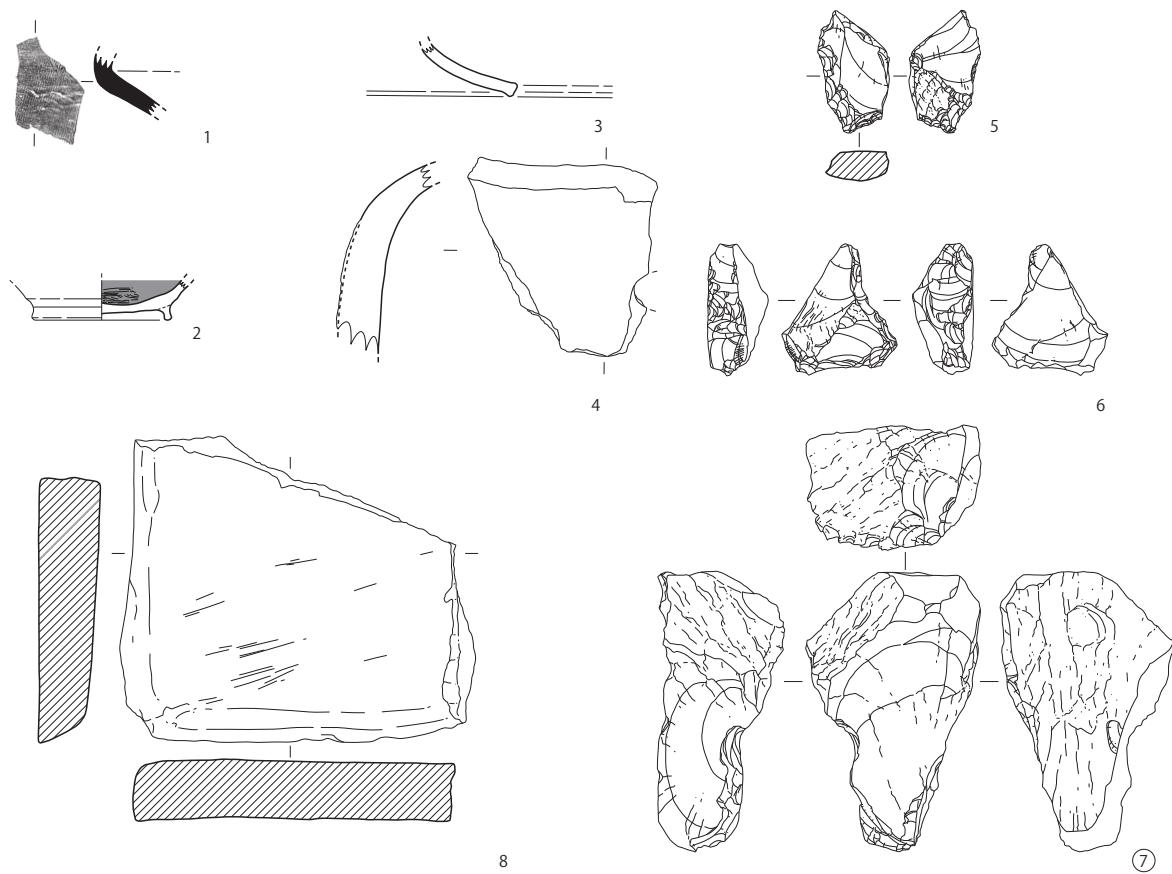
自然流路跡については、古代の段階で遺跡群内において、当該時期に大規模な開発が行われたことにより、埋没、もしくは埋め立てられた可能性が考えられる。

出土遺物中に縄文土器や弥生時代前期・中期に該当する資料が多く含められることは、本遺跡群の南側エリア～上野台地付近にかけて、集落域が展開していたことを示唆するものといえる。
(佐藤道文)

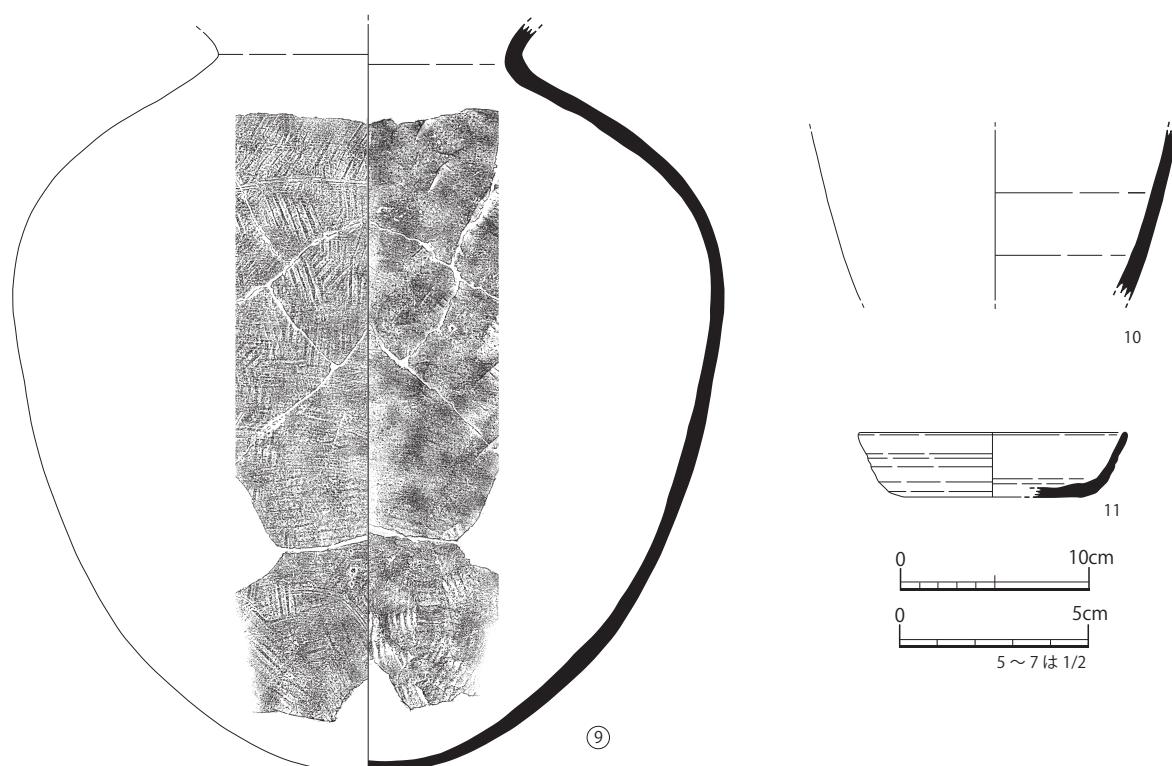


第34図 第27次出土遺物実測図 (1/1 • 1/4)

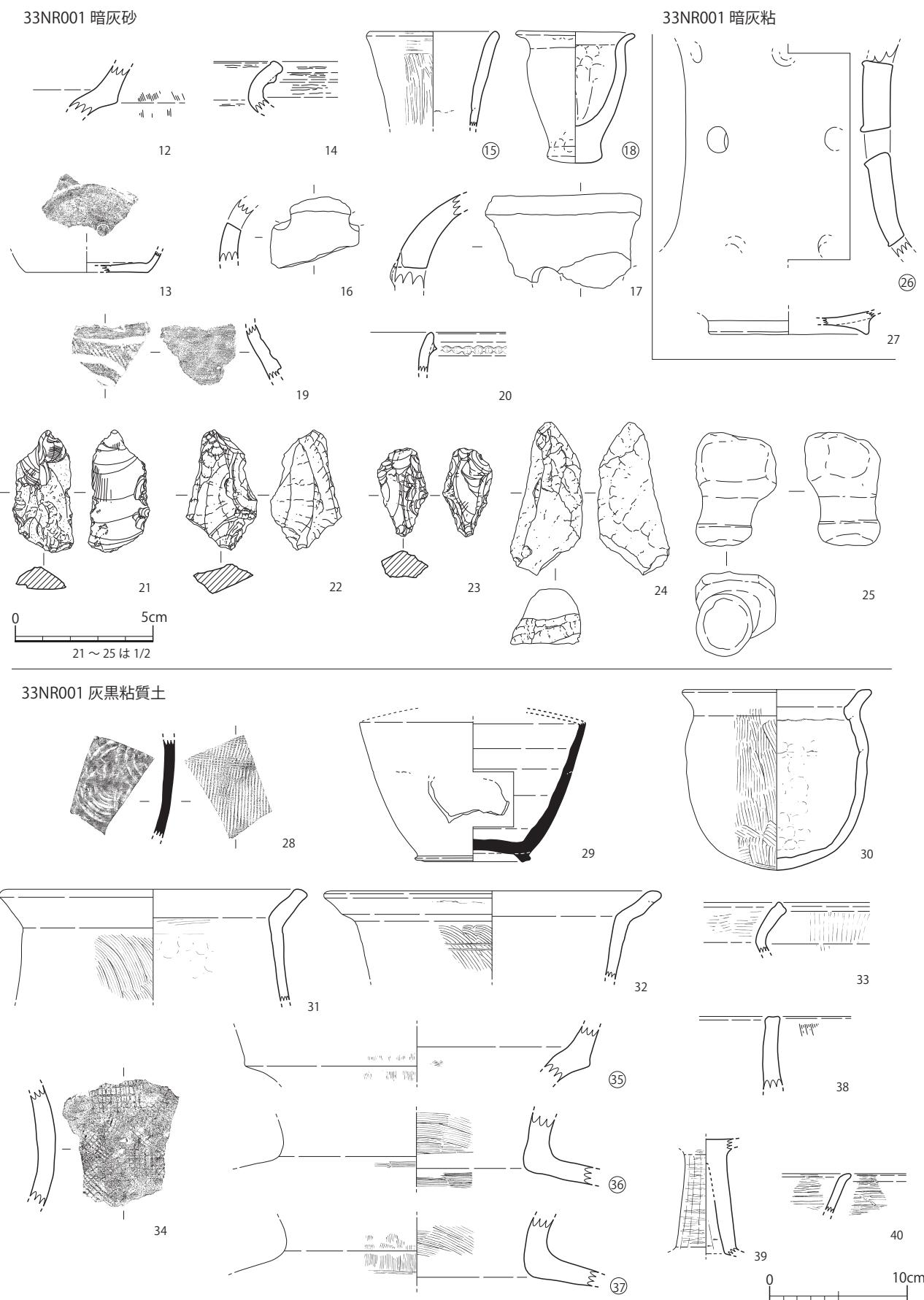
33NR001 褐灰砂質土



33NR001 暗灰砂

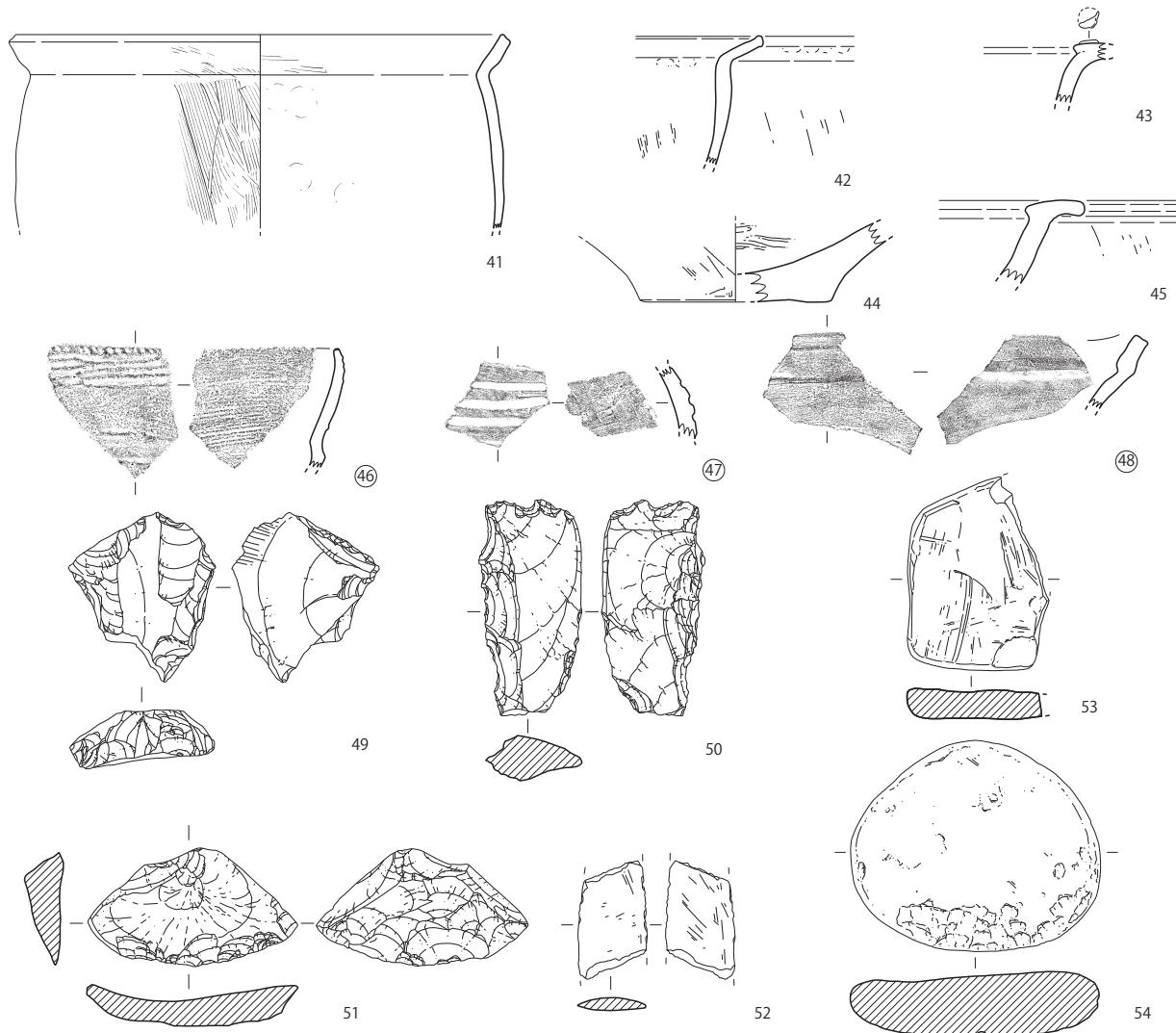


第35図 第33次出土遺物実測図1 (1/2・1/4)

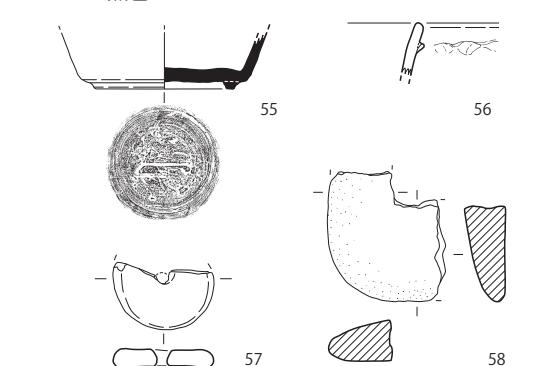


第36図 第33次出土遺物実測図2 (1/2・1/4)

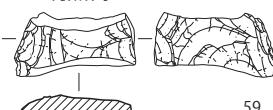
33NR001 灰黒粘質土



33NR001 黒色土



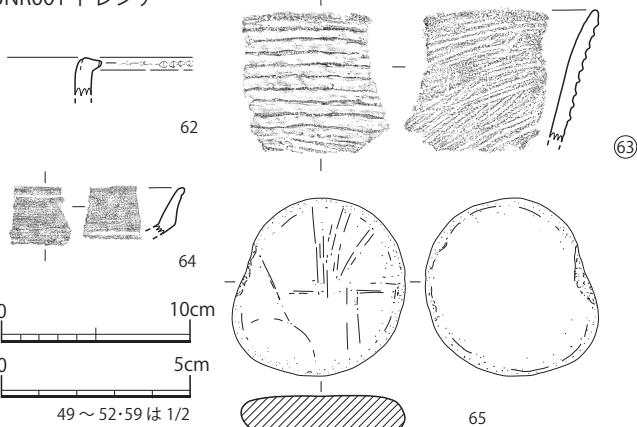
33NR001 明黒褐土



33NR001 機械掘削時



33NR001 トレンチ



第37図 第33次出土遺物実測図3 (1/2・1/4)

第4節 F区の調査

大道遺跡群第30・39次調査（第38図）

F区は、調査対象範囲内の南西隅にあたる地点であり、『大道遺跡群2』にて報告した第6次調査地点を含む。調査前はコンクリート基礎をもつ多くの建物があり、全体としては攪乱が非常に多い地点であったが、東西方向の溝跡や弥生時代前期に遡る貯蔵穴と考えられる土坑、古墳時代前期の多量の土器群を含んだ遺構群のほか、9世紀代の井戸跡が確認された。

①大道遺跡第30次調査

A 調査の概要

第30次調査は、第39次調査に東接し、4.5m西側には第6次調査が所在する。調査の結果、調査区全面は後世の攪乱により大規模な削平がみられたが、井戸跡や土坑、複数の溝跡を確認した。遺物の多くは弥生時代前期・古墳時代前期のものが主体であるが、8~9世紀代の遺物も確認できる。

B 基本層序（第39図 調査区東壁土層）

地表面から遺構面までは造成土が厚く堆積する。この造成土を除去すると厚さ0.2mほどの近世の整地層と考えられる黒灰色土が確認される。古代以前の遺構は黒灰色土除去後の標高6.5~6.6m付近で検出される。

安定地盤は確認できず第6次調査や後述する第39次調査と同様、沖積作用によって形成された「黄褐色砂質土」が基盤層となる。

C 遺構

井戸跡（SE）

30SE020（第40図）

調査区中央東側のG8グリッドで検出された。長軸1.4m、短軸1.2mのほぼ円形を呈す。遺構検出段階では井筒のプランは確認できなかったが、土層模式図上で1層とした層を除去すると直径0.4mの井筒プランと底部を欠いた大型の企救型甕がやや傾いた状態で口縁部を上にして出土した（写真図版5参照）。甕の性格として井戸の廃棄に伴う祭祀遺物の可能性もあるが、底部の欠損状況や井筒プラン内に納まる状態で出土したことから井筒として再利用された可能性が高いと考えられる。甕を除去すると直径約0.2mの曲物が据えられており、水溜部としていた。検出面から水溜部最深部までの深さは0.5m、最深部標高は4.2mである。最深部には調査時にも豊富な湧水が認められた。

水溜部には、完形の黒色土器B類椀1点が正置した状態で出土しており、井戸廃絶時の祭祀行為と考えられる。井戸廃絶後には井筒を抜き取った後、淡灰黄色砂質土（模式図上で1層とした層）により、一度に埋め戻されたと推定される。出土遺物から、9世紀前半頃に形成され廃絶したものと考えられる。

土坑（SK）

30SK032（第39図）

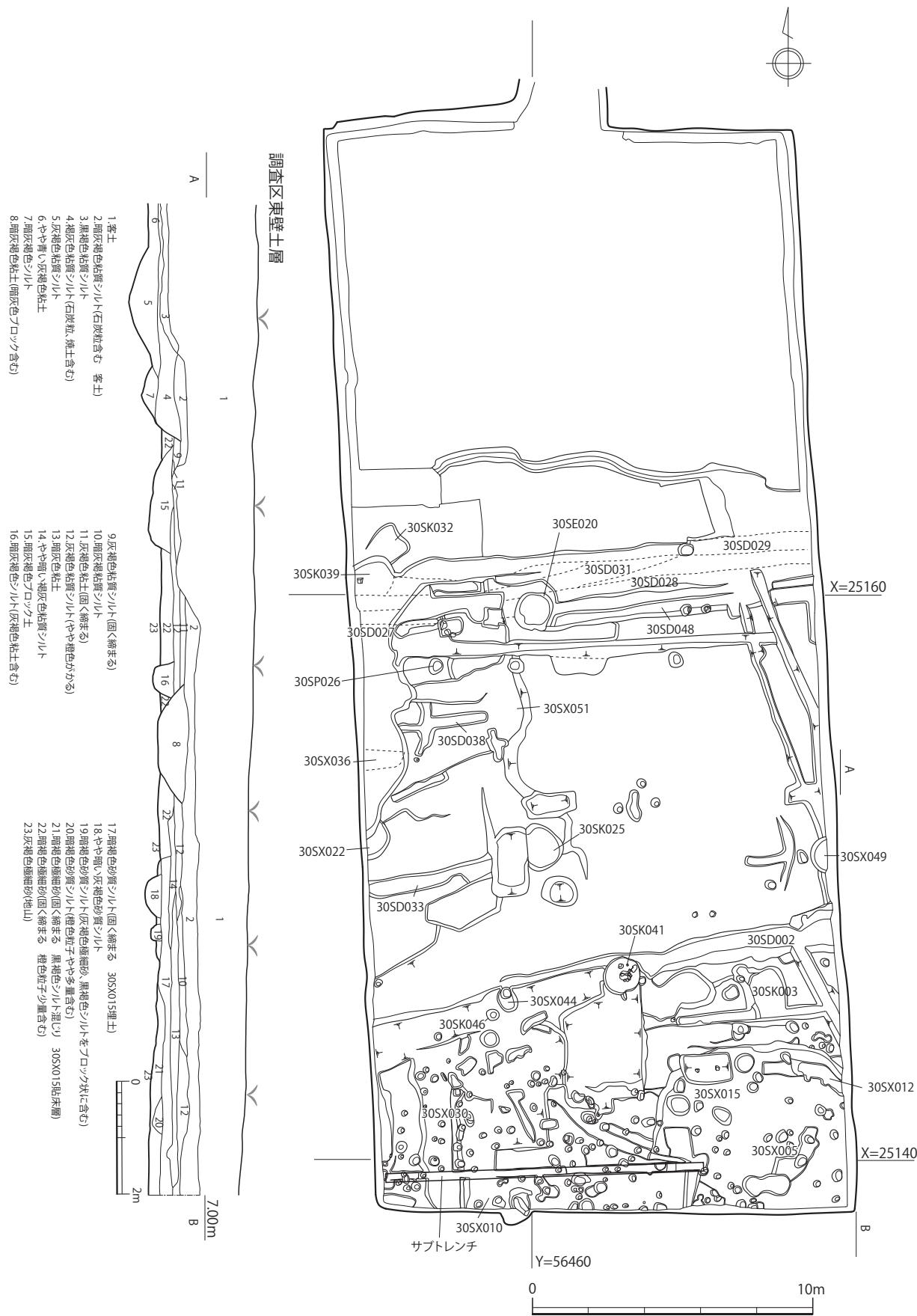
調査区中央南側のH6グリッドで検出された。長軸1.2m、短軸1.1mの平面不定形のプランで検出面からの最大深度は0.6mを測る。8世紀~9世紀の遺物が出土した30SX039を切ることから9世紀以降のものと考えられるが、弥生時代前期末~中期初頭頃の遺物が出土している

30SK039（第39図）

調査区中央南側のH6グリッドで検出された。調査区外に延びるため全容は不明であるが、長軸 $1.5 + \alpha$ m、短軸1.5mを測る。検出面からの最大深度は0.6mを測る。

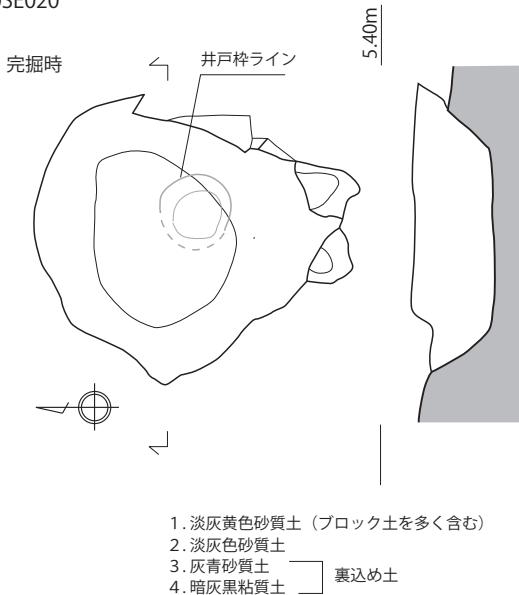
出土遺物は土師器壺cが出土しており、8~9世紀代の遺構と考えられる。



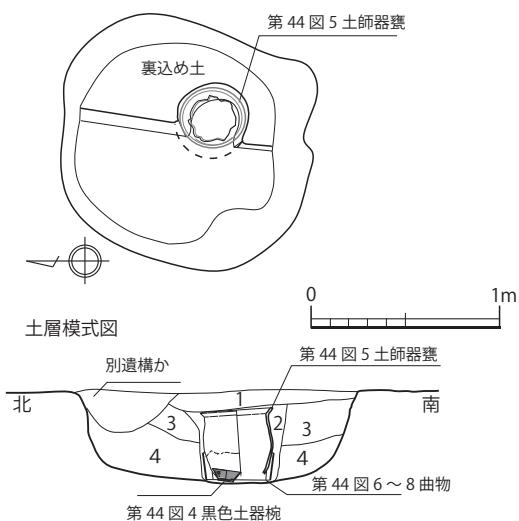


第39図 大道遺跡群第30次全体遺構図 (1/200) 調査区東壁土層断面図 (1/80)

30SE020



井戸枠（土師器甕）検出時図 西側半分は完掘した状態

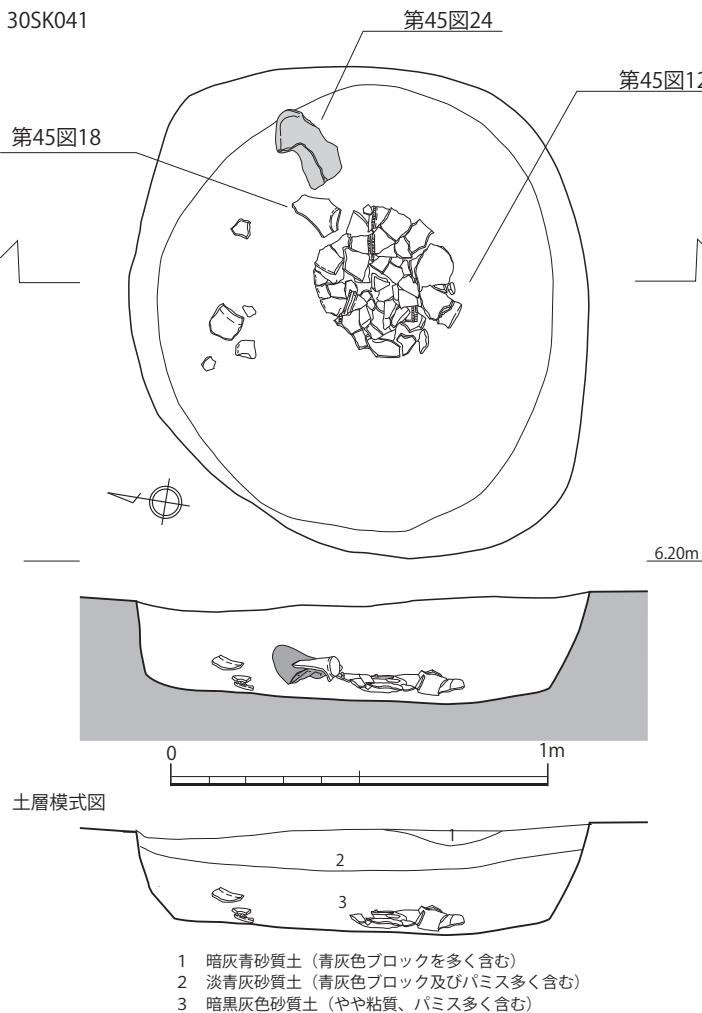


第40図 第30次井戸跡遺構実測図 (1/40) 土層模式図

30SK041 (第41図)

調査区中央南側のD8グリッドで検出された。長軸1.45m、短軸1.25mの円形のプランを呈する。検出面からの最大深度は0.3mである。壁面は比較的垂直に立ちあがるが断面形状は概して逆台形状となる。床面直上付近よりほぼ完形に復原される弥生土器甕や擦石の可能性のある河原石等が出土した。

出土遺物は弥生時代前期末頃と考えられる。なお、西側の調査区である第6次調査では同様の規模及び時期の円形土坑が複数確認されている。これらの事例を参照すれば貯蔵穴である可能性が高いと考えられる。



第41図 第30次土坑遺構実測図 (1/20)

溝跡 (SD)

30SD002 (第39図)

調査区西端のD6グリッドから東端のD10グリッドにかけて調査区を横断する東西方向16.7+ α mである。30SK041を切る。幅0.5~0.8m、検出面からの最大深度は0.5m、やや蛇行するがほぼ直線に形成されている。調査区西側に所在する第6次調査の6SD008 (SD003) の延長部分に相当すると考えられる。標高はD4グリッドで5.3m、E8グリッドで5.2mである。

土師器甕dが出土しており、8世紀中頃～後半の遺構と考えられる。

30SD027 (第39図)

調査区西端のG6グリッドから東端のG7グリッドにかけて調査区を横断する東西方向の溝跡である。30SD028を切る。幅0.3~0.35mを測る。やや蛇行するがほぼ直線に形成されている。

30SD028 (第39図)

調査区西端のG6グリッドから東端のG10グリッドにかけて調査区を東西方向に横断する長さ $16.0 + \alpha$ mの溝跡である。30SD027に切られる遺構である。幅0.3~0.35mを測る。やや蛇行するがほぼ直線に形成されている。

火打石と考えられる石英・チャートの石材が出土している。具体的な時期は不明であるが大道遺跡群一体では近世以後に数が多くなることから近世の所産である可能性が高い。

30SD029 (第39図)

調査区西端のG6グリッドから東端のG10グリッドにかけて調査区を東西方向に横断する長さ $14.7 + \alpha$ mの溝跡である。弥生時代前期の遺物が出土する30SD031を切り、土師器坏cが出土する30SK039に切られる遺構である。幅約0.3~0.5mを測る。やや蛇行するがほぼ直線に形成されている。

弥生時代前期末～中期初頭の遺物が複数出土しており、当該期の所産と考えられる。

30SD031 (第39図)

調査区西端のG6グリッドから東端のH9グリッドにかけて調査区を横断する東西方向の溝跡である。弥生時代前期の遺物が出土する30SD029及び30SD027、30SE020に切られる遺構である。幅0.3~0.35mを測る。やや蛇行するがほぼ直線に形成されている。

出土遺物は極めて少なく図示できたものは土製紡錘車のみであったが、遺構の切り合いで弥生時代前期～中期の遺構の可能性がある。

30SD038 (第39図)

調査区中央西端のF6グリッドで検出された。遺構の東側は搅乱によって削平されており全容は不明である。幅0.3~0.35mを測る。

出土遺物から弥生時代前期末～中期初頭頃の遺構と考えられる。

性格不明遺構

30SX010 (第39・42図)

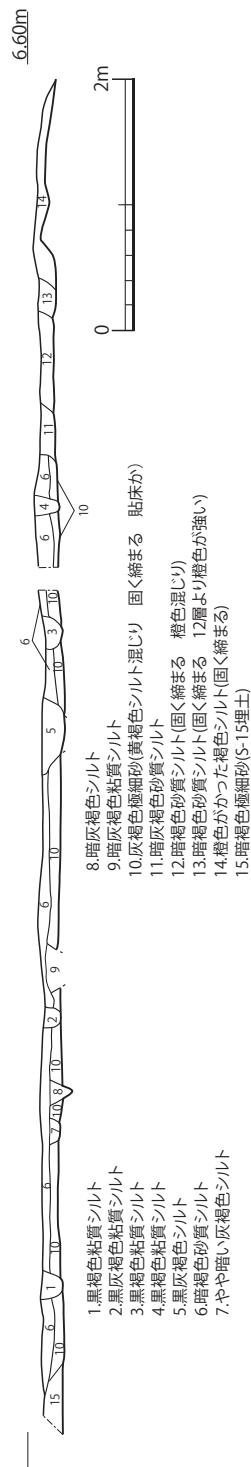
調査区南端部のB7グリッドで検出された。南北 $4.0 + \alpha$ m、東西7.0mの不定形プランの遺構である。検出面からの最大深度は0.15mを測る。東西サブトレーンチ土層図（第42図）によれば、硬く締まった層（第10層）の存在から貼床の可能性もあるが、竪穴建物とするには十分な条件はない。

出土遺物は弥生時代前期末～中期初頭の甕や結晶片岩製の勾玉状の製品などが見られるが、企救型甕が出土したことから8世紀中頃～9世紀頃の遺構と考えられる。

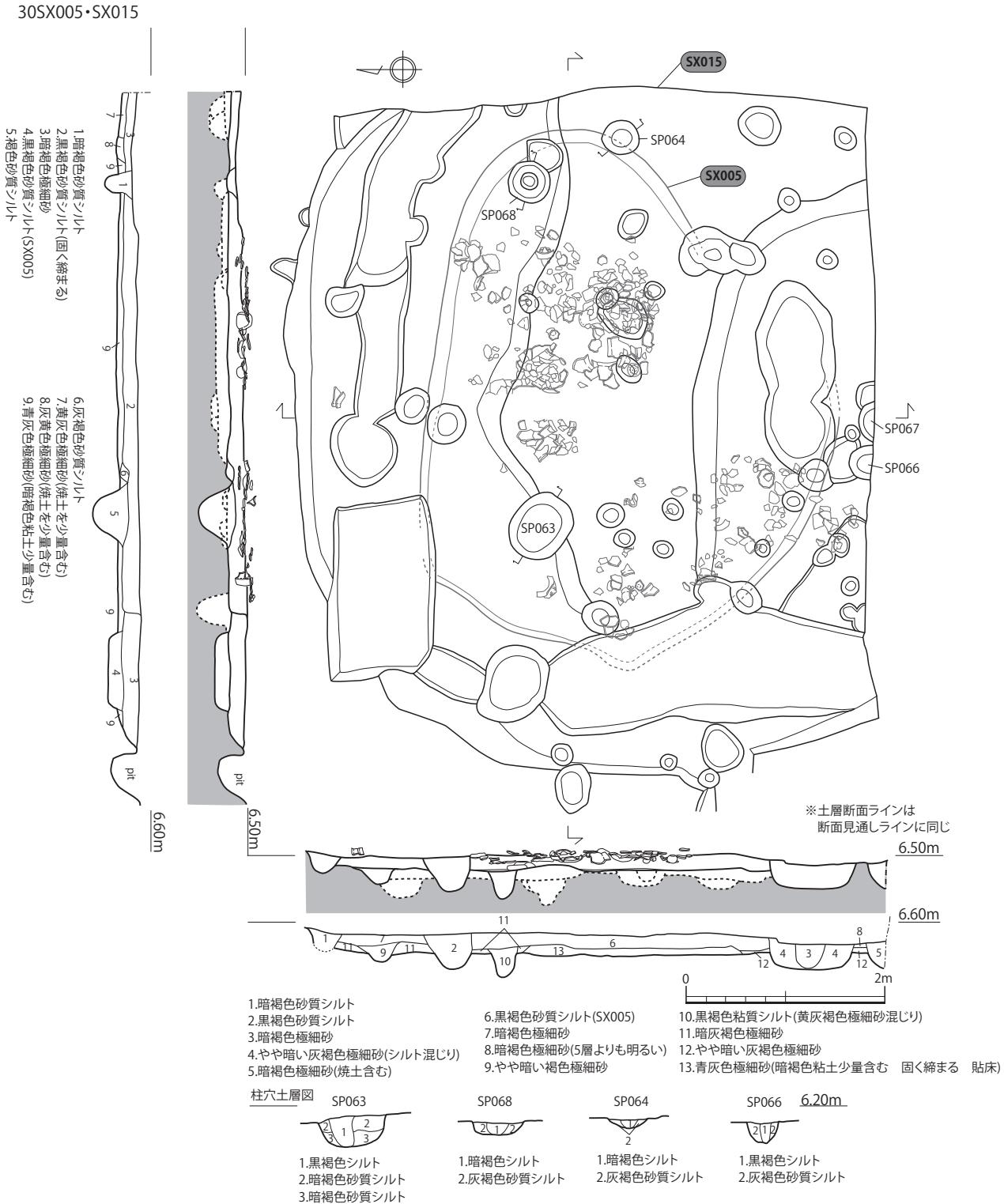
30SX015・30SX005 (第39・43図)

調査区南東端部のB9グリッドで検出された。南北 $6.0 + \alpha$ m、東西6.9m、検出面からの最大深度は0.2mを測る。床面には、調査区東壁南側土層断面図（第39図）第21層とした締まった暗褐色極細砂が堆積しており、貼床と考えられる。第43図の土層図第6層は貼床上に堆積する土器を多量に含む不定形なプランに対応するものであり、これを土器溜まり30SX005として調査を行っている。遺構廃絶後に土器の廃棄空間として使用されたことが窺える。

貼床上面には柱痕を確認したピットが4基（SP063・064・066・068）存在するが配置に規則性はない。また、壁溝、炉跡、屋内土坑などの竪穴建物とした場合に想定



第42図 第30次ナフトレンチ南壁土層断面実測図 (1/50)



第43図 30SX015・005遺構実測図 (1/60)

される施設は確認できないため、貼床状の堆積は確認できたものの堅穴建物とする確認は得られなかった。

遺構埋土からは多くの遺物が出土したが、多くは30SX005とした土器溜まりから出土したものである。遺物の出土状況や完形率からみて一括投棄した遺物群と考えられる。30SX015から出土した遺物は小型丸底壺一点程度であるが、30SX005と大きな時期差はなく両遺構の形成には大きな時期差はないと考えられる。

出土遺物から、古墳時代前期中葉頃に廃絶したと考えられる。

30SX012（第39図）

調査区南東部のC10グリッドで検出された。長軸2.0m、短軸0.5mを測る溝状のプランで、検出面からの最大深度は0.6mを測る。出土遺物は弥生時代前期中頃の遺物のみであるが、30SX015を切る遺構であるため古墳時代前期中葉以降の時期と考えられる。

30SX022（第39図）

調査区中央西側のE6グリッドで検出された。北側が攪乱によって削平されている。東西0.7m、南北 $1.2+\alpha$ mの不定形プランで、検出面からの最大深度は0.6mを測る。

出土遺物は器壁の厚い京都系土師器が出土しており、16世紀後半の遺構と考えられる。

30SX036（第39図）

調査区中央西側のF6グリッドで検出された。北側が攪乱によって削平されている。東西 $1.2+\alpha$ m、南北0.7mの溝状のプランを呈する。

出土遺物は黒色土器A類の椀が出土しており、9世紀代の遺構と考えられる。

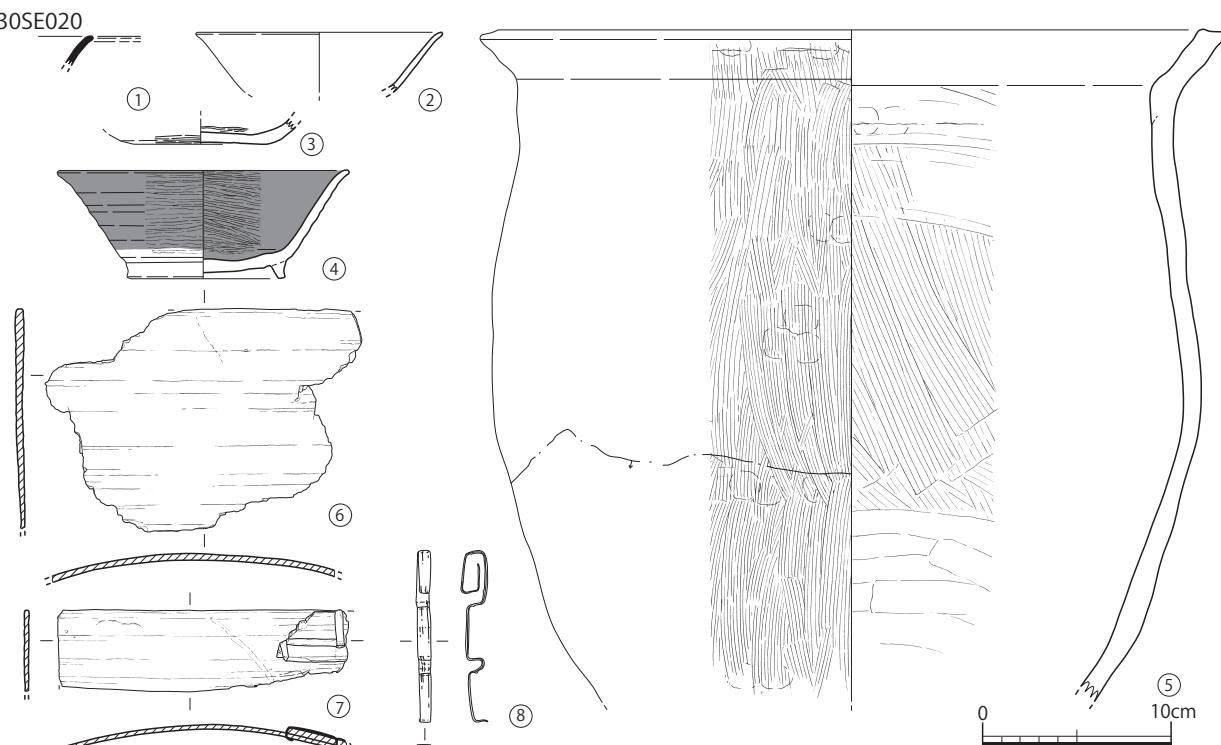
D 出土遺物**出土遺物の概要**

今回の調査では、コンテナ16箱の遺物が出土した。出土遺物の大部分が30SX005とした古墳時代前期の土師器資料であるが、他にも弥生時代前期末～中期初頭頃、8～9世紀、18世紀頃の遺物が出土している。なお、弥生時代前期末～中期初頭頃の遺物が多いのは隣接する第6次調査と共通する。

第44図～第50図は、主要遺構に絞って遺構の時期を示すものや、特殊な遺物を中心に掲載している。

30SE020出土遺物（第44図1～8）

1～3は遺構掘削時に出土した遺物で、4は水溜部より、5は井筒内で出土した遺物である。1は灰釉陶器の碗×皿の口縁部片である。2は土師器坏a4の口縁部片である。薄手の器壁で口縁端部は外反する。橙褐色の色調を呈す。3は土師器坏dの底部片である。内外面には回転ヘラミガキが僅かに確認できる。4はほぼ完存する黒色土器B類の碗である。内面は漆黒色に燻され丁寧な横方向のミガキ調整が施される。外面は高台付近～底部外面に



第44図 第30次井戸跡遺物実測図（1/4）

は、燻しが及んでおらず内面と比べて斑である。なお、外面も丁寧な横方向のミガキ調整が施される。5は土師器甕bに分類されるいわゆる企救型甕である。色調は橙色を呈する。外面には煤が付着している。口縁部はやや肥厚気味で端部に平坦面をもって水平をなすもので稗田氏の口縁部分類Aタイプに類似する（稗田2010）。口縁部形態からは企救型甕の中でも古相に属するが、内面調整に縦方向のハケ目調整や体部下半にケズリ状の調整を施し、体部外面は粗雑な縦方向のハケ目調整を施す。このような調整は、本来内面にケズリ調整を施さず、体部外面上部に斜め方向のハケ目調整を行う点を特徴とする企救型甕の属性からは逸脱するものである。また、全体のプロポーションも体部下半に最大径をもつ点は、いわゆる企救型甕の基本とする特徴とは異なっている。したがって、共伴遺物が示すような9世紀前葉頃の時期に相当する企救型甕が変容した形態を示す資料と考えられる。6・7・8は井戸枠水溜部最深部で出土した曲物である。

30SK041出土遺物（第45図12・16～24）

貯蔵穴と考えられる遺構から出土した遺物群である。12は土庄によって潰れていたが、ほぼ完形に接合した下城式の甕である。床面直上に置かれていたと考えられる。色調はにぶい赤褐色を呈し、口縁端部と突帯に刻目をもつもので口縁部はやや内傾する。内外面は縦方向のミガキ調整が施される。内面～外面上部にかけて煤の付着が見られる。17は甕の底部片と考えられるが、焼成後に底部打ち欠きが見られる。底部の厚みが薄く甕としてよいかは不明である。16・18はやや古相を呈する甕の底部である。19は弥生土器壺の体部片、20は頸部片と考えられる。ともに内外面にミガキ調整を施す。21・22は縄文土器で、22は小池原下層式の口縁部片である。23は土掘具などの機能が想定される緑泥片岩製の打製石器である。24は擦石の可能性のある石製品である。

30SD028出土遺物（第46図5～6）

5は石英製、6はチャート製の石製品である。使用痕は明確ではないがこの種の石材で近似する規格をもったものに火打石があり、これらの資料も使用頻度の少ない火打石の可能性がある。

30SD029出土遺物（第46図7～9）

7～9は弥生土器である。8は甕の底部片であるが内面はハケ目調整の後斜め方向の細かいミガキ調整、外面も丁寧な縦方向のミガキ調整を施す。底部外面には糊跡が残る資料である。9は鉢形の土器である。口縁部に一条の突帯を施し、内外面には縦方向のミガキ調整を施す。

30SD031出土遺物（第46図10）

10は土製紡錘車である。一方の面に線刻を施している。

30SD038出土遺物（第46図11～13）

11・12は弥生土器である。11は下城式の甕の口縁部片である。口縁端部は舌状に丸みを有している。12は甕の体部である。外面は縦方向のハケ目調整を施すがミガキ等は確認できない。13は縄文土器深鉢の体部片である。

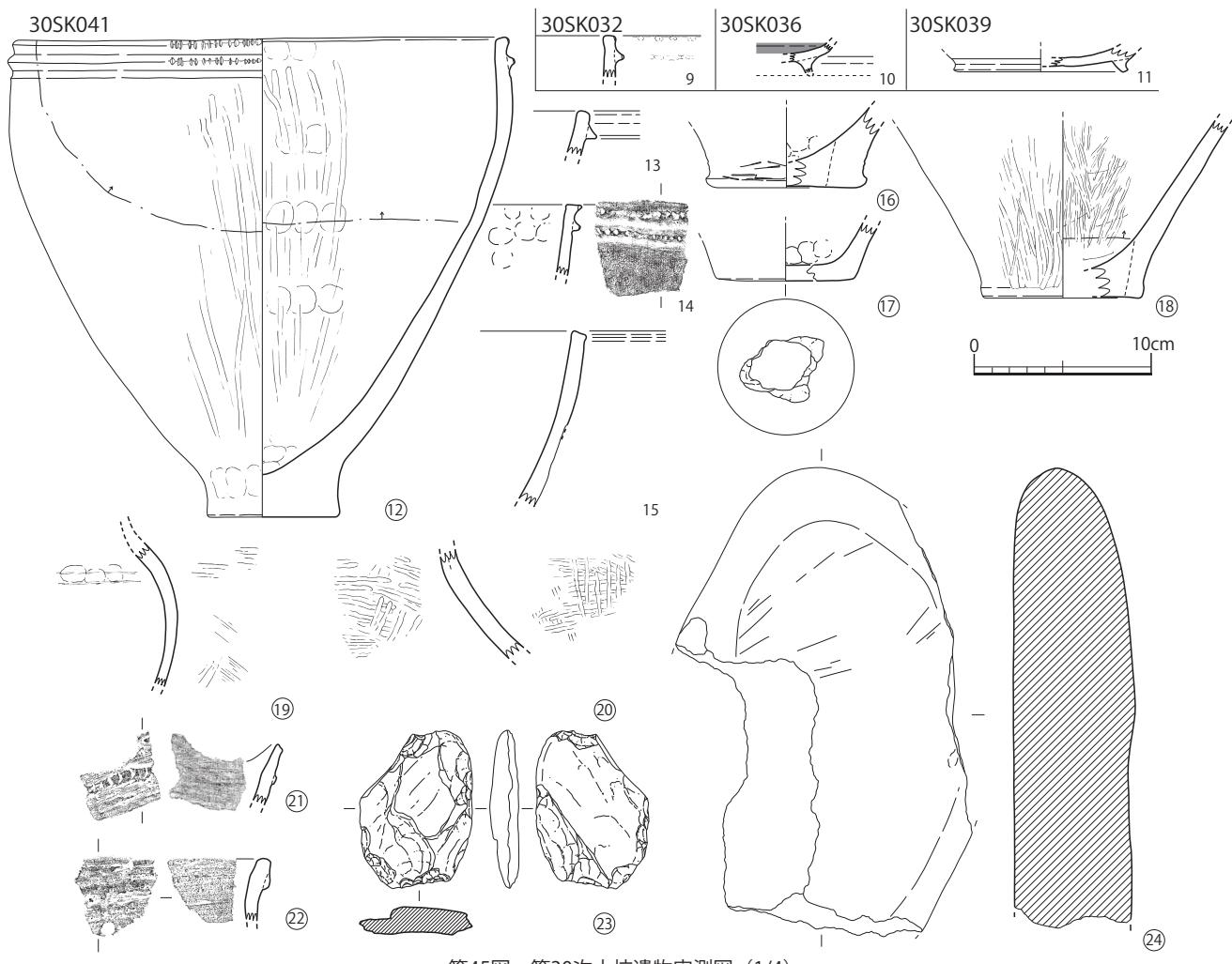
30SX005出土遺物（第47～49図1～63）

第30次調査で報告する遺物中の大半を占める一括投棄された遺物群である。図化したものその他にも多くの遺物が出土しているが、ここでは、各層位ごとに取り上げた土器群の内、遺存状態の良い甕類及びその他の器種を中心図示した。遺物の組成としては甕（1～13）、安国寺式壺（15～17）、複合口縁壺（18）、直口壺（14・19～21）、鉢（22）、高壺（23～31）、小型器台（32）、長頸壺（33）、小型丸底壺（34～37）、鉢（38～44）、壺（48～52）など当時のセット関係を良好に示すものであった。組成の特徴としては外来系遺物が一定量認められるなかで布留系の甕が欠如する。

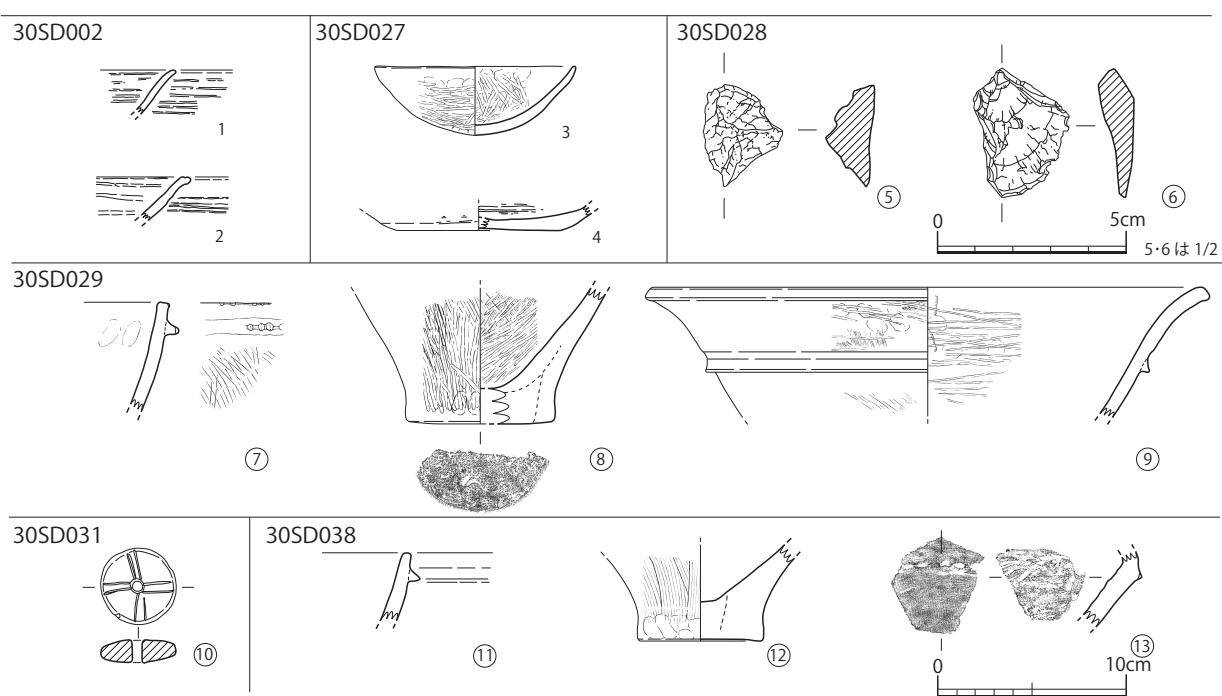
なお、弥生時代後期の土器や小池原上層式の縄文土器深鉢が出土したほか、碧玉製の管玉（63）も出土している。

30SX010出土遺物（第50図1～3）

1は土師器甕b（企救型甕）、2は弥生土器甕である。3は結晶片岩製の勾玉と思われる製品である。2ヶ所に穿孔が見られる。複数の時期の遺物が混在しており、勾玉状製品の明確な時期は判断しがたいが、縄文時代晚期～弥生時代前期頃の遺物の可能性がある。（長直信）

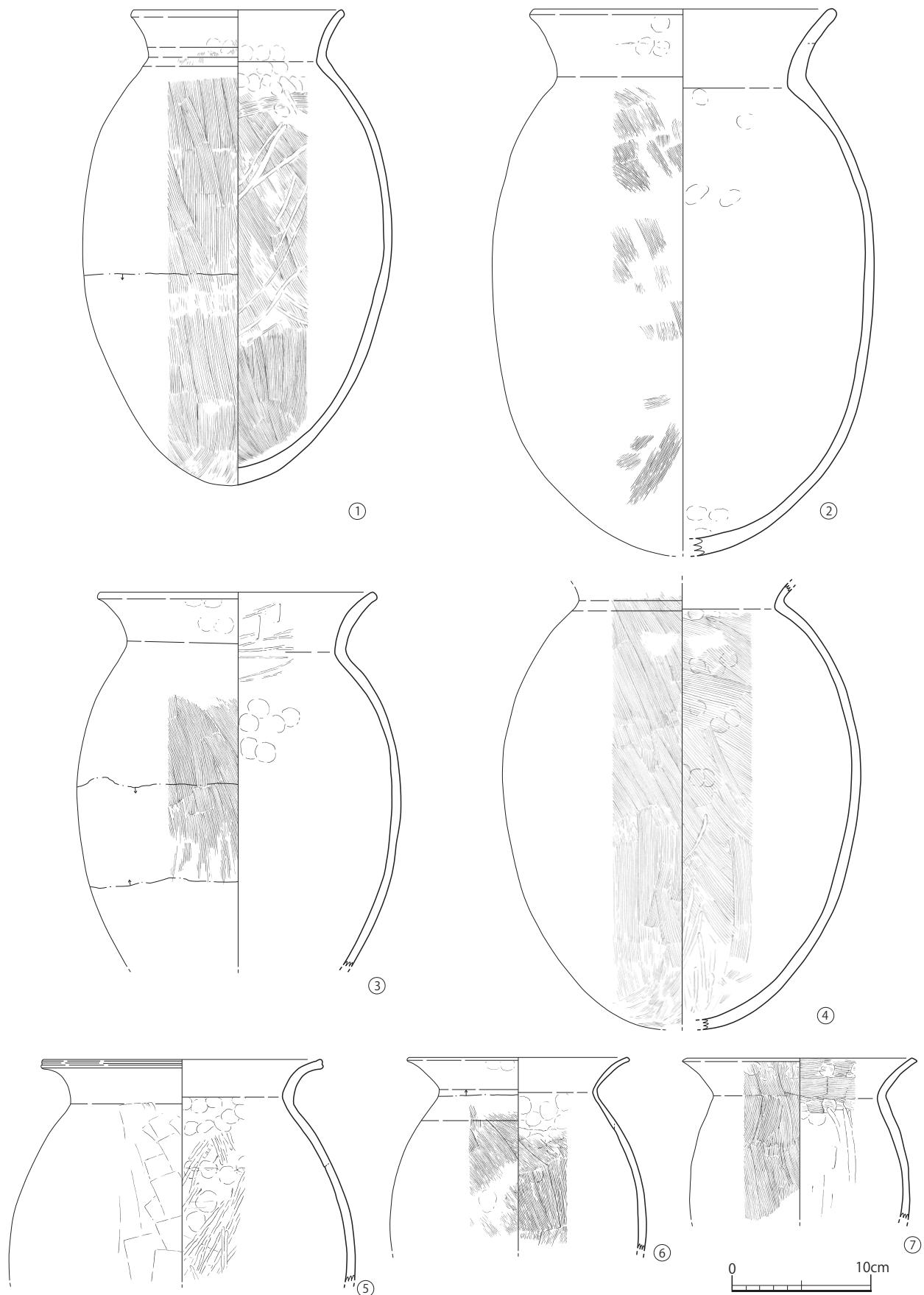


第45図 第30次土坑遺物実測図 (1/4)



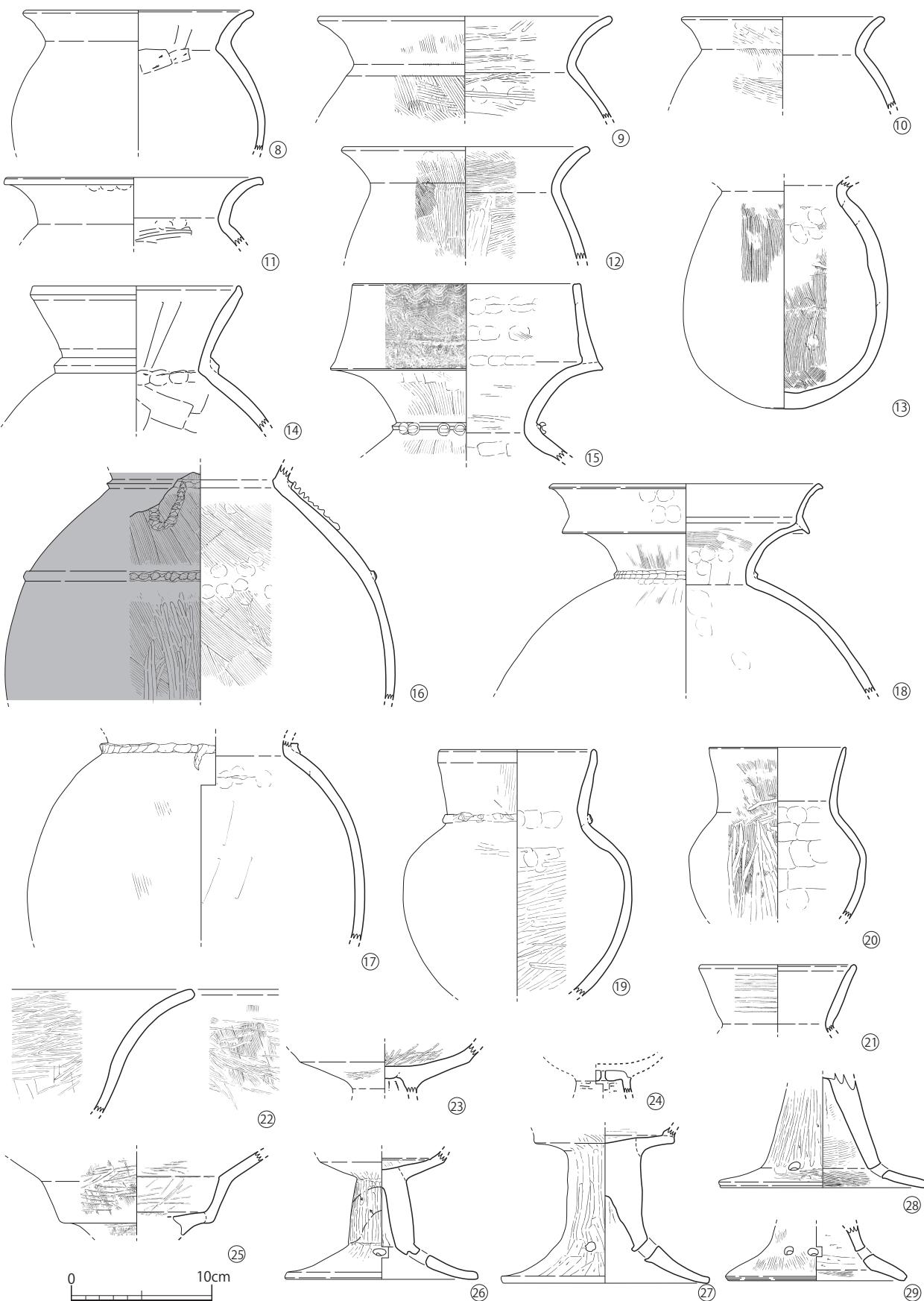
第46図 第30次溝跡遺物実測図 (1/2・1/4)

30SX005



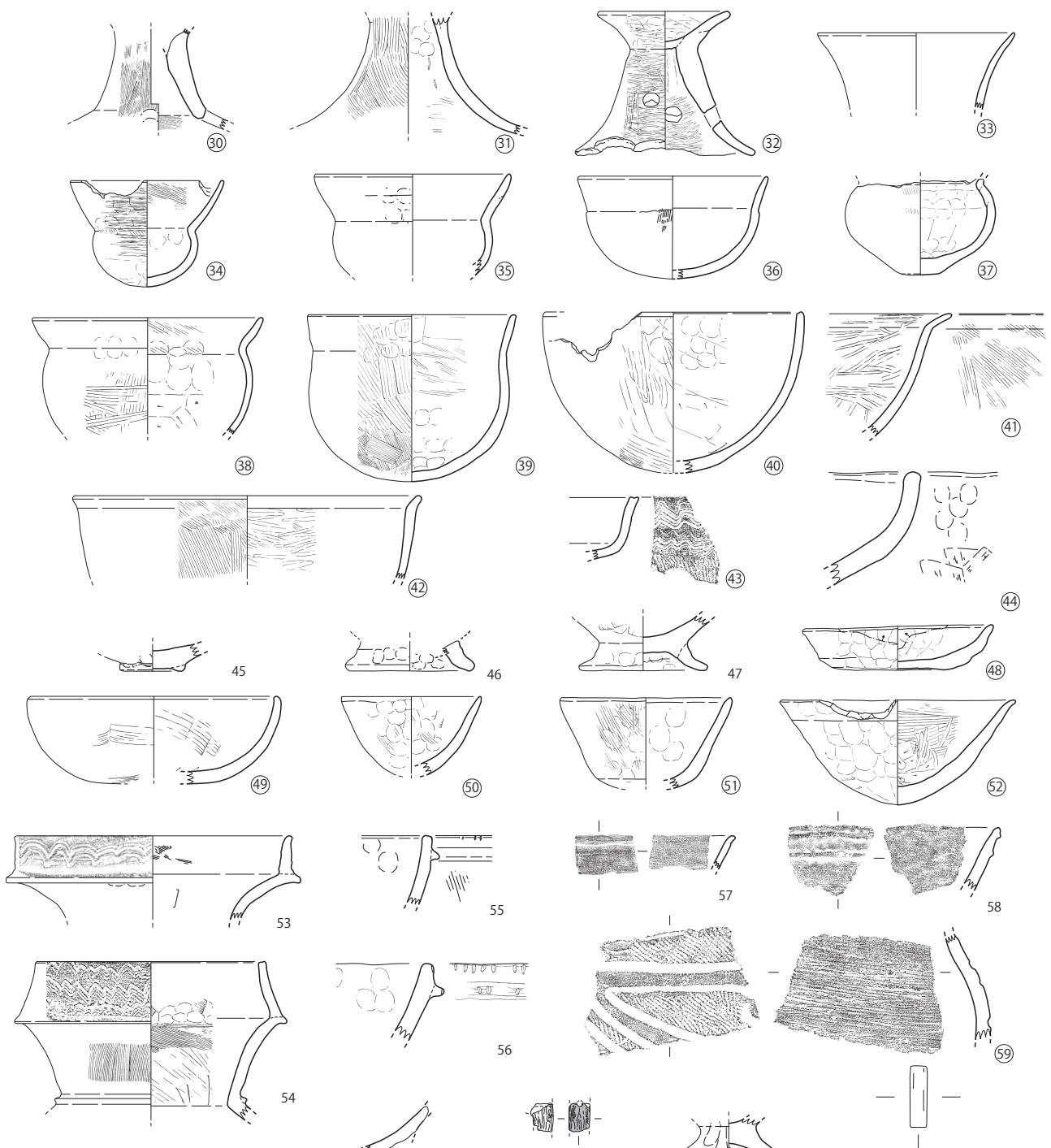
第47図 第30次性格不明遺構遺物実測図1 (1/4)

30SX005

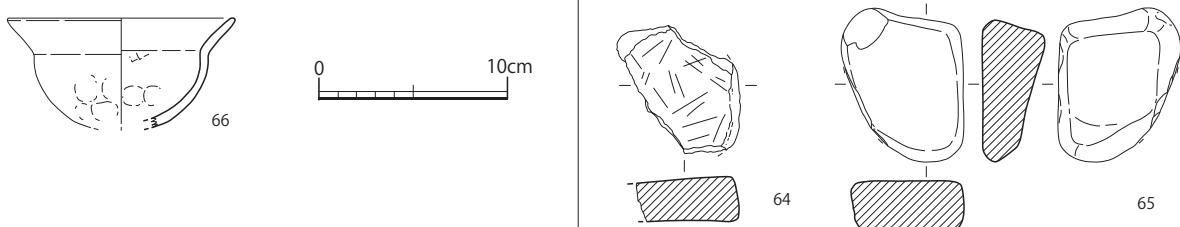


第48図 第30次性格不明遺構遺物実測図2 (1/4)

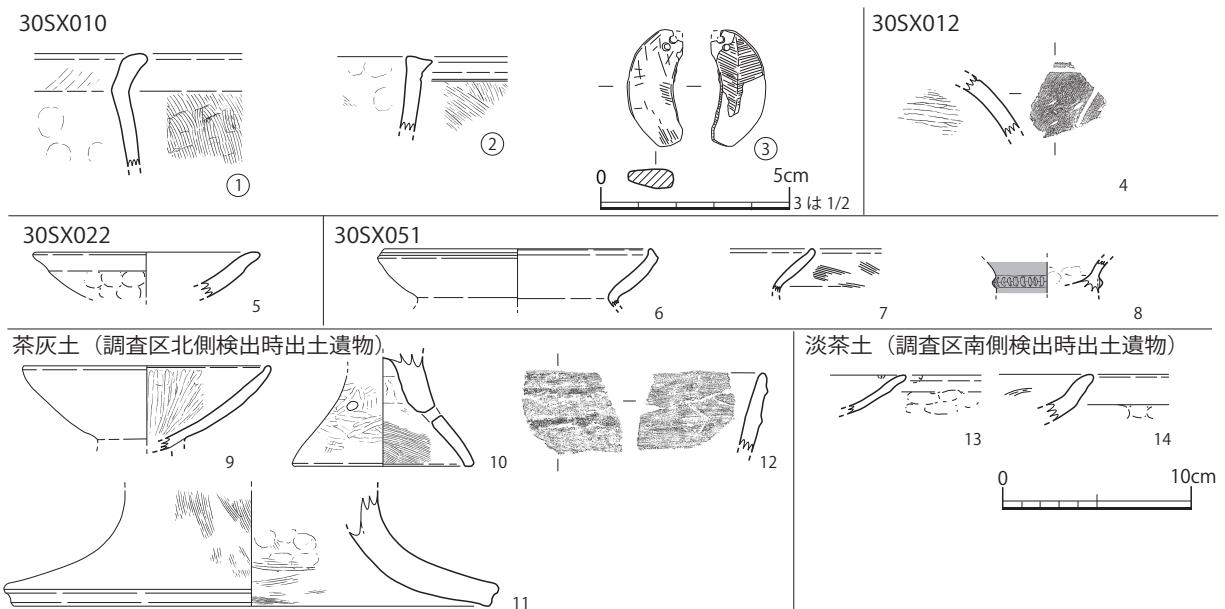
30SX005



30SX015



第49図 第30次性格不明遺構遺物実測図3 (1/1・1/4)



第50図 第30次性格不明遺構・その他の出土遺物実測図4 (1/2・1/4)

②大道遺跡第39次調査

A 調査の概要

第39次調査は、第30次調査に西接した地点にある。調査の結果、調査区中央や西端部で後世の建物基礎による攪乱がみられたが、複数の溝状遺構や土坑などを確認した。また、調査区東側では、北東側に隣接する第33次調査の自然流路跡（33NR001）の延長部（39NR001）を確認した。他の調査地点と同様安定した地山は確認できず、灰色系の砂質土が基盤層となる。なお、本調査に先立って、遺構の有無及び遺構検出標高などの情報をえるため、調査区東側に南北方向にトレンチ1とトレンチ2とする試掘トレンチを設定した。トレンチから複数の遺物が出土しており合わせて報告する。調査区は砂層である基盤層中に砂質を基調とする埋土をもった遺構が展開している点に加えて、攪乱が各所に展開していたこともあり、遺構の検出及び遺物の取り上げには苦慮した。

B 基本層序（第51図）

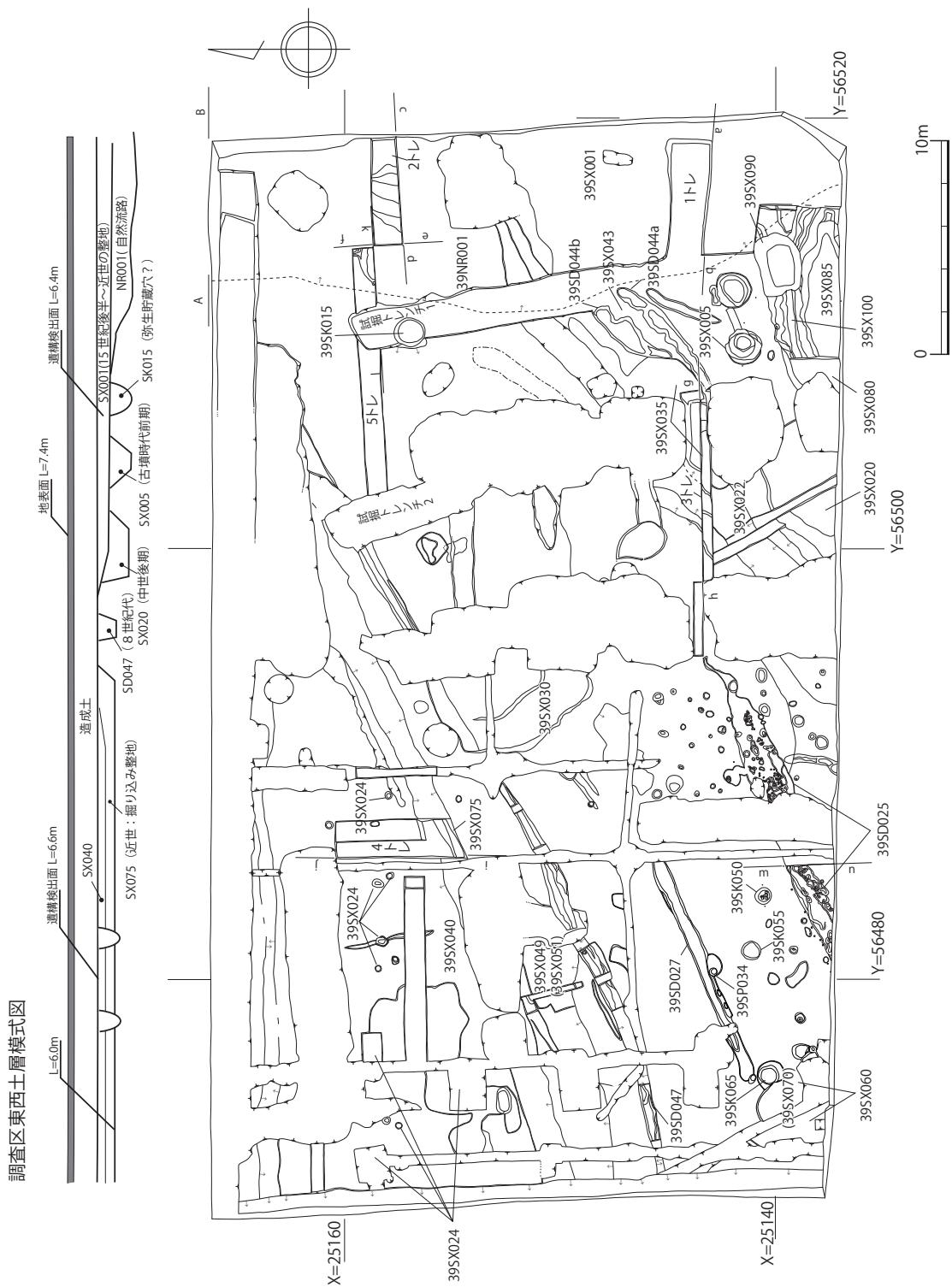
調査直前まで駐車場として利用されていた標高7.4m程の位置にあるアスファルト面を除去すると、0.8mほどの厚さで造成土が堆積していた。調査区西側では、造成土除去後の標高6.6m付近で遺構面を確認することができるが、調査区東側では0.2m程の15世紀～18世紀以後の整地層（39SX001）が堆積する。39SX001を除去すると標高6.4mほどの地点から39NR001とした調査区東側に展開する自然流路跡が確認できる。地山は「黄褐色砂質土」である。以上の堆積関係を模式図化すると第51図「調査区東西土層模式図」のようになる。

C 遺構

土坑（SK）

39SK015（第54図）

調査区東側のG20グリッドで検出された。試掘トレンチ1によって上部が削平されるが、直径1.4mの円形プランで検出面からの最大深度は0.4mを測る。床面はややレンズ状に中央が窪む。弥生時代前期末～中期初頭頃の甕片が出土した。遺構のプランや出土遺物からみて、貯蔵穴の可能性がある。



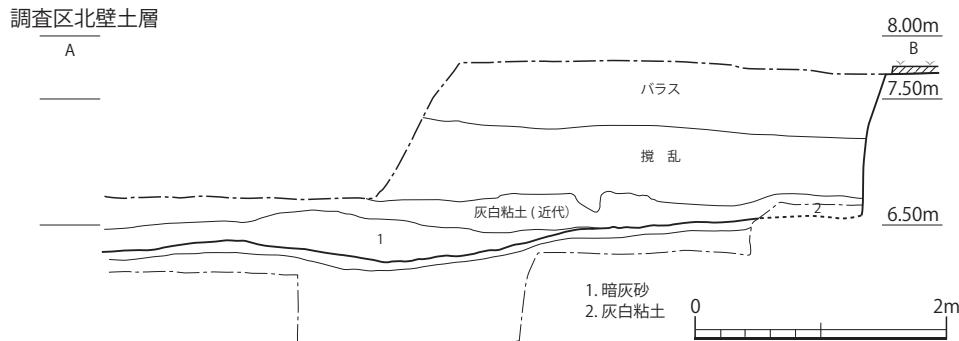
第51図 大道遺跡群第39次全体遺構図（1/300）

39SK050（第54図）

調査区南西部のC14グリッドで検出された。直径0.8mの円形プランで検出面からの最大深度は0.35mを測る。床面直上には拳大の礫が5点置かれていたが土坑の性格は不明である。出土遺物が皆無なため、具体的な時期については不明である。

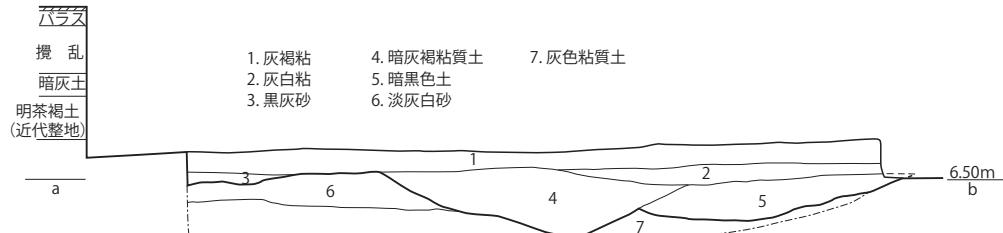
39SK055（第54図）

調査区南西部のC13グリッドで検出された。直径0.9mの円形プランで検出面からの最大深度は0.55mを測る。

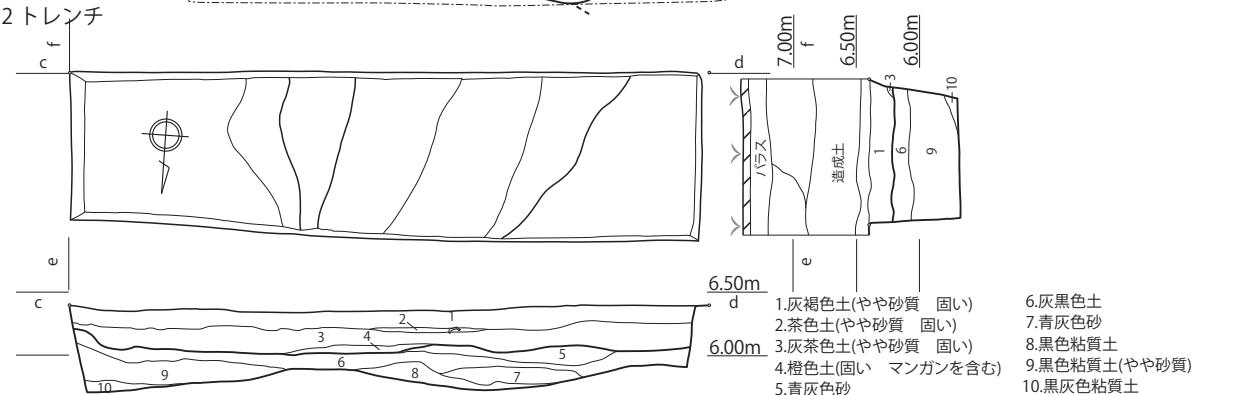


第52図 調査区北壁土層断面実測図 (1/60)

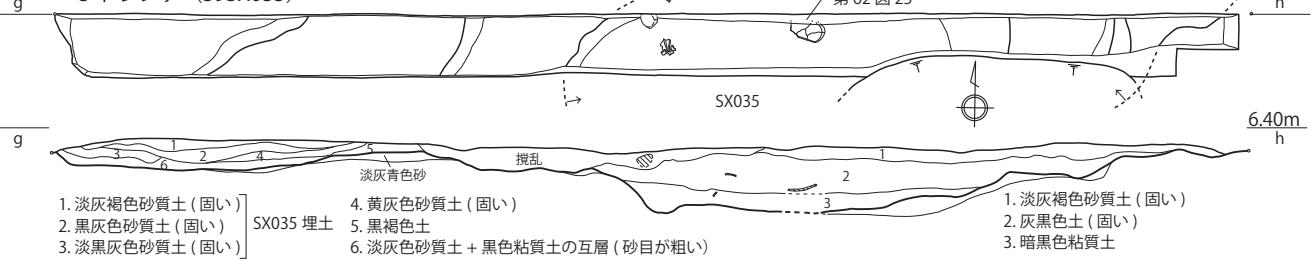
1 トレンチ



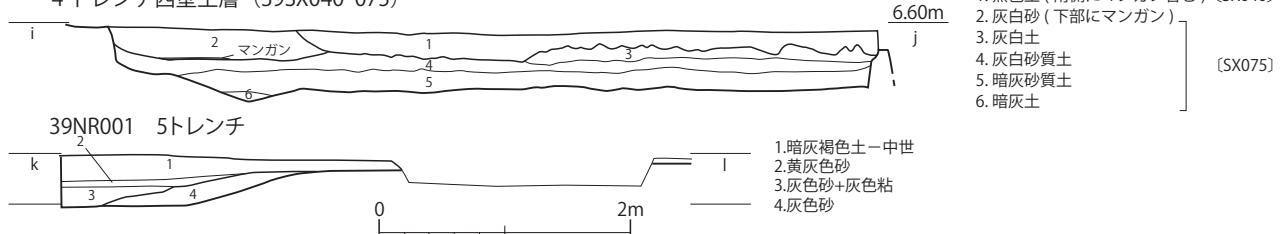
2 トレンチ



3 トレンチ (39SX035)



4 トレンチ西壁土層 (39SX040・075)



第53図 第39次トレンチ遺構実測図 (1/60)

床面はややレンズ状に中央がくぼむ。弥生時代前期後葉頃の甕片などが出土した。遺構のプランや出土遺物からみて、貯蔵穴の可能性がある。

39SK065 (第54図)

調査区南西部のC11グリッドで溜まり状の遺構39SX060を掘削後に確認した。直径0.9mの円形プランで検出面からの最大深度は0.2mを測る非常に浅い遺構である。弥生時代中期の遺物が出土する円形プランの遺構39SX070に切られる。床面はややレンズ状に中央がくぼむ。弥生時代前期頃の甕底部片が出土した。非常に浅

いが遺構のプランや出土遺物からみて、上部が削平された貯蔵穴の可能性がある。

溝跡 (SD)

調査区内では複数の溝跡を検出した。近現代のものも多いが、どの遺構も極めて近似した主軸を指向しており、それぞれの溝跡に時期幅がないように見える。以下では、他の遺構と同様、出土遺物中の最新の遺物から時期を決定したが、複数の時代の遺物も多く含んでおり、溝跡の時期がどの程度まで遡るかは断言しがたい部分もある。

39SD025 (第51・55図)

調査区南西部のB13グリッドから東端のC16グリッドにかけて掘削された東西方向の溝跡である。幅1.2~2.0mを測り、約15.0m分を検出した。東側に向かって浅くなり収束する。溝の底面は凹凸が顕著に見られ、深度は0.06~0.2mと幅がある。

出土遺物は、弥生時代前期の壺片などが出土したが、8世紀中頃~9世紀前葉頃の企救型甕が出土しており、当該期の遺構と考えられる。

39SD027 (第51図)

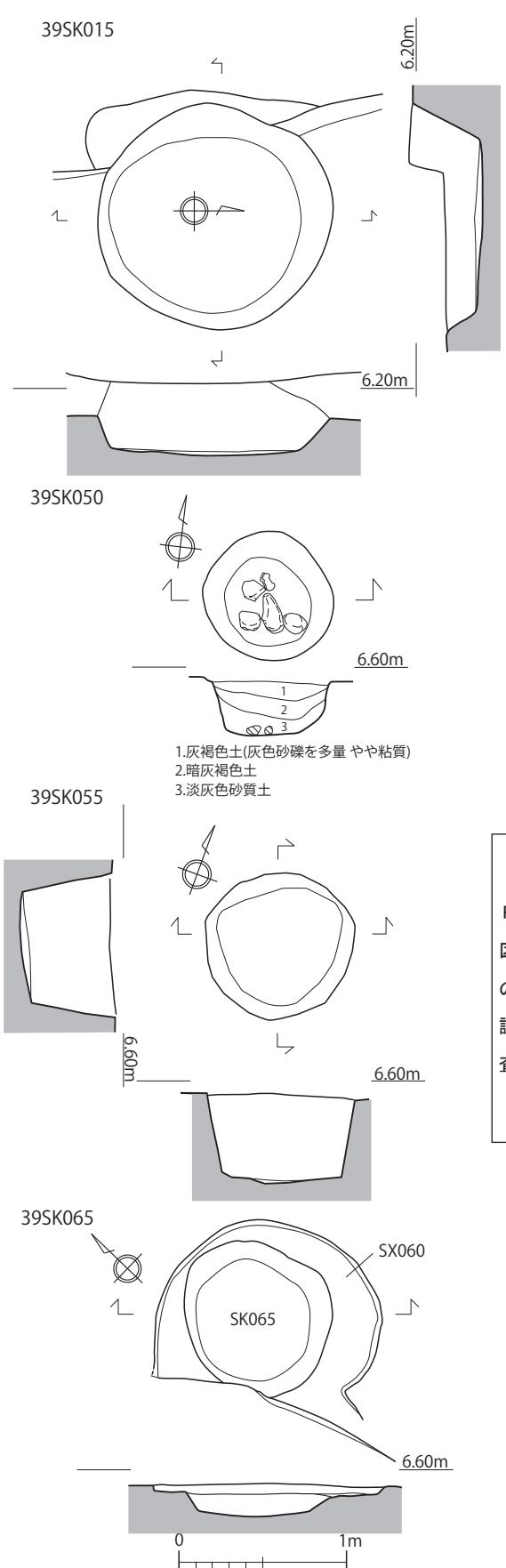
調査区西端のC11グリッドからD14グリッドにかけて斜行する溝跡である。検出面からの最大深度は0.5mである。遺物が小片のため時期が確定できないが、弥生時代もしくは古墳時代の所産である可能性がある。

39SD044 (第51図)

調査区東側のC19グリッドからE20グリッドにかけて斜行する溝跡である。39SX043とした不定形なプランを掘削後に同一方向の溝跡が2条確認されたため、それぞれ39SD044a、39SD044bとして掘削を行った。39SD044aは幅0.5~0.8m、検出面からの最大深度は約0.3mを測り、東側に向かって浅くなり収束する。39SD044bは幅0.6~1.0m、検出面からの最大深度は約0.3m、39SD044aと同様、東側に向かって浅くなり収束する。埋土はともに黒色土であり、元来は一つの溝であった可能性が高い。なお、39SD044aからは黒色土器B類椀や、土師器蓋など8世紀~9世紀代の遺物が、39SD044bからは古代の土師器類と共に同安窯系青磁皿が出土しており、遺構の埋没時期は12世紀代と考えられる。

39SD047 (第51・55図)

調査区西端のD10グリッドから中央付近のH19グリッドにかけて調査区を斜行する溝跡である。西側の一部が近現代の配管と重複するが、第30次調査の30SD052と同一の溝となる可能性がある。幅0.4~0.5m、検出面からの最大深度は0.3mを測り、30SD052を加えるとやや蛇行するものの直線的なプランを呈し、



第54図 第39次土坑遺構実測図 (1/40)

テラスをもちながら台形状に掘削されている。

弥生時代前期の壺や甕片が出土しているが、8世紀後半～9世紀代の土師器坏片が出土しており、また、30SD052も同様の古代の土師器片が出土していることからも当該期の遺構と考えられる。

性格不明遺構 (SX)

39SX005 (第56図)

調査区東端部のC20グリッドで検出された。南北1.7m、東西1.6mを測る平面円形プランの遺構である。

検出面からの最大深度は0.5mを測る。断面の見通し図上では段掘り状に垂直に掘削したようにみえるが、土層図に示すように緩い「V」字型の断面形状をもつ。第5層以下は滞水状態を示す堆積環境であり、井戸跡の可能性も考えられるが、他の調査地点で確認される井戸跡とは形状が異なっており、現状では性格不明遺構として報告する。なお、第1層は第2層以下と不整合をなしており、掘り返しないしは別遺構である可能性がある。

出土遺物は第2～5層に相当する地点から古墳時代前期の甕や小型丸底壺が出土しており、当該期の遺構と考えられる。

39SX020 (第57図)

調査区中央南端部のB17グリッドで検出された。遺構の南側は調査区外へ延び、その他の三方は攪乱によって削平される。南北 $3.0 + \alpha$ m、東西 $3.7 + \alpha$ mを測る不定形プランの遺構で、検出面からの最大深度は0.7mである。39SX001灰褐色土とした中世の整地層除去後に検出した。埋土の大部分が暗黒色粘質土とした層であり、水溜めなどの機能をもった遺構の可能性がある。

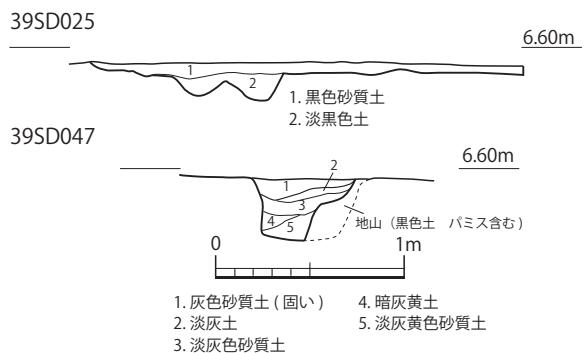
出土遺物は企救型甕片や古墳時代前期の土師器片、弥生土器、縄文土器など多様であるが、粘質土中から須恵質土器甕片が出土しており、13～14世紀頃に埋没した遺構と考えられる。

39SX030 (第51図)

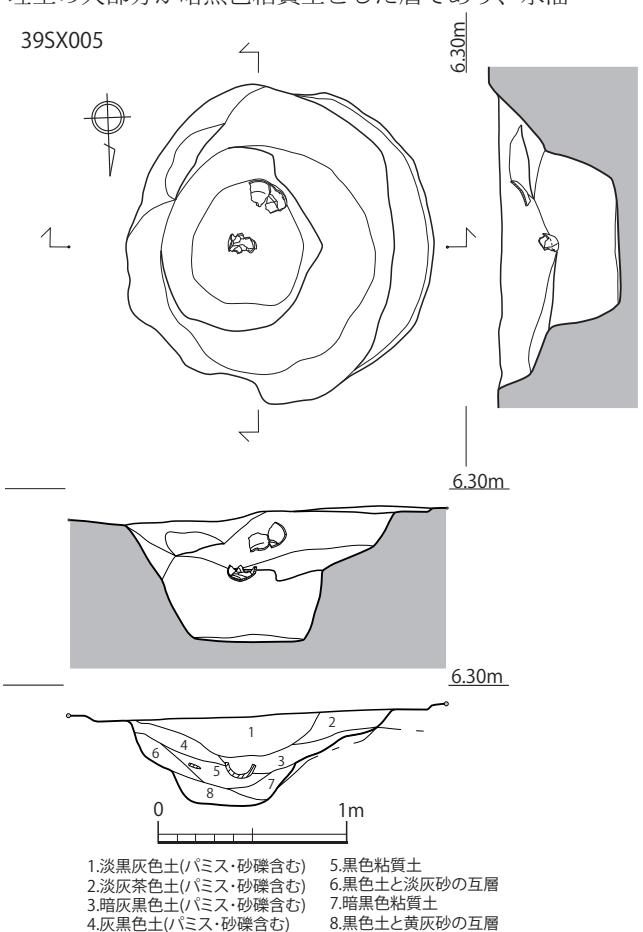
調査区中央のE16グリッドで検出された。南北0.5m、東西0.7mを測る不定形プランの遺構である。検出面からの最大深度は0.2mと浅く、埋土も「淡灰色粘質土」とした単一層である。埋土中からは、弥生土器類や須恵質土器甕、龍泉窯系青磁片、青花片、土師器坏Bn、中国錢などが出土した。近代の国産磁器が1点含まれるが、遺構と重複する攪乱からの混入である可能性が高いと判断され、16世紀代の遺構と考えられる。

39SX035 (第53図)

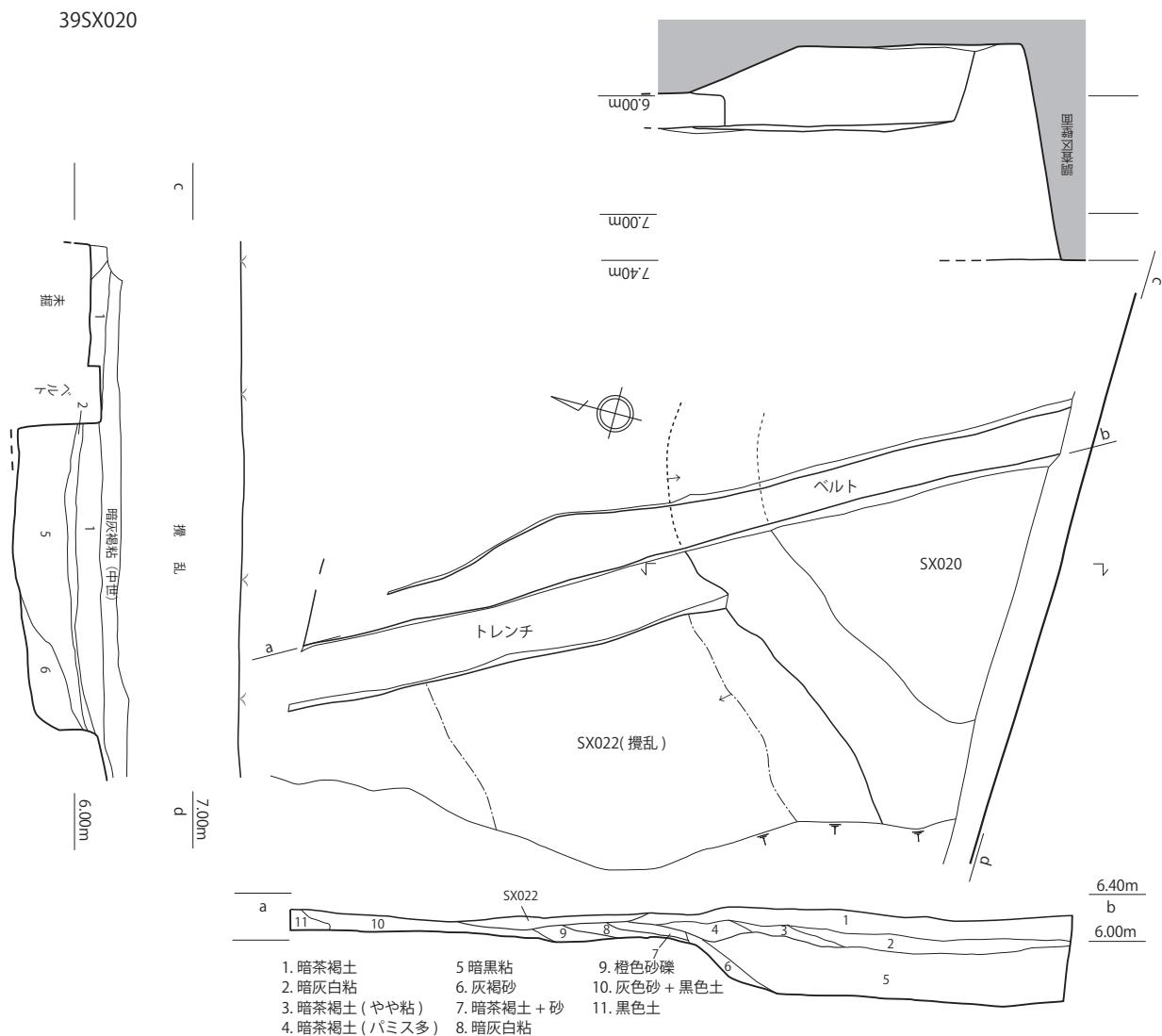
調査区中央南側のD18グリッドの3トレンチ部分で検出された。四方が攪乱により削平されるため遺構の形状に不明な点が多いが、南北 $1.1 + \alpha$ m、東西4.5mを測る不定形プランの遺構である。検出面からの最大深度は0.5mを測る。古墳時代前期の土師器甕の体部片が出土しており、当該期の遺構と考えられる。



第55図 第39次溝跡土層断面実測図 (1/40)



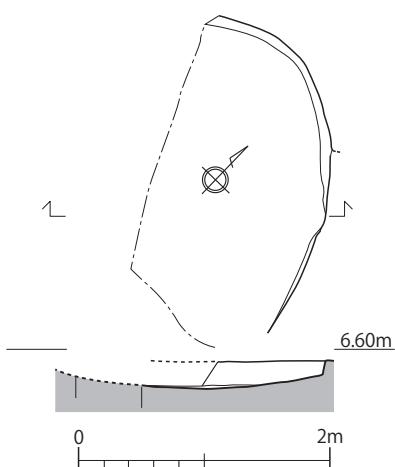
第56図 39SX005遺構実測図 (1/40)



第57図 39SX020遺構実測図 (1/60)

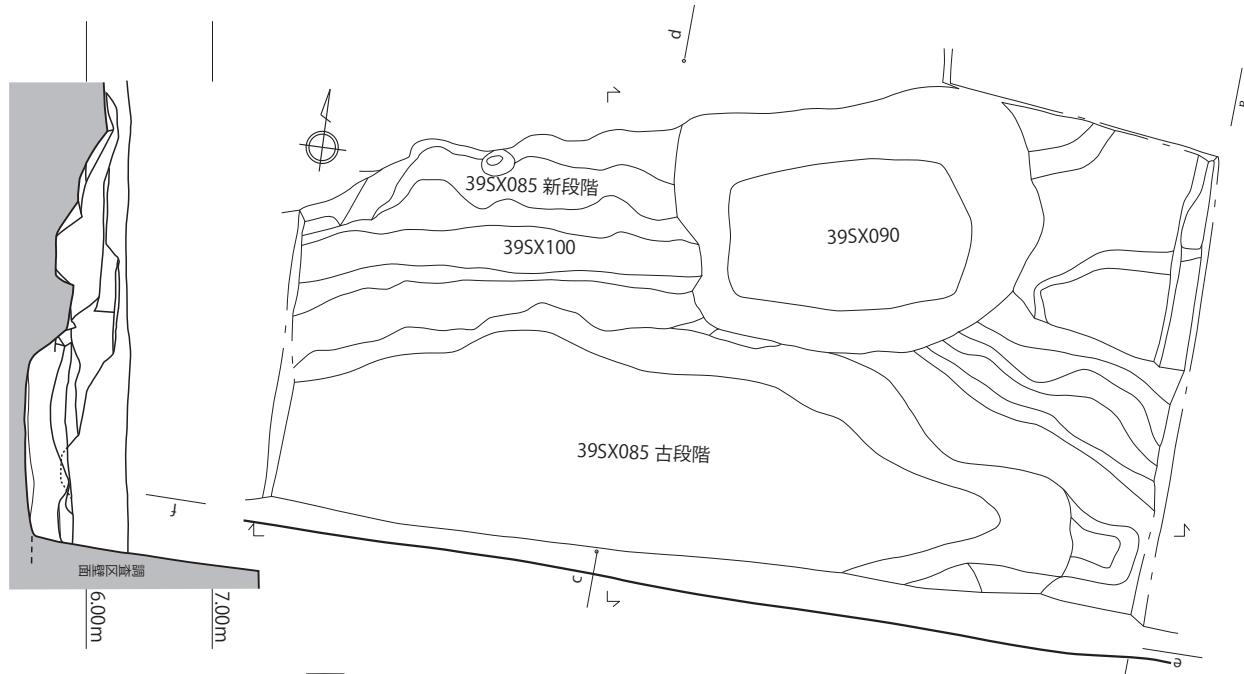
39SX040・075 (第51・53図)

調査区北西部のG1グリッドからG13グリッドで検出された。近世の整地層と考えられる遺構である。両遺構の堆積状況を確認するために設定した4トレンチ(第53図)の所見から、39SX040は39SX075の上部に0.2mの厚さで堆積する黒色土の層群であり、39SX075はこの下部に展開する0.5~0.6mの厚さで堆積する層と考えられる。整地土は地山と考えている砂質層を掘り込んで形成されていることから、大規模な掘り込みを伴う整地と考えられる。出土遺物は、縄文土器や弥生土器下城式甕、古墳時代前期の土師器、火打石と考えられるチャートや石英などの石材、18世紀代の肥前系染付類が出土しており、18世紀後半頃に形成された整地層と考えられる。なお、工期の関係上、トレンチ掘削による整地の時期の確認にとどめ、遺構の全掘は行っていない。

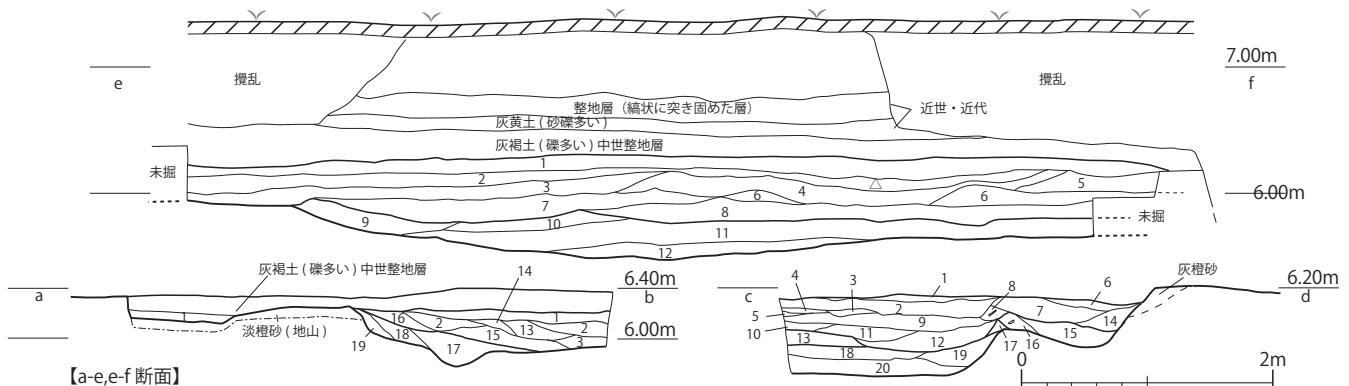
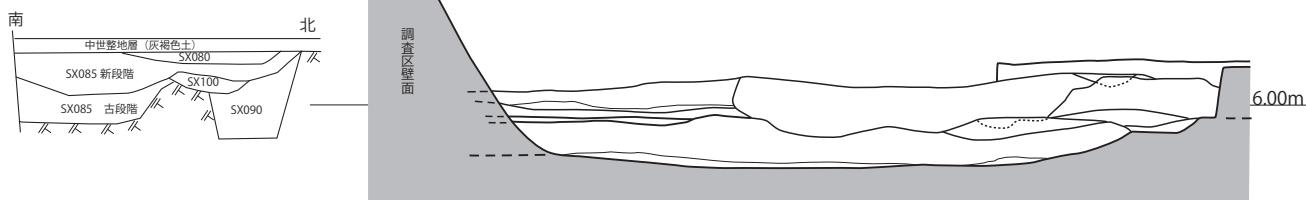
39SX070

第58図 39SX070遺構実測図 (1/60)

39SX085・100



【SX085周辺東西土層模式図】



第59図 39SX085・39SX100遺構実測図 (1/60)

39SX070 (第58図)

調査区南西部のB11グリッドで検出された。西側が現代の配管によって削平されている。長軸2.6m、短軸1.4+ α mを測る平面不定形プランの遺構である。検出面からの最大深度は0.2mを測る。出土遺物から弥生時代前期末～中期初頭頃の遺構と考えられる。

39SX080・085・090・100（第38・59図）

検出時の状況：以下の39SX080・085・090・100は、重複した大型遺構群である。これらの遺構群は類似した埋土が複雑に切り合いをもち、遺構プランの認定に非常に苦慮した。また東西が攪乱によって、南側は調査区外へ延びるため、遺構の全容がつかみにくい。ここでは各遺構の検出過程を述べる。

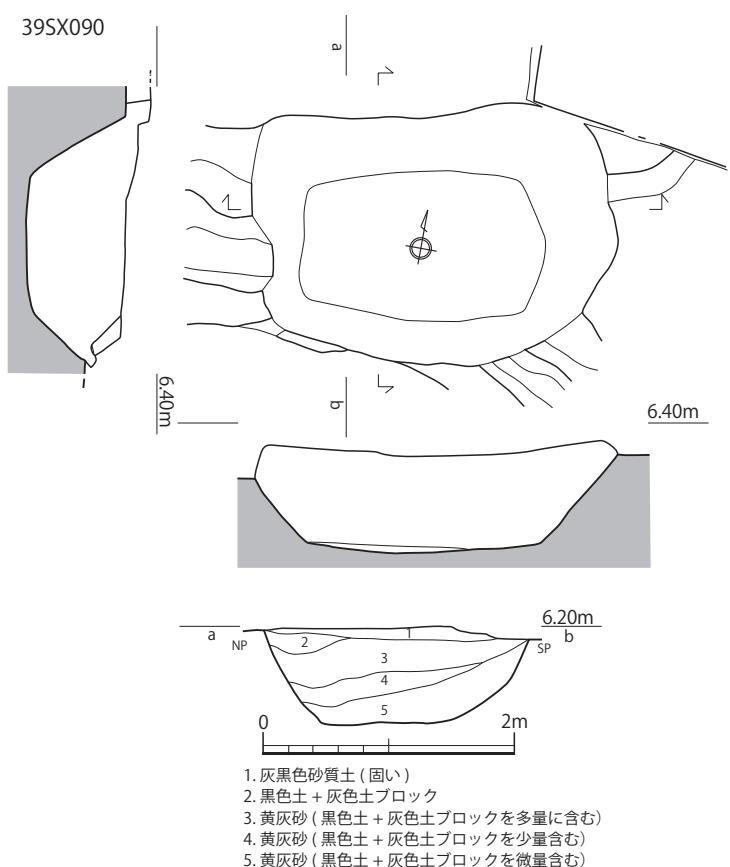
遺構群の検出地点は、中世後期の整地層が全面に覆っていた部分であり、中世の整地層除去後に検出したものである。遺構検出時は、39SX080とした土坑状の長楕円形プランの遺構が39SX085とした大型の不定形なプランの遺構を掘り込んだ状態で検出できた。39SX080は長軸 $2.8 + \alpha$ m、短軸 $1.2 + \alpha$ m、深さ0.25mを測る浅いもので、遺構というよりは39SX085の最終埋没土の単位であったと考えられる。39SX080の除去後、39SX085を面的に掘り下げたが、遺物の取り上げに際しては、「39SX085 上層」→「39SX085 暗灰粘」→「39SX085 暗灰土」→「39SX085 灰褐色土」の順に取り上げながら掘り下げを行った。中央に設置したベルト中の遺物群は「SX085 1層目」として遺物を取り上げた。「39SX085 1層目」は「39SX085 上層～灰褐色土」までの遺物を含む。これらの層を便宜的に「39SX085 新段階」の遺構とした。この遺構の掘削時点で、39SX085の北側より39SX100とした弓なりに湾曲する溝状の遺構を確認した。この39SX100は39SX090とした隅丸方形プランの遺構に切られる遺構である。39SX090は39SX085新段階の遺構群の除去後にプランが明確に判明した遺構で、39SX085新段階より古く、39SX100より新しい遺構である。39SX100及び39SX090除去後に残された部分が「39SX085 古段階」の遺構である。「39SX085 下層」として遺物を取り上げた部分にあたる。以上の過程を模式図化したものが第59図「39SX085周辺東西土層模式図」である。

これらの遺構群の性格は不明であるが、39NR001とした流路に近接した地点に形成された遺構であり、水場に関連する何らかの機能をもった遺構群と考えられる。

39SX085新段階（第59図）

調査区南東端部のB19グリッドで検出された。新段階の図面は記録できていないため推測を含むが、長軸 $7.0 + \alpha$ m、短軸 $3.5 + \alpha$ mを測る不定形プランの遺構である。検出面からの最大深度は0.5mを測る。39SX085古段階の遺構が埋没後、同一地点を再掘削したようにみえるが、39SX085古段階のプランを正確に踏襲しているかは不明であり、同一の性格をもった遺構であるかは判断しがたい。砂質を含んだ層が堆積土の大部分であるが、最下層に相当する第59図e-f土層の7・8層、c-d土層の10・11層は粘質土とともに緑泥片岩の破片を多く含んだ特徴的な層である。

出土遺物は比較的遺存率の良い古墳時代前期の土師器類が多く出土したが、7～8世紀代のものと考えられる須恵器長頸壺や、9世紀後半～末頃の土師器椀の高台部分、瓦器小皿など古代～中世前期の遺物が出土したことから、12世紀後半を下限とする時期に埋没した遺構と考えられる。



第60図 39SX090遺構実測図（1/60）

39SX085古段階（第59図）

調査区南東端部のB19グリッドで検出された。長軸 $6.5+\alpha$ m、短軸 $3.0+\alpha$ mの平面長楕円形プランを呈するようであるが全容は不明である。東端部はすぼまって収束する。検出面からの最大深度は0.8mを測る。最下層には粗砂を含んだ層が堆積しており、流水していた可能性がある。新段階と比べて遺物の量が圧倒的に少なく、弥生時代前期の甕と縄文土器がそれぞれ1点出土したのみであった。

39SX090（第59・60図）

調査区南東端部のC21グリッドで検出された。長軸2.9m、短軸2.0mを測る平面隅丸方形プランの遺構である。検出面からの最大深度は0.85mを測る。遺構はブロック土を含んだ黄灰色砂質土によって埋没しており、人為的に埋められた遺構と考えられる。

出土遺物は古墳時代前期の土師器甕の出土しており当該期に埋没した遺構と考えられる。

39SX100（第59図）

調査区南東端部のB20グリッドで検出された39SX090に切られる遺構である。長軸 $7.0+\alpha$ m、短軸1.0m程の弓なりに湾曲する溝状の遺構である。検出面からの最大深度は0.55mを測る。出土遺物は古墳時代前期の土師器群が多く出土しており、当該期に埋没した遺構と考えられる。

自然流路跡・整地層

39NR001・39SX001（第51・52・53図）

調査区中央から東寄り部分で確認された自然流路跡（39NR001）と、これを埋めて整地する中世後期段階の整地層（39SX001）の概要を述べる。第51図の調査区東西土層模式図に示すように、39SX001は調査区の中央付近から東側にかけて厚さ0.2m程の中近世の遺物を含んだ整地層である。「39SX001暗灰褐色土・黄色土」は中世5期の備前焼擂鉢を下限とする遺物群が、「39SX001灰褐色土」は肥前系磁器を下限とする遺物群が出土しており、中世から最終的には近世段階にかけて整地を繰り返したと考えられる。自然流路跡である「39NR001灰青色砂」出土遺物は、弥生時代後期～古墳時代前期の土器類のほか、古墳時代～古代の須恵器甕片を含んでおり、自然流路の埋没が古代を起点に始まった可能性が考えられる。なお、この時点では人為的に埋めたような堆積状況は確認できることから埋没の開始期として位置づけることができる。東端の39NR001上に設置した1トレンチ、2トレンチ及びこれらの北側延長部にあたる北壁土層では、それぞれ標高6.0m、5.7m、6.3mを底面とする流路の一部が確認できる（1トレンチ第4・5層、2トレンチ第5～10層、調査区北壁土層第1層が自然流路跡の埋土）。流路跡の西端部は、5トレンチとして設定した部分（第53図）において、試掘第1トレンチにほぼ重複する地点から調査区東側へ向かって傾斜する落ちの一部が確認されている。これらの所見より、39NR001は東西 $8.0+\alpha$ m、深さ $0.8+\alpha$ mの規模であり（第52図）、北東15.5mの地点に所在する第33次調査の自然流路跡に接続する可能性が高いと考えられる。

D 出土遺物

出土遺物の概要

今回の調査では、コンテナ28箱の遺物が出土した。内訳は古墳時代前期の土師器類が主体を占めるが、中世～近世にかけての国内外の陶磁器や、弥生土器、8～9世紀の土器類、弥生時代の石器類も少量ながら出土した。また、F区中では最多となる縄文土器片が出土した。

第61図～第66図は、主要遺構に絞って遺構の時期を示すものや特殊な遺物を中心に掲載している。また、古代以降の攪乱39SX024や39SX022出土などの弥生土器類や第66図に示した縄文土器類は遺構の帰属時期とは無関係なものであるが、遺跡の存続時期を示す遺物として図示している。遺物の種類・名称・法量などについては、遺物観察表（付属DVD表8 参照）にて報告している。また全遺構の出土遺物については、遺構出土遺物一覧表（表7・8参照）に掲載している。ここでは、特に重要と思われる遺物の概要を述べる。

39SK055（第61図3）

3は弥生土器甕である。口縁端部は左右に張り出しており一条突帯とともに刻目を施す。内外面には縦方向の丁寧なミガキ調整を施す。口縁端部の属性から弥生時代前期末～中期初頭頃の所産と考えられる。

39SD025（第61図7）

7は弥生土器壺である。頸部内面に断面三角形の突帯をもつ。内外面ともに横方向のミガキ調整を施し、頸部外面には沈線が巡る。豊後中部では主体を占める型式ではなく、客体的な個体である。弥生時代前期末頃の所産と考えられる。

39SD044（第61図9・11・12）

9は黒色土器B類椀である。断面三角形の高台がつく。内外面はミガキ調整が確認できる。大道遺跡群では黒色土器B類は極少量しか出土しない。11は金山産安山岩を用いた石匙状の製品である。12は鉄滓である。25.5gと大きさのわりに軽い。

39SD047（第61図14・15）

14は弥生土器壺の口縁部である。外面には3条の沈線が巡り、外面には縦方向の、内面には横方向のミガキ調整を施す。弥生時代前期末頃の所産と考えられる。15は白みがかった淡茶色の色調を呈す土師器坏aで、底部の立ち上がり付近にやや厚みをもつ。こうした特徴は8世紀後半～9世紀前葉頃の製品にみられる。

39SX020（第61図19）

19は須恵質土器甕の体部片とした遺物である。外面には格子目タタキ調整、内面には当具痕の上から粗いハケ目調整を施す。暗灰黒色を呈し、焼成はやや瓦質に近い。

39SX030（第61図23・24）

23は黄白色を呈す砂岩製の扁平片刃石斧である。24は石英製の火打石の可能性のある石材である。

39SX040（第63図29・30・32～36）

29は緑釉陶器壺×瓶である。30は産地不明の国産陶器擂鉢で胎土に長石を多く含む。32～34は火打石と考えられる石材で、32・33はチャート、34～36は石英である。

39SX075（第63図42）

42は白磁のレンゲである。型作り成形されている。

39SX080（第63図43）

43はミニチュアの弥生土器複合口縁壺である。

39SX085暗灰色粘（第63図48）

48は須恵器長頸壺である。頸基部に突帯をもつもので、外面にはヘラ記号らしき線刻がある。

この種の須恵器は7世紀中葉頃～末頃にかけて瀬戸内～畿内に分布するものである。

39SX085暗灰色土（第63図51・52）

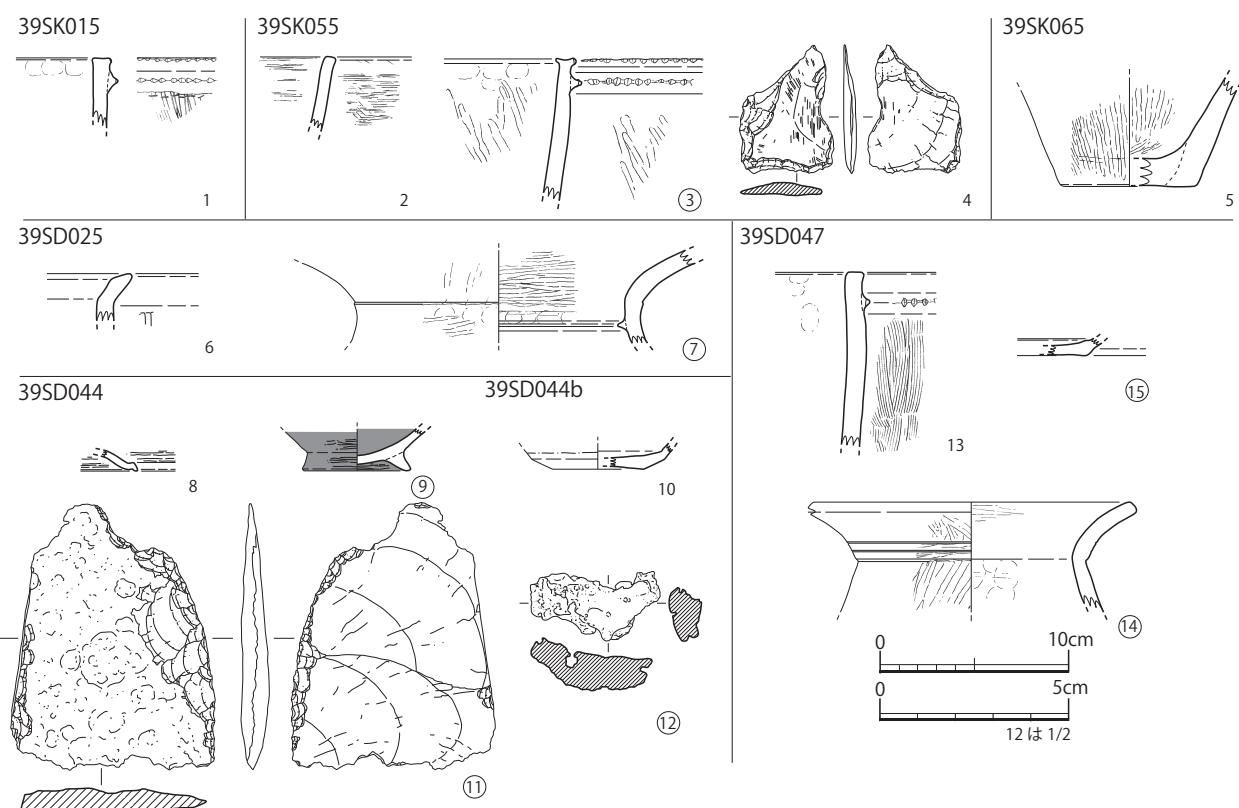
51は弥生土器前期頃の甕底部で中央に焼成前の穿孔がみられる。52は弥生土器壺である。内外面に横方向のミガキ調整を施し頸部外面に凹線を施す。瀬戸内系の土器である。

39SX085 1層目（第63図57・58・61・65・第64図66・68）

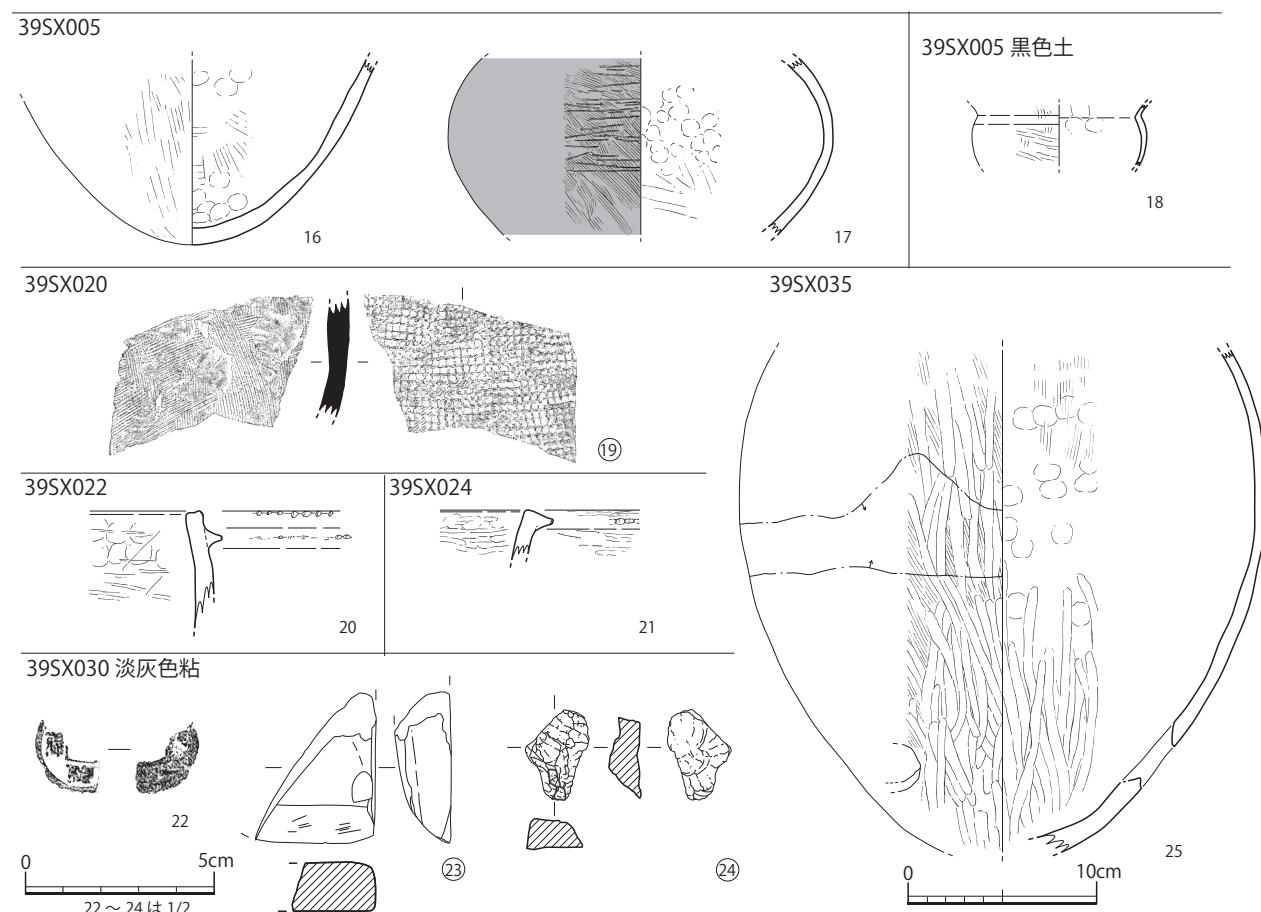
57は瓦器小皿である。灰白色を呈し、やや焼成が甘い。内面立ち上がり部に段をもつ。摩滅のためミガキ調整の有無は確認できない。58は土師器椀の高台部である。高めの高台をもつ椀は10世紀代にみられるものである。61は吉備系の甕を模倣したと考えられる土師器甕である。摩滅のため調整不明瞭であるが、外面にはタタキ痕らしき調整があり、体部内面には横方向のケズリ調整を施す。器壁は厚い。65は弥生土器甕の底部で中央に焼成前の穿孔がみられる。66は弥生土器壺の底部である。弥生時代前期のものと考えられ、底部は上げ底状になる。68はいわゆる縄文系の磨製石斧である。安山岩製で暗灰緑色を呈す。表面には敲打痕が明瞭に残る。

39SX085灰褐色土（東）（第64図77）

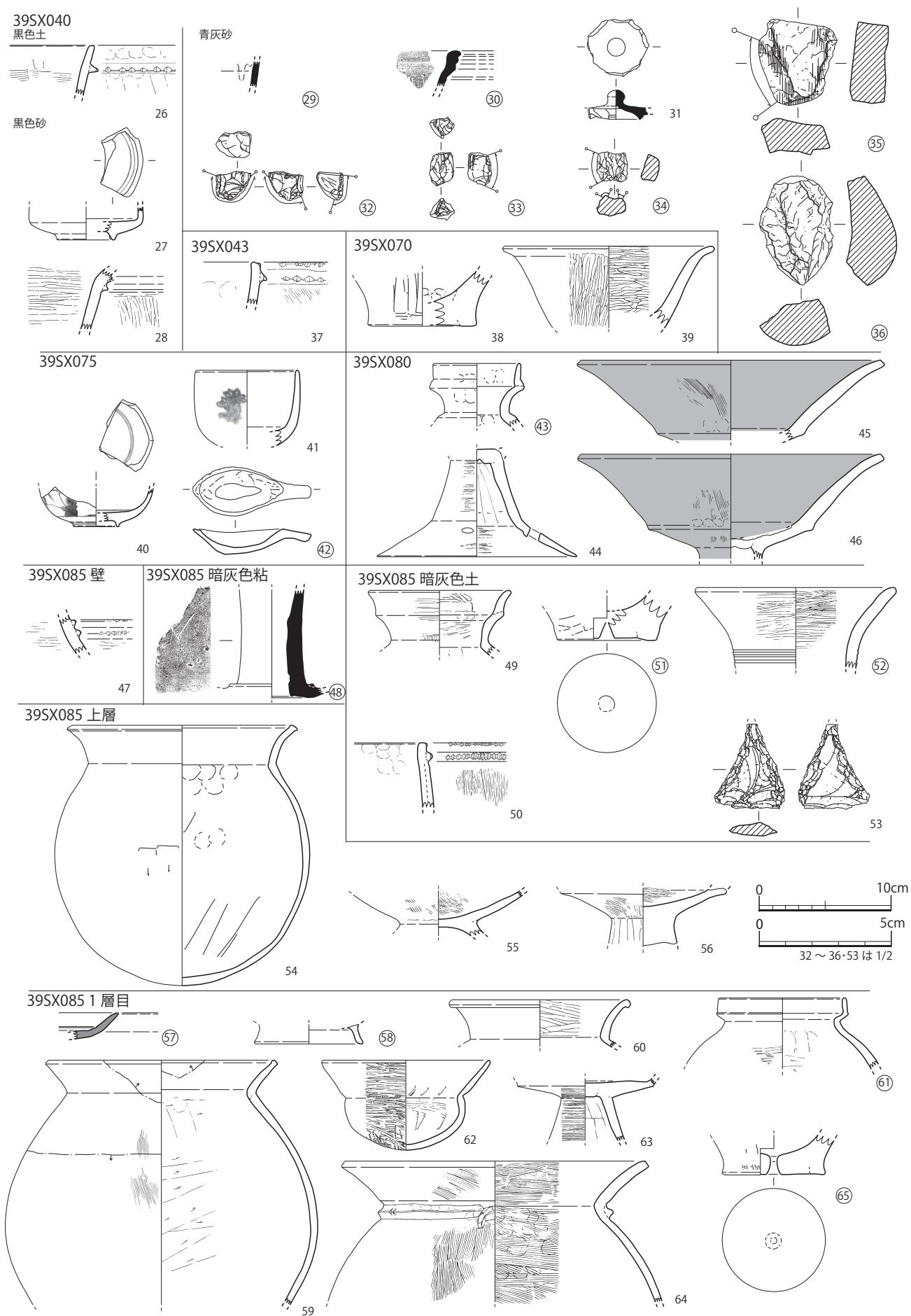
77は緑泥片岩製の板状石材である。下部に研磨された部位があり砥石などとして使用された可能性がある。



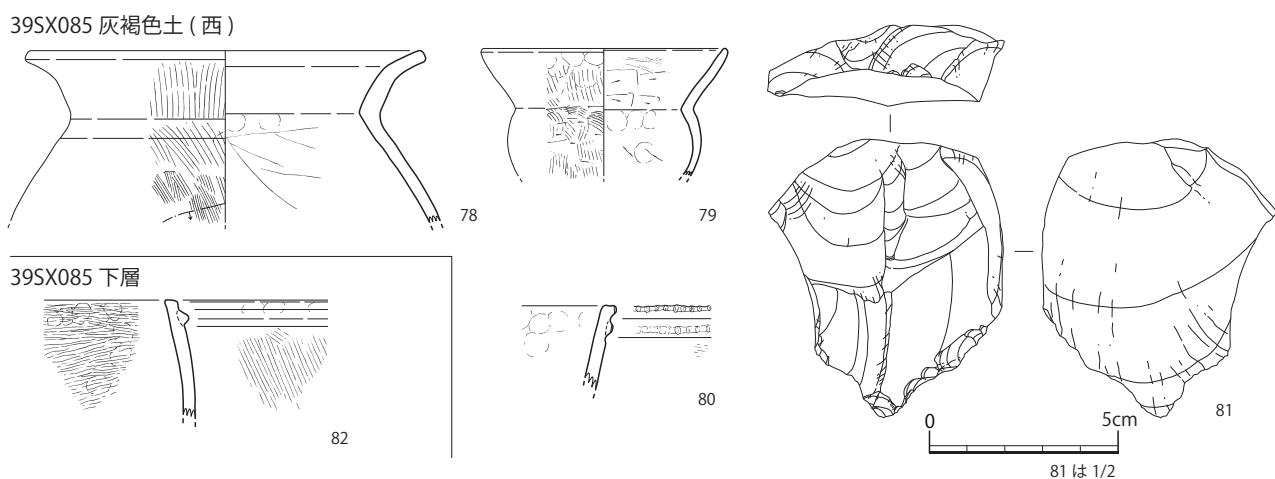
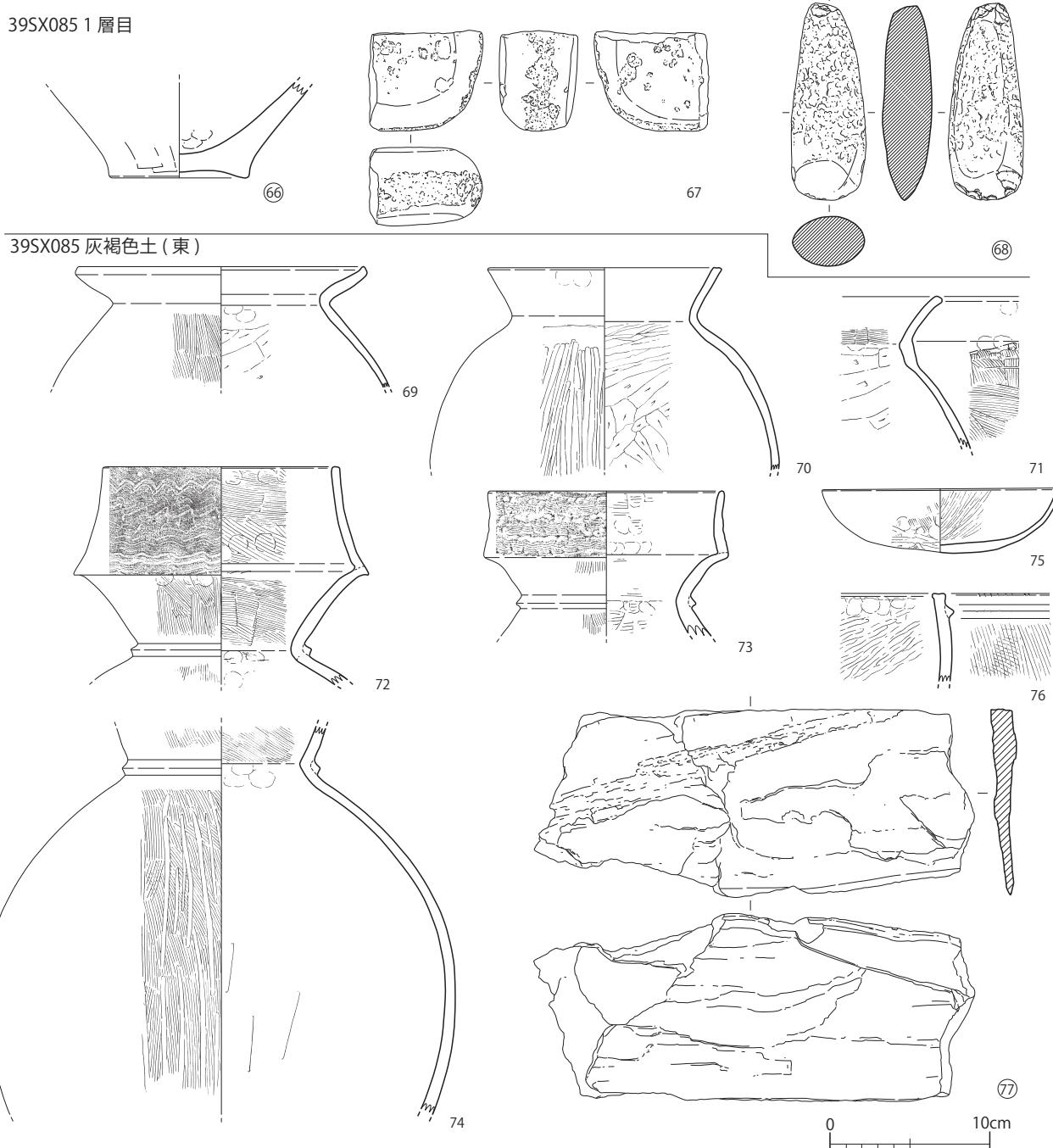
第61図 第39次土坑・溝跡出土遺物実測図 (1/2・1/4)



第62図 第39次性格不明遺構出土遺物実測図1 (1/2・1/4)



第63図 第39次性格不明遺構出土遺物実測図2 (1/2・1/4)



第64図 第39次性格不明遺構出土遺物実測図3 (1/4)

39SX090（第65図86）

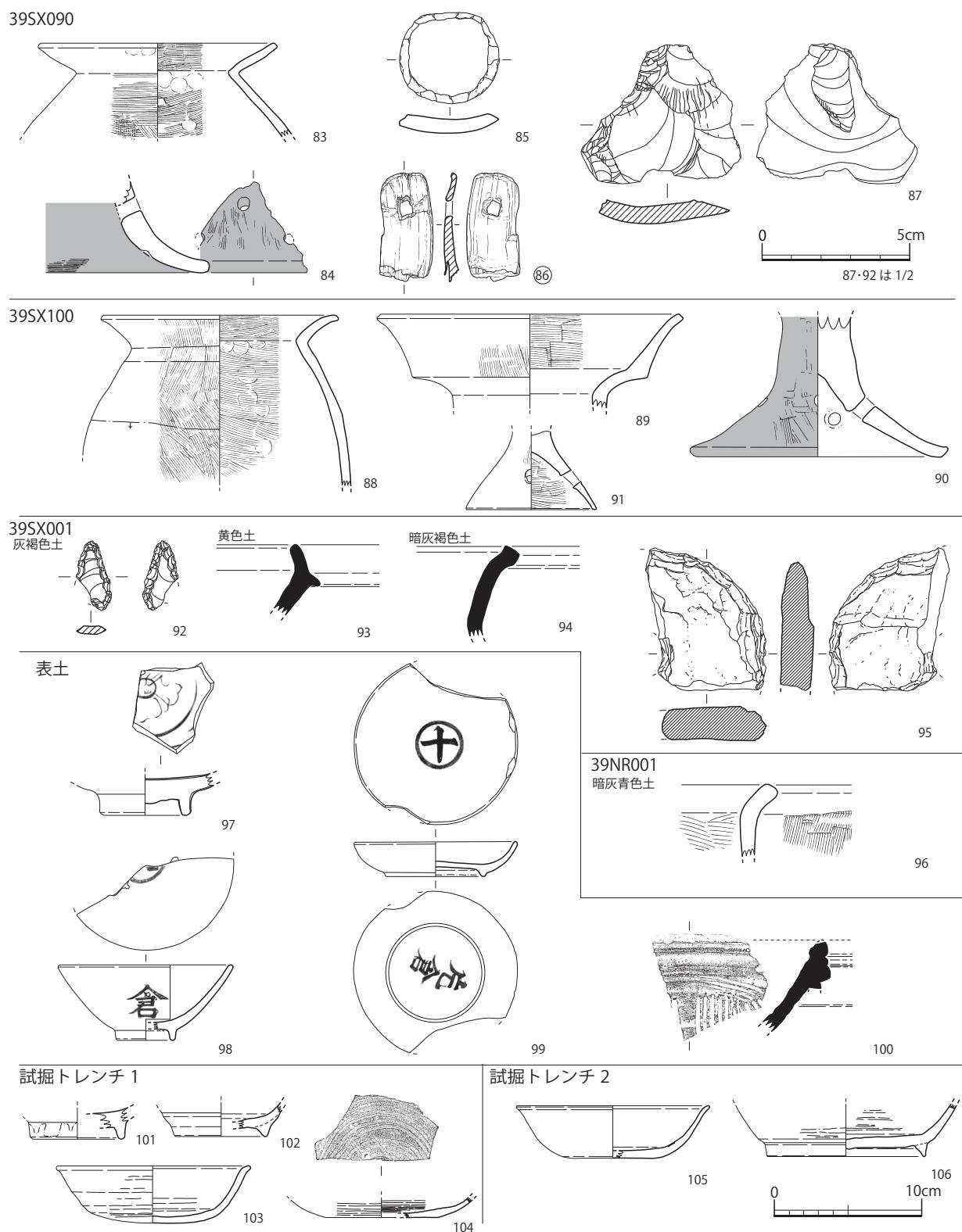
86は木製品である。案脚部の部材の可能性がある。

縄文土器概観（第66図）

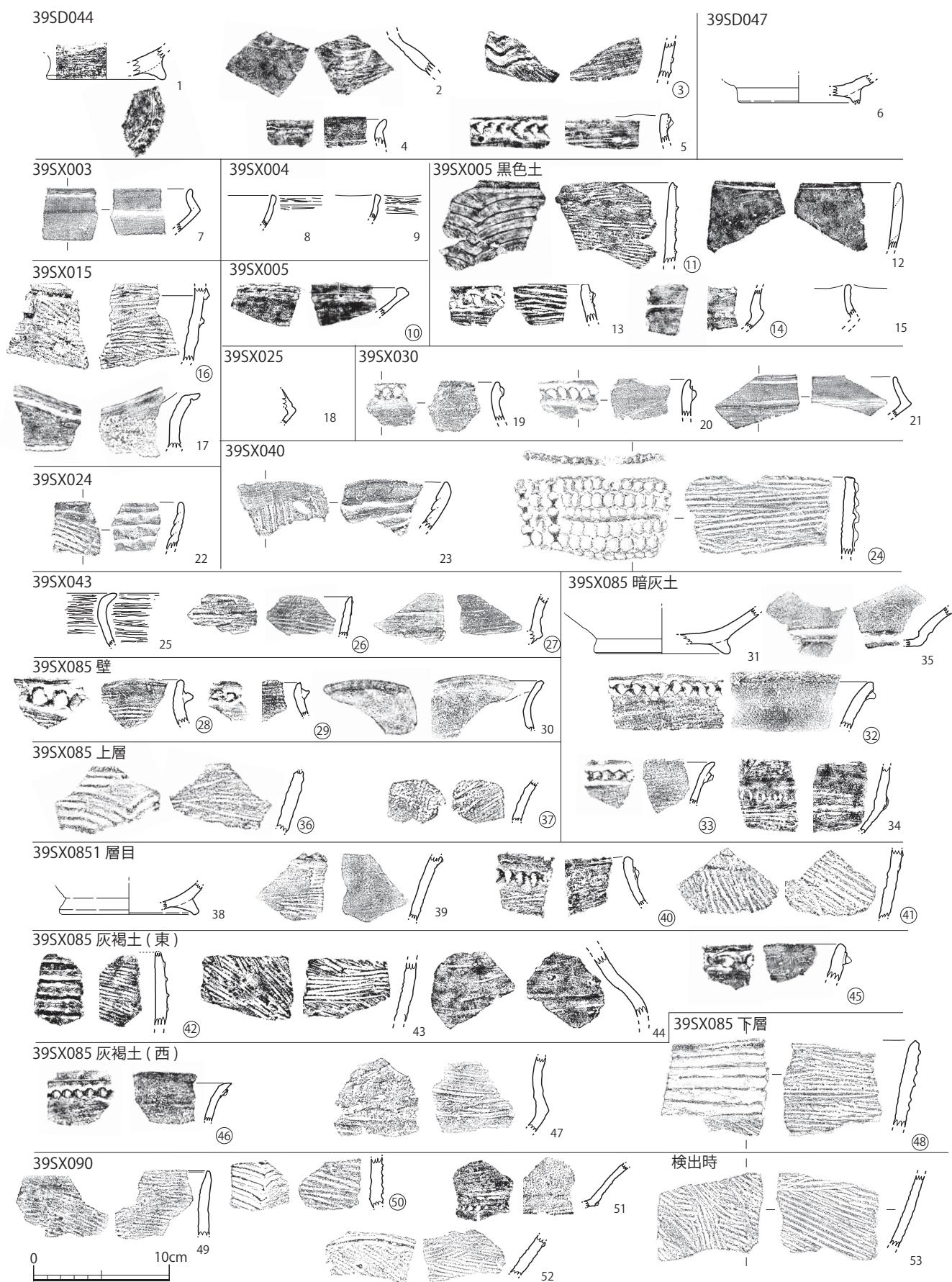
最後に、各遺構より出土した縄文土器群について概観しておく、縄文土器は全て後世の遺構へ混入して出土しており、具体的な遺構は確認できないが、轟B式（3・11・16・26・36・41・42・48・50）、上菅生B式（10）、下黒野式（28・29・32・33・40・45・46）、船元式（24）のほか、縄文時代晚期の赤色研磨土器の壺（14）や、赤色塗付された鉢（27）、外面に貝殻条痕を施す深鉢（37）などがある。全体として縄文時代前期前葉・中期後葉・後期中葉・晚期後葉・晚期終末期の資料がみられるが、後期・晚期の資料が多い。

E 小結

第6次調査を含め、F区の調査地点を総括する。当区では、安定した黄灰色土の地山は確認できず、調査区全体は砂質土を基盤層とする水気の多い調査地点であった。こうした立地に起因するように、F区を構成する特徴的な遺構は、近世を中心に弥生時代以降、掘削され続けた東西方向に走る溝跡群である。溝跡の方向は山裾のラインに概ね一致しており、地形に沿って溝を切ることで導水・排水を行いながら周囲の土地利用を行っていたと考えられる。第6次調査地点や第30次調査地点では弥生時代前期の貯蔵穴と考えられる遺構が展開しており、他の地区にはない特色である。低湿地型の貯蔵穴と判断され、大道遺跡群の最初期の土地利用状況を知ることができた点は大きな成果といえる。出土遺物を概観すると、古代や中世の遺構中に弥生時代前期の土器群が比較的多く混入しており、大道遺跡群全体の中では当地区は弥生時代前期末～中期初頭段階の生活域であったことを追認することができた。（長直信）



第65図 第39次性格不明遺構・その他の出土遺物実測図4 (1/2・1/4)



第66図 第39次出土縄文土器遺物実測図 (1/4)

表2 大道遺跡群第26次調査 遺構出土遺物一覧表

S番号	遺構番号	性格	層位	主な出土遺物	新旧関係	時期	地区
1	SD001	溝状遺構			15→1		K・L9
2	SK002	土坑			15→2		J9
3	SK003	土坑			18→3	古代～	L9
4	SK004	土坑					K10
5	SD005	溝状遺構 明灰砂		龍泉窯系青磁 黒色土器A類碗 土師器皿	15→5	中世前半頃	K8～M4
				土師器鉢 繩文土器鉢	18→6		
6		ピット		土師器片	18→6		L9
7	SD007	溝状遺構	暗灰土	須恵器甕 土師器甕×壺・环底		古代	M・N9
8		ピット		土師器甕			M9
9		ピット		土師器甕×壺底			M9
10	SD010	溝状遺構					M9～K11
11		ピット		須恵器甕			M10
12		土坑?		下城式甕（弥生）			M8
13	SD013	溝状遺構		弥生土器甕底（平）・甕口	10→13		N9
14		ピット		土師器破片			O6
15	NR015	自然流路		須恵器甕・蓋・环c 土師器甕・甕b・二重口縁壺・皿×蓋・环a・高环 弥生土器甕・壺（下城式・西瀬戸内系？）・高环・鉢 繩文土器深鉢	25→15→1・2・5・17・18・20	9世紀前半	Q7～J10
16		溜まり状遺構		繩文土器浅鉢 石鐵 黒曜石（姫島産）	15→16		N8
17	SD017	溝状遺構		須恵器破片 土師器甕（古墳）	15→17		P9
18	SD018	自然流路		土師器鉢×鍋 繩文土器鉢	15→18		K9
19	SK019	土坑		土師器壺（古墳）下城式甕			O5
20	SK020	土坑		龍泉窯系青磁碗 国產陶器皿・染付碗（肥前系）、甕・擂鉢（備前） 土師器皿C・环a	15→20	16世紀後半～17世紀前半	O7
21		土坑					N10
22		欠番					
23		欠番					
24		欠番					
25	NR025	自然流路		須恵器環（古墳） 土師器壺・环c 土師質土器環（イト） 弥生土器壺	25→15	古墳時代前期～古代	P7～N9

表3 大道遺跡群第27次調査 遺構出土遺物一覧表

S番号	遺構番号	性格	層位	主な出土遺物	新旧関係	時期	地区
1		ピット					R15
2		ピット					S15
3		ピット					R15
4		ピット					R15
5	SK005	土坑			20→5		P10
6		ピット					S15
7		土坑					Q15
8		土坑					Q13
9	SK009	土坑					Q13
10	NR010	自然流路?		弥生土器甕 加工土器片 繩文土器深鉢（轟B式・下黒野式）	37→15→10	古墳時代前期～古代	Q8～T12
11		土坑		黒曜石			Q13
12		土坑		土師器甕・壺			O12
13		ピット					P13
14		ピット					R13
15	NR015	自然流路		須恵器蓋・环 土師器蓋・甕b 弥生土器高环・壺 繩文土器深鉢・浅鉢	15→10→32	古墳時代前期～古代	T8～V13
16	SK016	土坑		繩文土器深鉢 石鐵			R12
17		土坑群		繩文土器深鉢			P11・12
18		土坑群					R12
19		ピット群					Q10・R12
20	NR020	自然流路		土師器二重口縁壺・高环 弥生土器甕・壺・高环	25→20	古墳時代前期～古代	O10～S14
21		柱列か					Q10
22		ピット群					V11
23		土坑群					T10
24		溝状遺構					O・P10
25	NR025	自然流路か		繩文土器深鉢	25→20・36	古墳時代前期～古代	O10～13
26		土坑					S15
27		土坑					R15
28		土坑					R14
29		土坑					T13
30	NR030	自然流路		須恵器甕・环a・蓋 土師器甕b・环 弥生土器鉢×甕・鉢	40→30	9世紀前半	Q7～V7
				灰色砂 須恵器環c 弥生土器壺（下城式）繩文土器深鉢			
				灰茶砂 須恵器甕・高环・环c 土師器甕b 黒色土器A類碗			
				灰白砂 須恵器蓋・环・土師器鉢 弥生土器甕			
				暗灰シルト 須恵器甕・高环・环c 土師器甕b・环・椀 弥生土器甕・壺（下城式）繩文土器浅鉢			
				茶灰砂 繩文土器深鉢（コウゴー松）			
31							T12
32		溝状遺構		国產陶器急須 土製品人形 銅製品雁首銚		近世	P9～V13
33		土坑					T8
34		土坑					U12
35	NR035	自然流路			37→35→40		Y8～R8
36							N11
37		自然流路か			37→15・35		Q9～W10
38		欠番					
39		欠番					
40	SX040	性格不明		繩文土器深鉢	40→30・35		W6～Q8
		暗灰土		土師器皿C 弥生土器壺 繩文土器浅鉢・深鉢			

遺構出土遺物一覧表

表4 大道遺跡群第33次調査 遺構出土遺物一覧表

S番号	遺構番号	性格	層位	主な遺物	切合い	時代	地区
1	NR001	自然流路	褐灰砂質土 台石 姫島産RF・石核	須恵器甕 土師器環a・c・d・蓋 黒色土器A類楕 弥生土器器台・大型器台	2・12→1	9世紀前半	E1~I8
			茶灰褐色	須恵器甕 土師器環・蓋・甕b・椀B 黒色土器A類楕 弥生土器片			
			暗灰砂	須恵器甕・壺・环a 土師器二重口縁壺・环a 弥生土器甕・大型器台・ミニチュア土器甕 繩文土器深鉢 石製品RF(腰岳産・姫島産・安山岩) 石核(石英) 石鍬 骸骨			
			暗灰粘	弥生土器大型器台 繩文土器			
			灰黒粘質土	須恵器甕・長頸壺 土師器環b・甕a・タタキ甕・二重口縁壺・椀・高杯 弥生土器甕・壺・鉢 繩文土器深鉢(船元式・小池原上層式)・浅鉢(浦久保?)種子(モモ) 磨製石鍬			
			黒色土	須恵器環c 土師器環a 弥生土器甕 土製品紡錘車 不明石製品			
			明黒褐色	安山岩RF			
			トレンチ	須恵器甕 土師器環d・甕b 弥生土器甕 繩文土器深鉢(轟B式)・浅鉢 土鍬 石鍬 種子(モモ)			
2		溝状遺構		土師器環 黒色土器A類楕 弥生土器片	2→1・4	9世紀	I4・5
3		溝状遺構	黒褐色	須恵器甕 土師器環b・环c・d 弥生土器片 土製品土鍬 移動式カマド 黒曜石	3→4	9世紀前半	G2~I3
4		溝状遺構	灰褐砂質土	国產陶器擂鉢(近世I期) 皿(肥前系)・関西系破片 須恵器甕・壺 土師器皿C 黒色土器A類楕 瓦質土器火鉢 結晶片岩	2・3→4	18世紀代	G2~J4
5		欠番		土師器皿C・环a 黒色土器A類楕 弥生土器片			
6		ピット		土師器片			G3
7		ピット		土師器環a×d		9世紀前半	H3
8		土坑		土師器片			G3
9		土坑		弥生土器甕片			G3
10		欠番					
11		土坑		土師器片	11→3		H3
12		溝状遺構	暗灰褐色	土師器環d・高环	12→1	9世紀前半	I5
13		土坑		弥生土器片	13→1		E3
14		ピット	黒褐色土	土師器片 弥生土器甕(下城式)			F3
茶灰土				須恵器甕 土師器環e・甕b 黒色土器A類楕 弥生土器大型器台			
機械掘削時				縄釉陶器碗(京都産) 須恵器高环 土師器皿C・甕b 弥生土器片 繩文土器深鉢			
トレンチ				須恵器甕・环・甕(転用硯) 土師器椀c 弥生土器甕(後期後葉・下城式)・高环 杭(近世?)			
表探				須恵器甕 土師器環・甕 弥生土器甕(下城式)			
攪乱				須恵器甕・壺 弥生土器甕(中期) 現代磁器片			

表5 大道遺跡群第30次調査 遺構出土遺物一覧表

S番号	遺構番号	性格	層位	主な遺物	切合い	時代	地区
1		溝状遺構		土師器壺・椀	3・4→1	古墳時代前期	D9・10
2	SD002	溝状遺構		須恵器甕 a 土師器環(中世)・环a・环d 弥生土器甕(下城式)	41→2	8世紀中~後半	D6~D10
3		土坑		土師器環 弥生土器片	3→1	古代	D10
4		土坑		-	4→1		D9
5	SX005	(SX015内)		土師器甕A・壺Aa・壺Ab・壺・小型丸底壺・小型器台・高环・鉢・脚付鉢・环 弥生土器甕(下城式)・壺Aa・繩文土器(小池原上層式) 不明土製品・製塙土器 砧石	15→5	古墳時代前期中葉	C9・10
6							
7	SX005~	土坑		土師器片 弥生土器片 繩文土器片	8→7	古墳時代前期?	C9・10
8		土坑		弥生土器甕(下城式)			C7・8
9		土坑		須恵器片 土師器片 弥生土器片	30→9	古代?	C7
10	SX010	竪穴住居跡か	貼床(最下層)	土師器甕c 弥生土器片 繩文土器深鉢片 勾玉状(石製品) 台石 弥生土器甕底部(平) 繩文土器深鉢片	15・78→10→8・56	8世紀中~9世紀	B7~9
11				土師器片			C8
12	SX012	土坑	(SX015内)	弥生土器甕	15→12	古墳時代前期中葉	C10
13				弥生土器片	42→13		B10
14		土坑	(SX015内)	土師器甕D・壺Aa・椀	43・16→14	古墳時代	B10
15	SX015	(SX015内)		土師器甕A・小型丸底壺 繩文土器深鉢 石核	15→5	古墳時代前期中葉	B9~C10
16				弥生土器甕(下城式)・壺			B10
17		土坑		土師器片 弥生土器片			D7・8
18		土坑		弥生土器片			C9
19		土坑		弥生土器片 繩文土器片			C6
20	SE020	井戸跡か		灰釉陶器碗 土師器甕・环d 黒色土器B類楕 弥生土器甕(下城式) 台石?	28・48→20	9世紀前半	G8
21		土坑					E7
22	SX022	土坑		土師器皿C	37→22	16世紀後半	E6
23				土師器片 弥生土器片	37→23	古墳時代前期	F7
24		方形土坑		土師器甕A 繩文土器深鉢片	37→24	古墳時代前期	F7・8
25		土坑					E8
26		土坑		弥生土器甕(下城式)・壺片	51→26	弥生時代前期	G8
27	SD027	溝状遺構		土師器環d・皿 弥生土器甕(下城)		8世紀中~後半	G6・7
28	SD028	溝状遺構		国產磁器片(肥前系) 火打石(石英・チャート)	28→27	近世	G6~G10
29	SD029	溝状遺構		弥生土器甕(下城式)・鉢	28→20		G6~G10
30		溝状遺構?		-	30→9		B7~B9
31	SD031	溝状遺構		土師器甕A 弥生土器甕(下城式) 繩文土器深鉢片 石製品紡錘車	31→29	弥生時代前期~中期	G6~H9
32	SK032	土坑		土師器甕A 弥生土器甕(下城式)	39→32	9世紀	H6
33		溝状遺構		繩文土器深鉢 弥生土器甕	21→33→34		E7
34		溝状遺構		須恵器片 土師器環d			E6・7
35		欠番					
36	SX036	土坑		土師器高环 黒色土器A類楕 弥生土器甕(下城式) 繩文土器深鉢		9世紀	F6
37				須恵器片	51→37→23	8世紀~9世紀	F6・7
38	SD038	溝状遺構か		弥生土器甕(下城式) 繩文土器浅鉢		弥生時代前期末~中期初頭	F6・7
39				土師器甕b・环c	39→32	8世紀~9世紀	H6
40		欠番					
41	SK041	土坑		弥生土器甕(下城式)・壺 繩文土器深鉢 石皿 打製石斧		弥生時代前期末	D8

表6 大道遺跡群第30次調査 遺構出土遺物一覧表

S番号	遺構番号	性格	層位	主な遺物	切合い	時代	地区
42		土坑		土師器甕A		古墳時代前期	B10
43		土坑		土師器甕A	5→43	古墳時代前期	B9・10
44		土坑		国産陶器椀片(近世) 弥生土器片	2→44	18世紀以降	D7
45		欠番					
46		土坑		弥生土器片 繩文土器片			D7
47		溝状遺構					D6~E7
48		溝状遺構		国産磁器片 土師器片 弥生土器甕×甕(前期)	48→20	G8~G10	
49		土坑		国産陶器陶胎染付椀		E10	
50		欠番					
51	SX051	不定形土坑		土師器甕D・高环 弥生土器甕(下城式)・高环(木製品模倣か) 繩文土器片	51→24	古墳時代前期	G6・7
52		ピット		土師器片×環d	1→52	古代	D10
53		ピット		弥生土器片(下城式) 石製品			D10
54		土坑	(SX010内)	土師器片			C7
55		欠番					
56		ピット		土師器甕×		古墳時代前期	C7
61				国産陶器擂鉢(備前) 土師器甕b 弥生土器片		16世紀後半	
62		欠番					
63		柱穴か	(SX015内)	土師器甕片		古墳時代前期	C9
64		柱穴か					C10
65		欠番					
66		柱穴					B9
67		柱穴	(SX015内)	土師器甕片 高环		古墳時代前期	B9
68							C10
69		柱穴		土師器甕D		古墳時代前期	B9
70		欠番					
71				弥生土器甕片(下城式)		弥生時代前期?	
72		遺物包含層					C9
73		ピット		石器(石核)			B6
74		ピット		弥生土器片			B6
75		欠番					
76		ピット		繩文土器片、弥生土器片			B6
77		ピット					C6
78		土坑		土師器(古墳)片		5~7世紀	C8
		茶灰土		国産磁器片 土師器甕A・高环・小型丸底壺 弥生土器台 繩文土器(轟B式)			
		淡茶土		土師器皿C			

表7 大道遺跡群第39次調査 遺構出土遺物一覧表

S番号	遺構番号	性格	層位	主な遺物	切合い	時代	地区
1	SX001	整地層	暗灰褐色	須恵器甕 土師器甕A・高环 石器	1→2	中世~近世	B21~I22
			灰褐砂	須恵器(古墳) 土師器甕A・D 弥生土器甕			
			灰青砂	須恵器片 土師器甕A 弥生土器台付鉢 壺Aa 繩文土器片			
			黄色土	国産陶器備前擂鉢(中世5a期) 弥生土器甕×甕			
			灰褐土	国産磁器(肥前系) 須恵器甕 土師器小型丸底壺 弥生土器甕・甕(在地系・下城式) 繩文土器片 打製石鎌			
			上面検出時	近代陶器片 須恵器片 土師器片 弥生土器片			
		自然流路	暗灰青土	土師器甕A・小型丸底壺 弥生土器甕(下城)			
			灰青土	土師器片 弥生土器甕・壺Aa 敷石・石核			
		NR001 2tr	灰青砂	土師器壺Aa 弥生土器片			
2		搅乱		弥生土器片			E22
3	SX003			国産磁器片 土師器甕A 繩文土器片			近世?混じり?
4	SX004			繩文土器浅鉢	9→4		繩文時代後期
5	SX005	最下層		土師器甕×甕 弥生土器甕 繩文土器浅鉢(上晉生B式)	9→5	古墳時代前期	C20
			弥生器甕 繩文土器片				
			黒色土	土師器甕A・小型丸底壺 弥生土器片(前期) 繩文土器深鉢(轟B式・下黒野式)・浅鉢 敷石・石核			
6		搅乱		弥生土器片			G18
7				土師器壺?(無頸壺?)			D15
8							C15
9				土師器壺d?・甕b 弥生土器甕 繩文土器片	9→4・5		8世紀後半
10		SX085~					C20
11				弥生土器片 繩文土器片			A11
12				弥生土器片			C21・22
13				小片			C16
14				繩文土器深鉢			C15
15	SK015	貯蔵穴か		弥生土器甕(下城式) 繩文土器深鉢			弥生時代前中期~中期
16				土師器片 弥生土器片 繩文土器片			G20
17				繩文土器深鉢 磨石			C16
18							D15
19				弥生土器甕			C16
20	SX020	西側		須恵器甕 繩文土器片	13~14世紀	B17~C19	
			土師器壺d?・甕b 弥生土器片				
			弥生土器片 繩文土器深鉢				
		灰褐粘	国産磁器片 須恵質土器甕 土師器壺d 弥生土器片				
21		搅乱		繩文土器片			H14
22	SX022			国産陶器擂鉢(備前) 須恵器甕 弥生土器甕 繩文土器黑色磨研土器・深鉢			B17~G20
23				繩文土器壺形土器?			C15
24	SX024			国産磁器碗(肥前系) 弥生土器甕(下城式) 繩文土器深鉢 石核			G11~15
25	SX025	黒色土		須恵質土器甕 土師器甕b 弥生土器甕(豊前・前期) 繩文土器深鉢	25→21・23	8世紀中~9世紀前半	B13~C16
			土師器小型丸底壺・繩文土器深鉢				
			小片				
26				小片	27→26		C13
27	SD027	溝状遺構		繩文土器片			C11~D14
28				弥生土器片 繩文土器片			C13
29							B12

遺構出土遺物一覧表

表8 大道遺跡群第39次調査 遺構出土遺物一覧表

S番号	遺構番号	性格	層位	主な遺物	切合い	時代	地区
30	SX030			弥生土器壺・甕	30→42	16世紀代	E16
				国産磁器（近代）中国磁器青磁碗・青花碗 国産陶器備前甕 土師器環Bn 須恵質土器甕 弥生土器片（前期）繩文土器深鉢（下黒野式）・浅鉢 火打石・石核 鉄釘 銅錢（明）扁平片刀斧			
31				弥生土器片			B15
32				須恵器甕			B12
33							B12
34	SP034	ピット		繩文土器片	34→26		C13
35	SX035 3Tr	SX		須恵器甕a 土師器壺Aa・甕A 黒色土器A類环 繩文土器深鉢	9世紀代	C18~D19	
35	SX035			土師器环・甕 弥生土器壺Aa・甕			
36				弥生土器片 繩文土器片			B12
37				弥生土器片			D13
38				弥生土器片 繩文土器片			B15
39				弥生土器片	39→25		C16
40	SX040		黑色土 黑色砂 黑色土下層 灰青砂 青灰土	国産磁器（肥前系）国産陶器備前（近世）土師器甕A 弥生土器甕（下城式） 平瓦・石核 国産磁器筒形碗 国産陶器片 須恵器甕 弥生土器甕・甕（下城式）・鉢 繩文土器深鉢（船元式） 国産陶器片 国産陶器片 弥生土器片 繩文土器片 石核 国産陶器片 緑釉陶器片 弥生土器片 繩文土器 平瓦 国産磁器片 繩文土器片 弥生土器片 平瓦 土製品土壁 火打石（チャーブ・徳島）	18世紀～	G12・13	
				須恵器小片（古墳・古代） 弥生土器片 繩文土器片			
				国産磁器片 平瓦			
41				須恵器甕a 土師器環d・甕A 弥生土器甕（下城式）繩文土器深鉢			C16
42		搅乱		国産磁器片 平瓦			D15~H15
43	SX043			須恵器甕a 土師器環d・甕A 弥生土器甕（下城式）繩文土器深鉢			D20
44	SX044a			須恵器甕・土師器蓋 黒色土器B類施 弥生土器片（前期）繩文土器深鉢（轟B式・下黒野式） 壺形土器・浅鉢 鉄滓 石匙	12世紀	C19~E20	
	SX044b			同安窯系青磁甕 土師器環a 弥生土器壺Aa 繩文土器片			
45							D18
46		搅乱		弥生土器片・繩文土器片			F13~H13
47	SD047	溝状遺構	検出時 上層	土師器環・弥生土器甕（下城式）・壺（前期）繩文土器深鉢 石核 国産陶器備前甕 土師器環c 瓦器輪	37・75→47	16世紀	D10~H19
				土師器甕A 須恵器片 須恵質土器甕			
				土師器甕A 繩文土器片 弥生土器片			
48				備前播鉢（中世） 弥生土器片 繩文土器片			D18
49							E13
50	SK050	土坑	中層	弥生土器片			C14
51		包含層		弥生土器壺Aa			E13
52							
53							
54							
55	SK055	貯蔵穴a		弥生土器甕（下城式） 繩文土器片 石器			弥生時代前期 C13
60				土師器甕（6C～） 須恵器甕（古代） 弥生土器甕（下城式） 繩文土器片、近代土管			B11・12
65	SX065			弥生土器甕（前期）	65→70		C11
70	SX070			弥生土器甕・甕・鉢			B11
75	SX075			国産磁器染付碗（肥前系）・レンゲ 国産陶器青磁楕（大宰府I期）・唐津播鉢・鉢・関西系楕 平瓦 木杭 鉄釘 玉砂利			弥生時代前期～中期初頭 E11~H18
80	SX080			土師器甕A・高环（布留系） 弥生土器甕・甕 繩文土器片 石核	85→8		古代～中世前半 C20
85	S-85 (S-10) SX085 SX085 SX085 SX085 SX085 SX085 SX085 SX085 SX085 SX085		壁 暗灰粘 暗灰土 上層 ベルト上層 1層目 灰褐土（東） 灰褐土（西） 下層	国産陶器陶胎染付碗 土師器片 弥生土器片 繩文土器片	85（古）→90・100→86 (新)	古代～中世前半 B19~B21	
				須恵器環a× 土師器甕 弥生土器 繩文土器（下黒野式） 故石 石核			
				須恵器長頸甕（突帯）・甕			
				土師器二重口縁甕 弥生土器甕・壺（瀬戸内系）・高环 繩文土器深鉢（下黒野式） 安山岩UF 石核			
				土師器甕A×D・脚付鉢・高环 弥生土器片 繩文土器（轟B式）			
				土師器甕A×D・吉備系）、小型丸底甕・高环・环c・碗c 瓦器小皿 弥生土器甕・壺 繩文土器深鉢（下黒野式） 唐津播鉢（下黒野式）			
				土師器甕A・D・壺Aa・B・环 弥生土器甕・壺 繩文土器深鉢（轟B式・北久根式併行・下黒野式） 砥石（緑泥片岩） 石核			
				土師器甕A・D・小型丸底甕 繩文土器深鉢（下黒野式） 砥石（緑泥片岩） 石核			
				灰青土			
				弥生土器片			
90	SX090			土師器甕・壺・壺Aa・环 弥生土器高环・器台 加工土器片 繩文土器深鉢 木製品案脚部 石器	85（古）→100→90→85 (新)		古墳時代前期 C21・22
95			5Tr	国産陶器鉢・備前甕・壺 弥生土器甕 石核			17世紀 G20
100	SX100		①②	土師器甕A・二重口縁甕（山陰系）・小型器台・高环 弥生土器甕 繩文土器片	85（古）→100→90→85 (新)		古墳時代前期 B20
	5Tr		黄灰砂	土師器片			
	5Tr		灰褐土	須恵器甕 弥生土器甕			
	5Tr		灰色砂	須恵器甕（古墳） 土師器片 土師質土器甕 弥生土器片			
	5Tr		茶色砂	土師器甕 瓦質土器甕?			
	検出時			国産磁器片 国産陶器関西系碗 土師器片 弥生土器片 繩文土器深鉢 平瓦 石核			
	表土			龍泉窯系青磁碗 国産磁器碗・皿 国産陶器陶胎染付碗・播鉢（堺・明石系） 須恵器甕（古代）			
第1トレンチ			黒灰粘質土	土師器環a			
				白磁碗 土師器環a・椀c・蓋 植木鉢			
第2トレンチ				环c			

第IV章 総括

はじめに

大道遺跡群は、大分駅周辺総合整備事業着手に先立ち計画地区内での開発に際し、埋蔵文化財の所在状況に関して平成8年10月に都市計画課駅南対策室より照会されたことで認知されることとなった。事業に先立ち、平成9年度から順次試掘調査を行った結果、事業予定地内には2地区に埋蔵文化財包蔵地が所在することが判明し、そのうちJR大分駅南側エリアが大道遺跡群として周知されることとなった。大道遺跡群は東西約0.6km、南北約0.7kmの範囲に広がり、大きくは縄文時代～古墳時代、奈良・平安時代、明治～昭和時代に該当する遺跡である。平成12年度～平成24年度まで「大道遺跡群」の調査は42次地点にわたる。これまでの発掘調査では、古墳時代前期の環濠を有す集落の存在及び全国的にも貴重である木製臼が発見されている。奈良・平安時代のものとしては「運河」と推定される大溝跡及びそれに沿うように配置された掘立柱建物跡群等が確認されている。これらの成果は、大分平野における開発史と大道遺跡群の性格を検討する上で重要な所見といえる。

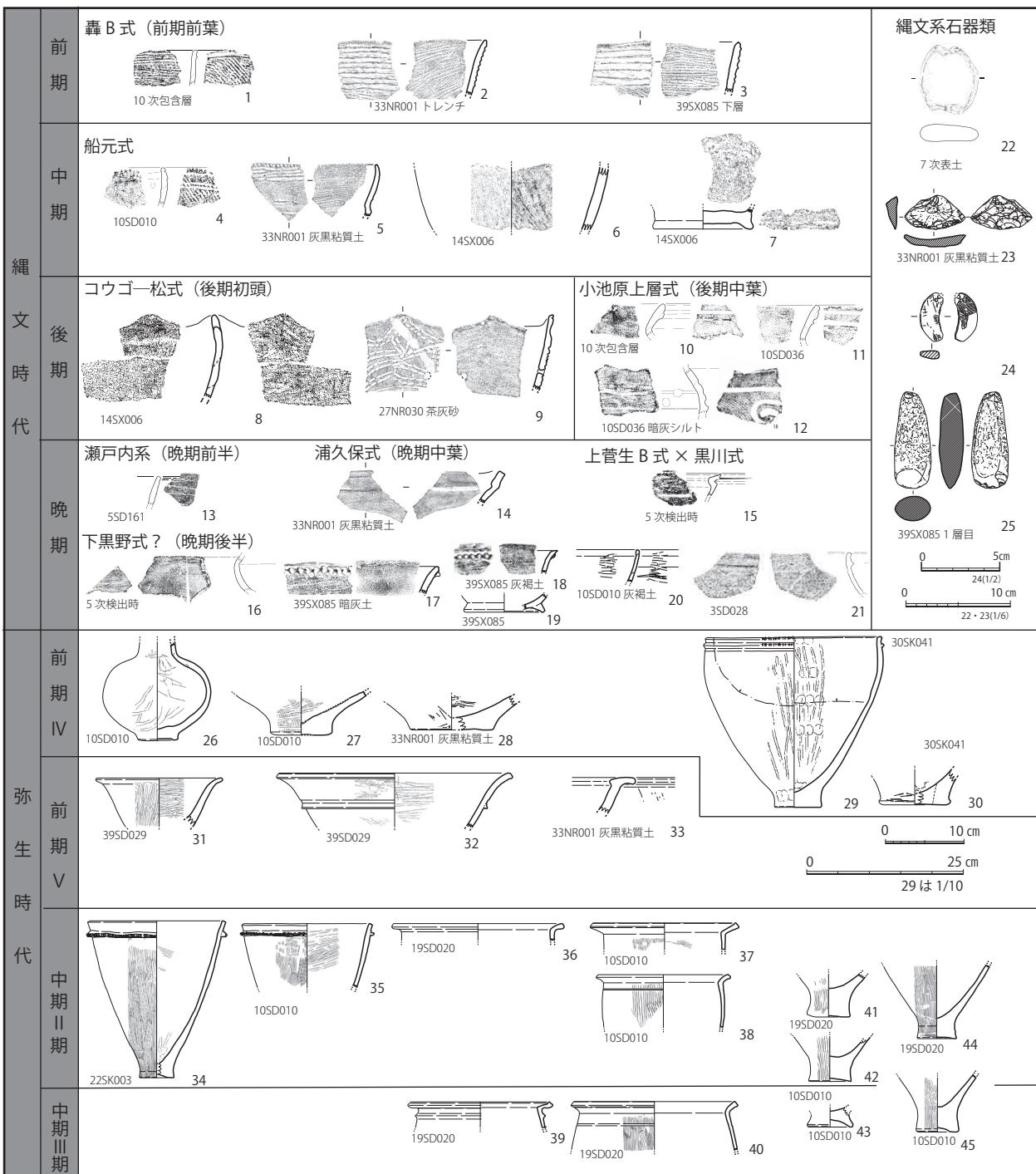
大道遺跡群内の発掘調査は平成24年度に終了し、平成25年度の発掘調査報告書の刊行を以って調査事業は完了することになる。本書では、これまでの調査成果について再整理を行い、大道遺跡群の本来の「姿」を把握すべく努めた。本章では、11年間の調査成果を通じて概観できるように作成し、発見された主要遺構・遺物を時代毎にまとめ、遺跡の性格及びJR大分駅南地域の土地利用の在り方について検討を行っている。具体的に、第1～2節では大道遺跡群全体の縄文時代～中世を対象に遺物様相（第1節）及び遺構の時期変遷（第2節）を概観する。大道遺跡群の主体をなす古代の様相については別節（第3・4節）をもうけて遺物・遺構ともにこれまでの調査成果の整理を試みる。

第1節 出土遺物の様相

(1) 縄文時代～弥生時代中期（第67図）

大道遺跡群のこれまでの調査状況より、縄文時代の遺構は確認されていない。縄文土器の出土は、遺構検出時・表採資料・新しい遺構埋土からといった資料が全てであるが、縄文時代前期～晩期に跨り一定数量認められるることは注目される。最も古い段階の資料として、第10・33・39次調査区から縄文時代前期前葉に該当する轟B式の破片資料（第67図1～3）が出土している。縄文時代中期の資料は船元式（第67図4・5）に該当する破片資料が散見される程度であるが、瀬戸内海の西岸にあたる当遺跡も近畿、四国、中国地方に広く分布する船元式文化圏の影響を受けていた可能性がある。また、大道遺跡群においては縄文時代後期前葉～中葉にかけての資料が集中する傾向が見られる。第67図にあるコウゴー松式（8・9）及び小池原上層式（10～12）以外にも、第10・14次調査区では縁帶文土器や条痕文土器深鉢の破片資料が多数出土している。縄文時代晩期は末段階に比定される下黒野式深鉢の破片（第67図16～20）が顕著である。

大道遺跡群では、弥生時代前期・中期に該当する遺物は極めて少なく、出土状況においても他遺構の埋土に混入するという状態が多くを占め、その分布も限定される。弥生時代の出土土器の変遷は、坪根伸也氏が設定した「下郡編年」を使用している（坪根2010）。弥生時代前期は、弥生時代前期IV期から確認することができ、長頸壺や板付系の壺底部の資料が認められる。その他、30SK041に代表される資料群がある。第67図29は下城式甕で、口縁端部は短く外反し、体部は丸みを有した古い特徴を示している。弥生時代中期になると、下城式甕は直線的な器形を呈し、口縁部の屈曲も消失し、端部の形状は断面四角形となる。また、東北部九州系甕も散見されるようになり、時期がくだるにつれ口縁部の屈曲が弥生時代後期の特徴である「く」字状へと変化していく。弥生時代中期III期では下城式の甕が次第に減少し東北部九州系甕が残っていくという、大分平野における他の遺跡群と同じ様相を示している。（佐藤道文）



第67図 縄文時代～弥生時代中期の出土遺物

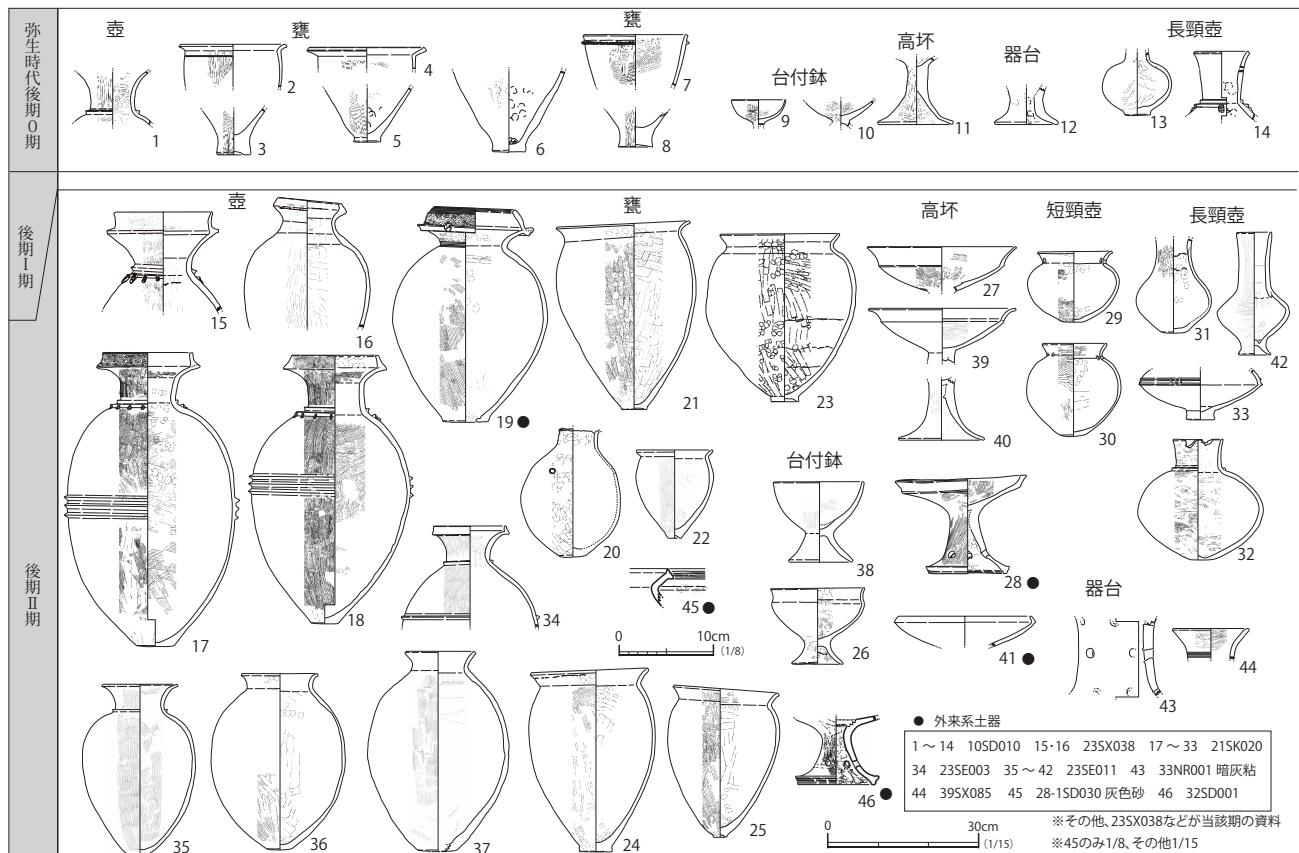
(2) 弥生時代後期～古墳時代 (第68図)

弥生時代後期～古墳時代前期は遺物量が急増し、溝跡や井戸跡、廃棄土坑・祭祀土坑内より多くの土器が出土している。大道遺跡群内では、弥生時代後期中葉～古墳時代前期前葉までの資料が欠落する点を大きな特徴とするが、後述する環濠内(32SD001・20SD001・23SD001・170)からは弥生時代後期V期に相当する終末期の遺物が存在しており、隣接地に遺構・遺物が展開している可能性がある。

古墳時代前期の井戸跡内から出土する土器組成中の45%が^(註1)甕であり、井戸の廃棄時には、畿内起源と考えられている「甕」主体の祭祀を行った可能性がある(久住他2004)。大道遺跡群の資料中では高坏などの精製器種が欠落気味であるものの、環濠内からは比較的多様な形式の資料がえられた。別府湾沿岸部の土器様相を知

るうえで極めて良好な資料群である。環濠への遺物の廃棄は継続的なものではなく、「埋土中層から上層にかけて出土しており、溝状遺構が環濠として機能を停止した後、埋没する段階に廃棄したもの」と報告されているが（大分市教委2011p272）、報告資料中に図示されたものには型式幅をもった資料が多く存在している。本来であれば形式分類を踏まえた検討を行うべきであるが、環濠内の資料の層位的な対応関係は不明である。よって、厳密な議論が難しく、また、検討するための十分な紙幅もないため、ここでは表9に示すように、後述する編年観にそった主要遺構出土資料の時間的位置づけと搬入品や外来系資料の提示を行うに留め、今後の編年的検討への叩き台としたい。弥生時代後期は坪根伸也氏が設定した「下郡編年」（坪根2010）に対応させている。また、近年研究が大きく進んでいる古墳時代の土師器については、博多湾沿岸部の土器編年を行った久住猛雄氏と坪根氏の下郡編年や重藤輝行氏の編年を参考にした（註2）。土師器Ⅰ期～Ⅲ期にかけては安定して出土する在地系の土師器甕A類より型式組列を組みたいところではあるが、在地的な技法や形態と外来系土器の技法や形態の影響度合いにより同時期の資料でも形や技法のヴァリエーションがみられ、型式組列を組むことは困難である。よってここでは甕の形態はおおまかにとらえ、高壺や小型丸底壺の形態変化から区分している。土師器Ⅱb期については時期幅が広く細分できる可能性がすでに指摘されている（坪根2010）。表9では小型器種や高壺等を参考に古相と新相とに区分してみたが、明瞭には区別しがたい部分も多い。

第68図の「●」を付した資料及び第69図（上段）中に外来系の土器を提示した。弥生時代後期Ⅱ期には西部瀬戸内系の擬凹線紋を施す甕や高壺、長頸壺などが含まれる。土師器Ⅱb期になると、これに畿内系や山陰系土器の影響下にある資料が加わる他、北部九州系の有段口縁鉢や高壺などもみられる。また、淡路型器台とよばれる器台の存在も瀬戸内地域との関連が想定される遺物である。なお、淡路型器台の盛行期は庄内期とされており（池田2003など）、布留I式新～II式にほぼ収まる大道遺跡群の事例は、豊後を含む淡路周辺地域以外で変容した二次的な資料と考えられる。なお、大道遺跡群より約500m東に所在する南金池遺跡第1次調査SK026からは搬入品と考えられる在地の土器とは胎土組成を異にした布留系甕・吉備系甕が出土している（第69図22・23）。

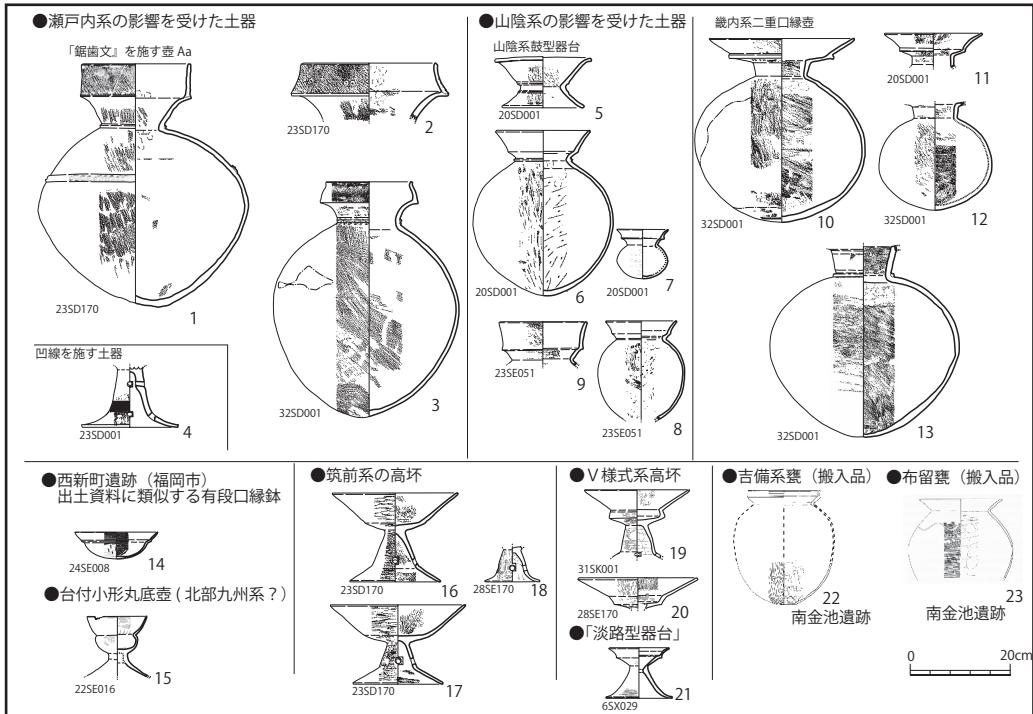


第68図 弥生時代後期の出土遺物

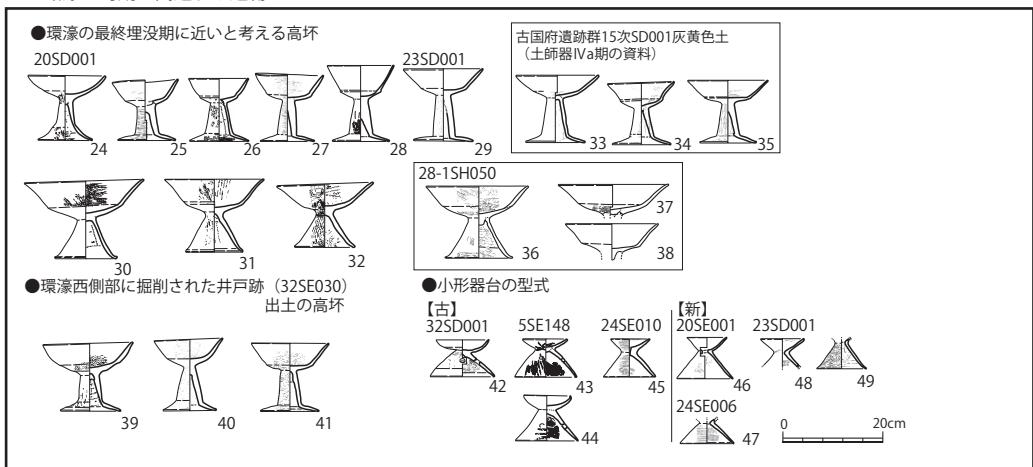
表9 古墳時代の主要遺構出土遺物の位置づけ

	久住 1999	坪根 2010	長 2013a (一部改変)	大道遺跡群 (東大道遺跡・南金池遺跡含む)		大分平野 別府湾岸における基準資料	
				A~C区	D~F区	東田室遺跡	下郡遺跡群 他
古墳時代前期	I A	後期IV	後期IV	環濠内資料			
	I B	土師器 I期	土師器 I期				
	II A	土師器 IIa期	土師器 IIa期	南金池 SK026 (搬入: 布留・吉備窯)			浜第7土器群 守岡1区19住 下郡 90SH020
	II B	土師器 IIa期	土師器 IIa期	環濠 (20+23+32SD001+23SD170) 22SE016 5SE148 22SE087 42SE007 SSE045-163-159-149 9SD010 42SE007 32SE020-025 22SE010-076-099 28SE010-170 23SE050-052-076-099 4SE037 24SE008	22SE016-010 7SK002 9SD010 24SE009 16SK050-058 30SX005 24SE008	東田室 SH3025-SK1108 東田室 SH4012 東田室 SH2108 東田室 2SE040	下郡 90SH464 下郡 92SH343 古国府 15SH260
	II C	土師器 IIb期	土師器 IIb期	(新相) 15SE013 16SK028		東田室 SH1301-SH3206 東田室 SH2101-2106	
	III A	古 新	土師器 III期	土師器 III期	20SE001 20SE018 23SE051 32SE020	15SE003 24SE006 19SK025 24SE007	東田室 D1111a 東田室 2SH005 植田市 E区満1 古国府 15SD001
	III A	新	土師器 IVa期	車轍 2011 ※田辺 1981	32SE030 28SH050	16SK028	東田室 SH1301-SH3206 東田室 SH2101-2106
	III B	IVb期					植田市 SH6 植田市 (1991) SH1
	TK23 TK47	TK73 TK216 NO46 TK208	IV	V期	東大道 A SX01	東田室 SH2501 東田室 SH3205	下郡 18SH01 新光A地区住居跡 一木 SH04 一木 SH02
	TK23 TK47	TK73 TK216 NO46 TK208	V	VII期		東田室 SH3107	植田市 SH23

<外来系土器・非在地系土器>



<環濠の時期に関連する遺物>



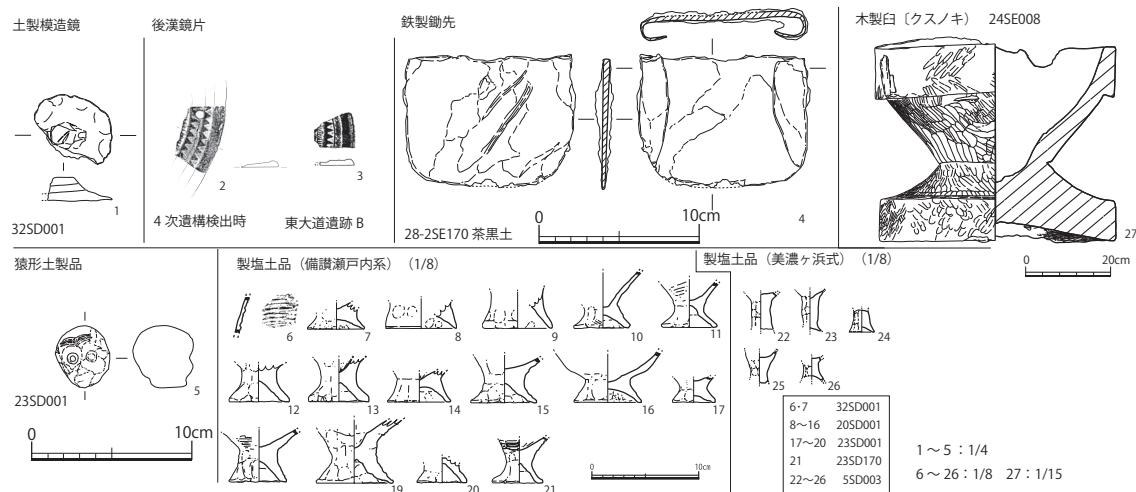
布留系甕については胎土分析からも生駒西麓産の資料との類似性が指摘されている(三辻2013)。

その他、古墳時代前期の特筆すべき遺物として、土師器IIb期頃の所産と考えられる備讚瀬戸内系製塩土器(第70図6~21)や、古墳時代後期とされる、山口湾岸で盛行した美濃ヶ浜式と考えられる遺物(第70図22~26)が後述する古代の運河状遺構から出土しており(大分市教委2009)、継続して瀬戸内地方からの技術伝播があったことが想定される(井口2010・藤本2013)。

いわゆる「破鏡」と考えられる後漢鏡片も第4次調査や大道遺跡群の隣接遺跡である東大道遺跡B地区で出土している(第70図2・3)。ともに遺構に伴う資料ではないが、遺跡の継続性からみて古墳時代前期に廃棄された資料と考えられる。第70図4は土師器IIb期の井戸跡である28-2SE170で出土した鉄製鋤先である。前回の報告(『大道遺跡群6』)で遺漏していたので図示しておく。

(長直信)

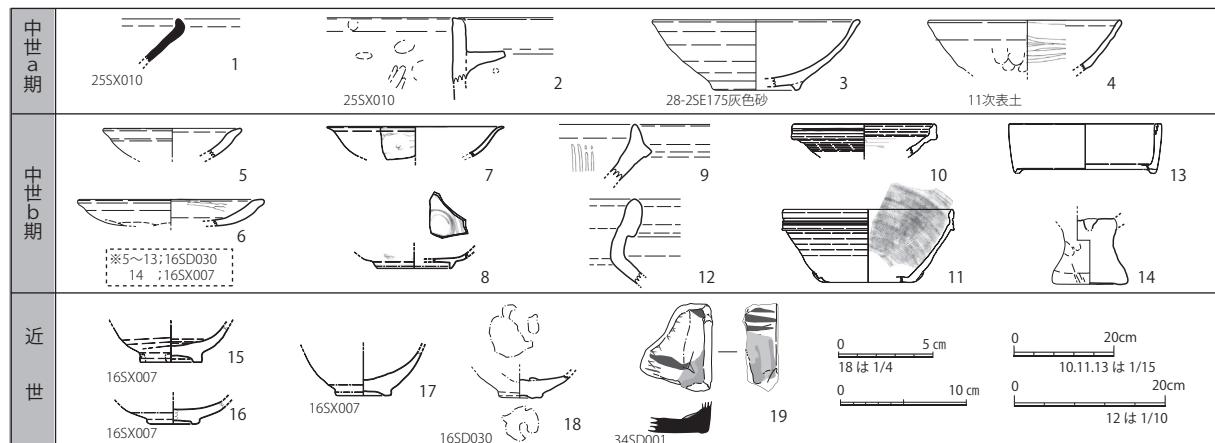
第69図 古墳時代前期土器資料 (1/15)



第70図 古墳時代 特殊遺物 (1/4・1/8)

(3) 中世 (第71図)

中世段階の遺物の出土は少量である。大きくは2時期に区分され、中世a期は12~13世紀段階、中世b期15~17世紀初頭にそれぞれ位置づけられる。中世a期の資料は極めて少ないとえ、他の遺跡で見られるような土師器供膳具や雑器等は看取されない。中世b期は擂鉢・甕（備前焼）・浅形火鉢（瓦質土器）といった雑器類が比較的多く、供膳具については16世紀後半以降になって土師器皿C（京都系土師器）が散見される程度である。近世初め~前半期の資料としては、第8・21・34次調査区等で確認されている近世後半~近代に比定される溝跡より大量に出土した近世陶磁器の中から初期伊万里や織部焼向付等が少数ながらも出土している。

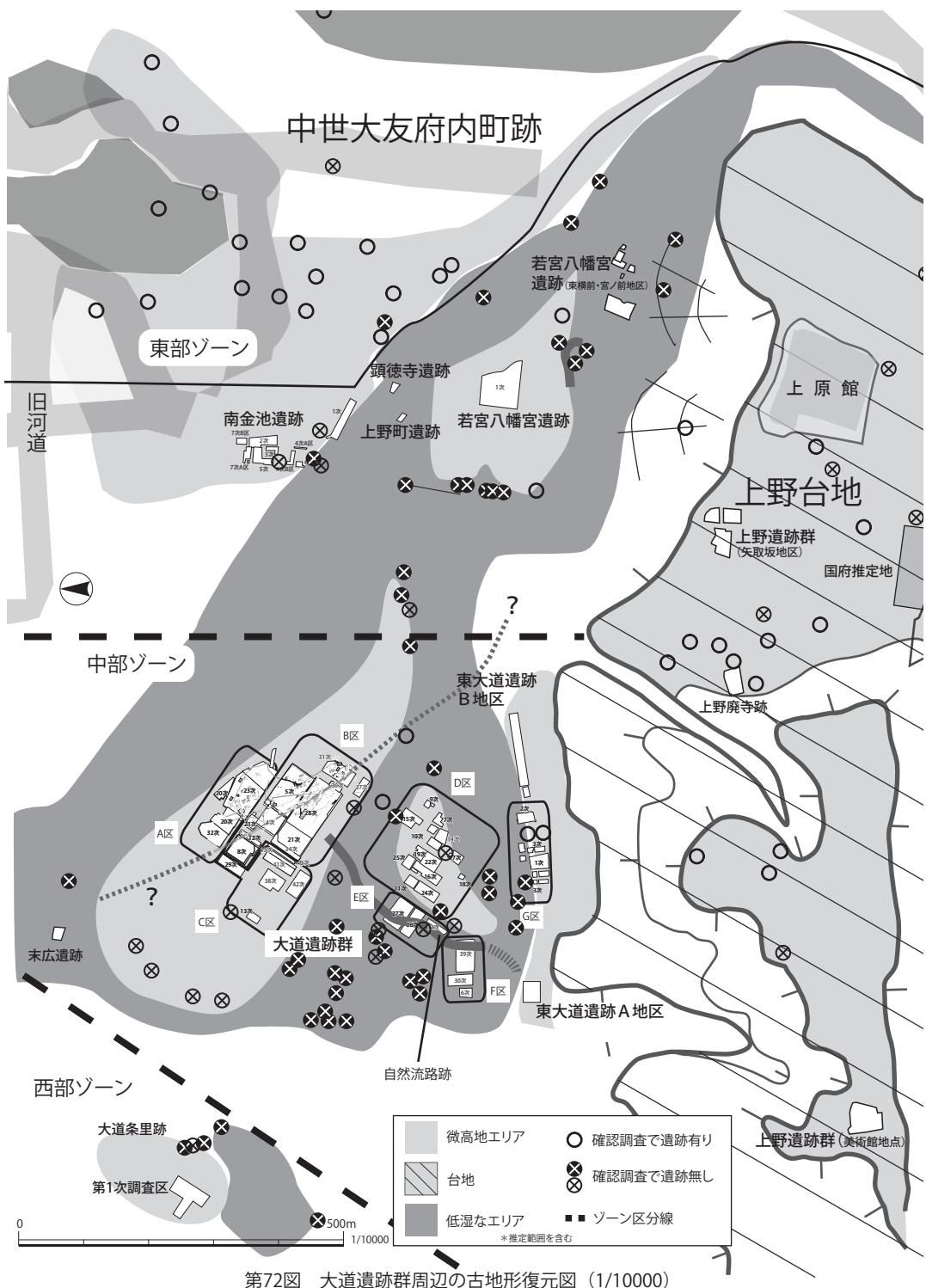


第71図 中世・近世初頭の出土遺物

第2節 遺構の時期変遷

(1) 大道遺跡群周辺の古地形復元 (第72図)

大道遺跡群内は、これまでの調査所見から遺跡の形成には当時の地形や古環境が影響していることが想定されている。地形分類図（第2図）によると、本遺跡群は別府湾から上野台地に広がる低湿土壤上に立地し、その中で「特に低湿な地域」に位置していることが分かる。今回、遺跡の展開状況が地形等にどのような影響を受けているか及び時代毎に遺跡の立地変遷がどのように変化しているかを把握するために、地形分類図に発掘調査で判明している事実事項を照合し、古地形復元の検証を実施した。復元にあたり、便宜的に中央ゾーン（大道遺跡群エリア）・東部ゾーン（若宮八幡宮遺跡・南金池遺跡を中心とする上野町エリア）・西部ゾーン（大道条里跡を中心とするエリア）の区分を行っている。東部ゾーンでは、南金池遺跡・若宮八幡宮遺跡で安定地盤が確認されており、複数の時代に跨る遺構も数多く検出されている。その両遺跡の間に位置する顕徳寺遺跡及び上野町遺跡



では中世に至るまでは明確な遺構は構築されず、粘質土・砂質土・シルト質土といった水成作用を窺わせる環境が想定されている。顕徳寺遺跡では調査区南側半分から低湿土壤の堆積を示し、北側においては安定地盤が表出している。このことから顕徳寺遺跡より北側（南金池遺跡）にかけて微高地が展開し、南側（上野町遺跡）は低湿な環境域であったと推測される。また、若宮八幡宮遺跡第1次地点の南東部・西部での試掘調査によると湿地状の堆積状況が確認され、上野台地北東端部までその環境が続くと判断される。よって、東部ゾーンにおいては若宮八幡宮遺跡第1次地点と南金池遺跡が限定的な微高地であった可能性が高い。中央ゾーンは、大分駅周辺域は試掘調査より低湿域であったことが判明している。この低湿域は、東部ゾーンの南金池遺跡と若宮八幡宮遺跡との間の湿地状堆積と連続するものと考えられる。大道遺跡群内では、古代の掘立柱建物跡群・推定運河跡・古

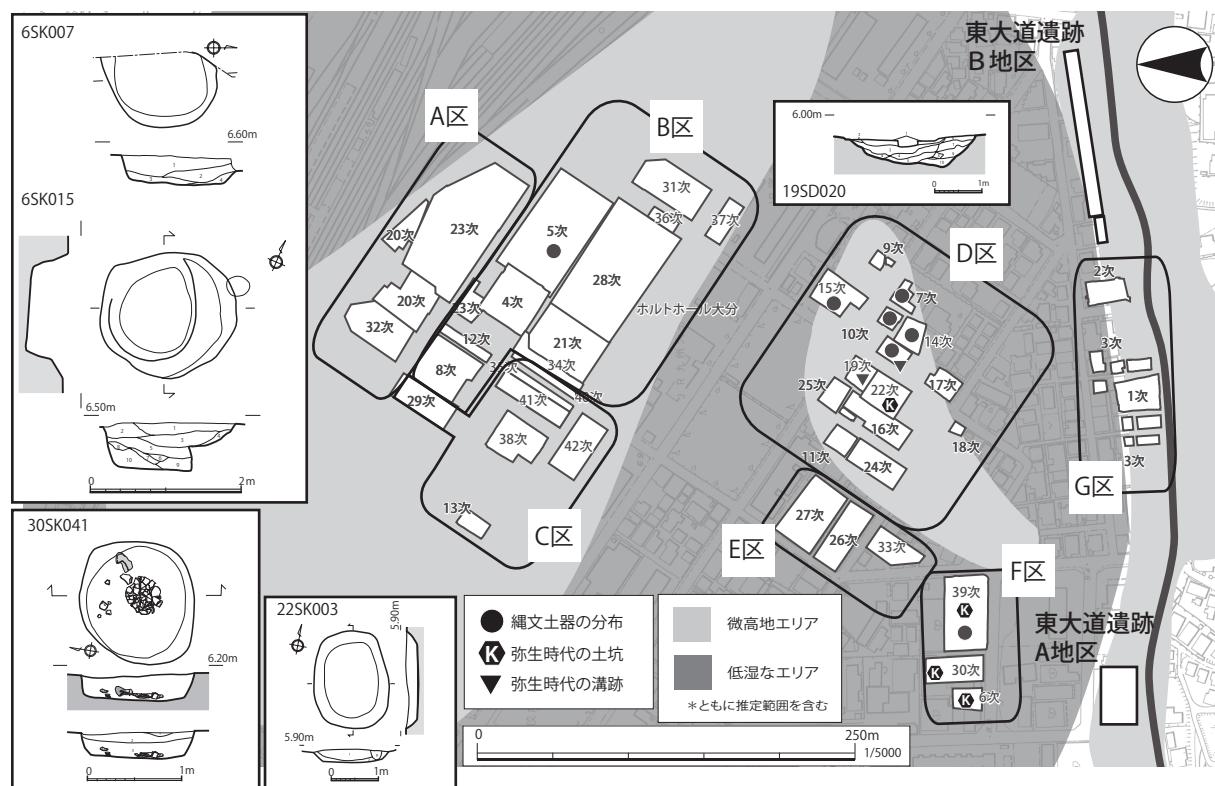
墳時代前期の推定環濠跡が確認されたA～C区では黄褐色土を主体とする安定地盤層が検出される。D区では第7・14・17次地点で上野台地に向かって低くなる地形の傾斜が、第15次地点の北辺では北方向に下がる地形が確認され、周辺の調査結果を照合すると第72図のような微高地の範囲が復元できる。E区は、主に自然流路跡が伸びる地区である。E区北側の試掘調査で砂礫層を主体とする溝状堆積が確認されており、位置関係より流路の延長部に該当すると判断され、第72図に示すような自然流路の存在が折出される。また、F区で検出された自然流路跡はE区の自然流路跡と繋がるものである。G区では脆弱ながらも黄褐色シルト・砂質土が確認される。G区の第3次調査G・H区では北側へ地形が下がるプランが認められるため、D区の西部から南西部にかけてとG区との間は低湿環境であったと解釈することができる。西部ゾーンは調査情報が少ないが、大道条里跡第1次区周辺で安定地盤（灰黄色シルト質土）が発見されている。但し、南側の試掘情報からは耕作土層や粘質土が確認されるのみであり、よって、安定地盤の分布も限定的である。

以上のことから、大道遺跡群を含む周辺は地形分類図（第2図）に示されるとおり「低湿な環境」エリアに該当する。しかし、試掘調査等から詳細な地形を分析した結果、微高地が島状に分布し、その周囲に低湿地や流路が流动していたという環境が形成されていたと考えられる。（佐藤道文）

（2）縄文時代～弥生時代中期（第73図 付属DVD第1図）

第1節でも述べたが、縄文時代の遺構は確認されていない。第73図に示したとおり第14次調査付近を中心にして縄文土器が出土していることが分かる。第14次調査区では地形が傾斜する堆積プランから縄文時代後期を主体とする一定量の縄文土器が出土し、第15次調査区においても同様な状況が看取されている。他時期の遺物も内包しているため二次的な出土様相を示していると考えられるが、多くの縄文土器にはローリングを受けた痕跡が無いことから、周辺の微高地上に当該期の遺構が存在していた可能性が示唆される。

弥生時代前期～中期にかけての遺構分布はF区に集中する。F区では主に土坑が検出されている。第73図に一部遺構図を掲載しているが、平面円形プランを呈し、底面及び壁面は直線的である。上部は削平されており深度は浅くなっているが、調査担当者は貯蔵穴の可能性を指摘している。遺物が出土しているものは少ないが、30SK041



第73図 縄文時代～弥生時代中期の遺構分布図（1/5000）

の事例から考えると弥生時代前期末～中期初頭に分布し機能していたと判断される。D区では当該時期の遺構は22SK003のみである。出土遺物から弥生時代中期Ⅱ期に比定される。10SD010・19SD020は出土遺物より弥生時代後期初頭段階（後期0期）と捉えられる溝跡で、平面分布より同一となることは明白である。溝の断面形状は第10次地点では緩やかな逆台形、第19次地点では不整逆台形状を呈す。共に掘り返し痕跡が認められ、その段階での断面形状は第10次側では逆V字状をしている。出土遺物には弥生時代後期の土器群とともに、弥生時代中期Ⅱ～Ⅲ期（共伴資料より第68図では後期0期としている）に該当する資料が一部含まれていることから、弥生時代後期に比定されているものの、その構築時期は遡ることも認識しておく必要がある。

大道遺跡群において弥生時代前期～中期の遺構は、F区に集中して分布し、部分的にD区（第10・19・22次）に展開する。但し、A～C区には確認されず、建物跡や井戸跡といった生活痕跡は全く見当たらない様相である。
(佐藤道文)

(3) 弥生時代後期～古墳時代（第74～76図 付属DVD第1図）

① 弥生時代後期の様相

弥生時代後期の遺構は、A～C区とD区の微高地上で散見される。A～C区では弥生時代後期Ⅱ期とした井戸跡2基（23SE003・011）と廃棄土坑2基（23SX038・21SK020）が主な遺構である。この地点は遺構面の削平が大きく竪穴建物跡の有無は不明と言わざるをえず、当該期の掘立柱建物跡も確認できない。D区では弥生時代後期0期の可能性がある幅3m、深さ1mの逆台形状に掘削された溝跡（10SD010=19SD020）が確認されている。南北溝の延長には低湿地が存在することから安定地盤の残るD区の東側と西側を分断する水路や区画のような性格が想定される。また、東西方向の溝跡も小規模な水路や区画溝のような性格が考えられる。なお、D区は他の地点と比較して標高が高く大きな削平は想定されないことから、当地には竪穴建物跡のような居住施設は想定できない。

② 古墳時代の様相

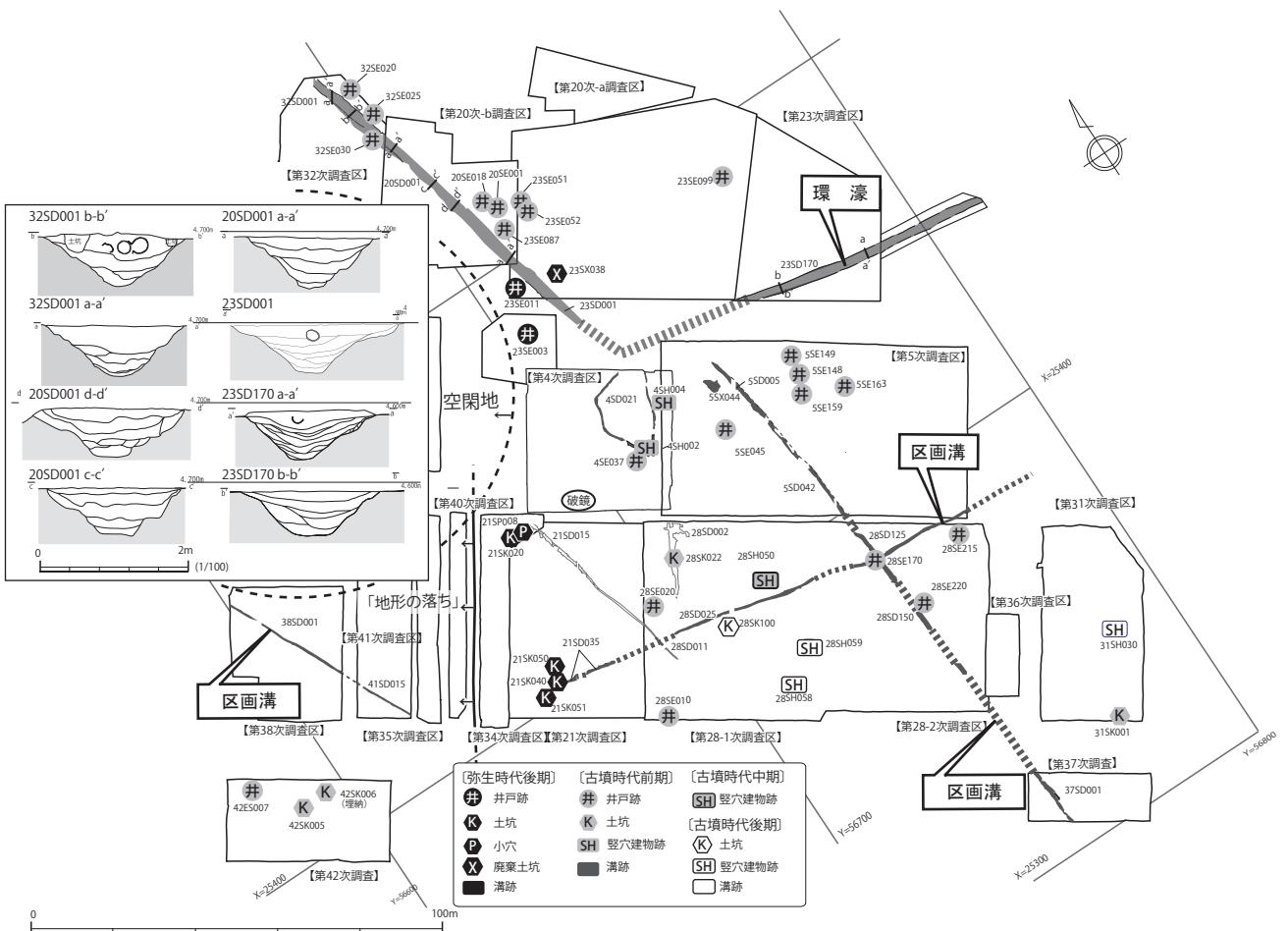
古墳時代前期になるとA～C区及び、D区において井戸跡35基（可能性のあるものを含めると38基。詳細は付属DVD表17参照）や廃棄土坑が形成されるほか、A～C区には環濠とされる直線的大溝（20・23・32SD001、23SD170）やこれに並行する直線的な溝跡（28SD125・025、21SD035、41SD015・38SD001・5SD005・042、28SD125・150、37SD001）が形成される。環濠や区画溝によって居住空間を分割する意識がみられ具体的な集落景観が明らかとなる。土師器Ⅲ期まで引き続き井戸の形成が盛んであるが、この頃には環濠の埋没が始まり、景観が大きく変貌していく。古墳時代中期のはじめである土師器Ⅳa期になると環濠が完全に埋没し（第69図24～32）、これを切って井戸跡 32SE030が形成される（第69図39～41）。他はB区で竪穴建物跡（28SH050）が1軒、D区で土坑が1基（16SK028）確認される程度となる。その後、東大道遺跡A地区にて土師器Ⅴ期頃の竪穴建物跡（SX01）が確認されており、集落立地を変えながらも遺構の形成が継続していたようである。なお、土師器Ⅴ期以後は周囲に明確な遺構は確認できないが、5世紀末～6世紀前半頃の須恵器片、6世紀後半～末頃の須恵器片が散見され、周辺では継続して当該期の遺構・遺跡が存在した可能性が高い。

i) 古墳時代前期（中葉～後葉）の様相

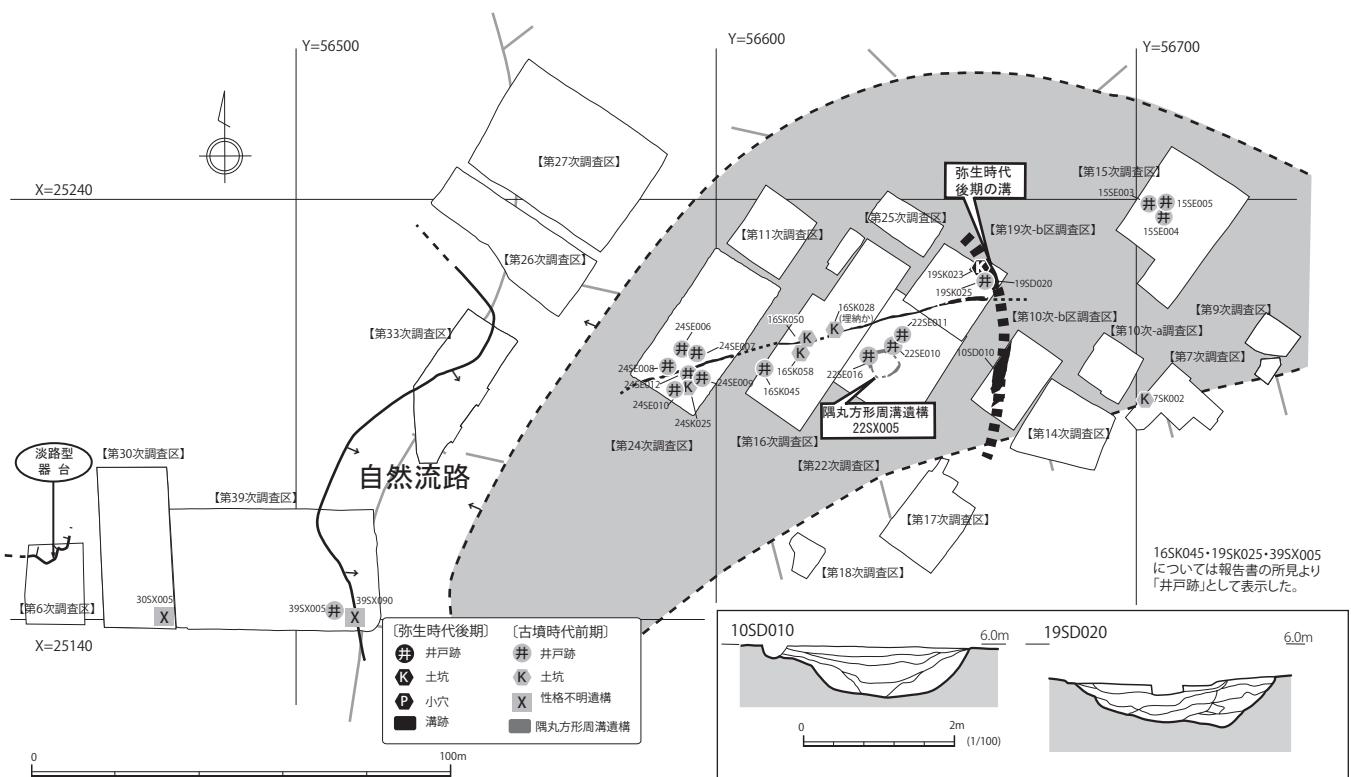
古墳時代の遺構・遺物が最も多くなる土師器Ⅱb～Ⅲ期の様相を具体的に検討する。当該期は、古墳時代前期を通じて、北と南の微高地上で遺構が展開する。特徴的な遺構は環濠と報告された大型の溝跡と40基近い井戸跡である^(註3)。

<北側微高地の様相>北側のA～C区では直線的な区画溝・井戸跡・竪穴建物跡・廃棄土坑が面的に確認されるが、西側には大型遺構は確認されず「空閑地」として認識できるエリアが広がる。

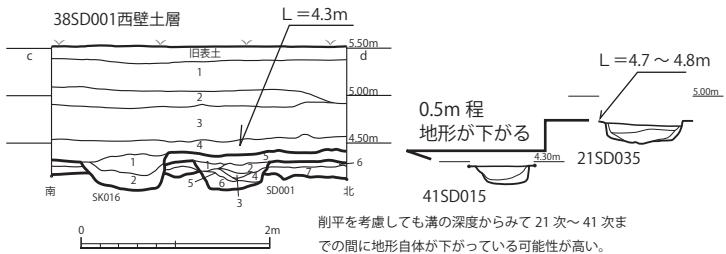
・環濠と内部：区画の北東部は大分駅旧操車場内にあたり、試掘調査によると低湿地帯が広がるようである。したがって環濠は微高地の南側と西側にのみめぐり、微高地部分の北・東側には存在しない可能性がある。内部は概ね半月状の空間が想定され、第23次調査を中心に内部の大部分を調査したこととなる。内部の井戸跡8基中、23SE099のみが区画内部中央に所在し、その他は、区画内部西側に偏在する。中心部にあたる付近は後世の削



第74図 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構分布 [A~C区] (1/1800)



第75図 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構分布 [D~F区] (1/1800)



第76図 38SD001・41SD015と21SD035の関係 (1/80)

・区画溝と内部：区画溝西側（38SD001=41SD015）は、環濠西側（32SD001～23SD001）と平行するように形成された区画溝である。同じく環濠東側（23SD170）と平行する区画溝21SD035=28SD025に接続する溝と考えていたが、第76図に示すように第35次地点付近から第41次地点までの間で0.5mほど西側へ地形が下がっており、溝同士は接続しないと考えられる。内部には5基の井戸跡が環濠に近い第4・5次調査地点で、1基が区画溝に近い第28次調査地点で確認された。詳細な時期は不明であるが当該期前後の竪穴建物跡2棟も井戸跡に近接して掘削される。第4次調査の表土中から「破鏡」（第70図2）が出土している。

区画溝外（区画溝～低湿地エリアとの間）：区画溝の外に該当する地点でも2基の井戸跡と竪穴建物跡1棟が確認される。また、湿地帯にほど近い第42次調査地点では土器内に底部を穿孔した小型丸底壺が埋置された遺構（42SK006）が形成されており、出土位置からみて集落縁部における境界祭祀を示した可能性がある。

＜南側微高地の様相＞：南の微高地にあるD区の中央部では9基（可能性のあるものを含めると11基）の井戸が集中して営まれ、中央には直径7.8mほどの隅丸方形周溝遺構（22SX005）が形成される。周溝内部には建物痕跡は確認できず、周溝からの出土遺物も希薄なため、具体的な性格は不明とせざるをえないが、その形状から祭祀的な遺構の可能性を指摘しておく。微高地と低湿地との境には膨大な土器が廃棄された土坑（7SK002）や3基の井戸が形成される。標高は5.0mと数棟の竪穴建物跡が確認されたA区よりも遺構の遺存度が高いにもかかわらず、竪穴建物跡や掘立柱建物跡が確認されない。よって、この微高地上には井戸跡と隅丸方形周溝遺構のみが独立して存在する、集落内での共有空間のような景観が想定される。自然流路跡33・39NR001をはさんで西側に所在するF区では30SX005のような多量の土器類を投棄した遺構や井戸跡の可能性のある39SX005などが形成されている。これらを形成した集落は今回の調査範囲では明らかではないが、やや西側の安定地盤面に集落域が想定されよう。（長直信）

(4) 中世（第77・78図 付属DVD第2図）

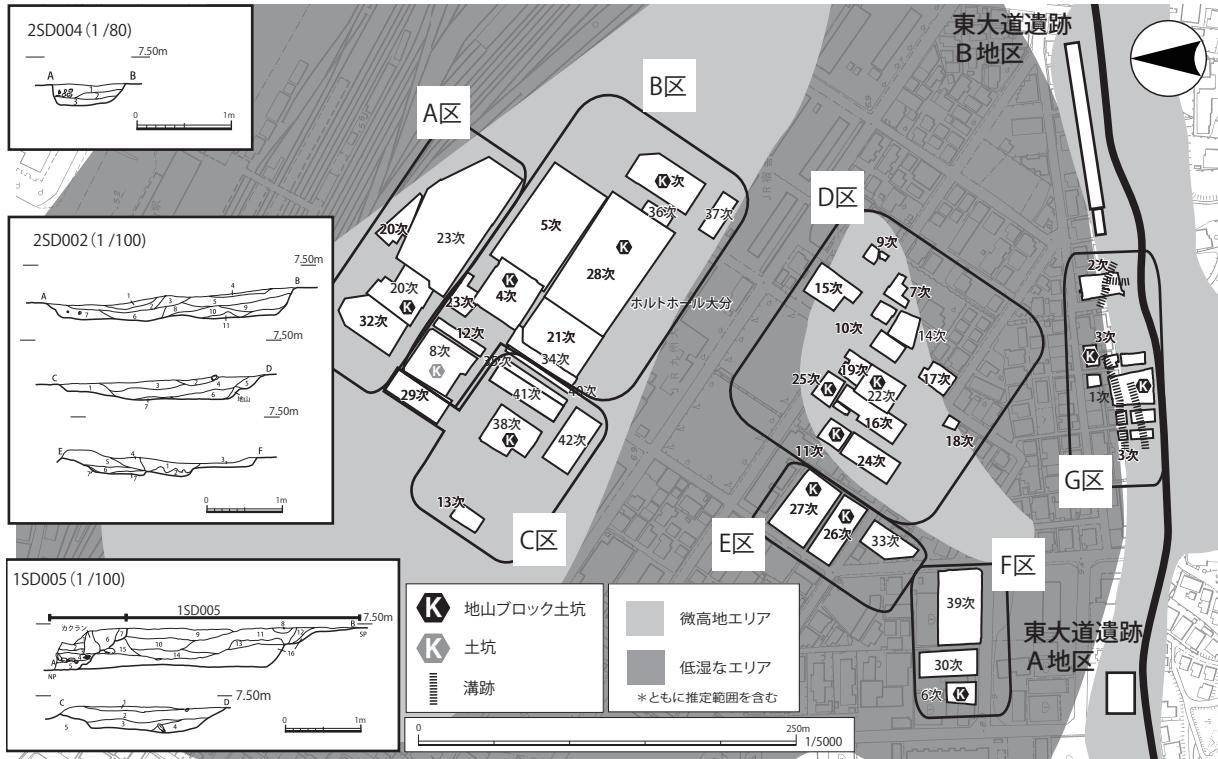
大道遺跡群の最盛期である古代を過ぎると、遺構の分布・密度は急速に低くなる。出土遺物も極めて少数であり、中世後半期に入ってもその傾向は続く。このことは大道遺跡群が生活域から耕作域へと変化したことを見た現象と言える。この段階の遺構は土坑（地山ブロック土坑を含む）・溝跡が中心であり、掘立柱建物跡はB区で2棟（28SB080・090）が確認されるのみである。D区では第10次～第17次調査区にかけて中世後期段階の溝跡が2条並行し（10SD026・004・009、14SD001・002、17SD009）、16SD030はこの溝群に直交するように配置する。G区では上野台地裾部の地形に沿うように東西方向に延びる溝跡群が構築される。これらは土層中に砂質土やシルト質土が含んでいることから耕作等に伴う水利施設と考えられる。

大道遺跡群の発掘調査の中で、ある共通性を有した土坑群が確認されることが多い。各調査担当者もそのことは認識しながらも、個別の事実報告に留めていた。今回、大道遺跡群全体の総括にあたり、特徴を再認識し、土坑の検討を行ってみた。他との土坑と区別するため、一見して判別できる埋土情報を採用し「地山ブロック土坑」と呼称する。

改めて、この「地山ブロック土坑」の特徴について列記すると以下のとおりである。

- ・埋土に基盤層を数cm程度に粉碎した地山ブロック土を多量に含み、人為的に埋められている
- ・出土遺物が極めて少ない

平や攪乱が大きく他の遺構は不明であるが、古代の大型掘立柱建物跡の遺存状況からみて、当該期の大型掘立柱建物跡の存在は想定できないようである。環濠の埋土中からは土壙の有無を読みとることができないが、環濠から2～3mと近接する井戸跡の位置からみて環濠の外側に土壙をもつ可能性がある。



第77図 中世段階遺構分布図 (1/5000)

- ・他遺構との新旧関係が生じない

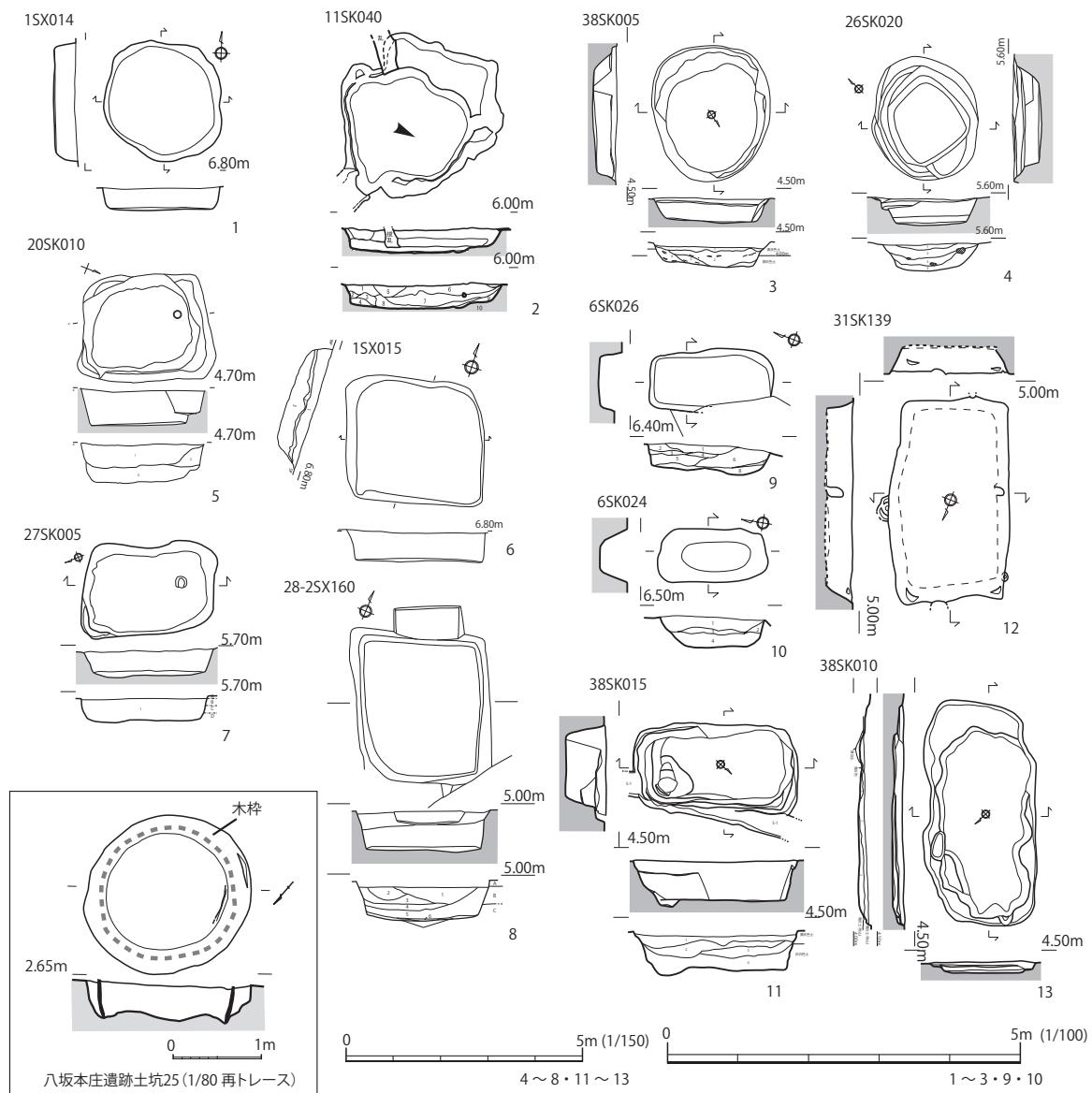
上記の特徴を有した地山ブロック土坑群を集成した（第78図）。これらは平面形状より、円形プラン（1～4）、隅丸方形プラン（5～8）、長方形プラン（9～13）に区分される。また、断面形状は、遺構底面がフラットであり壁面傾斜がきつく直線的であるといったことが共通項として挙げられる。これまでの報告事例として水溜め的な機能が想定されているが、時期は異なるが大道遺跡群に分布する古墳時代前期の水溜めもしくは井戸跡と認定される遺構の壁面は水成作用により抉れていることが多い。よって、素掘り構造の水溜め機能を想定した場合、断面形状の特徴が異なることになり齟齬が生じる。こうした事象を解決する事例として、八坂本庄遺跡B区土壙25が挙げられる。この土壙25は、近世段階の農業用灌漑施設として位置づけられている。底面はやや歪であるものの、壁面は直線的に掘り込まれ、土壙内には底板を有さない木枠が存在していた。木枠を設置することで壁面の崩れが防ぐことができ直線的な形状が保持されたと考えられ、仮に床板等も設置すれば平坦な形は保たれよう（これについては、大道遺跡群第23次S-108に底板が存在する木桶が設置された状況が確認されていた：付属DVDに写真添付【写真図版F→既報告分調査写真F→大道遺跡群第23次F→その他F】）。地山ブロック土坑の機能を想定する上で留意すべき資料である。

次に、玉沢地区条里跡第12次調査C区では土取りもしくは洪水砂処理土坑が確認されている。平面形状は第78図13に類似するが、壁面を比較すると傾斜が緩く底面も起伏が認められるため、やや異なる状況である。但し、水田耕作域の中で検出される土坑の一機能としては認識すべき資料と言える。

地山ブロック土坑群の時期であるが、一部近世段階も認められるものの、少量ながらも白色研磨土師器や東播系鉢、土師器皿C（京都系土師器）等が出土していることから概ねは中世の範疇で捉えられる。

第77図には地山ブロック土坑の分布も提示している。概観すると、微高地・低湿地の区別なく広がっていることが看取される。また、一地点に密集せず、切り合い関係を生じずに立地することも大きな特徴として掲げられる。

最後にこれまでの情報をまとめると、地山ブロック土坑は古代の官衙的遺構群が廃絶された後、耕作地として土地利用が変化した中世～近世段階に、平面及び断面形状の様子から意図（規格性）を持って、密集せず且つ同一地点に重複しないように構築されている。さらに、立地環境より水田敷地の内に掘り込まれたと推測され、他遺跡の事例を踏まえると、木枠又は何かしらの容器等を設置していたことが考えられる。よって、本土坑群は水田耕作に関係する貯蔵施設的な機能を有していた可能性が高く、地山ブロック土單一層しか認められない状況から、機能停止後は短期のうちに埋め戻されたものであろう。（佐藤道文）



第78図 地山ブロック土坑集成図 (1/100・1/150)

第3節 古代の大遺跡群の性格について (第79~84図)

ここでは、大道遺跡群を特徴付ける「運河」と表現された（佐藤2013）南北方向の大溝と、この北岸に密集する大型掘立柱建物群を含む古代の大遺跡群について総括する。大道遺跡群は、筆者が近年検討した大分平野における官衙関連遺跡の類系上B-1類にあたり、「地方官衙」的様相をもった遺跡ととらえた。また、遺跡の具体的な性格については 案①：8世紀中葉～8世紀後葉の大分郡衙であった下郡遺跡群が9世紀前葉～9世紀中葉頃に大道遺跡群へ移動した。案②：下郡遺跡群（郡衙）に連続する遺跡ではなく、8世紀中頃に成立した地方官衙施設で、上野台地に設置された国府に関連するもの。案③：第79図に示すように大型掘立柱建物跡が群集するエリアは「字郷ノ本」であることから8世紀中葉～9世紀前半の遺跡の性格は「笠和郷衙」で、9世紀代に一部国府に関連する施設が併設された。以上の3案を提示した。これらの案について近隣の遺跡である未広遺跡や南金池遺跡、上野町遺跡の調査成果を総合しつつ、「運河」や掘立柱建物跡の時期・出土遺物や遺跡の立地などの検討を行った。結論としては、案②とした国府に関連する集散地的な性格をもった地方官衙的な遺跡である蓋然

性は高く「大溝を利用した水上交通に關係する公的施設」とする説が現状では妥当な見解ではないかと思われた。これまでの大道遺跡群の総括中で触れられてきた稗田智美・佐藤道文氏らの「別府湾岸に所在した可能性のある湊・津などから物資を運ぶための「運河」を利用した海上交通に關係する公的施設」とする見解を引き継ぐ見解となる（長2013b）。本報告において全ての調査地点の報告が終了し、各地点の詳細な遺跡の検討が可能となつたことを踏まえ、以下では古墳時代と同様、A～C区の微高地（以下、北微高地）とD区の微高地（以下、南微高地）上に展開する遺構を再度時期別に整理する中で古代における大道遺跡群の遺跡景観について検討する。また、「運河」については事実報告及び遺構解釈の補足を含めて概要を記す。

（1）遺物の様相

①時期幅（第80図）：はじめに、古代における遺跡の存続幅を確認しておく。第80図は各時期の遺物組成を示す遺構を提示した。長2013bでも検討したように、大道遺跡群は8世紀中葉頃から井戸跡をはじめとする遺構・遺物が出現し、以後8世紀末～9世紀中葉までを物量のピークとしている。ここでは長2013bで示した編年案（ex. IV-2期）を併記しつつ既存の編年（坪根・塩地2001）に沿った資料提示を行う。

なお、8世紀中頃の井戸跡5SE140から9世紀中頃の31SE035まで数は少ないものの継続して瓦の廃棄が行われているようである。瓦の中には豊後國分寺にはみられない格子目タタキを行った後にカキ目調整を施した特異な瓦（第80図106～109・112～113）が存在する。カキ目調整瓦は、上野台地上に所在する上野廢寺からも出土しており（大分市教委1996）、両者の関係が注目される資料である。

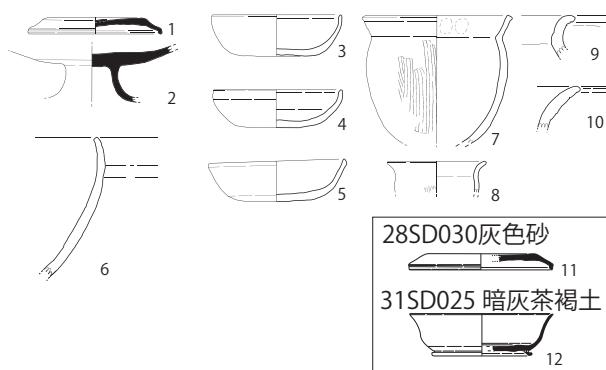
②特殊遺物（第81図）：越州窯系青磁・灰釉陶器・綠釉陶器・搬入須恵器（底部糸切り須恵器など）・墨書、刻書土器、陶硯（転用硯5点、製品4点）、石帶、櫛、製塩土器、瓦類、金属器模倣須恵器・漆付着土師器などが出土している。調査規模が大きい点もあるが、現状の調査・報告資料からみて大分市域において以上のような多様で希少な遺物が出土する遺跡の事例はない。なお、沖積地に所在する大道遺跡群と地理的に連続する末広遺跡及び南金池遺跡についても大道遺跡群に関連する一連の遺跡として図中に加えている。（長直信）



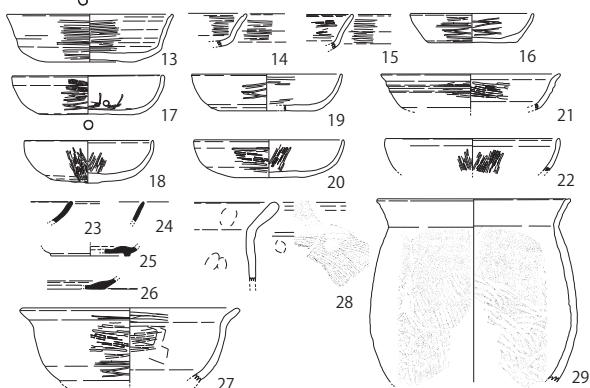
第79図 大道遺跡群周辺の遺跡調査地点及び字図（1/8000）

【8-II期(IV-2期)】8世紀中頃

5SE140

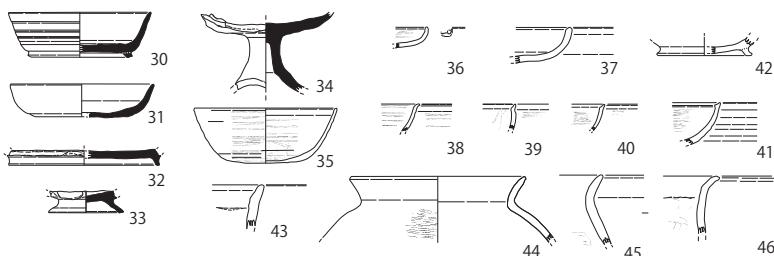


23SX169



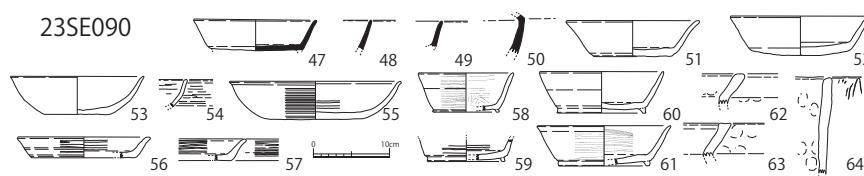
【8-III期(IV-3期)】8世紀後半

31SD025 灰茶褐砂質(運河最下層)



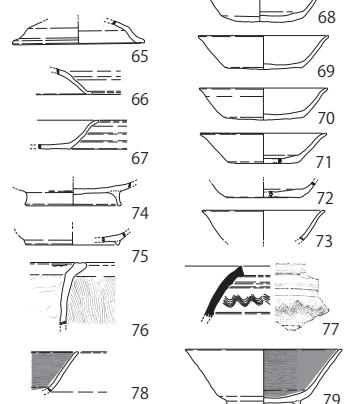
【9-II期(V-1・2期)】9世紀前半 坯の口径 14.5~15cm前後

23SE090

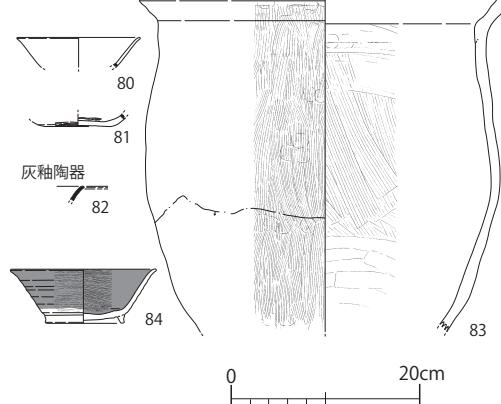


【9-III期(V-3期)】9世紀中頃 坩の口径 13.5cm前後

23SE049



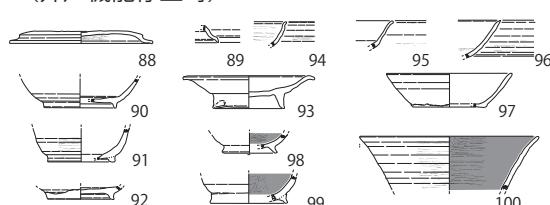
30SE020



31SE035 灰色砂
(井筒内:井戸機能時)



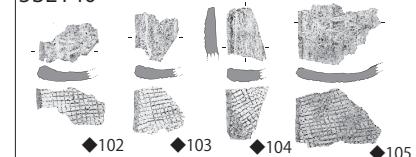
31SE035 黒灰土
(井戸機能停止時)



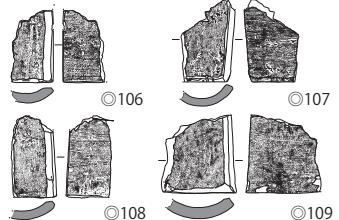
31SE035 黒茶粘土
(井戸機能停止時)



5SE140



31SD025 灰茶褐砂質土(運河最下層)



31SE035 黒灰土
(井戸機能停止時)

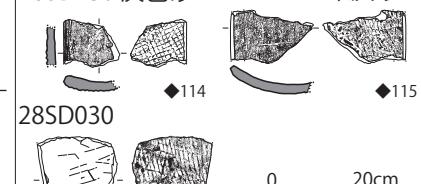


運河埋土上層

31SD025 暗灰茶褐砂質土
(運河最下層)



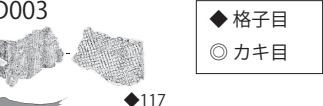
28SD130 灰色砂 28SD130 茶灰砂



28SD030



4SD003



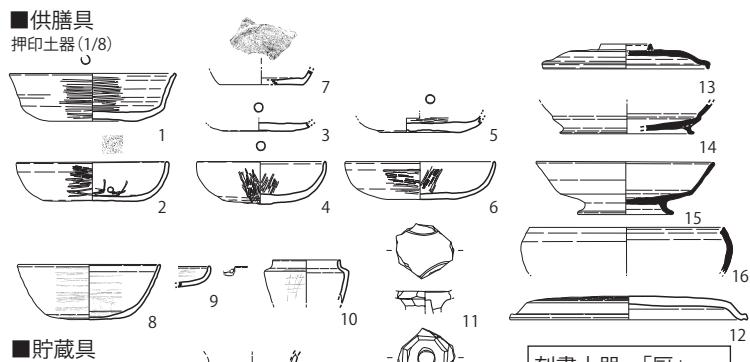
◆格子目

◎カキ目

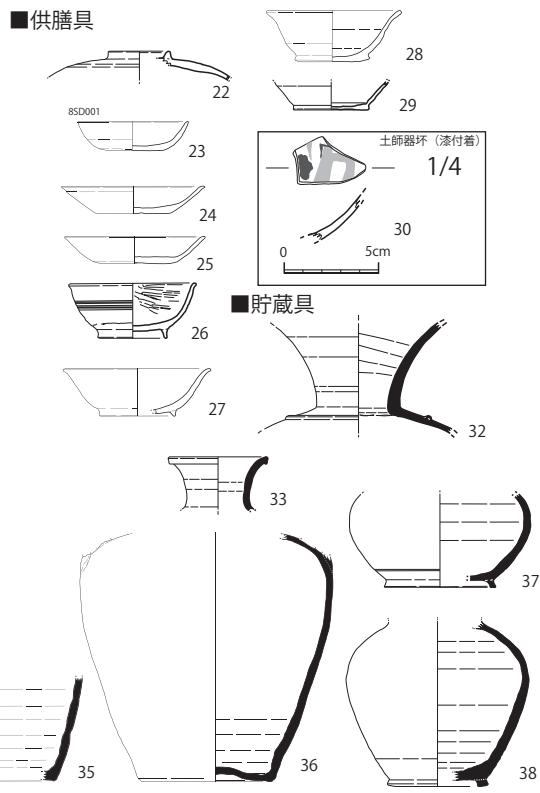
第80図 時期認定資料

大道遺跡群

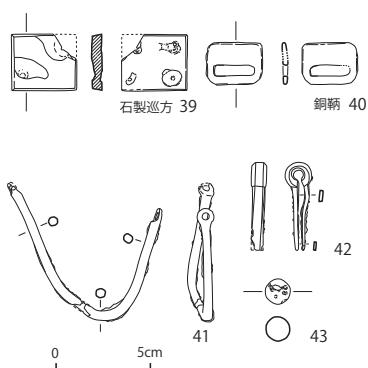
【8-II～8-III期(IV-2～3期)】



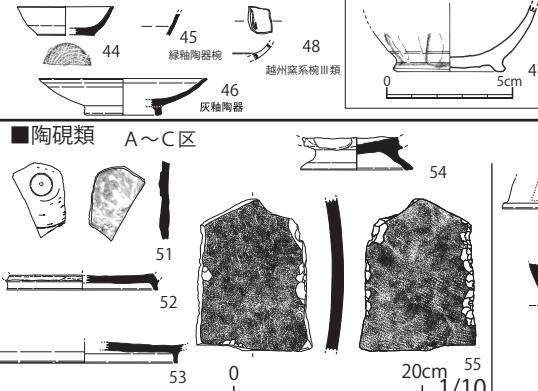
【9-II～9-III期(V-2～VI期)】



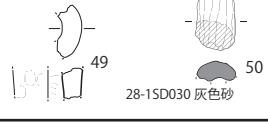
■装身具(1/4)



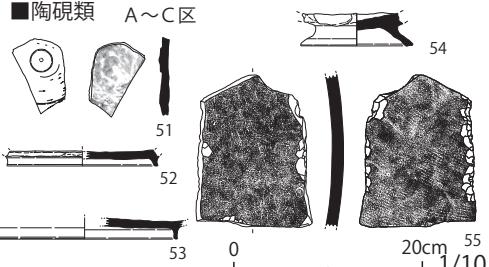
■搬入陶器・磁器



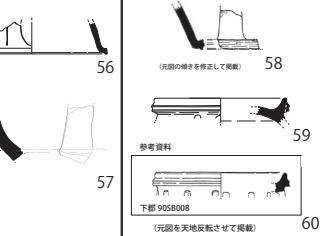
■フイゴ羽口



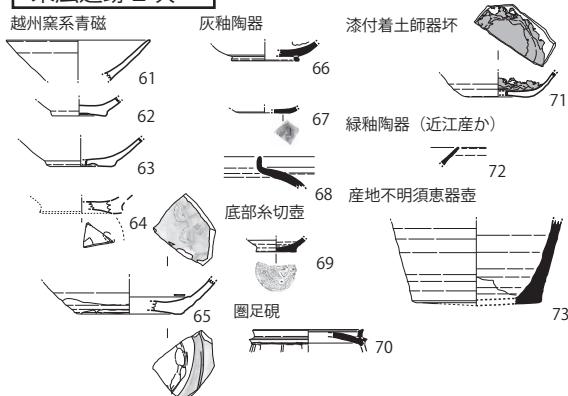
■陶硯類 A～C区



D区



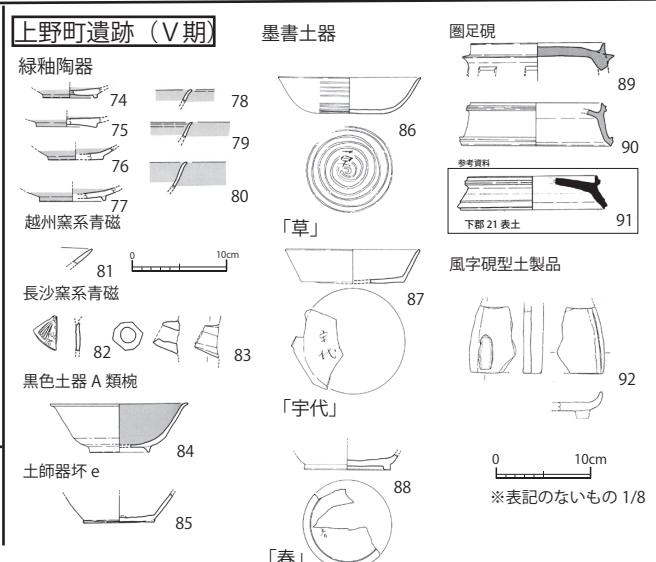
末広遺跡2次



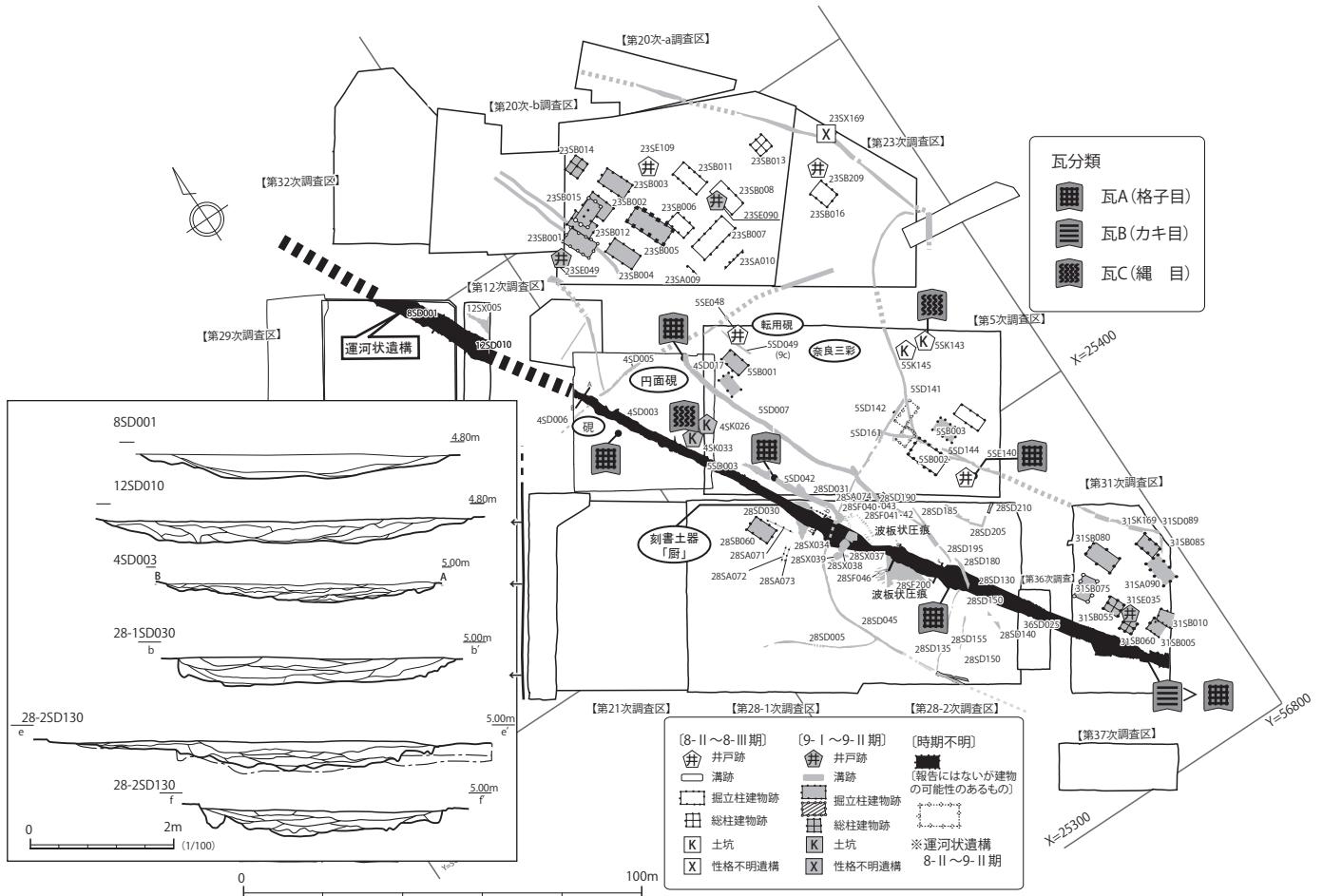
南金池遺跡2次



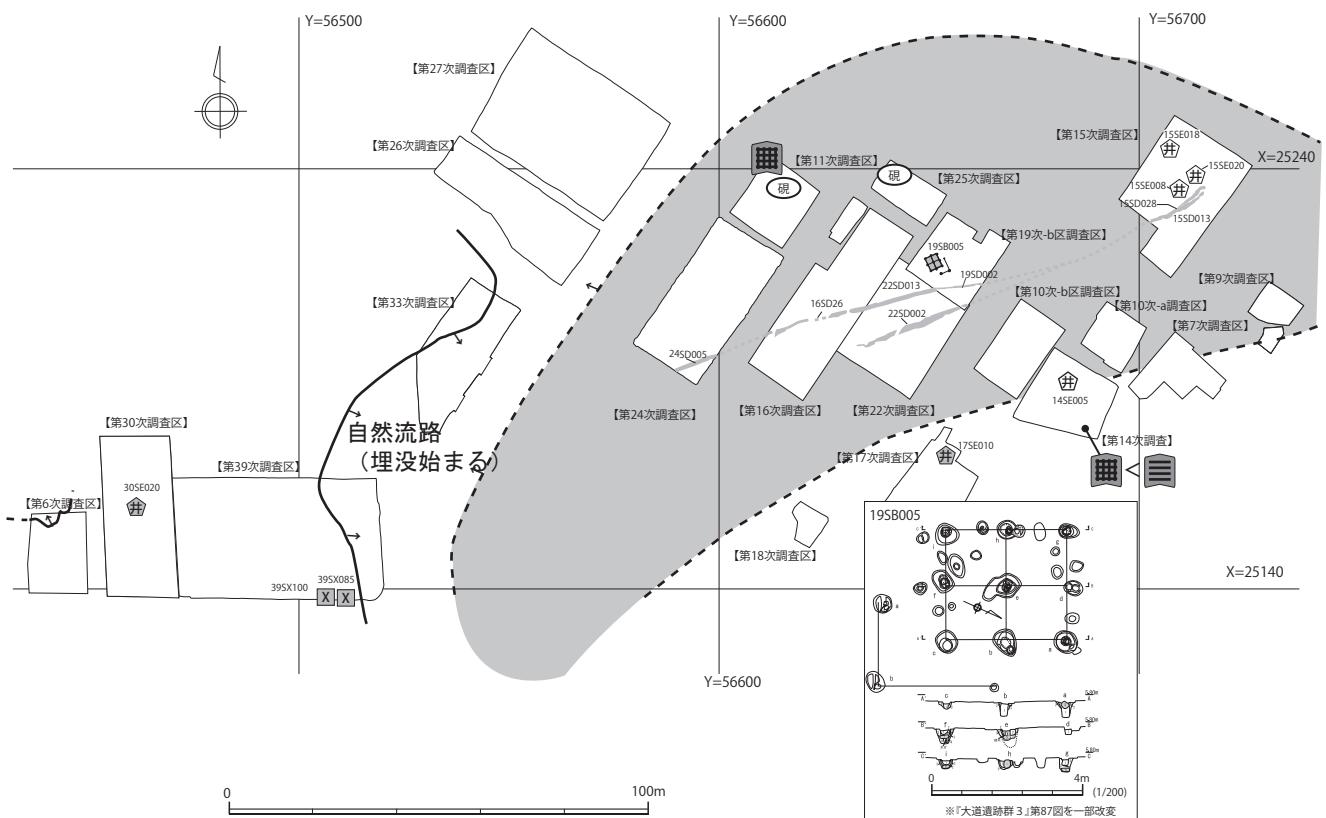
上野町遺跡(V期)



第81図 大道遺跡群及び周辺遺跡での特殊遺物 (1/3・1/4・1/8)



第82図 8～9世紀の遺構分布 [A～C区] (1/1800)



第83図 8～9世紀の遺構分布 [D～F区] (1/1800)

(2) 運河状遺構の具体的な機能及び周辺の遺構群について

大道遺跡群のB区では、約200m超の大溝が検出された。その中でも第28次調査区では他調査区とは性格の異なる大溝（以下、便宜的に「運河」と呼称する）に付属する遺構が南北で確認でき、北側に展開する「公的施設」に関連すると考えられる。「運河」の北側ではスロープ状の通路状遺構（28SF040）や波板状圧痕（28SF041・042・043）、南側では、「運河」と軸をほぼ同様にする掘立柱建物跡1棟（28SB060）と波板状圧痕（28SF046・28SF200）が検出されている。28SF200については、通路としてではなく、船が接岸し水上交通で運ばれてきた物資の荷揚げや人の乗降などが行われた場と考える。この地点からやや北側部分で、「運河」を掘り込む28SX037・038が検出された。特に28SX038は、「運河」から南側に入り組む形をしており、「運河」に接続する溝状の遺構を伴って28SX037・039より深くなっている。この地点は舟入りや係留の場としての機能をもっていた可能性がある。28SX037の北岸には、28SF040や28SF043の道路状遺構があり、この道路状遺構が第5次調査の掘立柱建物群へとつながると想定すれば（佐藤2013）、この地点でも船が接岸し人が乗降したことが考えられ、北側に展開する公的施設への入り口であった可能性もある。さらに北側には「運河」の両岸に広がる28SX034が位置する。28SX034は南北対照の構造をもつ遺構である。遺構の底面にピット群があり、堆積の状況から柱穴の役割をなしたと考えられるため、この地点に橋のようなものが設置され「運河」を挟む南北間の往来があったと想定される。なお、「運河」の南北で遺構の分布が大きく変化し、南側では掘立柱建物跡は28SB060の1棟しか検出されていない。28SB060に近接する「運河」内で「厨」と刻書された土師器小壺が出土している。また、溝として機能していた肩部には斜面に沿って無数のピット群が確認されており、「溝斜面に杭等を多数打ち込んだ痕跡も含まれている可能性も排除できない。（略）、水路の機能を有する溝に対する護岸的な意味があったもの」（大分市教委2009）と報告している。大道遺跡群全体の「運河」とその周辺の様相からも護岸施設と位置づけたい。

以上の点より第28次調査地点周

辺は、「運河」を利用した水上交通の中継地点としての役割があつた可能性が高いと考える。

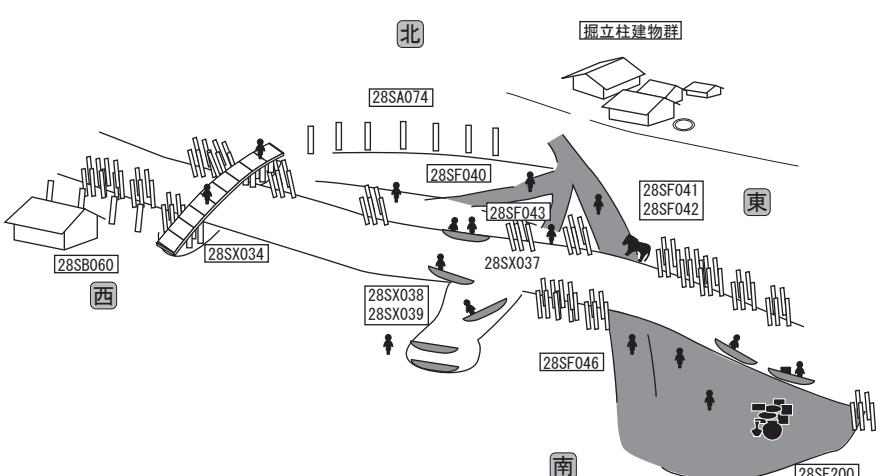
（倉増美智代）

(3) 微高地上の遺構の様相

以下では、北側、南側の微高地上に展開する建物跡・井戸跡・溝跡などに着目し、遺構の様相及び変遷を述べる。

① 北側微高地の様相

北側のA～C区では上述した南北方向の「運河」及びその関



第84図 第28次調査地点運河状遺構周辺のイメージ図

連施設と、溝の東側に20棟を超える掘立柱建物跡、井戸跡7基（詳細は付属DVD表16・18参照）及び性格を決しがたい小規模な溝跡などが面的に展開する。一方「運河」西側は遺構が希薄となり、掘立柱建物跡1棟と柵跡、溝跡等が確認できる程度であり、南側・西側の大部分が「空閑地」として認識できる場が広がる。なお、建物跡や井戸跡などの遺構の数に対して廃棄土坑と認定できる遺構は極めて少なく、各時期に1基程度しか確認できない。この点は、当地が生活空間とは異なる空間であることを傍証しているといえる。

[8世紀代]：明確にこの時期の遺物が出土する掘立柱建物跡はないが、近接して井戸跡が4基（23SE109・23SE209・5SE048・5SE140）形成されている点、建物西側の湿地帯への落ち付近で「○」を刻印した土師器壺10点（第80図13～22）が出土する廃棄土坑（23SX164）が形成されている点、第80図の運河最下層出土遺物が示すように運河内には当該期の土器が多量に含まれる点等から、8世紀中頃において一般集落とは異なる性格を付帯し突如出現するようである。運河中の8世紀代の遺物の中には「厨」と刻書された土師器（第81図21）

が存在する他、金属器模倣の須恵器（第81図13～15）、大分平野では極めてめずらしい「鉄鉢型」須恵器鉢（第81図16）など特徴的なものが多く、遺物の面からも当該期の特異性を窺うことができる。

[9世紀代]：井戸跡3基（23SE049・23SE090・31SE035）が形成される。掘立柱建物跡の柱穴からは黒色土器A類碗が出土するものもあり（31SB080）、この時期の建物の存在は明瞭に捉えることができる。遺構内からは少量ではあるが平瓦・丸瓦が出土する点、東接する南金池遺跡の9世紀代の井戸跡（2SE077）の枠内に大型礎石が廃棄されている点（大分市教委2006）などからみて付近には8～9世紀に部分的に瓦を葺いた礎石建物が存在した可能性がある。当該期には井戸構造に変化があり、南金池遺跡を含めて概観すれば8世紀中頃～後半の井戸枠は井桁組構造からクスノキを割り貫いた形式へと構造の変化がみられる。

掘立柱建物跡の変遷：時期比定可能な遺物が出土したものは極めて少ないが、建物主軸からみて10°～20°西に振る一群（Aグループ）と20°以上西に振る建物（Bグループ）の大きく2つにグルーピングできる。Aグループである23SB008は9-II期の遺物が出土する井戸跡によって柱穴が削平されており、Aグループが9世紀以前の建物群である可能性が高い。8世紀中頃～後半の井戸跡の配置を見るとAグループの建物群との切り合いはなく、数棟単位に1基程の割合で分布することから、Aグループを8-II～8-III期頃の所産と推測した。同様に、Bグループの建物群と9-II期の井戸跡との関係をみても一部建物を切るものもあるが（31SE035）、概ねAグループと類似した配置をとっており、これらが9世紀代を中心とした時期の建物群と考えられる。なお、A・Bグループともに2間×2間の高床倉庫らしき建物を伴っており、遺跡の性格が8世紀～9世紀へと連続していることが想定される。なお、9世紀代になると第31次調査地点で倉庫と考えられる建物を含む掘立柱建物や井戸が新設されるようであり、「運河」の西側にも建物が形成されるなど、施設の拡充などが想定できる^(註4)。

以上の時期区分は、資料の限界から十分な論拠は提示しがたいものの、遺物の様相や井戸の形成時期、分布を加味すれば整合的な解釈と考える。なお、建物の特徴としては下郡遺跡群や城原・里遺跡のような郡衙関連遺跡と比較して建物主軸の振れが非常に大きい。したがって建物配置にも規範が窺えない点から儀式的な空間等は想定できず、運河の東岸部に倉庫のような建物数棟が井戸を伴って点在する荷揚げ場のような景観が想定される。

運河の形成時期：第28・31次地点にて「運河」の層位的な発掘を行っている。最下層出土遺物は8-II期（8世紀中頃）の様相をもつが遺物が少ないためこの遺物群をもって即形成時期とは断言できないが、運河内に投棄された当該期の遺物量の多さや「厨」と刻書した土師器小壺の型式が8-II～III期のものである点、8-II期の井戸が3基程度形成される点、「○」を押印した土師器坏a1を複数廃棄する遺構が存在するなど当該期より面的な遺構の展開が行われており、その上限は8-II期（8世紀中葉）である可能性が高い。「運河」の機能自体は上記に示したように、当地が物資の集積施設の一つであり、水運に関わる遺構であったことは間違いない。溝底の勾配からは流れの方向は確認できないが、北西方向の別府湾と東方向の大分川左岸・上野台地北側眼下の後背湿地付近まで到達していた、もしくは大分川まで到達していた可能性などが想定されるが、立地的には国府が所在する上野台地裾までの水運を担ったものと想定される（第72図）。

②南側微高地の様相

礎盤石を伴う2間×2間の掘立柱建物跡19SB005や南北方向の溝跡及び低湿地部への落ち際で6基の井戸が形成される。井戸は8世紀代から形成されており北側微高地と同時期に遺跡の形成がはじまったと考えられる。なお、19SB005は出土遺物に乏しいが8世紀末～9世紀前葉頃の所産と考えられる。当地では表土や近世段階の溝中より陶硯が2点出土している以外は、目立った遺物の出土はみられない。北側微高地の建物群と湿地帯をはさんで100m南側に存在する井戸とがどのような関係であったのか、当地の建物遺構の乏しさからは想定が難しい。19SB005については通常であれば倉庫としての機能が想定されるが、北側微高地に対して約1m前後高い位置となる立地を考えると、北側微高地の遺構群から見上げる位置に造営されたお堂などの宗教的な施設としての性格も考慮に入れる必要があろう。南側微高地の西側部分に形成された自然流路（33NR001など）をはさんで、さらに西側にあたるF区には30SE020とした9世紀中頃を下限とする井戸跡が存在する。巨大な企救型甕を井戸枠に据えたものであり付近に当該期の居住施設などが想定される。（長直信）

第4節 まとめ

1) 大道遺跡群の遺跡動態

表10は、明確な遺構が確認できる弥生時代前期IV期から10世紀代を対象に遺跡の諸属性について整理したものである。「+」とした部分は、現状での「空白」であり今後の隣接遺跡の調査状況によって変化する可能性がある。大道遺跡群の北西約1kmの位置に所在する東田室遺跡は、遺跡立地や遺跡の内容が類似することから対比資料として併記してみた。古墳時代前期に一部重複する時期もあるが大道遺跡群内で環濠が埋没する古墳時代中期以後は、東田室遺跡の堅穴建物跡数が増加しており、大道遺跡群の集団の一部が東田室遺跡側へ移動した可能性も考えられる。9世紀代になると東田室遺跡と大道遺跡群は遺物組成の一部に類似する傾向があることから、大道遺跡群が大きく衰退する9世紀中葉以降、当該期まで存続する東田室遺跡へと機能の一部が転移した可能性もある。今後の調査課題である。

2) まとめ

大道遺跡群とは、別府湾沿岸に立地する沖積地内に所在する遺跡である。島状に点在する微高地を中心古墳時代前期と8世紀中葉～9世紀中葉に遺構・遺物の数が増大し、遺構が面的に広がるという大きな画期がある。具体的には

①古墳時代前期には、土師器IIb期～IVa期までに埋没する環濠及び40基近い井戸跡、祭祀土坑、竪穴建物跡が展開する別府湾沿岸部の拠点的な集落

◎2世纪中葉に著した宮本・林三昧『通

◎8世紀中葉になると突如、井戸跡・運河・掘立柱建物跡を伴う遺跡として再編成され、官衙的な遺物や瓦類を伴いながら施設の拡充を行うが9世紀中葉を最後に遺構の形成が停滞する。

その他、古墳時代前期・8~9世紀とも製塩土器を多く伴う点や、大型の土錘なども出土するなど海浜部の遺跡及び官衙関連遺跡を象徴する遺物の出土も特筆すべき点といえる。また、各時代によって具体的な背景は異なるが、これらの遺跡の性格は、別府湾沿岸部でありかつ国府推定域である上野台地の眼下に所在するといった地政的要因に起因すると考えられる。なお、運河内からは木簡等の文字資料の出土が期待されたが、今回の調査では発見できず遺跡の性格付けに苦慮した点がある。隣接する別府湾岸域の遺跡の動態（東田室遺跡や中世大友府内町跡など）を総合的に把握しながら、大道遺跡群の性格について再検討していく必要がある。また、今回の総括作成過程において、古地形復元にかかる現場でのデータ収集の重要さを痛感した。沖積地という現在の地形では窺えない多様な土地の

表10 大道遺跡群及び東田室遺跡の諸様相

起伏や性質がありこれが遺跡立地に大きな影響を与えていた点を再確認することとなったためであり、今後はこれらの旧地形復元を考慮した大道遺跡群周辺での運河の延長部の確認は喫緊の課題といえる。

古墳時代の集落景観については、情報の整理に終始し他の遺跡との遺物の組成を絡めた比較検討が行えていない。また、大道遺跡群周辺の沖積地及び上野台地上では墳墓の存在が確認できず、東田室遺跡や大道遺跡群を眼下にする龜甲山古墳との関連（表9）などを含めて集落と墳墓の関係からみた大分平野の古墳時代社会像を検討する必要がある。（長直信）

おわりに

平成25年度を以って、大分駅周辺総合整備事業に伴う報告書までを含めた発掘調査事業は終了する。大道遺跡群は、ほぼ完存するクスノキ製木臼の発見や布留式系甕のAMS測定法による実年代比定の試み、推定環濠とされる溝跡からの大量な古式土師器の出土及び資料の編年試案の提示というように、これまで古墳時代前期の遺跡としてイメージが強かった。しかし、『大道遺跡群5~6』において古代の掘立柱建物跡群及び推定運河跡や官衙的な性格を有する特殊遺物が提示され、その後の研究成果（長2013bなど）により古代の大道遺跡群が、当該期の中で極めて重要な場であったことが論じられたことにより、この地に豊後国府との強い関係性を窺わせる施設が形成されていたことが、調査終了後に改めて認識されることとなった。

発掘調査は、埋蔵文化財が二度と元には戻らない行為である。遺跡に対して問題提起が成されているか、調査手法は妥当か、遺物の取上げ方は正しいか、時期はいつか、分からぬまま漠然と調査をしていないか。埋蔵文化財の調査にあたっては常に推考・検証・確認を何度も取り組み、遺跡に対して誠実に、真摯に向き合わなければならぬ。何故なら、それが遺跡を表現する唯一の証拠だからである。

発掘調査を行う者は、埋蔵文化財が地域の歴史、郷土の歴史、日本の歴史を知るための、そして、それが過去の人々の軌跡であるということ且つ歴史の最前線にいるということを胸に強く刻んでおかなければならぬ。（佐藤道文）

<本文註>

註1：井戸跡出土遺物組成の内訳は、サンプル30遺構に対する平均値は甕45%、壺27%、鉢13%、高杯8%、器台2%、その他の土器6%である。

註2：坪根編年と他氏編年対応や基準資料の配列については久住猛雄氏に多くの教示をえた。

註3：井戸の掘削深度や調査時点での湧水標高を勘案すれば大道遺跡群において井戸から水を得ることは比較的容易な作業であったと考えられる。よって、井戸が密集して分布する地点の意味については、自然的要因である水質劣化などによる井戸の掘り直しの結果として密集するようになったと考えたほうが妥当であり、当遺跡においては、井戸の密集自体に集団間の関係や政治的な要因を読みとることは難しいと捉えている。

註4：長2013b第9図においても建物の時期区分を行っており、概ね同様の検討結果を得ているが、本方向をもって最終的な見解をしたい。

<引用文献及び参考文献>

池田毅2003「搖籃期の象徴『淡路型器台』」『続文化財学論集』(第1分冊) 文化財学論集刊行会

井口あけみ2010「古墳時代における大分県内出土の製塙土器」『古文化談叢』第65集 発刊35周年・小田富士雄先生喜寿記念号(2) 九州古文化研究会

久住愛子2010「弥生時代集落構造研究への予察—井戸の視点から—」『還暦、還暦?、還暦!』—武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集一

久住愛子・久住猛雄2008「九州I（福岡県）一福岡県下における弥生時代から古墳時代前期の井戸についてー」『第57回 埋蔵文化財研究集会 井戸再考～弥生時代から古墳時代前期を対象として』埋蔵文化財研究会

久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究XIX』庄内式土器研究会

久住猛雄2002「出土土器の位置付けについて」『元岡・桑原遺跡群1』福岡市埋蔵文化財調査報告書第722集

佐藤道文2013「第IV章 総括」『大道遺跡群6』大分市教育委員会

重藤輝洋2010「北部九州における古墳時代中期の土器師編年」『古文化談叢』第63集

鈴木一有2012「宮竹野跡遺跡と長上郡家」『宮竹野跡遺跡6次』(財)浜松市文化振興財団 高畠豊2007「大道遺跡群第23次調査の概要—古墳時代環濠集落と古代官衙遺構—」『大分県考古学会例会資料』

長直信2010「豊後国における7・8世紀の土器様相—旧大分郡・海部郡を中心に—」『還暦、還暦?、還暦!』—武末純一先生還暦記念献呈文集・研究集一

千田昇1986「大分川下流域の地形」『大分川流域』大分大学教育学部

長直信2013a「第1節 出土遺物の様相」『古国府遺跡群1』大分市埋蔵文化財調査報告書第122集

長直信2013b「豊後国における官衙関連遺跡の基礎的研究—旧大分郡・海部郡を中心に—」『福岡大学考古学論集2—考古学研究室開設25周年記念—』

坪根伸也・塩地潤一2001「豊後の土器編年」『大分・大友土器研究会論集』

坪根伸也2007「第IV章第2節下郡遺跡出土の弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器について」『下郡遺跡群V』大分市教育委員会

坪根伸也2010「第III章第3節(4)弥生時代から古墳時代前期の土器による時期区分」『下郡遺跡群VI』大分市教育委員会

稗田智美2010「豊後における古代前期の煮炊具」『下郡遺跡群VII』大分市教育委員会

稗田智美2012a「羽田遺跡出土の白色研磨土師器塊について」『羽田遺跡3』大分市教育委員会

稗田智美2012b「出土遺物から見た大道遺跡群の性格」『大道遺跡群5』大分市教育委員会

藤本貴仁2013「九州における土器製塙の波及と製塙土器の運搬」『第16回九州前方後円墳研究会・熊本大会 古墳時代の地域間交流 1』九州前方後円墳研究会

文化庁文化財部記念物課2013「発掘調査のてびき・各種遺跡調査編-」

三辻利一2013「古国府遺跡群および、その周辺遺跡出土須恵器、土師器の蛍光X線分析」『古国府遺跡群1』大分市教育委員会

龍孝明・久住猛雄・菅波正人・山崎頼人「九州地方の古墳時代から飛鳥時代の井戸」『第62回 埋蔵文化財研究集会 続・井戸再考～古墳・飛鳥時代の井戸』埋蔵文化財研究会

大分県教育委員会2002「東大道遺跡(B地区)」大分県文化財調査報告書第145集

大分県教育委員会2004「東大道遺跡(A地区)」大分県文化財調査報告書第166集

大分県教育委員会2004「上野町遺跡・顯徳寺遺跡」大分県文化財調査報告書第164輯

大分県教育厅埋蔵文化財センター2008「若宮八幡宮遺跡」大分県教育厅埋蔵文化財センター調査報告書第25集

大分県教育厅埋蔵文化財センター2010「上野遺跡群～矢取坂地区～」大分県教育厅埋蔵文化財センター調査報告書第53集

大分市教育委員会2008「大道遺跡群1」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第79集

大分市教育委員会2009「大道遺跡2」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第91集

大分市教育委員会2010「大道遺跡3」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第99集

大分市教育委員会2011「大道遺跡4」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第106集

大分市教育委員会2012「大道遺跡5」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第113集

大分市教育委員会2013「大道遺跡6」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第125集

大分市教育委員会2011「上野遺跡群第11次調査(確認調査・立会調査)報告」『大分市埋蔵文化財概要報告』2010

大分市教育委員会2005「上野遺跡群(上野庵寺跡2次調査)」『大分市埋蔵文化財調査年報16』

大分市教育委員会2005「東田室遺跡2」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第55集

大分市教育委員会2006「南金池遺跡」

大分市教育委員会2006「若宮八幡宮遺跡 第1次調査」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第67集

大分市教育委員会2010「下郡遺跡群VII」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第100集

大分市教育委員会2012「末広遺跡2」第2次調査 大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第120集

『大道遺跡群7』 DVD収録内容

総括図

第1図 大道遺跡群全体遺構 分布図（弥生時代～古代） 1/600

第2図 大道遺跡群全体遺構 分布図（中世～近代） 1/600

表

【遺物観察表】

表1 大道遺跡群第26次遺物観察表

表2 大道遺跡群第27次遺物観察表

表3 大道遺跡群第30次遺物観察表

表4 大道遺跡群第33次遺物観察表

表5 大道遺跡群第35次遺物観察表

表6 大道遺跡群第38次遺物観察表

表7 大道遺跡群第40次遺物観察表

表8 大道遺跡群第39次遺物観察表

表9 大道遺跡群第42次遺物観察表

【遺構出土遺物一覧表】

表10 大道遺跡群第29次 遺構出土遺物一覧表

表11 大道遺跡群第35次 遺構出土遺物一覧表

表12 大道遺跡群第38次 遺構出土遺物一覧表

表13 大道遺跡群第40次 遺構出土遺物一覧表

表14 大道遺跡群第41次 遺構出土遺物一覧表

表15 大道遺跡群第42次 遺構出土遺物一覧表

※第26・27・30・33・39次遺構出土遺物一覧表については紙面（p72～75）に掲載

【遺構集成表】

表 16 挖立柱建物跡集成（古代）

表 17 井戸跡集成(弥生時代～古墳時代)

表 18 井戸跡集成(古代)

写真図版

【大道遺跡群空中写真】

- ・整備途中の事業地一帯・大道遺跡群遠景・大道遺跡群範囲
- ・第26次・第27次・第30次・第33次・第34・第35次・第38次・第39次・第40次・第41次調査

【遺構・遺物写真】※遺物写真の番号「33-4」は、「第33図4」の遺物を示す。

- ・第27次調査
- ・第29次調査
- ・第30次調査
- ・第33次調査
- ・第35次調査
- ・第38次調査
- ・第39次調査
- ・第40次調査
- ・第41次調査
- ・第42次調査

【既報告分調査写真】

- ・第4次調査
- ・第5次調査
- ・第6次調査
- ・第10次調査
- ・第22次調査
- ・第23次調査
- ・第24次調査
- ・第32次調査

※今回『大道遺跡群7』は大分駅周辺総合整備事業に伴う最終報告書であり、過去調査分の総括を実施するにあたり、①報告書掲載に漏れた遺構 ②性格不明であった遺構の解明に繋がる資料 などを「既報告分調査写真」として収録した。

※付属DVDの訂正

- ・第1図 5SK045とあるのは5SE045の誤りです。
- ・第1図及び表17の24SE006・007は土師器Ⅱb期と表示しておりますが土師器Ⅲ期の誤りです。